
ネギま！ 転生しまし.....え？！

ケフィア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！ 転生しました……え？！

【Nコード】

N6818U

【作者名】

ケフィア

【あらすじ】

作者が妄想爆発し書かれた物語。

まさかの転生してしまった主人公こと両希 夷、まさかの輪廻からの外れた存在になり1000年は生きなければいけなくなり、転生先は……近衛木乃香の義兄？！！

神からもらったチートを使いながら薬味を矯正していきます（ちなみに最初はアンチですが後々友情を深めていく予定です……という感じになったらしいな）と思ったか？！それは嘘だ、魔改造の

最強のネギを作ってやんよ!!

ヒロインは木乃香&刹那……もしかしたら増えていく可能性が。
まあテンプレになった転生ものですがよろしく願います。

ヒロインは木乃香&刹那と言いましたがエヴァがメインヒロインに
……どうしてこうなった？

ただ今戦争に突入……原作が見えてこない。

それとこれは作者の自己満足の小説です、そこら辺をあしからず。

転生、そして義息子に（前書き）

なぜか終わってないのに二作目と言う暴挙。

俺のゴーストが書けって、言っただもん！（きもいwww）

とりあえずお願いします。

転生、そして義息子に

？ 「……知らない天井だ」

テンプレと言う言葉が思い浮かんだが無視する。

って、待てや、ここどこおおおおおおおおおおお！！

？ 「心の中で騒ぐな！」

？ 「誰ですか、あんた？」

俺の目の前にいるのは高齢のおじいさん。

すげえや、ひげが足まで伸びてる、仙人っぽいよこのじい。

？ 「神じゃ、ゴツトじゃ、崇めろ！」

？ 「はいはい電波、電波」

神？ 「話聞け、あー少年、残念なことにな」

？ 「あんたの頭が？」

神？ 「髪の毛は残念じゃが、頭は大丈夫だからの？！」

？ 「はいはい、でなんだ？」

神？ 「ああ、お主は死んでしまったのだよ」

……ああ、そうゆうこと。

？ 「でなんだ、それくらい？」

神？ 「お主、もう少し驚けよ、死んじやったのじゃぞ？ もうちつとリアクションを」

？ 「はあ、死んだからいいよ。やっぱあれか？ ここは天国と地獄の境目か？」

神？ 「……すまんの、お主は輪廻の輪から抜け落ちてしまったじや」

？ 「は？！ いやいや、輪廻の輪って！ 俺って転生できないの？！」

神？ 「ああ、ワシのアホの部下が事故で死んだお主の体を実験にしておの……人間が輪廻の輪を抜け落ちたらどうなるかというな。すまん、ワシの落ち度じゃ」

？ 「で、俺の体はどうなったの？」

神 「ああ、なんとか魂だけでも補完出来たんじゃが……体は崩壊してもうてな、ついでに輪廻転生のシステムに不具合が……」

？ 「訳が分からんから、結果を言ってくれ！」

神 「……最低でも1000年は転生は不可能じゃ」

……1000年って、長すぎるだろ？

神 「だから1000年間の間、ワシの罪滅ぼしのために……転生してくれ」

「……今の説明だと俺は転生できないはずなんだが？」

神 「だから、お主は憑依してもらうぞ？ …… ああ心配するな、肉体はこっちで再構成するのでな、まあつまりお主は新しい肉体に憑依してもらってから、転生させてもらう」

「1000年も生きられんが？」

神「心配するな、肉体は不老、魂も不死じゃ。最低でも10000年は生きてもらうからの。……心配するな、20歳までは成長する肉体じゃ」

「……まあいいや、そっちに任せるよ」

神 「そうじゃな、お主にちーとを与えよう」

チート?! マジでテンプレだなあ、おい！
まさか、俺TUEEEEEEEEEEE! とかで
きるかも……いや待てよ。

「何個もらえるんだ？ そのチートは」

神 「最高で5つにしよう、それ以上は無理じゃ」

なににしようか？ 5つなあ、なんか参考になるものを…… ああそ
うだ、どうせだったら。

？ 「仮面ライダーカブトとアクセルに変身できるようにしてくれ、ちなみにカブトはハイパー、アクセルはトリアルになれるようにしてくれ」

神 「その程度なら一個分じゃな、この頃はもっとちーとくれとか言われるし」

？ 「後は成長限界突破の才能をくれ」

神 「ほいほい、それから？」

？ 「刀語の見稽古の能力を」

神 「まあいいじやろつ、後は？」

一気に行くか？

？ 「どんな道具でも創造できる力をくれ、武器でも医療品でもなんでも」

神 「それは少しチートすぎるからのそれは二個分じゃな」

？ 「構わないよ、仮面ライダーになれるだけでも感無量だよ」

神 「……身体能力強化とかはいいのか？」

？ 「最初から与えられた筋力じゃなくて、自分で鍛えたいんだよ！」

神 「……あい、わかった……それからすまん」

そういつて歩き出す神、……ちくしょう嬉しいけど、悔しい。
俺が実験台になってたんだ。そう思うと勝手に目から涙が流れた。

数時間なのか、ほんの一瞬なのかかわからないが神が戻ってきた。

神 「準備ができたぞ」

？ 「そういえば、俺を実験した奴は？」

神 「能力をすべて奪い、地獄の最下層で永久凍土と封印で二度と出てこないだろう」

？ 「はっ！ ざまあないな」

神 「それと肉体に少し手を加えた、魔眼じゃ」

？ 「いいのか？」

神 「もともと、ワシらの責任で人間を人外にしてしまったのじゃ、もつと能力をつけさせて、ロンギヌスで殺されてもおかしくないのじゃ」

？ 「ちなみに魔眼はなんなの？」

今までの奴らには落とすと『ふざけんなあああああ』とか言われ、暴言ばかりでありがとうとは言われたことはなかった。

さあ、あやつの世界はネギまと呼ばれる魔法の世界、一応は魔力は平均以上にしといたが……大丈夫かのう、転生とは言ったが再構成したから赤ん坊からなんじゃが。

神 「いつてらっしやい、両希 夷君」

ちなみに仮面ライダーW 赤き閃光と太陽の神の夷とは別次元の同位体じゃ……なんじゃい、この電波

神 「しかし、あやつのあの才能は……」

「……………夷の視点

夷 「あぶううう」

おいおい、確かに転生してるが……なんで赤ん坊おおおおおおお！
お……

つつか捨てられてるし、タオルケットに包まれてるだけだし！
ま
あここは少し落ち着こうか。

夷 「ばぶぶぶあぶ（誰か拾ってくれ）」

？ 「なん なつ、赤ん坊？！」

？ 「あなた、どないしたの？」

うん？ イケメンな大人の男ときれいな着物着てる女の人？
しめた！ この人たちに拾ってもらおう……呼びかけてみるか。

夷 「あぶううう、あぶううう（拾って、マジ拾ってええええええ！）」

？ 「あらあら元気な子やな、捨てられてもうたのかな？」

？ 「……そうだな、この子の名前は……夷か」

あ、名前は前世と同じだったのか、サンキュー神様

？ 「なあなあどうするの？ 詠春さん？」

詠春さんか、いい名前だな。結構若そうだけど……夫婦か、この人たち。

詠春 「そうだな、養子……いや息子にしよう」

いやいや、まだ知り合って一分もたってませんよ！
そんな不審人物を息子にしているのか！

詠春 「目がきちんとしてる、この子は将来いい剣士になるだろうな」

？ 「駄目やで！ 剣士になったら詠春さんみたくいなくなつてまうやろ？ そんなん、ウチは嫌や」

詠春 「桜……すまん、苦勞をかけて」

おーい、その二人 いちやいちやするなー、俺を忘れないでー。

詠春 「おおう、夷を忘れてた！ そうだな今日からお前は近衛夷だ！」

桜 「いい名前やな、男の子……ええ子に育てるで」

……ちくしょうすこしうれしくなっちゃまった！
まあいいや、よろしく父さん、母さん。

詠春 「さあ木乃香も待ってるし、帰ろう」

桜 「そうやな、木乃香にお兄ちゃんができてもうたなー」

夷 「ばぶう（妹か）」

そして俺こと、両希……いや、近衛夷は転生した。
将来まさかの薬味に手を掛けせられるとは思わずに……。

まあいいや、これから頑張ろう。

そして俺は両親に抱きかかえられて家に行き、とてつもなく大きな
家に思わず絶叫した。

……あれ？ 俺ってラッキー？

転生、そして義息子に（後書き）

こんな感じで基本はほのぼので行きます。

シリアスもありますが、次は一気に時間が三年ほど飛びます。
ではキングダムゾン！ これ言ってみたかった。

出会い？ いいえ萌えキャラです（前書き）

今回は刹那と出会いシーン、あれ？ 京都弁ってこれでいいのか？
激しく心配になってきたなあ。

それとラブひなからあのひとが……俺って原作読んでないや。

キャラ崩壊注意。

感想は常時お待ちしております。

出会い？ いいえ萌えキャラです

||||| 夷視点

よお、久しぶりの方もはじめましての方も。

両希改め近衛夷です……誰に言ってるんだ俺は？

まあいい、あれから三年と少したち、正式に近衛の長男となった俺だったけど……神様あ、あんたの普通の人間の定義を聞きたい。

身体能力は普通の三歳児なんだが……魔力がとてつもなく大きい、どのくらいかわからないがなんでも、大戦の英雄……ナギ・スプリングフィールドの魔力を二乗くらいらしい（詠春談）……何その規格外？ 魔眼で見てみたら……とてつもないことになってたよ、これでも普通らしい。

ああ、間違えるなよ、今の状態でも最高だが実は霊脈と呼ばれる神力と契約してた……どうしてだ？ おかげで全力の魔力が無限に等しい 試したことないが……たぶん魔力切れは起こさないだろう、地球そのものと繋がってるんだ。

……やっぱあれか？ 神様に体を作られたから偶然繋がっちゃったってことも考えられるしなあ。

まあいいが、現在俺は神鳴流の修業を見稽古で見ている。

……たぶんだが今やったらすべての技とはいかないが秘剣クラスの技ならできるだろう、まあ奥義クラスだと気が足りない。

ああ、ちなみに気は並だ。たぶん霊脈を使えば強化は可能だろうけど、今の俺はそこまで制御する力がない。

？ 「いくで！ 斬岩剣！」

今のは青山素子っていう、俺の親戚にあたる人らしい……マジパねえ、気だけで岩切り裂けるとか……早くやりたいなあ。

ちなみに俺はまだ駄目らしい、まずは体作りからだ。さすがに三歳

児が奥義とも全てできたら鬼才ではなく、異端だ。

まあ父さん曰く『昔の俺の師匠は六歳で修めたらしい』化け物か？
名前は両義式……微妙に違うが空の境界のあいつか？！さらに魔
眼持ちだったらしい。

詠春 「今日はここまでだ！ 明日も厳しくしていくぞ！」

修練者達
「
「
「
「
「
はい！
」
」
」
」
」

父さんは今は関西呪術協会の長らしいが今は育児休暇らしい……長がそんなんで大丈夫かよ?! まあ親父が俺とこの「に————」さまあああああああああああああ!

夷「へぶらりい
いいいいい？！！」

ガハ！ は、腹に衝撃が！！ これは木乃香アタック、全体重を頭にこめ突撃する俺に対しては最終兵器だ、つか！

夷「木乃香！突っ込んでくるなって言っただろう？！」

木乃香 「いやや！ にいさまのにおいだいすきなんや！」

ぐは！ 俺の精神にダイレクトアタック！ 昔からというか、昔はここまでブラコンじゃなかったんだが最近からこうなった、昔はおとなしかったのに。

ちなみに木乃香とは表では兄、裏では義兄として知られている。普通の二人ならよかったんだが……木乃香も俺も魔力がバカにでかい、でかすぎて笑っちゃうくらいだ。なので今から嫁やらお見合いやらが多い。

俺は三歳児だぞ?! え、まだ赤ん坊のころ? すまん、これは封印してるんだ黒歴史として。

夷 「父さんも素子さんも笑ってないで助けてくれよ!」

素子 「嫌や、だつておもしろしゅうて、それにこのちゃんも嫌やがるやろ?」

詠春 「いいじゃないか夷、そんなに抱きついてくるのは今のうちだけだぞ?」

夷 「ぶるーだす、お前たちもか?!」

木乃香 「にいさま、にいさま! あそぼつ!」

夷 「えー、もう少し修業見てたいんだが?」

木乃香 「ひぐ、うちとあそぶのやあの?」

夷 「……わかった、わかった遊ぶから捨てられたような子犬みたいな目をするな!」

ちなみに素子さんは俺の未来のお嫁さん候補らしいが……あんなきれいな人を嫁なんかでもらってみろ、俺にはもつたいない。

ていうか、なぜだ?! 俺との歳の差考えろや! 俺三歳だし、あつちは十歳だぞ?!

まあきれいだけど……。

木乃香 「いこう、にいさま!」

夷 「ちょっと、引っ張るな。悪い父さん、素子さん、行ってきます！」

詠春 「気を付けるんだよ」

素子 「行つてらっしゃーい、暗くなる前には帰ってくるんやでー！」

夷 「はーい」

そうして俺と木乃香は道場を飛び出し、家の裏の山に遊びに行った。この家バカにでかいからなあ

||||| 詠春視点

行つたか……夷は私の本当の息子じゃないが将来は神鳴流を習わせようと思う。

しかしあいつの目は……

詠春 「まるで全部吸収してやる、と言わんばかりの目だったな」

素子 「そうですね、あの子うちの動きを目で追っていましたよ」

詠春 「そうだな、錆び付いているが私の動きが見えていたようだな」

私も刀を置いて久しいがまだまだ現役のつもりだし、たまにこうやって訓練もしている。

彼女……素子だってまだ若いが十分な実力を持っているし、私と手加減はしてるが斬り合える、それも気で強化したスピードでだ。だがあいつは見ていた、全てをだ……これは鬼才を拾ってしまったのかな？

素子 「えらい子ですわ、三年前のことはびっくりしましたよ？」

詠春 「はは、すまん」

しかし、夷と木乃香は悲しいが魔力がすさまじいほどの量だ、あのバカよりも……これを利用しない奴はいないしな。
あの子たちには平穩に生きてほしいのだから。

詠春 「せめてどちらか片方でも……」

この思いが数年後に崩れ去ることは私すら予想できなかった。

||||||| 夷視点

夷 「つかーれーた」

マジで疲れたが今日は気の強化を試しにやってみた。
木乃香との鬼ごっこのときに使ったがうまくできたようだ、秘密裏にやっておいてよかった。
そうそう、ちなみに仮面ライダーになるためのベルトは俺の影にしまっている。

偶然だが俺の影に物を投げ込んだら収納できた、もちろん持ってこれる。俺はこれを倉庫と呼んでいる、まあ入ってるのはベルトだけだ。けどまだ装着したことがない、まだ三歳だし焦る必要がないだろう。

それに神鳴流も習わなきゃなあ。

夷 「やること多すぎだろ？」

とてもじゃないが三歳児が考えることじゃないなあ。
もうちつと子供らしくしないとな。

ちなみに俺の今の容姿は髪は腰まで伸びていて、顔は……女顔だが、男だからな！！

つつか男の娘です、本当にありがとうございます。

母さんに強制的に伸ばされたが……最近は素子さんまで悪ふざけし
だしたし、姉の鶴子さんまで……俺は男だ、何度も言うが。
二次創作で男の娘っていいかな？ って思った俺を殴りたい、地獄
だ！

木乃香 「うゝ、にいちやまあゝ」

木乃香は寝ています、さすがに三歳児だし舌足らずだし、子供らしくてめっちゃかわいい。

将来は母さん似は決定しています。

夷 「俺も寝るかな」

そう思い、目を閉じると一気に意識が飛んで眠りの世界に飛び立った。

〓〓〓〓〓〓〓〓 数日後

夷 「父さん、その子は？」

詠春 「いやな、木乃香と夷の友達になつてくれる子だ」

父さんの後ろに隠れている、黒髪の女の子、髪を左に一纏めにしていて……まあサイドテールって奴だろう、後おでこが出るね。結構な美少女になるであろう女の子だが……めっちゃ怯えていますうがな、父さん父さんおびえてますって。

？ 「うつうつ」

詠春 「あいさつなさい、刹那」

刹那ね……魔眼を一瞬だけ使つと……あれー？ この子混血？それだとビクビクするのも当たり前かあ、だが体中に打撲痕と内出血はいただけない。なんでこんなに？

刹那 「さ、さくりや……ふぐう」

がはー！！ 萌えたああああああ！ そこで嘔みますか？！ 父

さんこの子面白いです、いろんな意味で!!

刹那 「さく、さくりや……さくりやざき、せつなです」

結局、噛んだままいったあああああああああああ?!!
なにこのかわいい生物うううううううううう?!!

木乃香 「さくりやざきせつな?」

詠春 「ちがうだよ木乃香、彼女は桜咲刹那、わけあって私が保護した少女だよ」

木乃香は意味が分からなくて首をコテンと横に倒す。
やべえ、なにこのかわいい(r y
じゃなくて……あいさつしようか

夷 「じゃあ俺からだな、俺は近衛夷、隣の木乃香の兄だ」

木乃香 「うん、いまにいさまにいつてもろうた、このえこのかで
す、よろしくせつちゃん」

刹那 「せつちゃん?」

木乃香 「せつなやから、せつちゃん! よろしくせつちゃん!」

刹那 「せつちゃん、木乃香さんありがとう!!」

夷 「こら! 刹那!」

ビクと過剰に反応する刹那は反射的に体をかばおうとする……そう

いうことが、体中の痣や怪我は！！
俺はすぐに謝る。

夷 「わ、悪い刹那、そうじゃなくて……木乃香がお前のことをせつちゃんってよんでるんだから、お前もあだ名で呼ばないと」

俺はできるだけやさしく言う、すると刹那が顔を向けてこつちを見る。

その姿はまだ震えていた……なんでだ？ 誰がこの子を追い詰めた？！！

怒りを表情に出さないようにしながら刹那の返事を待つ。

刹那 「……このちゃん」

木乃香 「え？」

刹那 「このちゃん！ 木乃香だから わきゅー！」

木乃香がタツクルよろしく刹那に突っ込む、それをほほえましく見る俺と父さん。

まあ木乃香の照れ隠しだが……俺の場合だと骨が碎けるほどの衝撃がくる。

木乃香 「せつちゃん！ せつちゃん！」

刹那 「この……ちゃん、このちゃん！」

一気に笑顔になった二人、だが……

夷 「おゝまゝえゝら」

木乃香 「まずう、にいさまがおこった！ にげるでえせつちゃん！」

刹那 「え？ えええ？！」

夷 「無視するなああああああああああ！！！」

木乃香 & 刹那 「きゃあああああああああああああああああああああ！！！」

そのまま力果てるまで鬼ごっこをした俺ら三人は疲れて終わった後に眠ってしまった。

まあ俺は起きて二人を寄り添うように寝かせるが……。

この数日後、俺は本格的に神鳴流の見習いになり修業を始めた……刹那は来年からだそうだ、仲間外れの木乃香には素子さんが見てくれた。

そしてそのまま数年がたち、俺が仮面ライダーとしてのビギンズナイトを迎えることになるが……一言言っておこう、きつかった、いんな意味でも！

夷 「ようやくかよ」

作 「ちなみに素子さんに見られます」

夷 「ネタバレ?!」

作 「まあねえ、画像見て一目ぼれしたわ」

夷 「確かにかわいいが……」

作 「最初はねえ、お前と木乃香以外はくっつけないつもりだったんだよ」

夷 「で? それでなんでこうなった?」

作 「画像見たら全員めちゃくちゃかわいかったから! ぶっちゃけ木乃香と素子、刹那はマジで一目ぼれですよ」

夷 「本当に欲望だな、とあるメダル怪人になっちまえ」

作 「じゃあここら辺で終わりにしよう、タイトルコール」

夷 「次回、振り切れ総てを!」

作 「……ネーミングセンスなしだあああああ?!」

夷 「次回も見てくれ……ってこれ別の小説の次回予告じゃないか
あああああああああ!」

作 「バラバラだなあおい!」

振り切れ総てを（前書き）

はい今回はタイトルと内容が一致しません。

キヤラ崩壊注意、嫌な方は戻ってください。

それでもかまわないのでしたら、あとがきで会いましょうそれでは、
どうぞ！

振り切れ総てを

はいな、こんにちは夷です……うえ、やっぱキャラ変えるのはやめよう、よお夷だ。

誰に言ってるんだろうか？

まあいい、俺は五歳になりました。木乃香と刹那もだけどな。

なんとか神鳴流の免許皆伝まであと少しだよ……どうしてこうなった？

あまりに修行が楽すぎた、木乃香との鬼ごっこがここまで鍛えられるとは……だってこの頃『エクスカリハンマーや！』とか言いながら追ってくるんだもん、いやあ十トンハンマーなんかに追われる日が来るなんて。

ちなみに気の修業にもなったので気の扱いもうまくなった、父さんや素子さん、ほかの修業仲間の動きを見稽古で見ればうまくなるよ……見稽古ってこんなにチートだったんだなあ。

ああ、そうそう魔眼がパワーアップしまった。……解析、理解のほかに複写、直死が追加されました。……たぶん俺の成長限界突破の才能が魔眼を進化させてるんだと思う、直死なんて空の境界か！
って思ったもの、俺って人外に入ってるようだ、複写は見稽古の能力が魔眼に影響したんだろう、直死は……たぶん特訓だな、父さんとの。

あの野郎、四歳児に木刀で心臓狙いやがった、そのあと四六時中狙われたから死線が見えてきた……つまり死を見すぎたから死線が見えちゃったんだ

……鬱になってきた、修業もろもろそうだが、俺の容姿がさらに男の娘になってきた、もう完璧に初対面なら女って思われる。外見は両儀式だよ。

夷 「斬岩けーん」

ズガーーーーーッ！

夷 「竜破斬！」

спан！

夷 「魔人剣！」

ザーーーーーッ……ドーーーーーッ！

夷 「雷鳴剣」

バリバリ、チュドーーーーーッ！

夷 「百烈桜華斬！」

ザクザクザク！！

夷 「行くぜ、とっておきの技！ 鳳凰天翔駆！」

ゴワーーーーーッ、チュドーーーーーッ！

夷 「さてはて、ここからが本」

素子 「やめんか！」

ほぶ！ なんだよー、連続奥義にしようと思ったのにー。

素子 「あんたは道場を壊す気なのか?! ウチでもあんな威力はでえへんで!」

夷 「あれでも抑えてるんだけどなー」

素子 「よーわかった、ウチの未来の旦那さんが規格外か」

夷 「だーからー、俺は結婚する気はないぞ?!」

素子 「アクセル(ぼそ)」

夷 「うぐ!!」

実は……うん、素子さんにアクセルになるところ見られて襲われた。調子に乗って『変……身!』って言いながら変身したらばつち見られました。

正確には俺がどれほど強いのか確かめる気だったみたいだけど……結果言っと勝ちました。

いやー、人体にマキシマムドライブ放つてもいいみたい。

そのあとまさか、求婚されるとは……あのー俺五歳児ですけど。

夷 「うー、でも素子さん」

素子 「素子でいいと言うとるやろう? 旦那様」

夷 「……俺は五歳児だが?!」

もういやだ、ちなみに魔人剣や鳳凰天翔駆は……はいネタ技です、TOシリーズのパクリ技です。いやあ神鳴流に気を電気に変える技があったから火とかできるかなあって試したらできた。

秘奥義は今のところ鳳凰天翔駆しかできてない、それでも気は十分なんだが……修業してたら総量が増えた。

今は俺の創造する力で気を抑えつつ自身に重りをつける、道具を作った。

最初はめっちゃくちや重かった、最初は十キロから……さらに一週間で一キロずつ増えていくようにしたら……今は百キロほどに。

夷 「（だけでも多少、邪魔な程度なんだよな）」

素子 「まあいいや、とりあえず……風呂行こうか」

夷 「あんた一人でな！」

この間なんか『背中洗うたる！』って言いながら突っ込んできましたよ。

俺吹き出しましたよ、どそこのエロゲだ？ まあ弟と入るっていう感じなんだろう……たぶん、姉の鶴子さんが温かい目で見てるけど……そういえば素子さんってシスコンだったような？

木乃香 「駄目やーーーー！！ えびにいとほウチが一緒に入るやーーーー！！！」

素子 「バカ言わんというて！ ウチと入るんや！」

夷 「そろーり、そろーり」

刹那 「私と入ってくだひゃい……えーちゃん！」

夷 「お前もか刹那！！ っていうかなんで噛む？！」

萌えるからいいが！　ちなみに刹那は腕がいらしく父さんに直々に教えられている。

メキメキと力を伸ばしてるらしい。

木乃香は合気道を……うん力の受け流しじゃなくて、木乃香アタツクの威力が倍增された。

たぶん木乃香と刹那さえいればそこら辺の大人は太刀打ちできないだろう。

ああ、刹那が「えーちゃん」って呼ぶ理由？　それは最初俺が女だと思ったかららしい、それからなんでも、えーちゃん、と呼ばれるようになった。

夷　「お前ら、勝手にやってろ！」

木乃香　「えー、遊ぼうや、えびにい」

刹那　「遊びましょうよ、えーちゃん」

素子　「ウチとあそ　「素子！！」姉さん？！」

鶴子　「あんた、勉強終わってないでしょう！！」

素子　「か、かんにんや~~~~~！！」

鶴子　「素子！！　まったくあの子は姉離れできたと思ったら、次はこれや」

夷　「……なんかすいません」

鶴子　「ええよ、まったくあの子は……まさか姉離れで来たらこないな子に恋するなんて、やっぱり男に免疫をつければよかったわ」

……最後ら辺は聞こえなかったが鶴子さんはやっぱり妹思いだなあ。
彼女が青山鶴子、素子さんの姉で今度結婚するらしい。

ちなみに神鳴流最強の剣士だった……ごくたまに修業をつけてもらえるがきつい。

鶴子 「けど夷君みたくなええ子なら、素子も嫁に出すのもええかも」

夷 「……冗談を、俺には不釣り合いですよ」

彼女だって好きな人の一人や二人は……いるよね、いてよ！

現実逃避はここまでにして、鶴子さんにあいさつしながらシャワーを浴びに行く。

木乃香と刹那には適当に言いくるめて外に出しておく、前に突入されてえらいことになった。

……俺は少し嫌な予感がしていたのでシャワーを最小限にして外に出る。

||||| 木乃香視点

木乃香 「なんでウチのこと見てくれないんだろ？」

ウチの名は近衛木乃香、大好きなのはえびにいや！

この頃のえびにいは少し冷たい……というか、女の子に優しくすぎるんや。

無自覚なのか、はたまたねらってるのかやら……狙ってたらかのエクスカリハンマーで頭かち割ったる。

刹那 「このちゃん、このちゃん今日は何して遊ぶの？」

木乃香 「そうやなうーん、えびにいがおれば簡単に出てくるんやけど」

刹那 「はあ、一緒にお風呂入ってくれないよ」

この子、ナチュラルにえびにいの裸見るって宣言したよ、今?!
ぐぬぬぬ、せつちゃん恐ろしい子や! えびにいの裸はウチのもんや。

木乃香 「鬼ごっこでもやろうか?」

刹那 「うん! じゃあ、じゃん、けん」

木乃香 & 刹那 「チョキ」「パー」

……ニヤリ、計画通りや。

刹那 「このちゃん!!」

木乃香 「くやしかったら捕まえてみーや!」

刹那 「そこになおれや! このちゃん!」

木乃香 「ここまでおーいで!」

うふふふ、せつちゃんが京都弁なっただってことは……ふふふ、イジリタイムや。

せつちゃん、日頃のえびにいへのスキンシップの恨みや、この頃兄様成分が少なくなってもうたのに……！！

刹那 「待ちなさい、このちゃん！」

さあどうやってあそ。

ウチは失念してた、昨日ぎょうさん雨が降って川が増水してるのを、いつの間にか川に飛び出していた……一瞬だけ飛んでるような感じがして、水に落ちてもうた。

刹那 「こ、このちゃん……！！ん！！！」

苦しい、助けてえびにい、兄様！！

？ 「たく！ 嫌な予感しかあたらん！ 変身！」

？ 「HENSHIN」

なんか兄様の声がした瞬間、変な声まで聞こえてもうた。そしてウチは意識を失ってもうた。

＝＝＝＝＝ 夷視点

? 「DANGER! DANGER!」

俺はゼクターからの木乃香の危機が迫った時に流れるように設定していた音楽が流れた瞬間、気を強化した足で森の中に走っていた。万が一木乃香に何かがあった時にゼクターには木乃香を守るようにしているが、それでもダメなときには電子音で知らせるように設定した。

夷 「くそ!」

限界まで気を使って足を動かす。

幸い、木乃香の大きな魔力を辿っていけば簡単にわかるが……場所が川なのだ。

確か、昨日の大雨で増水していたような。

刹那 「こ、このちゃー………ん!!!!!!」

ついた矢先に刹那の悲鳴が聞こえた。

木乃香は……まずい!!! 川に落ちた!!!

夷 「たく! 嫌な予感しかあたらん! 変身!」

ゼクター 「HENSHIN」

カブトのベルトにゼクターを装着させると俺の体に変化が起こる。

腰のベルトから装甲が展開される、武骨な格好をし、左肩に『ZECT』と書かれた文字が現れる。

仮面ライダーカブト・マスクドフォーム、俺が一番好きな仮面ライ

ダーだ。

しかし、そんなことを言ってる場合じゃない。

すぐにゼクターのホーンを右に少し倒す、するとゼクターから電流が流れ、まず腕、肩、胸、顔の順で装甲が浮かび上がる。

まあ知ってる人は知ってると思うがカブトのもう一つの姿になるための準備だ。

そして足以外のすべての装甲が浮かび上がった瞬間、ゼクターのホーンを完全に右に倒す。

夷 「キャストオフ!!」

ゼクター 「CAST OFF」

そして三百六十度すべてにカブトの装甲が飛び散る。

あ、刹那の方には飛ばしてないよ。そして飛び散った装甲の下からさっきよりもスマートな装甲が現れる。

そしてカブトの顔のカブトホーンが立ち上がり、角のように立つ。

そして複眼が青く光り、ゼクターから電子音が鳴り響く

ゼクター 「CHANGE BEETLE」

仮面ライダーカブト・ライダーフォーム、元々カブトは二段階変身と呼ばれる、特殊な変身方法で戦う。

防御と攻撃が高いマクドフォームで戦い、機動力と攻撃力が高いライダーフォームでとどめを刺す、とても戦略的なライダーだと思う。しかし今は…… 木乃香を助ける!! 初めてだが行くぜ!!

夷 「クロックアップ!」

ゼクター 「CLOCK UP」

ベルトの右側のスイッチを押すと電子音が鳴り響き俺はクロックアップ状態に入る。

クロックアップっていうのは、まあ一種の加速装置みたいなもんだ。速度がバカに早いから水の流れが止まって見えるし、落ちる葉っぱの動きすら止まって見える、まあ実際は少しだけ動いているんだが……。

原理はよくわかんないが『タキオン粒子』っていう、粒子の力で加速してるらしいんだが……まあいい。

夷 「木乃香 ああああああああああああ！」

俺はクロックアップ中から川の中に入り、溺れかけている木乃香の体を持つとすぐに川から出る。

水にぬれているが命に別状はないだろう。

ゼクター 「CLOCK OVER」

ゼクターからの電子音が鳴り響き、クロックアップから抜け出す。ああ、そうそうもしもクロックアップ中にゼクターを外したら、超負荷で俺の体がサンドウィッチになっちまう。

夷 「木乃香！ 木乃香！」

刹那 「え？！ こ、のちゃん？」

まあいきなり出てきて変身して、いつの間にか救出してたら誰だっ
て驚くだろうな。

まあ変身はもう解いたのだが、誰が妹をパンチ力何々もあるライダーの腕に置いておくか！ つぶれちまうよ！

夷 「とりあえず、無事だったことを喜ぼうか」

刹那 「……さっきのはなんなんや？ えーちゃん？」

夷 「……時が来たら教えるけど、今はダメ。……まあこれだけ
言っておくか、俺は仮面ライダーだからな」

刹那 「カメンライダー？」

夷 「ああ、お前や木乃香がピンチの時に現れる、正義の味方さ」

刹那 「……でもウチ、このちゃんを、お嬢様を危険な」

夷 「ちょいな！！！」

ズガンと刹那の頭にチョップをくらわせる。

全くこいつはネガティブに考えすぎるんだよ。

痛そうに頭を押さえる刹那、まあ痛くしたんだがな。

夷 「いいか？ お前は五歳だ、できることだって限られてるし、
例え護衛役だったとしてもそれは父さんがお前を信頼してるから、
お前を木乃香の護衛に選んだ」

ちなみに俺の護衛は素子さん、なんかいつの間にか両親公認の許嫁
になっちまいましたよ、どうしてこうなった？

そして素子さんはまんざらでもない様で、姉の鶴子さんは土下座ま
でしてお願いします、って言ってきました、アレエーこれってどう
したらいい？

夷 「それに俺はお前を信賴してるし、お前なら木乃香を守れると信じてるからな」

刹那 「でもウチ、裏、切って、もった」

あーあ、泣いちゃったよ。

もう仕方ない、今回だけだぞ？

俺は刹那の体を抱きしめてやる、少しびくつとしたけどまあいいや。

夷 「さっきも言ったがお前は五歳だ、なんでもかんでもできるわけがない。周りを頼れ、俺はお前の友達だし、それに……修業仲間だからな」

なんか腕の中の刹那がすげえ沈んだような感じがする。

気のせい……だよな？

刹那 「これからもウチ、お嬢様……このちゃんの傍に居てもええの？」

夷 「ああ、これからも妹を頼むぞ？」

さて、とりあえず帰りましょうか。

木乃香の服も着替えさせなきゃいけないしな。

……やっぱり木乃香専用のゼクター作るか、コンセプトはフランクメモリみたくな純粋な防衛本能による護衛、刹那の刀改造して、サイドみたくなるか？ 刹那のメモリだし。

ああ、そうそうメモリやゼクターを解析しようとしたらできたよ、この魔眼まじチート、ハイパーゼクターすら解析できたぞ、やっぱり作るか木乃香の護衛兼刹那専用メモリを。
忙しくなりそうだ。

||||| 木乃香視点

木乃香 「う、ううん」

あれ？ ウチなんで布団に寝てるんや？

ああ、そうや、ウチ、せつちゃんと遊んでて川に誤って落ちてもうたんや。

刹那 「このちゃん！ 大丈夫？！」

木乃香 「うーん、ちょっと頭がぼやけてるけど大丈夫や」

うん、なんとか無事やけど……誰が助けてくれたんや？

夷 「やっと起きたか」

木乃香 「えびにい……」

わかったんや、えびにいが怒ってる。怒ると怖いんや兄様は……ア
カンアカン、昔の呼び方に戻ってもうた。

夷 「お前、俺は言ったよな！ 川は増水してるから近づくなと！」

木乃香 「ご、ごめんなさい」

夷 「みんなに心配かけて！ 父さん、母さん、素子さんに鶴子さん、刹那だつて心配したんだぞ……！」

う、ウチはそんなつもりなかったのやけどなあ。

夷 「それに……」

あれ？ えびにい、なにしてはるの？ なんで抱きつくの？！
なんとえびにいがウチに抱きついたのや、けど泣いておつた。

夷 「もしも、俺が間に合わなかったら！ ほんとによかった、無事で……！」

木乃香 「……えびにい」

夷 「ちゃんと刹那やみんなに謝るんだぞ？」

そう言つて離れるえびにい、まずう、顔が赤くなつてる。

うー、えびにいの鈍感！

木乃香 「ごめんなあ、せつちゃん、心配かけて」

刹那 「いいよこのちゃん、ウチが言わなかったのが悪かったんや」

……ウチってほんま幸せもんや、こんないい兄がいて、友達が居て

ほんま。

木乃香 「幸せや」

|| || || || || || 夷視点

夷 「はあ、やっぱり妹の危機になると落ち着かん」

あるときもそうだが……木乃香がピンチなときにはまったくもって
あたふたしちまう。

俺も妹離れしないと。

真剣にさっきのメモリの件を考える、形は……人型じゃなくて鳥型
のメモリにしよう、エクストリームみたく自立行動して、AIはゼク
ターを参考にすればいいや。

じゃあ刹那に合わせて、変身機能はつけなくていいからなあ。ああ、
マキシマムドライブ機能はつけとこ。

詠春 「夷！」

夷 「どうしたの？ 父さん」

詠春 「ああ、少し話がある、ちょっと来なさい」

なんだろ？ ああ、学校かな？

でもなー、俺は大学まで一応だが行ったんだが？
とりあえず父さんの部屋まで行く。

振り切れ総てを（後書き）

作 「今日の！ ネグラジオー！ ゲストはこの方！」

木乃香 「近衛木乃香や！」

作 「……あれー？ 今日は刹那さんのはずなんです？」

木乃香 「ああ、そうや、せつちゃんはOHANASHIをしたら
快く譲ってもらえたんや」

作 「ガクガクガク、この子こえー、幼女こえー」

ガゴン！！

木乃香 「ちよつと黙つとき」

作 「ずびばせん」

木乃香 「この小説のメインヒロインはウチやろ？」

作 「まあーそうですが……なんか俺の気まぐれで増えそつな」

木乃香 「えびにいの初めては、ウチのもんや！」

作 「ちなみにその知識は誰から？」

木乃香 「ウチの母さんからやー！」

作 「夷逃げてー、超逃げてー！ この幼女ヤバイ」

チュドーーーーーン！！

木乃香 「少し頭冷やそうか？」

作 「撃った後に言わないで、つつかキャラが変わってますよ」

木乃香 「最近、はまっとるアニメのキャラの真似しただけなんやが？」

作 「やめてください、あれ三期から空気キャラが目立ってえらいことになってるんですから」

木乃香 「スターライトぶ」

夷 「言わせねえよ！」

木乃香 「あ、えびにい」

夷 「なんか刹那が、部屋の隅でガクガク震えてたから木乃香のせいだと思ったらこのざまだよ！」

木乃香 「まーええやんか」

夷 「よくねえよ！ つつかその知識捨てなさい、母さんも何教えてんだよ」

作 「お前ら……つつか後何話かしたら、夷、逝って来い」

夷 「字が違う?!」

作 「ああ、まあ意味的にはあってるがな」

夷 「俺死ぬの?!」

作 「それは神のみぞ知る」

夷 「カミイイイイイイ!! (作者)」

作 「はいはい、カオスになってるから木乃香さんしめて!」

木乃香 「ええよー、次回、別れのSノ兄は妹思い」

夷 「タイトルでだいたい内容理解できるけどな!!」

作 「次回も」

木乃香 「見いへんとハンマーでかち割るで!」

夷 「……妹を暴走させた結果がこれだよ!」

作 「こんな妹で大丈夫か?」

夷 「チェンジで」

木乃香 「兄様?」

作&夷 「待て待て、ハンマーを置け! 死ぬって100tはさ
す アッーーーーー!!!!!!」

別れのS／兄は妹思い（前書き）

今回は木乃香の麻帆良に行く話を書きましたが……予想以上に長くなってしまった。

キャラ崩壊、原作ブレイクが目立ちますが……どうかご容赦を。それでも嫌な人は戻ってください。

準備はOK？ それではどうぞ！

別れのS / 兄は妹思い

ヒーハー！！ 夷だぜ！！

……すまん、寝不足でハイな気分になってる。

はいはい、六歳になりましたー、神鳴流の免許皆伝したおー。

……やばい、深刻な寝不足だ。早く寝よう。

それから今日、木乃香と刹那が麻帆良に行きます。どうしてこんなった？

どうやら東と西の対立が問題らしい、あっちには祖父もいるから大丈夫だろうけどな。

ああ、東ってのは関東魔法教会の連中で西は関西呪術協会ってことだ。一言でいうと融和を図りたいらしい。

東と西は昔から血なまぐさいことが多かったらしい、俺の父さんと祖父になってようやくそういうことがなくなってきたようだがゼロにはならなかった。

一回だけだが俺に刺客が送られてきた、東の魔法使い、というよりもあっちは正義の魔法使いだそうだが……正義の魔法使いが誘拐ってどうよ。

そのとき魔力の制御といくつかの魔法を魔眼で複写、理解しました。魔法の射手だっけ？ 使い勝手がいいし、魔法と気を合わせてその反作用で身体強化できるようになりました。たしか昔、家に来たタカミチって人が使った……ナントカ法って奴だと思うがそれができた、あと全力だしてみようかとリミッターを外したらえらいことになった。

死線は見えるは、相手の行動パターンは理解できるは、技使えば複写と見稽古で覚えられるは、と俺が悪役みたいになった気分でしたよ。

ええ、あのぐらい師匠……鶴子姉さまの修業に比べたら、ガクガクすみません、奥義連続で使用しないでそれ広範囲残滅技っあああ

あああああああ！！！！

ハッ！ すまない混乱したようだ。ああ姉さま？　なんか素子さんの許嫁だからこう呼べって言われました。

何故？　それはな『ぶっちゃけ、あんた女にしか見えへんで』だそうですね、死にたくなってきた。母さんがフリルやらが大量の服やゴスロリだっけ？　そんな服着せてきたからなあ、刹那と木乃香、素子さんと鶴子さん、鼻から血だしながら見てたし、なんか鼻息が怪しかったです、はい。

そんなこんなで剣術したり、いろんな技を見稽古したり、父さんに殺されかけたり、鶴子さんの修業で死にかけたり、素子さんが夜寝るときに布団に入ってきたり、刹那の噛み癖を直したり、木乃香のブラコンがひどくなったり、ハイパークロックアップで過去に行つてメモリ作ったり、……ぶっちゃけ六歳児がすることじゃねえ！

ああ、魔眼がさらに強化されました。吸収に分解、霊体が見えるようになっていました。吸収は魔法を吸収し力にしたり体の傷を治したり、ぶっちゃけ伝勇伝の残滅眼です、分解は魔法だけなら構造を理解しその場で解除する、まあ中級魔法ぐらいだったら、上級は無理、まだ追いつかない。霊体は死線見えるのに霊体見えないのかよwwww、とか思ってたやつ手上げろ、今すぐ燃える天空をぶちこんでやるよ。……ゴホン、あれだなんかぼやけてるの見えるなー、って思ってたたら悪霊でしたwww、死線切って殺しましたよ。

なんか霊感があったらしく、見る修業をしてたから才能が成長したようです。

……あれだ、俺は思った、成長限界突破ってチートじゃなくてバグじゃね？　と。

だって鍛えれば鍛えるほど強くなるんだよ？　身体能力じゃなくても体の機能や魔力総量、気だって無限に成長する、だって限界がないんだもの。

まあ魔眼はここまでにしよう、つうか俺の魔眼最近バグになってきたよ、もうやだこの目、いや俺の才能か。現在俺は魔力と気の大半

を封印してる、魔力は馬鹿でかいが気は同年代の子供と同じくらいと錯覚させていて神鳴流の師範代くらいしかない、まあくらいって言ってもかなりの量だが……、それを全部首飾りの俺専用のリミッターにしてある、元々は木乃香からのプレゼントだったがこれ幸いに改造してみた、魔法も使っていないからばれることもないし、防御力もとある管理局の魔王様の最強の技を十発撃って壊れる強度の結界を三層に分けてつけてるつまり壊れないwww。

木乃香 「嫌やー、えびにいと離れるなんて!!」

詠春 「すまん木乃香、おじいちゃんだって向こうで一人で頑張ってるんだ、それに向こうで友達を作ってたきなさい」

木乃香 「嫌! 兄様とせつちゃん、素子姉さん達がいればええの!」

すまん、今家族で喧嘩してる、今まで長く話してたのは現実逃避するためだ。

いやー、かわいい妹にそう言ってもらえるのは嬉しいが向こうに行かないと東と西の融和も図れなくてえらいことになる。あーもう言うしかないか。

夷 「行つて来い木乃香、そっちには刹那だつて一緒に行くし、素子さんも行く」

俺がOHANASHIをして素子さんには刹那と共に木乃香の護衛になつてもらつた。

まあファーストキスが奪われた程度でよかった、正直刹那だけでなく素子さんも護衛だと盤石だし、向こうで男友達「ボーイフレンド」でも作ってもらい、俺への興味を失ってもらつ……最近マジで貞操

の危機を感じる、前世から童貞なんだよ、俺。

木乃香 「兄様はウチがあっち行ってもいいの？」

夷 「はあー、いや、そうじゃなくてな。あっちには俺たちの祖父……妖怪じじいもいるし、向こうで友達を作ってもらいたんだよ」

妖怪じじい、俺の実際の祖父ではないが木乃香の祖父で後頭部が以上でかい、ぬらりひょんですよあれは、最初あったときはミルクを吹き出したねあれは。

まあいいじじいだよ、麻帆良の学園長であってさらに魔法使いであり俺と木乃香を溺愛してくれる人だ、腹黒じじいなんて言われるが組織のトップが黒いことをやってないわけないだろうし、良心がありすぎてそれに悩んでいたみたいだしな。

木乃香 「絶対、嫌や！ いきとうない！」

夷 「……いい加減にしろよ？」

いい加減切れてきた、子供であっても、妹であっても決定したことだし、一度家族で話し合って決めたことだ。

木乃香だって了承したし、俺だってしぶしぶだが了承した。

夷 「俺だってお前と離れたくないし、刹那やお前を知らない土地に送るのは父さん、母さんも嫌だ、けどな」

桜 「そのへんにしとき、夷」

夷 「母さん！！」

桜 「少しお話ししようか、木乃香」

木乃香 「……うん」

そう言つて母さんが木乃香を連れて行く。

俺だつて木乃香を麻帆良なんざに行かせたくない、けどじいさんの件もあるし、東西の関係を少し修正したい。木乃香のほどの魔力保持者が行くということはつまり、西が自分の秘蔵を出したと融和の証にもなる。まああれだ結局は大人の汚い事情だ、俺が行つてぶつ潰してもいい、あそこには大戦の英雄であるガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ、高畑・Ｔ・タカミチが居るが今の俺なら瞬殺できる。それほど力を持っている、ぶつちやけるとハイパーカブトのハイパークロックアップで視認できないほどのスピードであいつらの頭と胴体を別れさせればいいだけだ。

……それをしないのは一重に、俺の祖父である、じいさん、近衛近右衛門が居るからだ、あの人には実の孫ではなかったがかなり優しくしてくれた。あの人が居るから俺は麻帆良を破壊しない。

まあ、俺は壊れてるんだろう。別に俺の家族と友達、大切な人以外の命なんざ知ったことじゃない。

詠春 「……夷、すまん」

夷 「謝るのはこつちだよ、すまないな……父さん。俺のワガママを聞いてくれて」

そう父さんが麻帆良までなら、俺が木乃香と刹那、素子さんを送つていい、だそうだ。

正直、俺の実力を知っているから行かせてくれたんだろう、剣士としての実力でも俺は並の魔法使いが10人いても太刀打ちできない力を手に入れていた。本気を出せば、まあ英雄と言われる者たちと

でも渡り合えるはずだ、そのぐらいの修業してきた。

詠春 「いいんだ、私のささやかな償いだよ」

夷 「……父さん」

そういえば木乃香と母さんは遅いな、どうしたんだろ？

||||| 木乃香視点

ウチは嫌やった、なんでウチだけ……いや、せつちゃんや素子さん
もついて来てくれるそうやけど、嫌や、えびにでも反対せえへんの？

桜 「木乃香、前にも家族で相談したやろ？」

木乃香 「そうやけど……嫌や」

桜 「はあ、まったくあんたは……ま、大方夷が反対しなかったの
が気に入らへんのやろ？」

木乃香 「そうや！　なんでえびにいは反対せえへんのや！」

桜 「あの子は賢いのや、賢すぎて自分の思いを伝えきれんのや」

訳が分からない、兄様の思い？

桜 「最初はあの子もあんたを向こうに送るのは反対してたんや」

木乃香 「じゃあなんでや!？」

桜 「あんたの為や、夷はな、あんたにもっと広い視野を持つてもらいたいんやろ」

……このときのウチはよくわからへんかった、わかったのは後、数年後やった。

桜 「あんたの友達は、刹那に素子に鶴子、まあ夷もか、まともな友達はこれしかないやろ？」

木乃香 「……そうやけど」

桜 「ウチも悪かったやけど、あの子はあんたを近衛として見ない人たちに会わせたかったや」

……そうや、いつもウチに近づいてくるのは近衛と言う名に集まる人しかおらへん。

まともに、木乃香として見られたことはあらへんのや。

桜 「あっちに行けば、あんたは近衛ではなく、木乃香として見られる。そう思ってたあの子はウチらの提案に賛成したんや」

木乃香 「……そうやとしても、嫌や、嫌やなんや、兄様と別れるなんて嫌や」

ウチは好きなんや、兄様が……えびにいが好きな人に離されていいと思うわけないやろ！

桜 「……薄々気づいておったけど、まあええ」

木乃香 「お母様？」

桜 「夷が言ってたで」

夷 『俺は木乃香が……妹が大好きだよ、けどな、あいつにはもつと友達が必要なんだよ。俺が甘やかしすぎたのも原因かもしれないけど……けど、あいつにはもつと人と触れ合ってほしいんだよ、俺がどうなってもいいから、木乃香には普通の女の子として育ててほしいんだよ。近衛じゃなくて近衛木乃香としてな』

……アカン、反則や。兄様、ウチがなんで好きになったか知ってる？
そんな優しい言葉に惚れたんやで？
ウチは気付いていないやけど、頬に大粒の涙が流れておった。

桜 「それに夷も中学になったらソツチに行くと言ったのや」

木乃香 「そ、それ、ヒグツ、ほんま？」

桜 「そうやで、どうする？」

……ここまでお膳立てしてもらおて行かないわけがないやろう。
馬鹿にい、来たら甘えたる。

|||||| 刹那視点

刹那 「このちゃん」

素子 「心配しない、それに木乃香だってわかってもらえるやろ…
…ゴホン、わかるだろう」

素子さんは無理して標準語で話しているが、ウチ……私は丁寧語でしか話せないがこれで大丈夫なのでひょうか……うー、噛み癖が治りません。

素子 「私だって夷と離れるのは嫌だ、それに……うーうー！」

刹那 「素子さん?! 真っ赤ですよ?!」

なんか素子さんは標準語になると硬いイメージがする言葉しか言わない、本人曰く『なぜか、こんなしゃべり方になってしまっんだ』だそうです。

刹那 「素子さんはいいんですか? 私は今年から学校に入学ですが……」

素子 「大丈夫だろう、友達だっているけど、別に親しいのはいなかったしな」

刹那 「……夷さんと別れていいんですか?」

素子 「ウグ！ し、しかたないだろう！ 夷からキスしてまでお願いしても しまった？！！」

へえー、キスですか？ いいですねえ、年上という有利なものを持っていて、ウチは修業仲間や！！ ……ゴホン、うらやましいファーストキスなんでしょうねえ、さぞかし嬉しかったんでしょう、今もなんか思い出しながら顔が笑っていますし……夕風の錆にしてあげましょうか？

ああ、この夕風は詠春おじ 長に譲ってもらいました。

なんでも素子さんは妖刀ひなを渡されたらしい、妖刀としては最高クラスだそうだが……とても危険だといえーちゃんが言っていました、大丈夫なんでしょうか？

素子 「駄目やでー夷、もつとつよ ハッ！！」

刹那 「涎たれてます、素子さん」

素子 「す、すまない、私もまだまだだな」

刹那 「大丈夫です、そこに首を固定してください、斬りますから」

素子 「い、嫌だぞ？！ 夷から褒められたこの髪を切られたくない！！」

ポニーテール好きなんですよ、私もしようとしたんですか……邪魔だったんで横に纏めているんですがえーちゃん褒めてくれた、ウフフ、ハッ！！

刹那 「ま、まあ落ち着きましょう」

素子 「そ、そうだな！ とりあえず当面の護衛は私に任せておけ、夷からもらった……メモリだったか？ そんな物をもらったしな」

……そうです、えーちゃんがどこから持ってきたメモリと呼ばれる兵器、魔法でもなければ気でもない、異質な力でできているものをもらいました。

素子さんには『ウルフメモリ』と言う、二メートルぐらいの狼の形をしたなにかをもらい、私には『ソードメモリ』鳥形の何かです、モードチェンジ？ で素子さんは鎧に、私のは刀に付いて切れ味、その他を強化してくれるそうです。

えーちゃんが言うにはどこかの祠の封印を解いたらこれが出てきたと……まあ理由がほかにあるのでしょうか、何れ聞きます。

素子さんの普段はなにか棒状のなにかに変形して持ち運べるそうです、私のはすてるす？ と呼ばれる認識障害の結界とはちがう力で見えないそうです。

刹那 「えーちゃん、いつか聞き出しましょう」

素子 「当たり前だ、待っている夷」

そういえば、このちゃんと桜さんはまだでしょうか？ 今私たちは車の前で待っているのですが？

素子 「来たか……」

素子さんの目が鋭くなりさっきまでの呆けていた人とは別人に見えます。

私も顔を前に向けると……このちゃんがえーちゃんに抱き着いて歩いてきました。

このちゃん？

「……………」夷視点

夷 「木乃香、離れなさい、離れてください」

木乃香 「そう恥ずかしがらんといて、ウチとえびには相思相愛
ってことがわかったから、な」

夷 「やめてくれ、俺は妹と禁断の関係になることだけは勘弁だ」

木乃香 「ええやんか」

刹那 「…………えーちゃん？」

素子 「夷？」

…………あのーなんか、刹那と素子さんが怖いんですけど待て、夕風と
ひなを向けるな、死ぬ刺さってる！！

夷 「素子さんに刹那、やめ」

素子 「素子と呼べ！」

夷 「いや、素子さ」

素子 「素子と呼べ！」

夷 「……素子、っていうかキャラ変わりすぎだろう?!」

仕方ない、俺がキャラ把握したのが今これ書いてるときなんだ（作者より）

作者 ああああああああああああ！！

刹那 「……いいですね、えーちゃんはこんな美少女に囲まれて！」

夷 「俺の周りの女は話を聞かない」

詠春 「どうでもいいがそろそろ行きますよ」

……父さん、あんたもキャラ変わってるよ。これも全部ケフィア（作者）って奴のせいなんだ！
これ言つとかないとダメだろ、555も好きなんだよな！。

そうして車に乗り込む、俺、父さんに母さん、刹那に素子に木乃香は駅へと出発した。

まあその中で木乃香が過激なスキンシップをして、火に油を注いだように刹那と素子が怒ったのは俺のせいじゃない。

夷 「じゃあ、少し行ってくる」

詠春 「ああ、お義父さんにもよろしく頼む、木乃香、夏休みとかはこっちに戻ってきなさい。刹那に素子、よろしく頼む」

桜 「夷、頼んだで？ 木乃香も体に気いつけてな。刹那も素子もな？」

刹那 「はい、長、桜さん。このちゃんは任せてください」

素子 「はい長、桜さん。木乃香と夷は任せてください」

木乃香 「うん、お父様もお母様も元気だよ」

そして別れの言葉を言いながら俺と木乃香、刹那に素子は電車に乗る。

途中、なんか魔法使いの気配も感じたがすぐに消えた、つうか俺が消した。まあ魔法の射手の改良版で相手の後ろに転移させて……まあ言わんでもわかるだろ？ 殺してない、殺傷性能ゼロで雷で捕縛しただけだ。

夷 「……寝てやがる」

木乃香 「うーん、兄様」

刹那 「うへへへ、えーちゃん、この服着てや」

素子 「駄目やでー、まだ早いで？ ああ、でも……」

……助けてください、この子たちえらいこと想像してます。

なんか起こしたら三人に目を刺されたんですが?! リアル大佐
状態だよ、目が、目があああああ!!

そんなこんなで麻帆良に着きました。

世界樹ってどのくらいでかいが、気になってたが……マジででかい、
魔眼で解析してみたら内包魔力がえらいことになってたよ。

……で神力まであったよ、あつやべえ解析と理解併用してるからあ
!!

『夷は神力の扱いが分かった、身体能力が片手で龍を倒せるように
なった。最大魔力量、気が上がった。神殺しの武器が作れるように
なった』

あばばばばば、こんなところに強化フラグがあああああああ
ああああああああああ!! 人外街道まっしぐら!!

俺は内心は嬉しかった、もしも神レベルの奴らが来たら決定打に欠
けていた。

これで俺のカブトとアクセルが強化できる、ああ現在、対魔力装甲
と魔力変換機能、気の強化機構のおかげか、魔力、気でできたシー
ルドが常時展開、さらにカブトの装甲であるヒイロノカネがパワ
ーアップしてヒイロオオガネになりました。

木乃香 「ここが麻帆良やな」

刹那 「ここが…… 大きなところです」

素子 「うーん、特訓のし甲斐があるところだな」

夷 「……とりあえず、お前らじいさんのところ行くぞ?」

確かタカミチだっけ? そんな人とガトウさんが来るらしいけど?
父さん、さすがに英雄はやりすぎだよ?

? 「うん? 君たちが詠春さんの子供たちかな?」

夷 「ええ、あなたは?」

? 「ああ、僕は高畑 し、式?!」

? 「どうしたタカミチ、そんなあわて 式いい?!」

夷 「は? は?」

タカミチ 「し、式、いったいどこに行ってたんだよ!」

ガトウ 「たつく、お前は! 姫と真名を預けてフラツといなくな
りやがって!!」

なんかガトウさんとタカミチさんが喜んでいるんですが?
ていうか式って俺?!

夷 「あ、あの」

ガトウ 「なんだ? 式?」

夷 「俺は近衛夷です、式なんかじゃないです」

タカミチ 「え？ あれ？ そういえば顔は似てるけど……背が小さい？」

夷 「そりゃあ六歳ですから」

ガトウ 「たしかに式だと俺たちにそんな丁寧に言わないしな……すまん人違いなようだった」

刹那 「なんなのですか？ あなたたちは？」

あ、やばい、刹那と素子が戦闘態勢に入ってる。

つうかここで戦うつもりか？！ ここ大宮駅、俺がお世話になってるところだし、駅抜けた先にアニメイトがあるよ！！

夷 「落ち着け刹那、人違いだったんだろう（待て待て、この人たちは父さんの戦友だ！）」

素子 「（戦友？ まさか……赤き翼？）」

そのまさかだ、つうか式って誰だ？

父さんの師匠とも言ってたしなあ、まさか赤き翼のメンバー？

ああ、心配するな、木乃香には聞こえないように念話でしゃべってます。ああ、どうして覚えたのか？ なんか通りすがりの魔法使いが教えてくれたよ……名前は確か、ゼクトだっけ？

夷 「（その通り、だから礼儀正しくしろよ？ 刹那？）」

刹那 「（なんででふか?! ……う、うー）」

…… お前はなんで噛むんだよ？ たしか式神のちびせつなも噛み癖だったような…… どうしてこうなった？ やっぱもう少しKYOU I KUすべきだったか？

夷 「はぁー、誰かが言ってた……」

俺は右手を天に上げて、あの人のマネをする。当時、あれを見て『おばあちゃんが言ってた』と言ったのはいい思い出だ。

夷 「本物を知る者は偽物にはだまされない、つまりあんたら両儀式と言う本物を知ってるから、俺と言う偽物にはだまされない筈だ」

…… あれー？ 二人が固まった？ なぜ

ガトウ 「本当に式じゃないのか？」

タカミチ 「言い方までそっくり、あつちは『おばあちゃんが言ってた』だけだ」

…… そいつ、転生者だろう?! ちなみに確認したがこの世界に仮面ライダーはいない…… まあTVでやってないってことだが。

残念だ、またそのときにクウガやアギトを見れるかと思ったのに…… クウガは最高だし、アギトはシャイニングがかっこよかったしなあ。

いや、ここは響鬼もよかったというべきか？ あれもあれで味があって面白いしなあ、一番面白いのは…… 決められないなあ、あえて言うならカブトとWだなあ、ディケイドもあれはあれでよかったしなあ。よく言うなら歴代の主人公たちをまた出してもらいたかった。

夷 「まあじいさ……学園長のところに行きましようか？」

そついつて、全員が同意したので歩き出す、ガトウさんたちが変な声を出してたけど……俺は両儀ではなく近衛だ！

「……………」 近右衛門視点

ワシの名は近衛近右衛門、ここ麻帆良の学園長をしておる……しかし今日ぐらいは忘れようかの。今日は孫たちが麻帆良に来てくれたそうじゃ。

まあ、木乃香と夷なんじゃがな？ ……最初は夷の事を知った時は婿殿に反対しようと京都にまで出向いたのじゃが……ええ目をしておった、例えるなら宝石のようじゃった。

ワシはこの子を孫として見守っていいこうと思つたわい、なぜならあの子から可能性を感じた……まるで英雄にでもなるかのようなの。買い被りすぎじゃか？ まああの子の報告をしてもらつたのじゃが

……チートじゃ、バクじゃ。

六歳にして神鳴流免許皆伝、単独での魔法使い（この者は魔法を奪つた後、ワシ直々に殴つたわい）を撃退……本当に六歳児かの？ まあいい、それでも可愛い孫の一人じゃ、木乃香も順調みたいじゃな。義兄とはいえ、夷に触発されたのか合気道を始めたらしいの、もう大人顔負けの実力者らしいの。

うれしい限りじゃ……じゃがのう、婿殿に木乃香には悪いことをしたの。いくら東西の対立を失くそうとしたのだとしても、ワシがし

たのは大戦中と同じ、同胞を異郷の地に送ったと同じ事じゃ……まあ「卓越者」^{オーバースキル}の両儀式がゲートを破壊してくれなかったら……もつと死者が出たじやろう。

話を戻そうかの……木乃香にはあの「黄昏の姫御子」と「ガンスリンガー」に仲良くしてもらうかの、オーバースキルの弟子であるあの二人ならなんとかなるじやろう、二人とも頭もいいし、実力もガトウを越えておるしの。

ああ、後「闇の福音」にも協力要請はしておこうかの？ まああやつなら無下には扱わんじやろう……彼女も根はやさしい子じゃ。

コンコン

おっと、来たようじやの。

ガトウ 「学園長、連れてきました」

||||| 夷視点

夷 「相変わらずの頭だな」

近右衛門 「ひどいのー、相変わらずの女顔じゃな夷」

夷 「黙れじいさん、その頭切り取って茶碗作るぞ？」

近右衛門 「お主は昔から毒舌じゃな」

夷 「どういいでもいいが……木乃香と刹那、素子をよろしく頼むぞ？」

そういつて頭を下げる俺、正直この人との会話はこんな感じだ、本気で言っていないよ？ だってこの人が反対してたら俺は捨て子に戻ってたもん。

木乃香 「おじいちゃんも久しぶりや！」

近右衛門 「久しぶりじゃ木乃香……いつみても可愛いのに」

刹那 「お久しぶりです、おじい……ゴホン、近右衛門さん」

素子 「久方ぶりです、近右衛門さん」

近右衛門 「うゝむ、刹那は昔見たくおじいちゃんでもいいのじゃが……素子も昔見たく近右衛門おじいちゃんでもいいのじゃぞ？」

刹那 「そんなこと言えませんよ、私もこの学園に通うんでしゅ……う、うう」

……刹那、なんつうところで噛んでるんですか？
真っ赤だよ、仕方ないから頭をなでてやる。さらに真っ赤に?!
つつか両脇をつねられて、イタ、イタイ。

素子 「私はいいい年ですし昔見たくは無理ですが……近右衛門さんでどうでしょうか？」

近右衛門 「むう、仕方ないの公の場では学園長で、私生活では近右衛門でいいぞ？」

刹那 「うう、ひゃい」

素子 「わかりました」

夷 「おい、いつまで真っ赤になってるんだ？ そんなに真っ赤になるとタコになるぞ？」

刹那 「ならないですよ！ えーちゃん！！」

素子 「駄目だ、やっぱり夷は鈍感のようだ」

……好き勝手言うが、俺は鈍感じゃねえし。

お前らの気持ちは気付いてんだよ……けどお前らに恋したら死んだあと耐え切れないんだよ。

夷 「まあいいや、じゃあ俺は帰るぜ？ じいさん」

近右衛門 「もう帰るのか？」

夷 「元々は京都で送るつもりだったんだ、それにもう会えないこともないだろう」

ガトウ 「そうか……じゃあタカミチ送っていけ」

タカミチ 「はい師匠、さあ行こうか、し 夷君」

夷 「必要ないし、俺一人で帰れますよ」

木乃香 「行つてまうの？」

刹那 「えーちゃん」

素子 「夷」

……みんながすごい目で見ますが無理だ、もう切符は買つてあるしなあ。

俺が居ること麻帆良に迷惑がかかるしなあ。あ、木乃香もか。

夷 「まあいいさ、言つただろう？ 夏休みとかはそこにいるじいさんや素子や刹那と帰つてこい」

木乃香 「……うん」

夷 「あつー！」

やべえ、木乃香にあれを渡してなかった！！

あれが一番重要なんだよ。俺はポケットから腕輪を取り出し、木乃香の腕に付けてやる。

木乃香 「これは？ えびにい」

夷 「俺からの小学生祝いだ、あ、素子とか刹那にはもうあげてるからな？」

木乃香 「ありがとう！！ えびにい！！」

まあそれは護身用の簡易結界を張れる腕輪なんだよなあ、まあ強度

はこの結界の二倍くらいだ、刹那のメモリに危険信号を送るようになってるからな、アフターケアもばっちり。

夷 「じゃあな」

そういつて学園長室から出る俺……さあ転移で大宮駅にでも行くか。久々にビツク メラにも行きたいしな。さあ故郷の空気を謳歌するか。

そして俺は誰にも気取られずに転移し、大宮駅で遊び、無事に京都に帰りました。まあ途中に魔法使いが襲ってきたが魔法の矢で撃退しました。

〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓 三人称視点

夷が出てった後、木乃香はルームメイトに会うためにタカミチに連れられて自分の部屋に向かった。
残ったのは魔法関係者だけである。

近右衛門 「さてここからは大事な話じゃ、素子に刹那」

刹那 「……はい」

素子 「……」

近右衛門のひょうひょうとした雰囲気が消え、真剣な目で刹那と素子を見る。

その姿は戦士のように鋭く魔法関係者の長の威厳があった。

近右衛門 「君ら二人には木乃香の護衛と夜の警備もしてもらおうかの」

ガトウ 「すまん、正直俺も出てるんだが……それでも侵入するアホ共が多くてな。それに足手まといが多いんだ」

ガトウの表情が曇る、それは疲労の顔であり落胆でもあった。

実際ガトウと言う英雄のネームバリウムもあり麻帆良に侵入するアホも少なくなったが……いなくなったわけではない、逆に質より量なのか以前よりも侵入するときの人数が多くなった。

そして魔法先生の練度の低さもあり、ガトウとタカミチがカバーしようとしてもきれない点がある。その点では将来有望の刹那と神鳴流の秘蔵っ子である素子が居ることは学園にとっても喜ばしいことだ。

素子 「そこまでひどいのか？」

刹那 「うっ、私は六歳なんですが」

近右衛門 「なんというか……すまん」

その雰囲気消し飛ばすように扉がノックされる。
学園長に一声かけてから入室したのは褐色の肌を持つ刹那と同じくらしい少女だった。

？ 「来たよ？ 学園長」

近右衛門 「おお来たか、この子は麻帆良の切り札であり、卓越者と呼ばれた両儀式の弟子である……」

真名 「両義真名だ、よろしく」

近右衛門 「真名にはの、刹那と同室になってもらおうかの、色々教えてやってくれんか真名」

真名 「いいよ、刹那だっけ？」

刹那 「ああ、桜咲刹那だ」

真名 「よろしく……ちなみに魔法関係者からこう言われているよ」

『銃使い（ガンスリンガー）』とね、はっきりした声で誇らしそうに言った。

||||| 木乃香視点

うー、今ウチはタカミチ先生に連れられて部屋に送ってもらった。大丈夫やるか？ ウチ、同年代の子と話すのせっちゃんにいいさ……えびに以外初めてや。

タカミチ 「緊張してるね」

タカミチ先生がそう言ってもろうつたけどガチガチに緊張して声がでえへん。

もうどないしようか。

木乃香 「同室の子ってどないな子なんですか？」

タカミチ 「うん？ 優しい子で木乃香ちゃんみたくきれいな子だよ？」

そんなお世辞みたいなこと言われても喜ばへんで。えびにいに褒められた方がうれしいんや。

タカミチ 「さっ、ここだよ。アスナー入るよ」

アスナ？ 「はいはい、入っていいわよ」

扉を開けると橙色の髪のをした女の子が椅子に座っておった。確かに可愛い子やな。

タカミチ 「今日からアスナの同室になった近衛木乃香ちゃんだよ」

木乃香 「今、紹介してもらおうた、近衛木乃香や、よろしゅうなアスナちゃん」

アスナ 「アスナでいいよ。私は両義アスナ、よろしくね、木乃香」

別れのS／兄は妹思い（後書き）

作 「今日のネギラジオ！！ ゲストはこの小説のマスコットこと
桜咲刹那さん！！」

刹那 「マスコット？！！ なんてしゅか！！」

……チーン

作 「それやるからですよ」

刹那 「噛み癖が直したいです、作者さん直してください」

作 「だが断る（ギリ）」

刹那 「斬岩剣！！」

作 「や、やめ」

放送事故により少しお待ちを

作 「ひどい目にあった」

刹那 「真つ二つにして斬ったはずなんですが？」

作 「それはな、二次創作クオリティ、つまり気にしたら負けだ」

刹那 「……納得できません」

作 「それと麻帆良組はこれから少しでません」

刹那 「え?!?!」

作 「いやー感想に『千草をヒロインに』っていう神の声があったな」

刹那 「ま、まさか?」

作 「うん、ヒロインにするためにフラグ立てておかないと」

刹那 「う、うわーん、作者のバカあああああああああ!」

作 「だから刀はしまえ」

アッ――――――――!!

放送事故に(r y)

作 「ゴホン、まあ今回こんなに長くなったのはびっくりした」

刹那 「なんか私変なキャラとして定着してるような?」

作 「そんなキャラで大丈夫か?」

夷 「大丈夫なわけないだろうが!!」

木乃香 「だまらっしやい」

夷 「は、はい」

素子 「今回は特別に姉さんを読んできた」

作&夷 「「待つて死にたくない――――！！」」

刹那 「逝ってらっしやい」

作&夷 「「嫌ダアアアアアアアアアアアアああ！！」」

アッ――――！！

京都の町はフラグでいっぱい（前書き）

今回は少しシリアスです。

月詠、千草の初登場、京都弁はこれでいいのかー?!?!
激しく心配です。

キャラ崩壊、原作ブレイクが嫌なお方はお戻りください。

そして今回はアンケートを取りたいと思います。

それではどうぞ!!

京都の町はフラグでいっぱい

ぐーてんもるげん、夷だ……もう何言ってんだろ？

すまんな最初から愚痴みたくしてしまつて……まああれから、木乃香の入学から二年たち俺も八歳になりました。木乃香たちもな……向こうではアスナと真名っていう子に優しくしてもらつてらしい、ありがたいことだ。一回あいさつに言ったら、確かに礼儀もよかつたが……俺の顔みたら固まつて、抱き着いてきた。

そのあと、木乃香に『ごるでいおんはんまー』と言われながらハンマーで頭をかち割られた、あいつ合気道だよな、やってんの、そうだよな？！腕力が跳ね上がってるんですけど……！

まあ抱き着いてきた二人に事情を聴くと俺が両義式にとても似てた、だそうだ。どこまで迷惑かけるんだ？！なんと二人とも式に拾われて麻帆良に送つてもらつたそうだ……で両義は行方をくらませてるそうだ……アホか？

でだ、麻帆良に行くと言つていいほど魔法関係者に間違われる、もう嫌だ一番やばかつたのは……葛葉刀子とシスターシャークティっていう人だ。なんでも大戦中にあつちに居たらしく……両親が死んで自分たちも殺されそうなときに颯爽と現れたのが両義らしい、当時ゲートが破損してたらしく、魔法世界から出れなかった彼女らは両義の魔法で旧世界に戻つたらしい。

ああ、旧世界つてのはこの麻帆良がある世界で魔法世界つてのは火星にある世界だ……火星人なのか？まああつちはオスティア・ウエスペリタティア王国という麻帆良のバックにいる連合の本拠地があるが……王女であるアリカ・アナルキア・エンテオフュシアが絶賛失踪中らしい、王女が失踪つてどうなんだよ？まあ原因はすべての責任を王女に押し付けようとした当時のメガロメセンブリア元老院のせいなのだがな。

話がそれたな、で刀子さんもシスターも俺に両義の影を見たらしい、

つつかそつくりすぎたと二人とも落ち着いたときに謝罪してたけどな、なんでも学園長、まあじいさんが受け入れ二人とも生徒として麻帆良に入り、そのまま魔法先生になつたらしい。

もう嫌だ、両義さんよ、早く失踪から出てこい。そして俺に謝れこのくそ野郎。

ゴホン、まあこの二年間は俺は学校には行かず、修業してましたよ。まあ近衛を継ぐのが俺だしな、木乃香を麻帆良に行かせるためにそれ相応の条件は出されたしな。この程度ならいい、木乃香の為だ。まあ刹那も木乃香も素子も向こうでうまくやってるらしい、クラスの間中がうるさいとさ、素子の方はなぜか女に人気らしい……なんてこつたい頼むからボーイフレンドを作つて俺を安心させてくれ、鶴子姉さまの修業がきつい、あの人六歳に上級の霊体でもぶつた切る奥義放つてくるからなあ、あれ物理攻撃も少しあるんだ、よく生きてこれたな……。

ああ、それと毎度恒例、魔眼が強化されました。つつか魔眼じゃなくて神眼になりつつあるんだが？ 悪霊なんか解放しただけで消え去りましたよ？ ああ、強化というか追加ね、幻術と未来線見えるようになりました……因果律にすら手を出し始めたみたいだよ。

現在の魔眼は解析、理解、複写、直死、吸収、分解、霊体感知、幻術、未来線が見える、なんだコレ？ 魔眼？ ちがうよね、つつか今魔眼の能力を封印してる、まあ能力制限だな未来線が強力すぎて頭が死にかけた、情報量が半端ないんだよね、俺じゃ使いこなないし意味なんだよなあ、感覚がクウガのペガサス並に超直感になってるから大体の攻撃なら放たれても避けれる。クロックアップにすら反応できた超直感だ、人間の攻撃なんて遅すぎるぞ？ まあ発動してるのが5分が限界なんだよな。

分解も上級魔法もできるようになった、自分の魔法で試してよかった。ゼクトありがとう！！

うん、ぶつちゃけいいうと八歳にして身体能力が人間を越えた……ま

あとつくの昔に越えていたような気がしなくもないがな。

夷 「行くぜ父さん、散沙雨！」

詠春 「まだだ、私も現役ですよ。斬岩剣！」

俺の数発に及ぶ突きをたった一振りの木刀の太刀筋で切り払われる。さすがに気で強化しているが筋力に負荷をかけてリミッターもつけてるから、全力が出せない、つつか全力でしたら京都吹き飛ぶよ？ 冗談じゃなくて本当に。

詠春 「なかなか……だが！ 雷鳴剣！！」

夷 「ちい！！ 雷破斬！！」

俺と父さんの木刀に同時に電気エネルギーが纏われ、甲高い音が辺りに響き、ぶつかり合う。

電流の放流が俺と父さんを襲うが結界を張って受け流す、自分の技で倒れるかアホ。

夷 「黒刀斬岩剣！」

詠春 「なんの！ 斬魔剣！」

ああ、この黒刀？ 神鳴流に背くが魔の力、妖力を使って技を放つと白じゃなくて黒になるから黒刀……下手をすれば妖力に飲み込まれるが……そんなへまはしないし、適量だ、つつか魔法と気も合わせてるからな、料理という隠し味だ。

斬魔剣なんざ、魔を斬る技だからすこぶる相性が悪いが……。

夷 「振り切るぜ!!」

詠春 「くっ?! 歳のせいですかね……だが!!」

俺が力を込めると父さんも負けじと力を込める、黒と白の軌跡がぶつかり合い対消滅していく、互角、まったくの互角……だが。

夷 「行くぜ? 秘奥義……」

詠春 「なっ?!」

俺は右手を離し、そのまま腰にある短い方の木刀を出す。
これで終わらせる!!

夷 「魔人千裂衝!!」

まず、右手の短い木刀で父さんの木刀を吹き飛ばし、そのまま左手の木刀で後ろに下がりながら切り上げ、足を前にだし前進し右手で切り上げてから左手で切り下げる、そのまま切り上げと切り下げをもう一度父さんの体に叩き込みながら、気を右手に集中させ最後の切り上げを決める!!

詠春 「ガハッ!？」

これがやりたいがために太刀と小太刀の二刀流にした、実際に使ってみると太刀だから若干ナイフよりも振りが遅かったが許容範囲内だ、二刀流は案外一刀流よりも強いと思われるがだが実際はキツイ、二刀流の方々には頭が下がるものだ。

一刀流は両手の力を一気に込めることができ一撃一撃が強く、二刀流はどっちかっていうと力よりも技の剣技だ、片方しか使えないか

ら力も半分だしな、それに攻勢に出れば強いが防戦一方だときつくなる……調子にのって鶴子姉さまに戦いを申し込んだらばこぼこにされた……手加減一切の容赦なくな、気付いたらベツトの上だ。二刀流の人は少ないから見稽古が使えないので純粹に俺の剣技として使えることが一番よかった、やっぱり自分の剣技は持つておかない。

詠春 「イタタタ、私も歳ですかねえ」

夷 「何言つてんだよ、何度も俺の隙を狙つてやがっただろうが」

そう、父さんは的確に俺の死角に攻撃を叩き込んでいた。

さすがにヒヤヒヤしたぜ？ サムライマスターは伊達じゃないか……というよりも父さんの戦闘経験がすごいからな、俺なんて戦闘力はっかだ。

あ？ 戦闘力〃強い？ バカ言うな、本当に怖いのは基本に忠実な玄人だよ、戦闘経験っていうのは貴重だ、命のやり取りだから下手をすれば二、三段階強くなる時もあるし、あれだ危機管理能力もレベルアップだよ。勘つていうのか？ まあそんな自分しかわからないものを手に入れることができる。

……俺は強すぎる力のせいかな、戦闘じゃなくて圧倒しちまうんだよ、経験もあったもんじゃない。まあ鶴子姉さまと父さんの訓練が一番いいがな。

詠春 「ずいぶん強くなったな、これならあの子も……」

夷 「つつか今日はもうやめるぞ？ 久々に京都の町を歩きたいんだ、これが」

最近、とあるキャラクターのしゃべり方が気に入ってるんだよな、

これが。

……うんやめよう、俺はアクセルでも仮面ライダーだもんな。
そうそう仮面ライダーで思い出したがアクセルメモリを参考にとあ
るメモリを製作中だ、できれば使わなければいいんだがな……。

詠春 「ああ、いいですよ？ 暗くなる前には帰ってきなさい」

夷 「俺はもう……そんな子供じゃない」

詠春 「何を言ってるんですか？ まだ八歳でしょうに」

夷 「うるせえ、行ってくる！」

そう言つて、俺は道場から出て、シャワーを浴びようとする。
今日は仮面の部品を買いに行こう！ 楽しみだなあ。

けど俺は今日ほど外に出て後悔したことはない……まあ理由は後で
な。

||||| 詠春視点

詠春 「ふう、本当に強くなった」

私は胴着を脱ぎ、傷だらけの体を見る。

長い間戦ったせいか、深い傷が多い、一番多いのは……師匠の修業
か？

詠春 「まったく勝手にどっかに行ってしまったて」

そう私以上の剣技、ナギ以上の魔力、ラカン以上の気、そして魔眼と言っていたが……あれは魔眼ではなく神眼のような気がする。とにかく強かった、そして厳しかった。正直あの人が居なかったら私は桜の元に戻らず、魔法世界でのたれ死んでいただろう、まったくもってあの時の自分は不甲斐無さすぎる。

まああの人の一言は強烈だったよ。

式 『おばあちゃんが言ってた、男がやっていけないことが二つある。女を泣かせることと食べ物で粗末にすることだ、ってな』

詠春 『……私は』

式 『考えるんだな、バカ弟子が。自分を待つてくれる女を泣かせるなんて男の風上にもおけねえぞ？』

この一言は効いた、私は京都にナギたちと共に戻り即座に妻に対して土下座をしたよ。

その後は女の涙と言うもの強さを知ったよ、私では到底たどり着けないものだった。

今も迷惑をかけているが……本当に妻には苦勞をかけている。

師匠………そういえばあなたの顔が思い出せないんですが？

式 『あ、そうそう、俺の顔の記憶を消させてもらっぜ？』

し、ししょおおおおおおおおおおお！！！！

「|||||||」 夷視点

夷 「ぶれすと、ふぁいやー！」

うう、なんか鼻がムズムズするからくしゃみしちゃったよ、誰か噂してんのか？

まあいいや、今日は筆と墨を手に入れたよー！ やつとふふ、仮面が完成する！ ああ、仮面はDARKER THAN BLACKの黒の仮面だ。あれはかつこよくて作りたかったんだ！ どうせなら本格的に作ろうと思って材料まですべて自分でそろえた……中々あの形した仮面がないからなあ。

夷 「さあ作るぞー！」

周りの人に温かい目で見られながら歩く俺、意外に俺は外に出ることが多かった。この商店街の人たちとは仲良しだ、多少の変な事なんてなんのそのだ、店がヤクザの抗争に巻き込まれようが魔法戦に巻き込まれようが、手に持つ家具や調理道具で戦う、コンバットじいさん、ばあさんたちである。あ、言うておくけど本気でやったら下手な軍隊よりも強いよ？ 結束力もあるしなおかつここにいる人たちは大戦を生き残った人ばかりだ。刀や魔法を使わなくても麻帆良の三分の二くらいは占拠できるだろう。

夷 「さあて、今日は」

？ 「きゃあああああああああ？！……！」

夷 「なんだ?!」

ただならぬ悲鳴で一氣に平和ボケしてた頭が活性化する。
ちくしょう、間に合えよ!! そう思いながら悲鳴のした方に走っていく。ああ、荷物なら影のゲートに入れたよ。

|||||?視点

ウチの名前は天ヶ崎 千草。

まあわけあって親がいないんやが……それについては触れたくあらへんのや。

ただウチはなんで父様や母様が死ななきやあらへんのや? 卓越者…… オーバースキルが憎い、憎くてたまらへん、あいつがウチの両親を殺したんや!! あいつは突然ウチの前に現れてこう言い放ちおった。

式 『お前の両親を殺したのは俺だ』

ウチは激昂して飛びかかったんや、式神と一緒に。父様の形見の猿鬼、母様の形見の熊鬼で襲い掛かったんや、けどあいつはただ指を鳴らただけでウチの動きを止めたんや、悔しゅうて悔しゅうて、今でも思い出せる、あの顔を。

式 『この程度か? なら話にもならねえよ』

千草 『殺したる、あんただけは殺したる!!』

式 『いい目だ、もつと憎め、そしていつか俺を殺して見せろ!』

そう言つてあいつは姿を消した、ウチは泣いた一晩中泣いて誓つたんや。

あいつだけやない、西洋魔法使いを殺してやる、とな。

父様や母様が許してくれるはずない……けどやらなきゃあかんのや、そつしなきゃウチは自殺しとる、もう嫌なんや父様や母様が居ない生活なんて……

千草 「父様……母様あ、ウチ、ウチはあ」

？ 「おやおや、まったくいい感じで実験材料が居ますね」

千草 「誰や!」

？ 「おつと、私の名はルシフェル……聞いたことありませんか？
地獄に落ちた天使ですよ」

千草 「なんや？ 冷やかしならさつさとどっかいきいや!」

ルシフェル 「おやおや、なにをそんな怒っているのですか？
…まあいいでしょう、あなたはここで死ぬのですから」

ガイアメモリ 「WEATHER」

なんやあれは？ 四角い何かが男の体に刺さると男の体が光って、姿が変わったんや……なんや嫌な予感がある？

千草 「ハッ！ どうせコケだましや！ 行や猿鬼、熊鬼！」

ウチと今のこいつらなら……勝てる！

……ウチはそう思ったんや、けどウチにはまだ相手の力量なんてわからなかったんや。

ルシフェル 「邪魔だ、カス共」

千草 「う、嘘やろ？」

一瞬にして猿鬼と熊鬼が消された、なんか雨雲みたいなものから放たれた赤い電流で猿鬼と熊鬼がやられたことがわかったのやが……ウチに放たれた電流はくらってもうた。

千草 「きゃあああああああああ？！……！」

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い、初めてやった攻撃を……ウチを殺そうとするような攻撃を受けるのは、惨めに悲鳴を出して倒れて動けへん！！

ルシフェル 「さすがは地球の記憶と言うべきですかね？ 私が使えばこんなに力をさせるなんてね」

男は白くなったその手を握ったり開いたりしてなんか確かめてるようやった。

ウチは口すら動けないように口を魚のように開くことしかできなかった。悔しいんや、どこの奴かわからん馬の骨に負けるなんて、これじゃウチは復讐なんてできないんや。

悔しい悔しい、悔しいんや！！ そう思うと涙が両目から溢れてき

た。

ルシフェル 「命乞いですか？ 無駄ですよ？ 今ここには結界が張っております。下等な人間ごときに見破れませんよ？」

違う、命乞いやないんや！ ウチは！ ウチはあああああああ！！

ルシフェル 「気にしなくても今から死にますから……ご安心を」

そうして男は腰の剣を抜く。鋭く、ウチの首なんて一瞬で切り裂いてしまうやろうな……悔しいなあ、復讐もできずに惨めに死んで、ウチの人生はなんやったんや！ ウチが何したっていうんや！ ウチはただ……父様と母様と笑って暮らしたかったんや。

ルシフェル 「それでは……さようなら」

ブンと言う音と共に振り下ろされた剣はウチの首を正確に狙っておった。

死んだなあ、ウチ、本当になんやったんや、ウチの人生は？ まあここで死ぬのも……父様、母様今行きますよ。

？ 「くそがああああああああああああああああああああ
！！」

そのとき何かを壊す音と共に何者かが結界の中に入ったんや。一体誰だや？

ルシフェル 「あなたはいつたい？」

見てみると女のようやった、腰まで届く長い髪、そして手に持つ大

きな赤色の剣、いったい誰や？

？ 「通りすがりの仮面ライダーだ！ 覚えておけ！！」

そうしてウチは限界がきたよう意識が消えてもった。

…… 神様あ、あんたが居るやんやったら今だけは感謝したる、ウチは…… まだ生きる。

||||| 夷視点

誰かの声が聞こえた方に行くとそこには何もなかった。

夷 「……解放」

俺はキーワードを言って解析だけ魔眼を発動する。
すると結界が張られていた、中には…… 女の子と

夷 「ウエザードーパント?!」

そこにいたのは仮面ライダーアクセルと激闘の末に負けたウエザードーパントが居た。

ありえない…… まさか転生者か？ そう思った瞬間、ウエザーは腰の剣を女の子の首に向けて振り下ろした。

俺は影からエンジブレードを取り出す、結界破壊効果はもうついている。

夷 「くそがぁあああああああああああああああ
！！」

そして結界を破壊して女の子の首に向かって振り下ろされた剣を弾く、このとき俺は身体能力だけは完全開放していた。
男は少しだけ感心したように声を出す。

ルシフェル 「あなたはいつたい？」

……それならこう言って答えてやる。
自分の世界を追い求めて最後は自分を犠牲にして世界を救った破壊者であり救世主であるライダーの名言。

夷 「通りすがりの仮面ライダーだ！ 覚えておけ！！」

ウェザー 「カメンライダー？ 面白いことを言うが……死ね」

ウェザーは手から電流を出す。結界を張り、女の子と俺を守る。
強度は上級魔法を十発撃ったって太刀打ちできないほどだ。

ウェザー 「……人間風情がぁあああああああああ！！」

怒って連続で撃つが……無駄だ。

それにこいつは妙に俺のカンに触る。いや……俺はこいつが気に食わない、初めてだな人間にそんな感情を抱くなんてな。

俺は天に右手を刺しながらウェザーに向かって言い放つ。

夷 「誰かが言った。子供は宝物……この世でもっとも罪深いのは、その宝物を傷つけるものだ！！」

[illegible]

「まだわからないのか……なら、振り切るぜ？」

「ガイアメモリ
ACCEL」

俺はガイアメモリのスイッチを押し、加速の記憶である……アクセルメモリを起動させる。

そして腰にバイクのスロットルのようなバツクルをつけるとバツクルからベルトが伸び、夷の腰に巻きつく。そしてバツクルの上部中央にアクセルメモリを挿入し、右グリップのパワースロットルを捻りとバイクの排気音がバツクルから流れ出す。

「ガイアメモリ
ACCEL」

そうするとまるでバイクのスピードメーターのようなものが現れ、スロットルを捻るとメーターが最大まで振るがもう一度最少まで戻り、もう一度捻ると時計のような赤いエフェクトが発生する。

そして一瞬だけ俺の体が赤く光り、次の瞬間には俺の体は変化していた。背中にはバイクのスロットルみたいなものがつき、両足には小さなタイヤがついており、顔は鋭利な形状となった「A」の文字が頭部に見える。青い複眼が光り、変身が完了する。

夷「さあ！ 振り切るぜ！！」

仮面ライダーアクセル……その姿は燃える火のようだった。
手にエンジンブレードを片手で持つ。

ルシフェル 「ガイアメモリ?! 貴様はいつたい?!」

夷 「通りすがりの仮面ライダーって言うてんだろぅが!!」

ガイアメモリ 「CYCLONE」

俺はエンジンブレードにサイクロンメモリを挿入する。まあ何でかって言うとな……アクセルドライバーにデータだけがあった、まあ解析してたら偶然見つかったんだがな、他にもジョーカー、メタル、ルナと……あのガイアメモリとベルトのデータがあった。まあいい、サイクロンメモリを挿入したのでエンジンブレードから風が舞いおこる。

ウェザー 「こけおどしがあああああああああああああ!!」

夷 「はあああああ!!」

ウェザーが俺の周りにメモリの力による雲を発生させるが、俺がエンジンブレードを一振りすると風が雲を消し飛ばす。

……Wでも思ったがアクセルにサイクロンメモリを渡せば序盤あんなに苦戦しなかったろぅにウェザーに、まあ大人の事情と言うやつだなあ、きつと。

案外、エンジンブレードってガイアメモリの力を引き出せるから効力は絶大だ。

ウェザーは雲を出すことをあきらめ、手から赤い電流をだし攻撃してくる。俺は走りながら軌道をよんで避けながら近づく。

夷 「斬岩剣!!」

ウェザー 「うおおおおお?!」

とっさに剣で受け止めるみたいだがボディーがから空きだぜ？
俺は右足を相手の腹に向けて繰り出す。うまくいったのかウェザーの腹に決まる、痛そうに吹き飛ばうとするが逃がさん!!
そのまま俺は右足のタイヤを起動させて、ウェザーの体で回転させる。

ガリガリ、と体が削れる音とウェザーの絶叫が聞こえるがどうでもいい。さあ本格的に振り切るぜ！俺は手のエンジンブレードを捨て、左手をドライバーのクラッチレバーに伸ばす。

夷 「……メモリブレイクだ!!」

ウェザー 「うあがあああああああ?!」

そのまま右足をウェザーに当て続けながら左のクラッチレバーを引き、パワースロットルを捻る、するとエンジンの排気音が流れる。

アクセルドライバー（これから長いんでADと略します） 「A
CCEL MAXIMUM DRIVE」

夷 「せいやあああああああああああ!!」

俺の全身に高熱を纏せながら、右足を軸に左足で回し蹴りを放つ。
アクセルのマキシマムドライブ、アクセルグランツァー、本来は後ろ跳び回し蹴りを叩き込む技だが今回は零距离でうてるから回し蹴りにアレンジしてみた。

ウェザーは転がりながらメモリを体内から排出し、元の人間に戻る。

ルシフェル 「ぐあああああああああ」

夷 「絶望がお前のゴールだ」

しかしここで予想外の展開が起きる。
なぜか……メモリブレイクされずにメモリが地面に転がる。

夷 「なんでメモリブレイクできない?!」

ちなみにT2メモリすらメモリブレイクできるのは実証済みだ、そうなるとこのメモリはT2よりも新型か? つうかなんでこの世界にドーパントが居るんだ?!

……一応、裏の世界の事情とかも調べたが、いやぁガジェットって使えるね。怖いよねえ、虫が飛んでると思ったたらその会話が丸ごと録音してるんだから(ニヤニヤ)

ルシフェル 「貴様、貴様、貴様ぁあああああああ!!」

夷 「何者だ? この世界にメモリなんて持ち込みやがって」

ルシフェル 「……その顔、そうか、そうか」

なんだ? 変身解いて、素顔を見たらニヤニヤしだしたぞ?
こいつ変態か?!!

ルシフェル 「ああ、お前の魂見たことあるぞ? この俺を地獄に落とした人間のだ!」

夷 「お前を地獄に……まさか!!」

ルシフェル 「そうさ、俺が実験したんだよ……名前は確か両希夷」

夷 「お前がお前が ああああああああああああああ
あああああああ！」

ルシフェル 「はははははは、今では転生者かあ、でもなあ、いいのか女が死ぬぞ？」

俺が後ろを振り向くと悪魔に囲まれた女の子が……まずい！！

「子供は宝物なんだろう？」

俺は迷わずに女の子の元に走り込み、影から俺が作った刀を取り出す。

カブトのヒビイロノカネと俺の全魔力と気で作り上げ、神力で鍛えた刀、赤い刀身は俺の魔力が纏わせやすいく、纏わらせると赤い刀身が鈍く光る。

夷
「紅刀百烈桜華斬！！」

円を描くように剣を振り、一瞬で悪魔を消し後ろを振り返るが……
奴はいなかった。きつと俺がこの子を見捨てれば倒せていただろう、
けどしなかった、復讐を果たすために一人の女の子を犠牲にするく
らいなら……守った方が百倍いい。

けど……けどぉ！！

夷 「畜生、畜生、ちくしょお おおおおおおおおおおお
 おおおおおおおお！」

辺り一帯に俺の聲が響いた。

「『『『『『』』』』』』」 千草視点

千草 「う、ううん？」

ここはどこや？ 確かウチは誰かに襲われて……。

？ 「起きたか……」

千草 「あんたか、ウチをた」

そこにおつたのは…… 両義式！！

ウチは懷から札を出そうとしたんやけど、なぜかなかったんや。

？ 「悪いが戦闘用の札は回収しておいた、悪いな」

千草 「いまさらなんや？！ ウチまで殺そうとするんか？！」

？ 「は？」

千草 「なんや？ 殺した相手は覚えておらんてか？ この人殺しが……！」

？ 「いやいや待て待て、お前とは今日初めて会ったんだぞ？ 俺

詠春 「ああ、紹介しておきます、この子は私の息子の近衛夷です」

夷 「どうもー、夷でーす」

へ？ 息子？ そういえば詠春様が言っていたような……もしかして、もしかしてや。

千草 「人違い？」

夷 「まあそうなるよな」

あ、あああああああああああああああああああああああ。

千草 「噓やろおおおおおおおおおおおおおおおー！！」

||||| 夷視点

その後、千草さんに土下座して謝れた。正直マジで床に頭こすり付けてたし、父さんの目の前で札で自爆しようとしたしな（父さんと俺でぶった切って中断した）

理由を聞いてみると自分の親を殺した、両義式と俺がそっくりだったからあんなことを言ったらしい、まあ来るものがあつたね。美人さんに初対面で人殺し発言されるなんてなあ、あははははははは、鬱だ、死のう。あ、俺死ねないじゃん。

千草 「ほんま、すんません。ウチ、ウチiiiiiiii!!」

夷 「落ち着いて! はいはい札はしまう(返さなきゃよかった! !)っていかもiii歳なんですから、まだ十歳にもいってない俺にそんな謝らないで!!」

千草 「……ウチ、死のう。まだ子供になんちゅうことを」

ああ、父さんは『その子のこと頼んだよ?』って言って退出していききました。

もう嫌だ、あの野郎、修業の時割と本気な気をぶちこんでやる(後日、詠春が風邪ということで数日間公務ができませんでした、その前の日に道場からすごい気が……)

夷 「落ち着いて?」

千草 「でも、でもウチなんちゅうことをぬかしてもうたんや」

もうしょうがない、語録でなんかいい言葉あったかな?

駄目だ……なんも思いつかない。あ、すいませんね、巫女さんが食事持ってきてくれたよ。

うん? 食事? そうだ!!

千草 「……食事かあ、ここ最近ハマったくっておらんかったなあ」

これだ!!

夷 「誰かが言ってた」

千草 「なんや？ 突然？」

夷 「食事は一期一会、毎回毎回は大事にしろ……つまり、一期一会とは出会いは一生に一度。その機会を大切にしろってことだ。ようするに食事は大切にしろってことだ」

千草 「おもしろいこといいますな……誰の言葉や？」

夷 「天の道を行き総てを司る男が言った言葉だ」

嘘は言っていない、いつかあの人の語録じゃなくて自分の語録を作りたい。

それが俺の目標の一つだ。

千草 「ふうーん、おもしろい人なんやな、そーやな食事は大切にしろ」と

そのまま勢いよく、和食を食べる千草さん。
そーいえば……この人メガネかけてるけど、外したらどうなる？
ちよつと気になるなあ。

千草 「グツ！！ ゴホ！ ゴホ！」

夷 「ああ、まったくゆっくり噛んで食べなさい！」

千草 「え？！」

あれ？ なんか、千草さんがすごく驚いたような顔したんだが？
つつか泣きかけてる？！！ なんでえ？！

夷 「あうあう、ち、千草さんどうかしました？」

千草 「い、いいんや、少し昔を思い出してな。ごめんな」

泣きながら笑顔をしてるけど……。

俺は千草さんの頭に手を置き、撫でる。まったくもってこんなことしかできない俺が嫌になる……神様に人を元気にする才能が欲しかった。

けど木乃香は『兄様の笑顔を見てるのがうれしいんや！』って言うてくれたから、あの日から笑顔を人に向けるようになったんだよなあ、俺の妹には頭が下がる。

千草 「どうしたんや？ ウチは撫でられるのは好きやけど……」

夷 「なんか千草さんの顔が苦しそうだったから……」

|||||千草視点

おもしろい子やった、どこぞの人殺し（英雄）とは大違いや。顔は似とるけど、心はまったくもって別人やな。

食事するときだって、誰かの言葉を借りてウチにご飯を食べさせようとするんや、まったくなんかあの言葉を聞くと食べえへんといけないような気がしてくるんや。

それに懐かしい言葉を聞いたんや。よく小さい頃、父様に言われたセリフや、懐かしいなあ、昔は本当に、ほん、とくに……アカン泣きそうや、なんでやこの子の顔見ると落ち着くんや、敵と同じ顔なのになあ。

そしたらいきなり夷はんが頭を撫でてくれたんや。理由を聞くと……。

夷 「なんか千草さんの顔が苦しそうだったから……」

そのときウチの記憶に不思議なものが飛び込んできたんや。

？ 『なあ千草は将来何になりたい？』

千草 『もちろん はんの嫁さんや』

？ 『ははは、嬉しいねえ、まあ何年かしたら考えてやるよ？』

なんや？ この記憶は？

千草 『嘘や、嘘やああああ！！』

？ 『すまない、俺にはこのくらいの償いしか考えられない』

千草 『何するんや？！』

？ 『すべて忘れろ、そして……』

千草 「おにい、ちゃん？」

夷 「え？」

アカン、わからんけど、わからんけど……目から涙が。

千草 「う、うあああああああああああああああ
あんー！」

||||| 夷視点

数十分間は千草さんが俺の胸の中で泣いていたよ。え？ うらやましい？ ふざけたことぬかしてんじゃねえぞ？ 人が泣いてるのにそんな不謹慎なこと考えるな！！

……まあ年上のお姉さんが抱き着いてくるのは男として……まあ、あれなこともあるのですよ。

千草 「ヒグ、ヒグ、す、すまんなあ、服汚してもうた」

夷 「別にそのくらいは……」

千草 「あの、な、夷はん」

夷 「夷でいいよ？ 千草さん」

千草 「また、ここに来てもええか？ 夷」

夷「当たり前ですよ、いつでもここに来てください」

にっこりと笑うと彼女も笑ってくれた……やっぱり美人は笑顔が一番。

数日後

俺は父さんに言われて、今少し本家ではなく分家の神鳴流の家に來ていた。名目は俺の実力を測りに來たらしいが……なーんか嫌な予感が、こう、木乃香がハンマーを出して追ってきたり、刹那が式神と一緒に刀振り回して追ってきたり、素子に寝込みに襲われたから逃げたら追ってきたり、姉さまの修業逃げたら奥義放ちながら追ってきたりする感じ。って全部追われてるのか？！俺の周りにはアクティブな女しかいないのかああああああああああ！！

詠春 「どうした？」 夷」

「い、いや、なんか嫌な記憶を思い出したから……」

詠春 「……なんだ、あれだ、すまん」

父さん、あんたも苦労してたんだね、巫女さんの姿見ながら鼻息荒くしてたら、母さんにシバキ倒されていた人とは思わないよ。ああ、そうだ母さんは実はかなりの実力者で素子と刹那が二人がかりでも

引き分けるくらい強い。

夷 「そういえば今日の相手は？ この前見たく弱かったら承知しないぞ？」

そう、この前と言うか一か月前の試合では相手が弱すぎてまとめて五人と戦ったんだが……正直それだったら、気を強化した母さんの張り手の方が怖い。あれって岩も砕く威力なんだよなあ。

夷 「頼むから……俺ぐらいとは言わなくても、刹那くらいの実力がなきゃ」

詠春 「お前は本当にバグだな、私の息子とは思えない」

ぶっちゃけると義息子だしな、まあいいや。

あれ？ 相手がきたか？ なんて剣道の面をかぶってるんだよ？

夷 「おいおい、あのバカはなんだ？」

詠春 「……あれがお前の対戦相手だ」

夷 「えー、だるい帰って仮面作りたいただけど？」

ようやく黒の仮面が出来上がったんだよ、強度もチタン合金並に変化したんだよ！ 結界を張って壊れないようにしてんだよ、後は色塗るだけなんだよ！ ヒヒロノカネサイコー！！

すまん、調子に乗りすぎた……まあいいや、おいおい、相手は……。

夷 「二刀流？」

俺と一緒に左右の長さが違う、左手に短い木刀を、右手に普通より大きい木刀を持っている。

二刀流の神鳴流かあ、俺以外にはすごく少ないがいるにはいるが俺の相手にすらならない……が。

夷 「あっはははは、おもしれえ」

詠春 「やる気になったか？」

夷 「ああ」

俺は道場の中央に向かう、相手もこっちにくる。
一礼し、それぞれの得物を相手に向ける、やべえ、俺って結構バトルマニア？

審判 「では……東！ 近衛夷！」

夷 「よろしく頼むぜ？」

審判 「西！ 月詠！」

月詠 「よろしゅうな、夷はん」

審判 「双方とも用意は……」

夷&月詠 「「とつとと始めろ、斬り殺すぞ？」」

審判 「なっ?! ……ゴホン！ では始め!!」

夷 「さあ始まったが終わった瞬間、あんたは八つ裂きになってる

だろうがな」

月詠 「うふふふ、ええお方や、惚れてしまいそうやで」

夷 「俺に惚れるなんて……物好きだな」

なんか後ろの父さんが『あいつは……ナギ並の鈍感だなあ、どこで教育を誤った？』とか言ってるが何のことだ？ 俺は鈍感じゃないんだが？ まあいい目の前の……女だな、声的に。月詠には普通の神鳴流とは違う感じがする、どっちかっていうと刹那のような人外の気配が……一瞬だけ魔眼で視ると、おうジーザスこの子魔族だし。まあ、真名みたくハーフか？ 人間の気と魔族の気が半分だしなあ。

夷 「行くぜ？ 黒刀斬岩剣！」

月詠 「ウチと同じ技や？！」

黒い斬撃が月詠を襲うが体を捻って攻撃を避ける。
まだまだだぞ？！

夷 「黒刀斬鉄閃、避けて見せろ」

月詠 「きやははっは、いいですねえ。ウチも……ざんがんけーん！」

ふざけた物言いだが……威力がハンパない、刹那より強い。
俺は身内の実力を優先させるようなバカじゃない、こいつは本当に強い。

やべえ、黒刀の影響か？ 妖刀使わずに俺が黒刀を使えるのは刀身に妖力を流してるからだ。

月詠 「あつはははは、ここまでの死合いは初めてですえー、ウチもテンションが上がってもうたえー」

あ、やばいスイッチ入った。まあ神鳴流にはふざけた特性がある、どこの戦闘民族かと問いたくなる戦闘衝動とでも言うのか？ そんなものがある、これが発動すると強さが三割くらい強くなる、ちなみに俺は自由にON/OFFができる、今はONにしてるが……相手もかよ。

月詠 「簡単に死なないで下さいよ？ 夷はん？ ざんがんけーん」

次の瞬間、面を捨てた月詠が俺に急接近する。早い、小柄な体格からのスピード、そして繰り出される攻撃の重さ、残念ながら刹那じや勝てるかどうかからん。

それに今の俺の実力と拮抗している、大したもんだ、少しリミッター外すか？

夷 「正直お前をなめてたよ、だが……俺はもう手加減はしないぞ？」

月詠 「ええわー、あんたと殺り合つと興奮するえー、最高や」

夷 「お褒めいただき、ありがとうございますか？ まあいい、黒式・一解除」

そして俺の目が黒から漆黒に変わり、木刀の刀身が黒く染まる。

魔法の文献を読んでいたら……「闇の福音」とか言う魔法使いの「マギア・エレベア闇の魔法」と呼ばれる魔法をまねた、俺の術式解放の一種だ。

もう一つは「咸卦法」……いや「神卦法」か？ まあ、違う点は神

力も取り込んだというべきか？ そのときだと体から虹色のオーラが出て魔眼が常時発動になる、めったに使わないが。

黒式はまありミッターを解放した状態だ、一は身体性能と気と魔力を少し、闇の属性の適合率が高いのか、それとも闇の魔法を使っただけか、どうかわからないが、目から光が消える、イメージ的にはSEEDの種割りか？

まあ一だからな、軽くだ、ほんの少しだけリミッターを外しただけだ。周りの奴らがなんか騒いでいるが……木刀に黒いのは全部闇の属性を持つ魔法と妖力で染まる。

月詠がうつとりしてるが大丈夫か？

月詠 「あんた最高やえー、本当に惚れてまった」

夷 「まあいい、終わらせるぞ？」

月詠 「えー、もう少し斬り合いたいやけど？」

夷 「お前は気に入ったから家に来てから斬り合おう、二人っきりで」

間違いない、前のセリフさえなければ口説き文句だろう。実際は「殺し合いをしようと言ってるのだから」

月詠 「ええよー、ウチもあんたは気に入ったえー。行くえー？ らいめいけーん」

夷 「黒式奥義、一の技」

俺は黒式に一つ一つに技と奥義を持っているが威力が自重できないので技、まあ秘剣なんだがそれを放つ。

月詠の電気を纏った木刀が俺を襲うが……静かに木刀を振る。

夷 「月下斬」

俺は黒い軌跡を描いた右手の木刀で切り上げながら月詠の木刀を両方とも破壊する。

そして左の木刀で月詠の体をとらえ、そのまま切り下げながら月を描くように木刀を振るう。

月詠 「があ?!?!」

吹き飛んでいく月詠……ぶっちゃけ、あいつはもう戦えない、完全に決まったしな。

にしてもだ、父さん怒るだろうな……俺の技って神鳴流としては異端なんだよ、だって魔を討つ剣技が魔を纏う剣技にしちまったんだから。

審判 「……ハッ!! 勝者、近衛夷」

夷 「黒式解除」

その言葉と共に全身の力を抜きながらいつもの自分に戻る、俺。微妙な目で見る周りの神鳴流の方々、そして気絶してる月詠。

詠春 「まあいいでしょう、まったくでは約束通り彼女はこちらで預かります」

師範代 「あ、ああけれども、その女は……」

詠春 「……聞こえなかったのですか？」

あ、父さんキレてる、多少だが目が細くなってる。

師範代は父さんの雰囲気にも呑まれたのか、謝っていた。だせえ、まあいいや、俺も帰る「待ってくれ!!」なんだよ?

修行者 「なんだあの技は?! 神鳴流の技なのですか?!」

夷 「ぶっちゃけると現存する神鳴流を少しいじってみただけ」

修行者 「まるであれは! 妖怪の類の力ですよ?!」

夷 「ああ、だって妖力使っているしな」

その言葉で場が騒然となる、まあ当たり前か、サムライマスターの息子である俺が妖怪の力を使ってるのが面白くないんだろうな。

修行者 「それでも……それでもあなたは神鳴流なのですか?」

師範代 「所詮は捨て子か……」

詠春 「!!!?!!!!」

あ、やばい、俺が抑えられない。

俺は木刀を持ったまま、その師範代の首筋に木刀を当てる、気でずでに殺傷能力抜群の性能になってるよ。

師範代 「なんの真似だ!!」

修行者たち 「『師範代!!』」

夷 「俺が捨て子？ どういうことだ?!」

なるべく混乱してるような声を出す。

まあ知ってるんだがばれてると父さんに悪いしな。

詠春 「ち、ちがう！ お前は私と桜の子供だ!」

師範代 「なんだ知らなかったのか？ そうだよお前は捨て子なんだよ！ 八年前に拾われた！ 近衛という神聖な名前を」

夷 「黙れよ？」

腕の骨を肘を入れて粉碎する。絶叫が師範代から放たれるが……俺の頭は冷水をぶっかけられたように冷たかった。今の一言が俺の怒りを爆発させた。

夷 「俺が捨て子？ それがどうした？ 俺は父さんと母さんの血を受け継いでいないのかもしれない。だからどうした？ この人は！ 俺の父さんだ！」

詠春 「夷……貴様名は？」

師範代 「はっ！ 私の名は長屋 鉄也です」

詠春 「破門だ、出ていけ」

鉄也 「はっ?! 今なんと?」

詠春 「破門だと言ったんだ、何度も言わせるな」

鉄也 「し、しかしその小童は神鳴流を、近衛を」

詠春 「薄汚い口で私の息子を侮辱するな！ それに八年前にも言っただろうが！！ 夷が成人するまでこの事は他言無用だと！」

あれ？ そんなのあったの？

鉄也 「し、しかし！！」

詠春 「くどい、それに今の私は貴様を殴りかねないんだ、とつとと視界から消えろ」

うわー、本格的にキレちゃってるよ。なんか師範代の人なんか真白くなってるし、まあいいか。

俺はざわめく道場を後にして父さんの隣に立つ。

夷 「父さん……いや近衛詠春、話してくれるよね」

詠春 「ああ、この日が来るのがこんなにも早いなんて」

夷 「そういえば……一つ聞きたいんだが」

詠春 「なんだ？」

夷 「なんで俺が月詠をお姫様抱っこで運ばなきゃいけないんだ？」

詠春 「ああ、今日からこの子は家に住むからだ」

夷 「えっ？！！」

詠春 「あのアホ…… まああそこの元師範代に言われてな、少し危険な子らしいが夷が使う黒刀によく似た技を使っらしいから、どうせなら勝ったら夷に見させよう」と

夷 「おい、ちょっと待てやこの野郎」

詠春 「すまない、こんなときにこんなことを頼んで」

拝啓木乃香、兄さんはまた厄介者を拾ってしまったよ、それも超がつくほどの厄介がな。

どうしよう、つうかこの流れだと……俺、近衛から両希に戻るのか？ 結構気に入ってたんだが…… そうなると木乃香まで襲ってくるような気がする、なんか嬉々として俺に飛びかかる光景が目に見えかぶよ。ああ、やっぱり俺ってフラグ体質らしい。

京都の町はフラグでいっぱい（後書き）

作 「今回のネギラジオ！！ ゲストはこの方！！」

素子 「青山素子だ、よろしく頼む」

作 「さあ今回の話は……」

素子 「あの師範代切ってもいいか？」

作 「つつか、夷が好きな人たちが知ったら八つ裂きにされてもおかしくないと言いやがりましたよ？」

素子 「その場にいたら、夷じゃなくて私がキレて殺したかもしれない」

作 「ええ、まったく」

素子 「それでだケフィア（作者）」

作 「なんでしょうか？」

素子 「なんでヒロインがふえてるんだ？！！」

作 「い、イタ痛い痛い、アイアンクローしないで中身が出る！！」

素子 「私が夷の嫁ダアアアアアアアアアアアアあああ！！」

作 「ちょ、これはしゃれに」

ピチューーーーーー！
作者復活中。

作 「アブねえ、バカじゃなかったら即死だった」

素子 「刹那も言っただがなぜ死なない？」

作 「それが二次クオリティ！！」

素子 「ああ、わかった。ツツコんでも無駄と言っやつだな？」

作 「さすがわかってるねえ、まあいいここからは少し真面目な話だ」

素子 「どうした？」

作 「ああ、少し真面目なアンケートだ」

夷 「作者ー、来たぞー！！」

作 「ああ来たか？ 主人公が言わないとな」

素子 「私は？」

作 「あんたはしめてもらっから」

夷 「えつと読むぞ？」

作 「頼む」

夷 「えー、今回を入れて後二話で年少編は終了させてもらいます
が……その間に閑話を入れたいと思います」

夷 「えー、その閑話なのですが……皆様に内容をアンケートして
書くものを決めたいと思います」

？ 木乃香との出会いのときの話（赤ん坊時代）

？ 素子と出会い話（同じく赤ん坊時代）

？ 魔法使いとの戦闘（五歳）

？ ゼクトとの修業編（五歳）

夷 「以上です、えー締め切りは後二話を更新するまでです」

作 「ありがとう、実は全部書こうかと思ったんだが……ぶっちゃ
け無理」

夷 「あきらめやがった」

素子 「そろそろしめないか？」

作 「そうだな、それでは頼んだ!!」

素子 「次回、親の思いと新しい仲間たち」

作 「次回も」

素子 「見ないと……姉さまと一緒に奥義を叩き込む！」

夷「ああ、今回は疲れた」

「まさか戦闘シーンを三回入れるとは……」

夷
「つかれ」

木乃香 「にーさーまー（ニクニク）」

夷「ハハッハハ、コノカサンテニモツテルモノハ？」

木乃香 「勇者王さんに借りてきたんや」

作 「ちよ？！！ 光になるぞ？！！ 素子さん、つて逃げたあああああああああ？！！」

夷＆作者 「「またこの展開かあああああああああああ
あああああああああ？！！」

木乃香 「光になってまえ（ニコニコ）」

[illegible]

ぎゃあ あああああああああああああああああああああああ
ああああ！！！！

親の思いと新しい仲間たち（前書き）

はい、今回も全然タイトルと内容がかみ合っていないません、俗に言うタイトル詐欺です。

感想はいつでもお待ちしております、制限は外してあるので誰でも気軽に誤字脱字、批判、ハーレムメンバーに入れてほしいキャラ、質問は常時受け付けております。

アンケートは継続中です、書き込んで下さい。

親の思いと新しい仲間たち

はろー、夷だ。

あのとんでもない捨て子カミングアウトから数か月がたった。変わったことと言えば、あの師範代は鶴子さんにボコボコにされ、偶然帰省していた素子の耳に入り二度と剣を握れない体になったそうだが、素子に何故と聞いたら、すごい黒い笑みで答えてくれました、昔の可愛かった素子はどこに行った？ 鶴子さんも本気で怒っていた、もう背後に鬼神が見えたよ、最強の神鳴流は伊達じゃないらしい。

まあ、その後俺は近衛の後継者から外された、実際に20歳になったら後継者候補から落ちる予定だったが予定が狂ったらしい、その後に緊急会議でなんとか俺が捨て子だとだということを言う輩は排除……いや、肅清かな？ そんな感じで処分された、俺としてはそいつらの面に黒式・一の奥義「黒百合」でもぶち込んでやりたいが……すると手加減できないんだよな。

まあ後は月詠が家に来た事か？ ああ、前に魔族と言ったが間違いでどうやら鬼と人の子らしい、神鳴流の戦闘衝動と鬼の破壊衝動のせいで自分自身が制御できてなかったらしい、親は……神鳴流に殺されたらしい、幼いころにそんなことすれば壊れるに決まってるだろう？ まあ俺が力の制御を教えるが……小さい頃から無意識に使ってた妖力のせいで体が人間より妖怪のそれになってる。

だから考えた、どうしたらいいと。まあ考えた結果、あいつの力を封じること……なりませんでした。それだったら、もうあいつの戦闘衝動を抑え込むために黒式を教えた、まあ黒式であって黒式ではないから……妖式か？ 妖力の大半を封印し、三段階にリミッターをつけたら、結構あいつも落ち着いてきた……まあ母さんが実の娘みたいに接してるからかもしれないが年頃の女の子みたくなくなってきた、が！ 頼むから俺の風呂の時に入ってこないでくれ、布団に入ってくるな、拳句の果てにトイレを斬って入ってくるな。

まあそんなこんなで仲良くやってますよ、千草さんもたまに来て家で遊んでいきますよ、なんか月詠と仲が悪いらしいが……なんでだ？まあ恒例となってきた魔眼の強化状況　！！　まあこの頃は封印してるから変わってないはず……　なんだがまあ死線が見えすぎて困る、魔眼を封印してても見えてきやがった。本格的に直死になってきた、幻術は使ったら、どこぞの写輪眼みたく相手の精神を破壊できたよ。まあこのぐらいか？　木乃香に事実を知らせるのは中学卒業だよ……　家出ようかな？

月詠　「いくでー？　ざんがいけーん！」

夷　「まだ甘すぎるし、脇をしめろアホ」

月詠の斬岩剣を一本の木刀で受け止める、相手は太刀なんだがな。そのまま斬撃を受け流して、月詠の腹を蹴り飛ばす、結構厳しくやるがこいつの為だ、俺が見たってこいつらまだ原石、つまり磨けば光るし、埋もれれば輝きを失い、裏の道に行くだろう、一度面倒を見たんだ最後までやり抜く。

月詠　「うう、行けると思ったんやけどなー」

夷　「俺の隙をバカ正直に当てにくるアホはいねえよ、これで三十回目の死だ」

月詠　「むう、夷はん少しは手加減してくださってもー」

夷　「二刀流じゃないことが手加減だ、それに実戦だったらお前は今頃八つ裂きにしてるは！！」

月詠　「はう、夷はんに八つ裂き、それはそれで……」

……うん、やっぱこいつ戦闘狂で変態だな、どうしようぶどうやって
矯正しよう。

助けてつるえもーん！

鶴子 「……呼んだか？」

夷 「ね、姉さま?!?! どうしてここに?!?!」

鶴子 「ウチの弟子が心の中でつるえもんなんて、ふざけたことを
ほざきよるから来てしまったんや」

夷 「アハハハハハ、ナンノコトヤラーオレハソンナコトイッテマ
センヨー、アハハハハッハハ」

鶴子 「今日の修業は『鬼』で逝こうか？」

夷 「嫌ああああああああああああああああああああああああ
あああああ!!!!」

月詠 「夷はんどないしたの?! って体がすごい勢いで震えとる
!!!!」

ガクガクガクガクガク、一日中の鶴子姉さまとのリアル鬼ごっこ+
防御不能、武器使用不能のガチの鬼ごっこ、捕まれば強制的に女の
服を着せられ撮影会……今日は木乃香も素子も刹那も千草さんもい
るのに!!! ああ、そうそう千草さんも俺が女だと思ってたらしい、
写真見せたら鼻血でてましたよ……月詠もだがな。

逃げる逃げる逃げる逃げる。なんか俺の生存本能が逃げ出そうとし
てるんだが……後ろに向きたくない、なんかとんでもないものを見

そうで……

「さらに今日は参加者も募ってみたんや」

へ？　と思ったら死地に向かうかのように歩いてくる、木乃香たちが……正直ダースベイダーのテーマソングが流れてます。

木乃香 「ハアハア、兄様に今日こそメイド服でござ奉仕してもらうつ
んや」

剎那 「ウチはこの服（旧スクール水着）でえーちゃんを。うふ、うふふふ」

素子 「この薬で今日こそ、一線を!!」

千草 「着物着てもらおうて、お代官様ごっこや、ぐふふふ」

[illegible]

夷「つ、月詠、たすけ」

月詠 「ハアハア、夷はん、ちよつと着てもらいたい服が……」

夷 「ブルーダス、てめもかあ ああああああああああああああ

「あああ！」

なんか息荒くして、手にゴスロリの服が……あ、あのお服の面積が
 すごく少ないです。

ていうか、早く逃げる

「みんな捕まえるんやでー!!」

家の巫女さん＆お手伝いさん＆そのほかの皆さん 「「「「
「「「 おおおおおおおおおお 「「「
！――！！

夷「……絶望が俺のゴールだ」

(ここからは音声だけでお楽しみください)

うあああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ

こっちよ！ そっち行つたぞ！！ ハアハア男の娘！ 夷さ
ん結婚してくれえ！！ えーちゃん――――！！
――！！！！！！ 巫女が純潔？ なにぞれ食えますの？
撮影会じゃあああああああああ！！ 兄様！！
待ってや――！！！！！！ 夷、今日で二人で階段を上ろう
じゃないか！！ 別に食べてしまつてもいいのだろう？ や
らないか？ 夷はん、これ着てくださいえー！！

夷 「なぜ俺を？」

詠春 「最年少で神鳴流を修め、自己流の奥義すらあるお前を高く評価してるんだ」

夷 「ってあれば奥義じゃなくて種類のには秘剣なんだが？」

詠春 「……本当か？！」

夷 「一の技って言っただろう？」

詠春 「わかった、お前は本当にバグだなあ」

夷 「それはいいから任務を言えや」

詠春 「ああ、私の古い友人であるクルト・ゲーデルを護衛してもらいたい」

夷 「……クルト・ゲーデルってあの？」

詠春 「そうだ、私たち赤き翼の政治担当のメガロメセンブリアの元老院議員の一人で、オスティア総督だ」

夷 「確か一人で政界に入ったんだっけ？」

詠春 「ああ、戦いしかできない私たちのために蛇の巣に入ってた友だ」

クルト・ゲーデル、確か大戦中は父さんたちと戦った一人で現在はメガロメセンブリアで……いや、もう一人の英雄であるゼク

トと呼ばれる人と一緒に頑張ってるらしい、あれ？　ゼクトってどこかで？

まあ一時は暴走して一人ですべてやろうとしたが……両義式が止めたらしい、まあそうだろう、ひ弱な少年がどうしようも何もならないだろう。

夷 「いつだ？」

詠春 「あと一か月後、それまでに刀の整備、魔法の訓練をしておけ」

夷 「知ってたのか？」

詠春 「これでも見分けることぐらいはできるさ」

夷 「わかった、近衛……いや別の名で言った方がいいか？」

詠春 「お前は今も昔も私の息子だ」

夷 「……近衛夷、その任務しかと了解しました」

……初任務だ、武器は……あれを使おうかな？

対魔法使い用の銃器、魔法銃『ジェフティ』と『アヌビス』を使うか、黒と白のハンドガンだ、口径は十ミリだが魔力弾で威力は自由に変えられることができる。まあ名前でわかる人もいるだろうが……いやーあれは十週くらいはプレイした。

装備としては銃に、ヒヒイロノカネで鍛えた刀と同じくヒヒイロノカネで鍛えた小太刀でいいか？　一応、黒の仮面と黒のコート（魔力障壁あり）も持っていくか？

詠春 「一つ言っておく、死ぬな……絶対だ」

夷 「ふん、俺を誰だと思ってるんだ？」

俺は天に右手を指しながら言い放つ。

夷 「俺はサムライマスター、近衛詠春の息子だぞ？」

|||||一か月後

展開はええと思う人、感想に書いておいてください。

何言ってるんだ俺は？ まあいい今は東京の羽田に来ているんだが……

……まったくくる気配がない、今の俺の恰好は黒のコートに黒のズボン、そして念のためのコートの下には魔法で縫ったシャツを着て、腰には見えないように銃をホルスターに入れている。

夷 「……遅いな？」

にしても遅い、一時と言われたが二時になっても来ないなんて……なんでもイギリスのゲートから来てるらしいが……そろそろ周りの撮影会もなんとかしてほしい、俺は男だ、女じゃない。

レポーター 「えー、速報です！！」

なんか焦ってるがどうしたんだ？

レポーター 「現在！ イギリス、ロンドン発羽田行のジャンボジエットがハイジャックされました！！」

夷 「は？」

それは俺の護衛対象が乗っている飛行機がハイジャックされたニュースでした。

護衛されてる前に襲われちゃ無理でしょ。

夷 「仕方ないなあ」

俺は転移してある場所に向かった、場所はもしもの時に作っておい
た俺の秘密基地がな。
行くか？

||||| クルト視点

油断しました、まさか魔法関係者に裏切り者がいるなんて。
最近公務しかやってないですし……勘が鈍りましたか？

男1 「手を上げろ、絶対変なことをするなよ？」

こいつが仕掛けてきたのは今から一時間前、すでにパイロットは拘

束されてそこにも二人ほどの魔法使い……いえ、傭兵でしょう、こちらは非戦闘員である秘書が一人、そして今杖を構えてるのは二人組の魔法教会から送られた護衛だった奴ら……こちらの不利が明白ですね。

まったく師匠に油断はするなとあれほど言われたのですが。

クルト 「なぜこんなことをするのですか？」

男1 「ふん、我らの恨みは深いのだよ。赤き翼」

クルト 「そうですか、あなたたちは……大戦中に」

男1 「そうだ、俺たちは静かに暮らしていた。そこに赤き翼が魔法で破壊の限りを尽くしたんだ!!」

クルト 「……私たちは虐殺などしていませんよ？」

男2 「嘘をつくな……、貴様らが我らの村を破壊し尽くしたんだ!!」

クルト 「いったい誰が?!」

男1 「両義式と言う男だ」

それこそありません、だって師匠は大戦中には一度も死者を出してませんしね。

あの人の顔写真はないんですよね、ピエロのような仮面をかぶっていたのですから、まったく終戦後の式典にすら黒のコートすら脱がない人でしたから。

クルト 「どんな容姿だったのですか？」

男1 「中年の男だった、奴が、奴が!!」

……えー、それ師匠じゃないですよ？ 師匠は最初はわたしでも女
と思ったほどの女顔でしたから…… 中年ではないですし、二十代後
半ですよ？

男2 「貴様に直接の罪はないが……ここにいる乗客と共に死んで
もらうぞ？」

クルト 「なっ?!?! 彼らに罪はないでしょう!! 即刻私だけ
殺しなさい!!」

男1 「貴様にも味わってもらうぞ？ 大切なものが奪われる瞬間を
!!」

まずいですね、このままでは交渉すらできない。すみませんアリカ
様、ナギさん、あなた達の汚名だけは拭いたかった、しかし師匠の
『闇の福音の賞金を解除しておけ』と言う伝言は守れましたし、も
しもの時の人材もいますし……まさか赤き翼での最初に死ぬのが私
なんてね、すいません師匠。

男1 「しかし、お前はここで殺す!! くらえ!! 魔法の矢
!!」

次の瞬間、私の体に魔法の矢が突き刺さりました、全身にです。
これは……致命傷だ。助からないでしょう、タカ……ミチ、師匠、
ナギさん、アリカ様……すみません、これが私の限、界のようです。
魔法世界を、みんなを、救いた

？ 「なら伸ばしてやるよ、ハイパークロックアップ！」

Hゼクター（ハイパーゼクターの略） 「HYPER CLOCK
UP」

なぜかその時、師匠の声が聞こえた様な気がしましたが私は意識を闇に覆われ、最後まで確かめられませんでした。

クルト・ゲーデル死亡。

||||||| 夷視点

現在俺は秘密基地……ぶっちゃけると麻帆良に作った俺専用の部屋だ。

まあ誰にもばれてないだろう、いつも危険な作業はここでしてる、今何をしてるのか？ 決まってんだろ、転送装置でジャンボに直接転送するんだよ。

夷 「スーハースーハー、転送！！」

少しでもミスったら体がジャンボの外壁にぶつかってスプラッタなことになるだろうなあ、と考えながら転送する。

ちなみに転送機械はロッキマンゼロのを参考にさせてもらってる、あれはよかったよ。

そんなことを考えてるうちに景色ががらりと変わり……なんとか飛行機の中に転送できたようだ……今のうちに。

夷 「変身」

ゼクター 「HENSHIN」

ベルトを着けて、ゼクターを装着させる。

カブトになっておけば不測の事態はクロックアップできるしな、さてゼクターホーンを左手で右に少し倒して……電流が上半身の装甲を巡り、装甲が浮き上がる。そして完全にゼクターホーンを右に倒す。

夷 「キャストオフ」

ゼクター 「CAST OFF」

上半身の装甲が飛び散り、顔のカブトホーンが立ち上がり複眼が青く光る。

ゼクター 「CHANGE BEETLE」

夷 「さあ、まずはパイロットたちを解放するか？」

ゼクター 「CLOCK UP」

クロックアップですぐに飛行機の操縦席を目指す俺、どうやら乗客

には危害を加えないようだ、だって見張りがいないが……念のため
結界で出たらわかるようになってるのか？

そして人間が反応できないスピードで操縦席まで行く俺、まあクロ
ックアップは最強だったなあ、速度的には全ライダーで一番だと思
うしな。

そう考えてると操縦席につく、見張りの傭兵らしき男二人が銃を構
えて操縦者を脅している。俺はクナイガンでクナイモードにすると
イオンビームで構成されているクナイカッターで銃を輪切りにカッ
トしてやる。

銃はゆつくりとだがズレおちていく、すかさず両方の腹にストレー
トを打ち込み内臓の一つか二つくらいを破裂させる、大丈夫だ、き
ちんと処置すれば助かる、そして魔法で作った縄で捕縛する。

ゼクター 「CLOCK OVER」

夷 「操縦者の方々」

操縦者 「君は？！」

一瞬で変身を解いて、操縦者に話しかける俺、まあ後ろ向いててく
れて副長が気絶してくれたのが助かった。
まあけがはなさそうでした。

夷 「えーと、この乗客のある人物の護衛をしてたんですが……」

操縦者 「あのクルトとか言う奴か？」

夷 「そ、そうです！」

嘘は言っていない、が護衛はしてなかったがな。

まあいいやクルトの場所を聞かないとなあ。

夷 「クルト様はどこに？」

操縦者 「奴らの話じゃ、貨物室に閉じ込められたらしい。でどうする？」

夷 「助けに行きますよ」

操縦者 「バカ言うな、子供を一人で」

夷 「それより操縦桿！ 操縦桿！ 落ちてる落ちてる！」

操縦者 「……やつちやたＺＥ」

夷 「とつとと操縦しろおおおおおおおおおおお！！！」

まあ途中でいろいろあったがなんとか貨物室まで来ましたよ、乗客の皆さんには事情を説明してなんとか落ち着いてもらったよ。まあ幻術をかけて軽く俺を二十歳に見せて信じてもらった（なんか女性も男性も興奮してたんだが？）

まあ貨物室に行く前にもう一度変身しておいた。

夷 「……さあ、クルトは？」

男1「しかし、お前はここで殺す！！　くらえ！！　魔法の矢！！」

まずい！！　魔法の矢だと？！　つつかクロックアップでも間に合
わねえ！！

……使うか、あれを

夷　「ハイパーゼクター」

Hゼクター　「HYPER CAST OFF」

俺はHゼクターをベルトの左側につけ、ゼクターホーンを倒す。
するとHゼクターからの電子音が鳴り響き、カブトの装甲が変化し
ていく。全身の装甲がヒビロノオオガネからネオヒビロノオオ
ガネに変わっていく、装甲に銀が混ざり装甲が一段階厚くなる。全
身のアーマーが内部にタキオンプレートを収納した、以前の6倍以
上の強度を持つカブテクターに再構成される。

Hゼクター　「CHANGE HYPER BEETLE」

夷　「……あんまり使いたくはないが」

誰かが言ってたな、伸ばして届く手を伸ばさなかったら一生後悔す
るって、たしかそう言ってたような気がする。……誰だったかな？

確かメダルを使うライダーの言葉だったような。

夷　「なら伸ばしてやるよ、ハイパークロックアップ！」

俺はHゼクターのスラップスイッチを押し、ハイパークロックアッ
プに入る。

Hゼクター 「HYPER CLOCK UP」

まず胸のカブテクターが開き金色の装甲が露わになり、次に肩のカブテクターが開き、腕のカブテクター、足のカブテクターが開く。最後に背中のカブテクターが開き背中からタキオン粒子が一気に放出される。カブテクターを展開し、大気中や真空中を自由に飛行でき、従来のクロックアップ以上のスピードでの移動や過去や未来・異空間を自由に行き来できる「ハイパークロックアップ」を使用可能なハイパークロックアップ形態になるハイパーカブト。

そして俺はいったんその場から消失し過去に行く、あまりのスピードのせいで過去にすら行けるハイパークロックアップ、反則級である意味これは時間移動であり、さらに悪く言えば俺は歴史すら操作できる力を持っている。

夷 「（だから使いたくはないんだ）」

過去に戻った俺はクルトに向かっていてる攻撃をすべて弾き……歴史を変えた。
クルトからすれば、何もない空間から誰かが出てきたように見えるだろう。

夷 「無事かい？ クルトさん？」

クルト 「君は……？」

夷 「俺か？ 俺は……」

本名使うのはまずいよなあ、どうしようか……うーん。

適当に言うかな。

夷 「俺は……黒^{クイ}とでも呼んでくれ」

クルト 「ヘイ？」

夷改め黒 「ああ、さてと……」

俺は驚いている魔法使い二人組を見据えて俺は右手を天に指しながら、語録を言い放つ。

黒 「おばあちゃんが言ってた。まずい飯屋と悪が栄えた試しはない。とな……」

クルト 「なっ？！！ し、師匠？！！」

なんか後ろのクルトがうるさいだが……まあいいや。

魔法使いもなんか再起動してきたしな、さあ始めようか。

男1 「我らが悪だと？！ ふざけるなあ！！ 我らの恨みは、正当な復讐だ！！」

夷 「復讐に正当も糞もあるか！！」

男2 「我らにはこれしか……これしか残ってないのだああああああああああああああああああ！！！！」

男1 「行くぞ！ ライ・ラ アヴェン・スキル フール！ 魔法の射手！ 火の三矢！！」

男2 「……リラ・リ アヴェン・スキル フール、魔法の射手
光の三矢!!!!」

魔法の射手が向かってくるが俺はこぶしを振るううだけでその攻撃を消す。

男たちは絶望を顔に浮かべながら、次の魔法を放とうとするが……させない、確かに俺も復讐者だ、この八年間俺を実験した天使を殺すだけの力と木乃香たちを守る力が欲しかった。それは俺の本心だし、人は復讐するものだと思っっている……だが!!

夷 「関係ない人まで巻き込むな!!」

Hゼクター 「HYPER CLOCK UP」

俺はもう一度ハイパークロックアップをして、男たちに近づき杖を手でへし折る!

そしてHゼクターのゼクターホーンを倒しチャージアップをする

Hゼクター 「MAXIMUM RIDER POWER」

Hゼクターからタキオン粒子が上半身に巡り、金色の装甲……タキオンフラッシュが発光する。そして俺はゼクターのフルスロットルを押していく。

ゼクター 「OWN , TWO , THREE」

そして俺は右手でゼクターホーンを持ち、左手でゼクターの本体を持ち一度マスキドフォーム状態に戻す、そしてタキオン粒子をチャージしながらつぶやく。

黒 「ハイパーキック!!」

ゼクター 「RIDER KICK」

再度右手でライダーフォームの位置にゼクターホーンを戻すとチャージアップしたHゼクターのタキオン粒子とゼクターの粒子がカプトホーンに集まる、青い複眼が一度光り、チャージアップした粒子はカプトホーンから右足に集まる。

Hゼクター 「HYPER CLOCK OVER」

男1&2 「「な?!?!」」

黒 「恨むなら恨め、でも俺は……」

飛び上がりながら俺は右足を男たちに向けて振る。
恨まれたっていい、けど……

黒 「仮面ライダーだあああああああああああああ!!」

男1&2 「「うあああああああああああああ?!?!」」

二人の顔にまあ……蹴りをいれたんだが、まあ普通にやったら二人とも原子崩壊して消滅しちゃうからな、リミッターはつけておいたからしにはしないだろうが……死なないはずだ、試したことないけどなあ。

クルト 「……彼ら生きてます?」

黒 「……多分な」

詠春 「ああ、なんかクルトがな、今回の件で調査に乗り出したらしい」

夷 「……つまり結果だけ言ってくれないか？」

詠春 「任務失敗だ」

ポクポクポク、チーン。

夷 「絶望が俺のゴールだ」

どうしよう、どうしよう！！ 初任務だから……任務のついでに木乃香に会って約束しちゃったし、なんかアスナと真名が会いあがってると言われたからお菓子とか（影の倉庫）持ってきたのに！
！ や、やばい。

詠春 「正直すまない、気を付けて帰ってこい」

夷 「アハハハハ、トウサン、ムスコハキットブジニカエツテクルヨ」

多分な……とりあえず木乃香の携帯に連絡をしないとなあ。
コールして一秒もたたずに出てきました。

夷 「あ、ああ木乃香か？」

木乃香 「あ、えびにい？ どうしたんや？」

夷 「じ、実はですね」

木乃香 「もしかして来れなくなった、とか言わへんよな？」

メキリと何かが砕ける音が……、お兄ちゃんはお前の将来が本当に心配です。

握力がハンパねえ、威圧感がやばい、背中から冷や汗が止まらないのだが？

夷 「……そうなんだ」

木乃香 「そうなん」

あれ？ 結構冷静だ！！ これなら押し切れる！！
そう思っていた時期が俺にもありました。

木乃香 「今、えびにいのところに行つとるから」

夷 「ナンダッテ？ アハハハハ、コノカサンザツオンガヒドク
テキコエナイヨー」

なんか後ろから威圧感が……逃げなきゃやばい、なんか肉食動物に
取り囲まれてる小動物の気分だ。向きたくねえ、なんか周りの客が
逃げ出してんだが……。

木乃香 「ほらすぐ後ろに……」

夷 「アハハハジョウダンキツイゾー？」

そして肩に置かれる手、振り向くと後ろに魔力で具現化した鬼神が
……嘘だろう、オイ。

怒りが魔力を制御したとでもいうのか？！

木乃香 「さあ、逝こうか？」

夷 「ちょ？！ 字がち」

その後夷の姿を見たものはいない。

なんて思ったかあああああああああああああ！
！！ なんとか関西まで逃げ込みましたよ！！ なんかアスナとか
真名とかリアル鬼ごっこに参加してたんだが？！！ まさか大剣と
銃に追われるなんてなあ。

まあ関西まで逃げ帰った俺に待っていたのは……

神 「久しぶりじゃな？ 夷君」

夷 「神様？ いったいどうした？」

神 「お主に頼みたいことがある」

夷 「なんだ？ あんたの頼みならなんでも聞くぞ？」

神 「そうか、なら頼みたい」

真剣な表情で神様が俺を見据える…… いったいどうしたんだ？

神 「墮天使ルシフェルの殺害を依頼したい」

それは俺にとって、最高の依頼だった。

親の思いと新しい仲間たち（後書き）

作 「今日の！！ ネギラジオゲストは！！」

千草 「ウチこと、天ヶ崎 千草や！！」

作 「今回カオスがひどかったですねえ」

千草 「あんたやろ？ やったの？」

作 「……勢いでやった、けど後悔していない（ギリ）」

千草 「まあナイスや、ウチはお代官様ごっこができただけでも……」

作 「うちのヒロインにまともな奴はいない」

千草 「というか今回のハイパークロックアップはチートやなあ」

作 「まあ、そうですねえ。劇中でも本来は爆散するはずだったガタックを助けたしなあ」

千草 「ウチの父様と母様も助けられんじゃ……」

作 「……本当にそれでいいのかと」

千草 「なんでや？！！」

作 「気に入らないから過去に戻ってやり直して……それでいいの

かと」

千草 「作者はん？」

作 「誰だつてやり直したいことはある……俺だつてあるさ」

千草 「すんません、無理なことを言っでもうて」

作 「まあ次回で一度区切る」

千草 「うちの出番は？」

作 「当分なんじゃないかなあ？」

千草 「猿鬼、熊鬼、頼んだでー」

作 「さっきまでのシリアスは」

クマー……！！

お前つてそんな鳴き声するの？！！ それにお前はさ ウアアア
アアアアアアアアアアアアアア！！！！

作者復活中

作 「そろそろしめてくれ」

千草 「はいな、じゃあ次回、迷いのEノまたいつか……」

作 「次回も！！」

千草 「見へんと式神でぶっ飛ばしたる！」

夷 「あー、つかれたー」

作 「おお、いいところにこの前のアンケートを再度呼んでくれ」

夷 「えー、まあいいか。えー、ではこの四つの中から選んでください」

? 木乃香との出会いのときの話（赤ん坊時代）

? 素子と出会い話（同じく赤ん坊時代）

? 魔法使いとの戦闘（五歳）

? ゼクトとの修業編（五歳）

夷 「締め切りは次の更新までです、今回は5日くらい期間を開けるので皆さんどうかこのダメ作者に感想をあげてください」

作 「それではみなさん次回まで」

作&夷 「「サラダバー」」

依頼と過去と吸血鬼（前書き）

すいません遅くなったのにこんな低クオリティ&タイトル変更……
まことに申し訳ない。

キャラ崩壊、原作ブレイクどんとこいやー！！ が大丈夫な方はそ
のままお進みください、嫌な人は戻ってください。

それでは年少期最後の話の始まり始まり〜。

依頼と過去と吸血鬼

にーはお、夷だ……ああ、駄目だなんか気分が乗らない。

前回から数週間がたった、あの任務の失敗を笑う奴もいたが……護衛する前に襲われたんじゃ俺のせいではなく魔法教会に文句を言うべきだろ？ まあ俺は怒らないが……姉さまが怒るから嫌なんだがな。

正直有象無象の奴らなど眼中にない、俺の剣技……まあ黒刀だな、あれは危険だと言って独断で神鳴流の師範代クラスが十人がかりで挑んでこられたときはびっくりした。まあその時月詠の修業中だったので一緒に倒したが……、結構危なかったと言っておこう。

まさか恥をかいてまで俺を殺しに来るなんてな、その時傭兵の魔法使いを雇ってきたんだが……魔眼使ってしまったてな、まあ結果だけ言うと父さんたちにはばれた。師範代たち？ 殺さなかったよ、月詠に相手した一人は死にかけたけどな、普段の狂気をふんだんに出してたよ、この頃は母さんに怒られないために出していないからなあ。月詠も強くなったし、多分今なら俺に一太刀くらいは入るんじゃないか？ そのくらいには強くなった。鬼だから力も強いしな。

……問題はあの任務が終わって木乃香たちに逃げていた時のことだ。あれはびっくりした……。

「……数週間の大阪駅」

夷 「ハアハア、何とか逃げ切った」

いやー、まさかアスナと真名が追ってくるとは……つうか二人とも

今の俺じゃ倒せないくらい強いんだが?! あの歳であればすごいなあ、って俺も同年代か。

まあアホな事考えないで家に帰ろう、うー任務失敗とか、アホな奴らに陰口叩かれるぜ? まあいいが。

? 「すまんの、その若者」

夷 「あ、俺?」

? 「そうじゃ、少し荷物を持ってくれんかの?」

夷 「あ、はいはいこれでいいかな?」

? 「ああそうじゃ、この荷物じゃ」

俺が持つのはハンドサイズのバック、まあ老人をいたわるのは当たり前だよな。そういや二次創作だと老人をいたわって……いやいたわっていた、はず。

? 「ふう、久しぶりに来たから疲れたわい」

夷 「大阪にですか?」

? 「いいや? 違うよこの世界に、だ」

な、なんだと? 俺は影の倉庫から妖刀・怪を取り出さそうとする、認識障害の結界はもう張ってある、しかし老人はなんの反応も起こさない。

それどころか影からの武器転送ができない。

？ 「落ち着け、ワシじゃワシ」

夷 「誰だ……ワシと言われてもわからん」

？ 「そうか、この体を借りておるからな、どこか座れる場所は…
…おおあつた」

老人は背中に手を当てながら優雅に歩いていく。

俺は魔眼を発動させると……咄然とした。その体には世界樹よりも濃密な神力、そして純粋な神力が巡っていた、化けもんか？！！
勝てる気がしない。

？ 「そう気張るな、夷君」

夷 「夷君？ ……まさかあんたは？！！」

神 「久しぶりじゃな、夷君、神じゃ」

俺をこの世界に送ってくれた神様だった。なぜ地上に降りてきたんだ？！

夷 「お、お久しぶりです！」

神 「もうちょいフレンドリーで行こう、まあ今日はそんな雰囲気じゃないんだがの」

夷 「……そう言えばあんたに聞きたいことがあつた」

神 「奴ルシフェルのことか？」

夷 「なら話は早い、どうしたんだよ?! あいつは封印したんじゃない!」

神 「……奴はな、ひとつだけ力を残していたんじゃないよ」

夷 「な?! 確かあんたはすべて奪ったと」

神 「そのつもりだった、しかしあいつはお主の能力をコピーしてたんじゃ」

夷 「俺の……能力?」

神 「……外す能力」

夷 「外す能力?」

神 「そうじゃ、なんでも外す能力……まあ攻撃などは無理なようじゃがな、鍵やロック、電子ロックすらなんでも外す能力」

夷 「実用性のなんもねえよ」

神 「いや、今回はその能力がキモじゃ……奴はお主の外す能力で封印を外したのじゃ」

夷 「神がやった封印だろ? 俺でも外せるか……」

神 「今のお主なら力技でも外せるわい」

俺って、トコトン人外だろ?! 神だぞ、神の封印を力技ってどうなんだよ。

俺が頭を抱えながら悩んでいると神様はため息をつきながら俺を見る。

神 「まあいいが……お主に頼みたいことがある」

夷 「なんだ？ あんたの頼みならなんでも聞くぞ？」

神 「そうか、なら頼みたい」

真剣な表情で神様が俺を見据える……いったいどうしたんだ？

神 「堕天使ルシフェルの殺害を依頼したい」

夷 「……俺が殺害するのか？ あんたがやれば簡単じゃないか」

神 「それでも神でな、奴のせいで天界に魔獣が現れてな」

夷 「で……この世界のイレギュラーである俺に頼むと」

神 「ああ、お主にかかっておる制限はすべてとる」

夷 「リミッターを？ やめてくれ爆散したくない」

そう昔だが本気だすとうなるのか試してみたら……体が爆散した、いやぁ俺って本当に不死だったんだね、体が細胞レベルで再生してたよ。

気持ち悪かったがなあ、内臓がくつつくところとか。

神 「ああ、神力の制限解放、リミッター外した時の自爆、妖力の解放などじゃな」

夷 「……ちよつと待て、自爆つてなんだ？ 自爆つて！！」

神 「……さすがにワシら神以上の力をつけるとは思わなかったんじゃない」

夷 「……神力の解放つて、俺は神力は使えるぞ？」

神 「……人間じゃないじゃろ、お主」

夷 「褒めてるのか？ 俺は昔から人外だぜ？」

さらに現在進行形で神の神力を見稽古で見てるからどんどん扱い方がわかってくる。

……正直コレの本来の持ち主が健康でどんな力にも耐えられたらと思うと……ゾツとするな。

神 「本来神力とはな、肉体の能力を最強まで上げるものなんじゃ……じゃがお主は身体能力は人間より上じゃが……妖怪などには力負けするじゃろ？」

確かに昔、鬼と戦ったときも力負けしてボコボコにされたがな。

神 「ワシが制限をとればお主の魂は上位になるじゃろ」

夷 「上位？」

神 「ああ、ワシら神がいる領域までな」

夷 「……であれだ頼みつて殺害だが、どこにいる奴は？」

神 「この世界の約十数年前じゃな」

夷 「……おいおい、ふざけんなその時期って戦争おっぱじめてるぞ？」

神 「そうなんじゃ、この世界の正史が塗り替えられると……下手をすれば消滅する可能性もあるのじゃ、この世界が」

夷 「……どうすればいい？」

神 「ハイパークロックアップで過去に行き、奴を殺してくれないか？」

神は頭を下げながら俺に懇願する……けれど。

夷 「俺が過去に行って、木乃香たちは？」

神 「ハイパークロックアップの能力を過去に行ったら封じさせてもらう」

夷 「なぜだ？！」

神 「その時代にはワシの力を介入させていない、つまりお主が気に入らないからハイパークロックアップで変えると過去の改ざん……つまりお主たちの言葉を使うとタイムパドックスの可能性があるのじゃ」

……たしかにな、それは一理ある。

俺は封印を決意し、神に連れられて天界に上って封印解除をした。

神 「行くぞ？」

夷 「どんとこいやあああああああ！！」

神 「エロイムエスサ……」

夷 「それやばい、いくらなんでも！！」

神 「封印解除！！」

次の瞬間、俺の体に神力が通り何かが破壊される音と共に全身から神力が噴き出す。

あまりの量に俺も神もびっくりする。

神 「お主……ばぐと言う奴か？」

夷 「まさかここまでとは……六歳から訓練してたしなあ」

神 「まあいい、これでお主の黒式の妖力総量も上がり、最後のアレもできるようになった、ぶっちゃけると今のお主はさっきまでの三十倍以上の力を持っておる」

夷 「俺はこのネイキッドなブラボーな目標になっちまったんだよ」

ちなみにブラボーな目標は……まあアヌビスをやった人ならわかるだろう？ ジェフティのことだ、あれ後半が化け物過ぎて笑った、まさかゲイザーで落とせるなんて……バイオラなんてシールド破壊できて数発で終わるとか……。

神 「まあいきなり行けとは言わない、数か月猶予をあげるから……やるべきことはやっときなさい」

夷
「わかつた」

神「じゃーのー」

パカリと俺の地面が割れて、一瞬の浮遊感と落下する感覚。
 ってまたかああああああああああああああああああ！
 ！！

夷 「じゃあ ああああああああなあ ああああああああ
あああああああああああ！」

そして俺は気付くと家の前に居たわけだがぶっちゃけると、俺はすごい行きたくない！ いや待てよ？ 俺が両義式をぶっ潰せばいいんじゃないか？ 正史じゃなくて奴は転生者なようだしなあ、つぶしても問題ないだろう。

はいそして恒例の魔眼の強化！！（どんどんぱふぱふ）

今回は……マジでひどい、全能力が固定されてこれ以上増えないらしい。解析、理解、複写、直死、吸収、分解、霊体感知、幻術。未来線は消えたらしい。それはどうでもいい……全部強化されてやがる！！

解析なんぞ、チラみしただけで全解析できたし、理解もそうだが……複写なんか、複写の途中に改良できるようになりやがつた。直死なんか……言葉通りになつてきたよ。『直』接見たら、「死」んでる。まあつまり眼光一つで殺害できるようになつてきた、まあ普通見たく死線を視ることもできるがな。吸収は魔法以外に気

も吸収できるようになったよ……うわー、タカミチとかの天敵じゃね？ 分解はついに古代魔法もできるようになったよ、きつかった。霊体感知なんて……まあクリアになった分、呪術の使う悪霊も見えてるから事実上呪術すら俺に効かない。最後に幻術だが……質感出せるようになった、微妙とか思う奴手を上げろ、魔法の射手をぶち込んでやるよ。質感出せるってことは……全くの本物みたくできるわけに変装がしやすくなった。

まあ身体能力もさらにリミッターかけたよ、だって手を振るだけで岩を砕き、蹴りだけで地面が削れるなんて……なに？ 俺Z戦士になつたの？ 今なら地球われる自信がある、アラレちゃんみたく。まあそんなこんなで最初に戻るんだが……どうしよう、過去に行ったら父さんにあう可能性が……！！

まあ俺はその時、まだ気づいていなかった。俺が過去に行くことが正史なんてことは……。

数か月後

夷 「麻帆良よ……私は帰ってきたあ ああああああああ！
！」

木乃香 「えびにい、うっさい」

「な、んだと？　これが妹の反抗期か？！」

木乃香 「ちゃうわー!!」

イテええええええええ!! どっかからハンマーだした?!
暗器使いもびっくりな武器収納テクだよ!! ああ、ちなみに今日は木乃香がちゃんと学校生活を送っているか、わざわざ授業参観に来てみた。

夷 「せっかく兄が関西からお前と刹那の成長を見に来たのに!!」

木乃香 「……むう、ほんまえびには心配性や。ウチは平気やつて、真名ちゃんやアスナもおるし、せっちゃんだって居る、素子姉さんもや」

夷 「……それならいいが、まあ今日は泊まるしな」

ちなみにじいさんの家にだが…… あっちもデカかった、アニメでよく見る豪邸ってやつだったよ。家政婦さんとか居たし…… 本当にじいさんが学園長だと思うよ。

さて今日は…… 麻帆良の観察にも来ている、どこまでの警備ができていいのか。出来ていないのか、それを見切る。

木乃香 「じゃあえびにい、今日は頼んだで?」

夷 「ああ、お前も刹那に秘密にしたんだろうな?」

木乃香 「大丈夫や、今日来るのはお父様のはずやからな」

クククク、素子や刹那がテンパるのが楽しみだ。

……しかし俺はまだ気づいていない、木乃香のクラスがどれほど力

オスかということをして！！

「……………授業参観の時間（五時間目）」

大人にまぎれて移動する俺……場違いだなあ、服装は黒の服装^{ヘイ}なんだが……ちなみに黒コートはいつも俺が任務の時に着てるやつだ。

タカミチ 「じゃあ、みんな今日は授業参観だから頑張ろうね」

わーわー、きゃーきゃー、めっちゃ元気や。アカン、なんか言語が崩れてきてる。

つつか 元気すぎるだろ？ よくタカミチは面倒見きれんな。

タカミチ 「元気がいいね、じゃあ入ってきてください」

俺は一番最後に入るつもりだ……ふふふ、待つてろよ？
そして俺の前の……あれー？ この人確か明石教授？！ なにしてるの？！

刹那 「え、え？！」

アスナ 「式い？！！」

真名 「（ガタガタガタ）嫌だ、私はまだ死にたくない」

？ 「あ？！！ 式アル！ 戦うアル！！」

？ 「くっ、なんで貴様はこういう予想外な展開で出てくる！！」

？ 「あれ？ 式兄さん？」

タカミチ 「夷君……」

夷 「なんかわからんがすまん、授業を続けてくれ」

なんか四方八方から視線を感じるんだが……なぜ？ ここにいる奴らに知り合いは刹那、木乃香、アスナ、真名、タカミチ以外だと明石教授くらいしか……。

？ 「式さん？！！」

って明石教授の隣にいる方ですか……そうですか。
つつかなんか今日は……嫌な予感が。

夷 「と、とりあえず始めてくれタカミチ先生」

タカミチ 「あ、ああわかってる」

騒然とするクラスの中授業は始まる、なんかドッキリが成功しすぎて刹那いじる時間がなかったよ……それとその女性、幽霊視るよ
うな目で見えるな、あんたも魔法関係者か？！

そして授業が終わる……なかなか良かったが、一つ言わせる。

夷 「……明石教授、その方は？」

明石 「ああ、私の……」

？ 「式さん？ しゃべり方違くないですか？」

明石 「この子は式さんではなく、近衛夷くんだ、夕子。すまない私の家内だ」

夕子 「え?! 噓」

夷 「初めまして、近衛夷です、妹がお世話になっております」

夕子 「ご、ごめんなさい、知り合いに似てたもんで」

……またか、あのくそ野郎!! こりゃあ、過去行ったら腕の一本や二本はもらうぜ?
つつかいつの間にか周りに人が!!

? 「式、式アルね、戦うアル!!」

夷 「誰だ?! つつか女の子がそんなこと言うな!!」

木乃香 「えびにい落ち着いて、くーふえもそんなこと言ったらアカン、えびにいの剣術でぶった切られてまうよ?」

夷 「兄さんは悲しいです」

古 「兄さん? え、じゃあ木乃香が前から言ってた……」

? 「おい、お前は式じゃないのか?!」

アスナ 「そ、そうだった」

真名 「ふう、本当に死ぬかと思った」

？ 「え？ 兄さんじゃないの？」

夷 「一度にしゃべるな、それに俺は木乃香の兄だし、君の兄ではない。それに俺の名は近衛夷だ」

木乃香 「そうやで、エヴァちゃんにくーふえ、裕奈、それにこれはウチの兄様やー！」

エヴァ 「え、夷？ じゃあ式じゃないのか？」

夷 「何度も言うが違うからな？！ 俺は夷だ」

裕奈 「うっ、けど兄さんにすごく似てる、顔とか服装とか」

夷 「ああ、そうかそいつとはいいお茶が飲めそうだ（いつか殺す）」

エヴァ 「というかお前は男なのか？」

ピシリとクラスの空気が固まる、つつか全員（クラス全員＋保護者）が固まる。

こ、コイツラコロシテイイカナ、カナ？ 自分でもわかるほど殺気があふれ出ている。

一部の方々がガタガタと震えているが……少し頭冷やせ。

夷 「ああ、男だよ？ こんな顔しても男ダヨ？ ダカラダマロウカ？」

エヴァ 「（ガタガタ）こ、こいつ式だ、式だ」

「……歳は？」

夷「お前らと同じだよ、八歳だ」

クラス全員 「「「「「「「「「ええええええええええええ」」「」「」「」

夷 「そ、そんなに以外か？」

「ぶっちゃけるとウチは美少女って言われても信じるで」

な、なんてこつたい、ふふふふふふふ。

夷「う、鬱だ、死のう」

その後全員から質問攻めに合いました。

なんか朝倉と言うパパラッチに仕切られてる三・A誰か止める、授業できてねえしタカミチも笑うな！！　つうか女装させたらどうなるか？！　やめろ！！　崩壊する今回はシリアス回だから、ちょっと待ってくれええええええええええ！！

「なぜ俺がこんな服を……」

クラス全員 + 保護者 「 「 「 「 「 「 「
（なにこのかわいい生物？） 「

エヴァ 「ハアハア、あ、あいつに着せるようだったがここまでとは……」

夷 「み、見るなああああああああ！！」

夕子 「ハアハア……はっ！！」

木乃香 「兄様ファイルに収納決定や」

刹那 「え、えーちゃん（鼻血が溢れている）」

？ 「（ご先祖様がこんなとは……なんていうことネ）ぼそ」

裕奈 「兄さんが……これはいける！！」

夷 「なにが？！！」

古 「……かわいいアル」

アスナ 「し、式じゃない、式じゃないから食べちゃダメ、食べちゃダメ」

真名 「……（大量出血により気絶している）」

タカミチ 「……なんだこのカオス」

クラスの大半が鼻血を出してぶっ倒れてるんだが？ つつかそんな目で俺を見るなあああああああ、ちなみに俺の恰好はメイド服（黒）スカートが短いぞ！！……そうじゃなくてええええええええ

ええええええええええ！！

夷 「俺は男ダアアアアアアアアアアアアあぁ！！！！」

||||| 数時間後

木乃香 「えびにい怒らんというて」

刹那 「えーちゃんごめんなひゃい……ごめんなさい」

夷 「……ふん」

素子 「まったくお前ら……いくらなんでもやりすぎだ」

今俺は麻帆良のとあるレストランに来ていた。じいさんが予約してくれたらしいが……高級レストランじゃなくて普通の店にしてくれ、素子が居るからまだいいがな。

まあきれいになったし、相変わらず女に人気だそうです、頼むからボーイフレンドを！！

木乃香 「そういえば……式って誰や？」

夷 「うーん、なんか俺と顔が似ててすごく強い奴らしい」

刹那 「そうや、えーちゃんもいい加減うつとしいと思ってきとるやろ？」

ああ、そういえば刹那は俺たちの前なら完全に京都弁になってきたよ。

噛み癖はあるが……、素子はなんかこっちのしゃべり方が気に入ったそうだ。

夷 「まあ他人のそら似がこんなに続くとは……」

素子 「しかし両義式か……一度斬り合ってみたいこともない」

刹那 「ウチもや、えーちゃんとどっちが強いんやろ？」

木乃香 「今はいいやろ？ みんなでご飯食べに来てるんやからな」

夷 「まあそうだな、じいさんの好意を無駄にはできない」

木乃香 「せやな、おじい様の好意は無駄にしたらアカンし、えびにいはおじい様大好きやもんな」

夷 「……あの人には感謝してるしな」

木乃香 「兄様？」

夷 「さあ食べようかー！」

そうやって夕食を食べる、木乃香が怪訝な顔に、刹那はキョトンとし、素子は微妙に顔を歪める。……俺は

夷 「さあて、木乃香の部屋に来てみたんだが……すまんアスナ」

アスナ 「いいよ別に見られて困る物はないもの」

夷 「……あつたら困るんだがな」

木乃香 「えびにい、今日は泊まっていくんやろ！」

夷 「ああ、それがどうかしたのか？」

木乃香 「ウチらの部屋で泊まらんか？」

アスナ 「ブーーーーー！！！」

アスナが飲んでたお茶、噴射したぞ？ つつか俺は男だぞ？
泊まるなんて無理だ！！

夷 「悪いが……俺は泊まる場所はあるんでな」

木乃香 「えー、アスナもええやろ？」

アスナ 「え？！ い、いやでも……」

夷 「……俺は行くぜ？」

そのまま部屋を出ると後ろから呼び止められるが無視する。
早く寝たいんだ。

それに……お客さんのご到着らしい。

夷 「……まあ、妹の居場所を守るのも兄の仕事だな」

|||||||三人称視点

魔法使い 「ようやくだ、ようやく麻帆良に着く」

男はボロボロの服を着ながらそうつぶやく。体は傷だらけで歴戦の戦士だとわかるが……気配が全くない、まったくだ。

魔法使い 「近衛近右衛門……今すぐに殺してやる」

超隠密用の魔法を使っているらしく、気配が全くないが……一部の強者にはバレバレであった、今泳がしているのもそれほど強くないからである。

しかし男はそんなことも知らずに進んでいく、まだ外に出ている生徒がいるが……男には関係なかった。ただその目は狂気が宿っているだけで血走っていた。

魔法使い 「ク、クカカカ、あと少しだ、あと少しで……」

？ 「なにが終わりだって？」

魔法使い 「なっ?!」

男が振り向くと電柱の上に座っている、仮面をつけ全身の服が黒い男がいた。

男は驚くが……即座に無詠唱で魔法の射手を放つ。

しかし男の服に触れた途端に消える。

魔法使い 「何者だ？」

？ 「……おばあちゃんが言っていた」

仮面をつけた男が天に右手を上げながら指を指す。

魔法使いの男は詠唱に入る、彼が出せる最強の一撃を繰り出すためだ。

？ 「男はクールであるべき……沸騰したお湯は蒸発するだけだ。つまりもつと落ち着け、今なら見逃すから……とつとと失せる」

魔法使い 「いまさら……いまさら止まれるか！！ 止まらないんだ！！」

？ 「……なら止めてやるよ。まあその頃にはあんたは八つ裂きになつてゐるだろうけどな」

魔法使い 「だ、黙れええええええええええ！！ 契約に従い 我に従え 炎の霸王（ト・シユンポライオン デイアーコネート・モイ ホ・テュラネ・フロゴス） 来れ（エピゲネーテート） 浄化の炎 燃え盛る大剣 ほとばしれよ ソドムを焼きし（レウサントーン ピュール・カイ・ティオン） 火と硫黄 罪ありし者を死の塵に（ハ・エペフレゴン・ソドマ ハマルトートウス エイス・クーン・タナトウ）！」

？ 「長い詠唱だなあ」

魔法使い 「燃える天空……！！」
ウーラニア・フロゴシース

？ 「術式吸収、燃える天空」

仮面の男がつぶやくと、魔法使いの男の頭上に燃える天空が吸い込まれるように仮面の男に吸収される。

驚く男をしり目に仮面の男…… 夷は仕上げに入る。

夷 「固定、掌握、魔力充填、術式兵装…… 煉獄ノ衣」

ゴウと言う音と共に燃える天空が夷に纏わりつき夷の髪の毛が赤く染まる。

背中から炎の翼が出ていて…… その姿は炎の化身と呼べる姿だった。夷が黒式を開発する前に試作的に作った術式兵装、摂氏数千度と言うとてつもない高温を纏っているが…… 夷には何の効果もない。

夷 「闇の魔法ってやつだが…… これでもやるか？」

魔法使い 「…… うあああああああああああああ！！！」

魔法の射手を連続で発射するが炎の翼がそれを許さない、当たる前に自動的に撃ち落とす。

夷は右腕を振り上げ、炎を収束させる。

夷 「術式解放…… 煉獄ノ槍」

それは炎の槍を模した炎の塊であった。

とてつもない魔力の密集に魔法使いの男はパニックを起こす、目の前の術式を防ぐ手段がないからだ…… 誰だっ て触れただけで人間が炭になる威力の攻撃なんて受け止めたくないはずだ。

夷 「すまんが消し飛べ」

それを振りかぶりながら男に向かって投げる！

男は目を見開きながら絶叫しながら……一瞬で燃え尽きた。

夷 「……やりすぎたか？ おっと、なんか色々来てるから逃げるか」

そのまま術式兵装を解きながら（余った魔力は吸収しました。デリシヤス、だそうです）転移する……もちろん秘密基地にだ。

次の日の朝一で帰った夷だが……次は生徒として来ようと思いがら関西に帰った。

||||||| 夷視点

こんちわー、夷だ……あれから一か月。展開速い？ 作者が赤点とって補習だから早めに書きたいんだそうだ、まあ裏事情は後回しにして……今日は家でダラダラしてみたい。この頃は修業、修業、発明、改造してたからなあ、たまにはゆつく

月詠 「夷はーん！ 斬り合いますえー」

夷 「少しは自重しろ！！ この戦闘狂が！！」
バトルジャンキー

月詠 「いくでー？ ざんがんけーん」

夷 「……斬閃拳」

手刀で気で強化した木刀を両断する、この頃は真剣もこれでぶった切れるようになってきた、神力強化は伊達じゃないらしい。

月詠がキラキラした目でこちらを見ているが無視する。この頃は平気で風呂にまで侵入してきた……女の子だからもう少し恥ずかしさを持つとよ。

ちなみにさっきの技は神鳴流にある拳の技を参考にして、虚刀流の技をパクらせてもらった、あれって結構きつかった、再現するのが……わざわざ自分の記憶から映像持つてきて、魔眼と見稽古で覚えましたがよ、見稽古チートすぎる。

月詠 「もう一本ありますえー？」

夷 「だから……その突っ込む癖をどうかしてこい、虚刀流……『鏡花水月』」

体重を適度に乘せながら掌底を打ち込む、この技を本気でやると岩すら砕きかねないので手加減に手加減を加えて、忍法『足軽』を使った手加減の極みの技、ああ足軽？ 記憶から昔見たアニメを再度見たら……できた、虚空移動と合わせると凶悪すぎる蝶々が学んだ技はすごいなあと再度認識したが……。

月詠 「きゃふ？！ なんやその技は？ 受けてるのに痛みがこないえー」

夷 「手加減の極みだからなあ」

月詠 「うー！！ ちゃんと戦うー！！ そっじゃなきゃ夜まで斬り合」

夷 「寝てろ!!」

魔法の射手（雷付属の少し強いスタンガン程度の威力）を打ち込み
気絶させるが……気絶する瞬間恍惚な表情をしたのは気のせいかな？
気のせいだよなあ？！

まあ布団しいて寝かせるんだが……細い体してやがる、鬼の血も入
っているから力が相当強い、まあ俺よりかは弱いが……。

夷 「願わくはこいつがまともな幸せを持てますように」

髪の毛を撫でながらそう思う、誰だって幸せになる権利はあるはず
だ……俺の周りにいる奴だけでもいい、それだけの人たちでも幸せ
になってくれれば……。

神 「なんちゆうこと考えてるんじゃ」

夷 「……もうそんな時間か？」

神 「ああ、行ってもらおうか夷君」

俺の後ろに神様が立っていたが特に気にせず会話を続ける。
神様がきたってことは……もう過去に行くのか。

神 「そうじゃ、今回はワシの力とお主のハイパーゼクターの力を
合わせる」

夷 「なんであんたの力を？」

神 「ルシフェルの奴がその時空を不安定にさせているからの、普
通に行くと虚数空間に永遠にさまようことになる」

夷 「……マジかよ、まあいいや変身」

俺はベルトをつけながらゼクターをベルトに装着させ、キャストオフまで終わらせる。

そしてハイパーゼクターを呼び出し、ハイパーキャストオフをする。

Hゼクター 「HYPER CAST OFF CHANGE
HYPER BEETLE」

夷 「よし、なったぞ？」

神 「重ねて言うがいつもすまん」

夷 「……あんたは俺に第二の人生をくれたんだ、頼みを聞くのは当たり前だ」

神 「……すまんの、では行くぞい!!」

神様が体から神力があふれ出し、俺の目の前に俺の身長くらいの空間の切れ目ができる。

俺はスラップスイッチを押してハイパークロックアップを発動させる。

Hゼクター 「HYPER CLOCK UP」

体からタキオン粒子が溢れだし、ハイパークロックアップが完了する。

すでにカブテクターは展開済みだ。

「……………その頃の夷
？」「お……の、おい……者」

夷「あ、ううううう？」

なんか頭がぼけつとする、うーなんだっけ重要なことを忘れてるよ
うな？

まあいいや、ここはどこだ？

？「おい、聞いてるのか？！馬鹿者！！」

夷「……お嬢ちゃん、どうした？」

俺の目の前には西洋人形を人間風にしたらこんなふうであろうと思
つてしまうほどの可愛い少女が居た、つつか黒いゴシッククロリータ
なんざ着て……似合うからいいんだが。

？「へへへ、御主人コイツキツテモイイカ？」

なんか女の子の様な小さな人形が物騒なことと言っているんだが？
なんだ？魔法人形か？珍しいな。

？「待てチャチャゼロ、少し話を聞こうじゃないか」

夷「あーすまん、君は？」

？「まずは自分からだろう？レディに先に言わせるつもりか？」

レディって……まだチンチクリンな癖して、まあいいか？　しかし近衛も両希も俺の本名名乗るのはまずいよなあ。

両希……あいつの名前にしよう嫌がらせには十分だ。

夷「俺は式、両義式だ」

？「ふん、まあいい、私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」

……アレエー？　ナンカキタコトノアル、ナマエダケドチガウハズ。

エヴァ「そしてこいつは私の従者の……」

？「ケケケ、チャチャゼロダ、ヨロシクナ嬢ちゃん」

夷改め式「嬢ちゃん？　俺は男だが？」

エヴァ「は？　なに言っているその髪に顔……どう見ても女にしか見えないぞ？」

チャチャゼロ「ソウダゼ？　女ニシカ見エナイゾ？」

式「てめえら、ぶちのめしてやろうか？」

エヴァ「ふん、貴様風情にできるか？　このエヴァンジェリンを……『闇の福音』と呼ばれたこの私をぶちのめせるのか？」

……おいおい、マジかよ、マジモンの闇の福音かよ？　ひとこと言わせろ、これは言っておかないと俺の精神が持たない。

式 「なんじゃ、そりゃあ ああああああああああああああ
あああああああああああああああ！！！！」

俺の墮天使殺しの時間跳躍は……一人の吸血鬼の少女の出会いから始まった。

依頼と過去と吸血鬼（後書き）

作 「今日のネギラジオ！！ こいや、夷！！」

夷 「えー今回で年少期終了です、次は前にアンケートをとった話です」

作 「おいおい！！ 俺のセリフをとるな！！」

夷 「いいだろうが！！ つうかなんで四十年前？！ 誤差ってレベルじゃねえぞ？」

作 「俺のゴーストがささやいたんだ」

エヴァを早く出せと……

夷 「このロリコンが！！」

作 「否定はしないし肯定もしない！！ YESロリータ、NOタツチ！！」

「

夷 「駄目だ腐ってやがる……」

作 「ぶつちやけ言つとな、補習がリアルにあつてな？」

夷 「赤点だったと」

作 「……英語だけ苦手なんだ」

夷 「他は？」

作 「すべて平均点以上、しかし英語は十点くらい」

夷 「勉強しろやあああああああああああー!!」

作 「ぶっちゃけ面倒、それに学校の用事も終わらせなきゃなんないしな」

夷 「で次はどうするんだ」

作 「ああ、アンケートの結果だけ言うぞ？」

夷 「ああ、それでは……」

ばらばらばらばらばら、ドーン!!

作 「一と二の夷の赤ん坊時代に決定」

夷 「え?!?!」

作 「なんかな、皆さんから一と二を一緒って意見が多くてな」

夷 「い、嫌だあああああああー!!」

作 「えらい人はこういいました」

夷 「なんだ？」

作 「AKIRAMERO」

夷 「神は死んだあああああああああー!!」

作 「そろそろしめるか……夷!!」

夷 「はあ、まあいいや。次回、吸血鬼と従者」

作 「次回も……」

木乃香 「見てくれへんとハンマーをプレゼントや」

作 「あ、あのー？ 木乃香さん？ その馬鹿でかいハンマーは？」

木乃香 「ウチが作った『木乃香EX』や」

夷 「ガクガクガクガク」

作 「ち、ちなみになぜ？」

木乃香 「別にー、作者さんがウチをあんまり出さなかったり、えびにいがウチの扱いが雑だからこんなことしてるわけないやないか（にっこり笑顔）」

素子 「そして私もだなあ、あれだけしか出ないとは……」

刹那 「ウチもや、えーちゃん、作者さん？」

千草 「ウチなんてセリフすらないのになあ？」

作&夷 「「ヒイイイイ？！！！」」

女性陣全員 「「「少し死んでみる？」」「」」

作&夷 「「全力できよ」「」

イエアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！

木乃香 「次回も」

素子 「見ないと斬り伏せて」

刹那 「切り裂いて」

千草 「つぶしたる」

月詠 「ウチも混ぜてくださいえー」

作 「な、なんちゅう奴ら、だ（ガク）」

夷 「な、なんで俺がこんな目に（ガクリ）」

吸血鬼と従者（前書き）

今回はバトルメイン、ほのぼの二割で構成されています。

夷（式）のキャラ崩壊危機、原作ブレイク、俺の好きなキャラがこんな筈ないなどをスルーできる方はお進みください。

いいですか？ それでは〇崎を始めよう。

吸血鬼と従者

なますてー夷だ。もうなんかこれが恒例になってきてるような……
まあいいいや、前回過去に来たんだが……闇の福音(?)の従者と
会ったんだが。なんだあれ？ 金髪幼女に人形とかなめてんのか？
まあ色々ありましたよ……再現VTRどうぞ。

「……………夷(式)視点

式「お前みたいなチンチクリンが闇の福音？ 冗談きついぞ？」

エヴァ「ほう？ 死にたいらしいな！！」

なんか目の前の少女から強大な魔力感じるんですが？ え、まさか
本当に闇の福音なのか？！！それに従者もなんかナイフ取り出し
てるし！！

チャチャゼロ「ケケケ、残念ダッタナア御主人ノ怒リカツチマッ
テ、マアオレハ殺シ合イガデキルカライイガナ」

式「ちっ！！」

急いで倉庫から武器を射出させる。俺の影から二対の大きさの違っ
た刀が出てくる。

俺はバックステップで下がりながら構える。

エヴァとチャチャゼロも戦闘状態に入る。

エヴァ 「チャチャゼロ！」

チャチャゼロ 「ハイハイワカッテルヨ、御主人、斬り合おうぜ！
シキイイイイイイイイイ！」

式 「軽くホラーだな、行くぜ？ 剛・魔神剣！！」

エヴァ 「ふふふ久しぶりに強そうじゃないか！ リク・ラク・ラ・
ラック・ライラック、闇の精霊29柱……魔法の射手・連弾・闇の
29矢」

俺に向かってくる人形と高密度の魔法の射手を衝撃波で相殺するが
…… チャチャゼロは空中で回転しながら再度俺に向かって来る。
それを右手で受け止めながら、撃ち漏らした魔法の射手を左手の太
刀で破壊していく。

一応、魔法耐性もつけといてよかった、ズバズバ斬れるぜ。

エヴァ 「まだまだ追加だ！ リク・ラク・ラ・ラック・ライラッ
ク、闇の精霊100柱……」

式 「いくらなんでもやりすぎだろ？！！ チャチャゼロに当たる
ぞ？」

チャチャゼロ 「ソレガドウシタ？ オマエヲ切り裂ケバイイダケ
ノハナシダ」

…… 人形だから恐怖心はないからか？ いや信頼してるからか？
エヴァの目には躊躇ってもんがないやる気かよ？

エヴァ 「魔法の射手……闇の100矢!!」

俺は左手の小太刀を影に戻し、ジエフティ（魔法銃）を取り出しながら魔法の射手に向かって乱射する。まずい癖になりそうぐらいにおもしろい!!

白い銃から白色の魔力弾が放たれ黒い弾丸（魔法の射手）を撃ち落としていく、左手でチャチャゼロの猛攻を弾きながらだから何発か撃ち漏らしが俺の足元に突き刺さるが気にしない。

チャチャゼロ 「ケケケ、殺りガイガアルナ!!」

式「お褒めの言葉ありがとうございます……ぶっ飛べ、虚刀流」
木蓮「」

左手の太刀でチャチャゼロを吹っ飛ばした後に飛び蹴りの追撃をかける、しかしチャチャゼロの被弾面積が小さいのが幸いしたのかまともに決まらずに取り逃がす。

右手の銃を乱射しつつエヴァへの牽制も忘れない、さっきまで100あった矢がもう数発程度になっているがな。

チャチャゼロ 「危ナカツタ、今ノクラツテタラ壊レタゾ?」

エヴァ 「それに魔法銃にチャチャゼロを圧倒する剣術の腕、そして拳法か……」

正確には虚刀流は拳法ではなく剣法だが……敵に情報を教えるほど俺はやさしくはない、にしてもさすがは闇の福音とその従者、なかなかヒヤヒヤする攻撃を放ってくるなあ。

そんなことを思っているとエヴァに魔力が集中する。魔力量からす

ると大技、上級魔法か？

エヴァ 「チャチャゼロ時間を稼げ」

チャチャゼロ 「ワカッテルヨ御主人、別ニ斬ッテモイイヨナ？」

式 「御託はいいから早く来い」

チャチャゼロ 「ワカッテンジャネエカ！」

式 「来いよ、キリングドール殺人^{人形}だけど そのころにはお前は八つ裂きになってるだらうけどな」

チャチャゼロ 「シテミヤガレ、殺り合オウゼ！！」

チャチャゼロが飛び上がりながらナイフを俺に向けて振り下ろす。それを太刀で防御しながら銃を構えるが…… 的が小さすぎて照準を合わせられない、銃じゃこいつには無理だな。そう思いながら銃を足元に落とし、影に収納する。太刀一本でチャチャゼロをいなししていくが小さい体のどこにそんな力があるかってぐらい力がでかい、ヘタしたら今の気の強化状態の俺並だ。

式 「くっ?!」

チャチャゼロ 「久々ニイイ獲物ジャネエカ！！」

エヴァ 「私もそろそろいくか……」

鏑迫り合いをしながらエヴァからそんな声が聞こえる、なんかやばそうだなあ。

高密度な魔力がエヴァの体を包んでいる。魔眼開放してますよ、そうじゃないきゃやられる、油断はしないさ。

エヴァ 「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹けよ常夜の氷雪。『闇の吹雪』」

その瞬間、チャチャゼロが離脱し俺は前のめりに倒れそうになる。畜生、罅迫り合いじゃなかったら『術式分解』が使えたのに！！そう思っていると闇が発生する、嫌な予感がしてきた。

エヴァ 「凍れ」

その一言を言われた瞬間、強力な吹雪が俺にふぶく……さむ！！そう思いながら結界を張り全身を包む、おいおいマジで闇の福音だなあ実力もあるし、魔力もある……久々に本気ですか？そんなことを思っていると吹雪が止む、どうやら終わったようだ……そう思っていた時期が俺にもありました。

エヴァ 「まだまだこれもくらっとけ」

するとエヴァの右腕から巨大な剣が現れる。

……マジか、魔眼で解析したところあの剣の効果は触れたものを強制的に物質を固体・液体から強制的に気体へと相転移させることで攻撃するというものだった。

なんつつう剣を出しやがってんだよ！！

エヴァ 「エクスキューションーソード……消えろ」

式 「や、やばいなあ」

次の瞬間エヴァが剣を振るい、俺に向かって振り下ろしたそれを避
けずに太刀で受け止める。

地面にでも当たったらやばいことになるしな。そのままエヴァは振
り下ろした剣を引き寄せ、俺に向かって突きの構えをとる。

……あれやるか。

エヴァ 「ハッー!!」

式 「虚刀流……『きく菊』」

俺の全身を魔力で包み込み、エクスキューショナーソードの効果を
受けないようにする……そのまま「剣」に二の腕と肘と背骨を利用
しつつ梃子の原理で剣をへし折った、まあ簡単に言くと剣に関節技
をかけて体（刀身）をへし折ったという感じだ。

エヴァ 「な?! エクスキューショナーソードを……」

式 「続いて繰り出すのは最終奥義……」

と言っても奥義を順番に出すだけだがな……。

チャチャゼロ 「御主人!!」

俺はすでに虚刀流一の奥義、一の構え「鈴蘭」から繰り出される奥
義である「きょうかすいげつ鏡花水月」の構えをとっている。

主人公の鑢七花が思いつきで作った技だが……まあいい。

式 「『しちかはちれつ七花八裂』!!」

体に七つの奥義を足軽を使いながら叩き込む。

そうすれば痛みはないだろうな、重さを消してるからなあ。

エヴァ 「な、なんだ?!」

チャチャゼロ 「ア、アレ? 御主人ナンモナイノカ?」

エヴァ 「あ、あれだけの打撃技をされたのに痛みがまったくない。何をしたんだ!」

式 「いや? ただ打撃の重さを消しただけだ」

エヴァ 「……闇の福音である私に手加減したのか?」

式 「さあな、俺は女子供は殺さない主義なんだ……つまり子供は^{ガキ}布団被って寝てろ」

エヴァ 「ふ、ふざけるああああああああああああああああああ!!」

あ、やつべ口が滑りすぎた……めっちゃ怒ってはるがな。
顔紅いし、なんか子供が怒っているようにしか見えないんだが?

エヴァ 「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、契約に従い我に従え 氷の女王 来れ永久の闇 永遠の氷河 全ての 命ある者に等しき死を・其は安らぎ也」

……大量の、さっきよりも殺意がある高密度の魔力がエヴァの周りに集まる。

こいつは……やばい、俺は魔眼で分解しようとするが……やめる。
ここで分解するよりも吸収した方が奴らも少しは黙るか?

エヴァ 「”おわるせかい”」

魔眼で解析、理解つと。絶対零度（摂氏－273、15度の冷氣）による攻撃。まあ知つての通りに絶対零度は（ほぼ）全ての原子の運動を停止させあらゆる物質を粉々にする特性がある、寒いと動きが鈍くなるだろ？　それが原子レベルで止まるって考えればヤバさがわかるだろ？。

しかもこの呪文は150フィート四方という広範囲にわたり完全凍結する……1フィートはセンチにすると30・48センチ……つまりだ、約76メートル四方は効果範囲内。範囲広すぎて笑えるなあ。

式 「術式吸収……『終わる世界』」

その術式を吸収すると俺の頭の周りに渦巻きながら冷氣が飛び込んでくる。

エヴァとチャチャゼロが啞然としながらこちらを見てるが気にしない。

式 「固定、掌握、魔力充填、術式兵装……凍土ノ衣」

冷氣が俺を包み込み、背中に氷でできた翼が生える。

全身が氷で包まれ、俺の周りの空気があまりの冷たさによって、軽く空気中の水蒸気などが凍っていてキラキラと輝く。俗に言うダイヤモンドダスト……つまり大気中の水蒸気が昇華して出来た、ごく小さな氷晶が降る現象ができていた。

ちなみに今は夜なので月明かりだけが反射している。

エヴァ 「術式兵装だと？　まさか闇の魔法？！！　そんなバカな！！」

式 「知るか……術式解放、凍土ノ太刀」

ちなみに今は髪の毛が青くなっていて、俺の手には巨大な一本の太刀が握られてる。

チャチャゼロ 「マズイゾ、御主人!!」

エヴァ 「……ここまでか」

式 「はあああああああああああああ!!」

そのままエヴァに斬りかかりその体を……斬らなかった。

エヴァ 「なんだ？ 命乞いでもさせようというのか？」

式 「いや？ これで戦いを終わりにしようと思ってな」

エヴァ 「な、何を言っている!! 貴様あ!!」

式 「それに外見が美少女を男の俺が一方的に戦っても……なあ」

啞然としてる二人をしり目に俺は術式を吸収し、消費した魔力などを回復させる。

まったくこの術式吸収はやりやすい。

エヴァ 「……なぜだ、なぜ『悪』の魔法使いの私を生かす？」

式 「アホか？ 悪？ 正義？ そんなもん自分で決める」

エヴァ 「なっ?!」

式 「俺は……ただ信じる者、つまり仲間だな。そいつらのために戦ってきた」

そうだ、いつだって強くなりたかったのは仲間の……みんなのためだ。

俺は英雄にはならない、なりたくない。十を助けるなら救える一を救う、俺にとっては他人とは「危なくなったら助けよう」その程度しかない。薄情な奴と言う奴はいるだろうな、だけど俺は家族を助けるためなら万の他人を犠牲にしても助ける」

式 「俺は悩まない……目の前に俺の大切なものを奪おうとする奴が現れたなら」

エヴァ 「あ……」

式 「叩き斬るまでだ!」

エヴァ 「ふ、ふふふ、フハハハハハハ」

式 「なんか可笑しいこと言ったか？」

エヴァ 「そうじゃない、いままで私にそんなことを言ってきた奴はいなかった」

……たしか闇の福音、いやエヴァは600年以上生きてるんだよな。さらに吸血鬼、人間の汚い部分をたくさん……いやそれしか見ていないかもしれない。

エヴァ 「『正義のため』『化け物を退治するため』『悪だから』
そんな理由で私に戦う奴らばかりだった……そして私はそんな奴ら
を殺していった『悪』だ」

式 「……」

エヴァ 「ハハハ、私はなぜそんなことを言ってるんだろうな……
散々殺してきた癖に 『悪』の癖に」

式 「お前は……自分から殺そうとしたのか？」

エヴァ 「……いや、私は吸血鬼だからな。血を分けてもらうた
めに襲ったこともあるが……自分から殺しに行ったことはない」

式 「ならなぜ自分を『悪』なんて言うんだ？」

エヴァ 「わからないのか？！ 私は吸血鬼で！ ばけ フグ！
！」

式 「ふざけたことをぬかすな、俺の目の前に居るのは……少しだ
けアクティブな女の子だ」

俺が頭を叩き、なんか口が滑って言ってしまったが……自分で言っ
てめっちゃ恥ずかしいです、はい！

式 「……ともかくだ、俺は自分が敵だと思った奴しか戦わない」

エヴァ 「……ク、クハハハッハハなんて奴だ。狂ってる」

式 「ああ狂ってるさ、刀が刀を使ってる時点だな」

ふざけんな！　ここは日本だったよ、確かに日本でしたよ！！　四十年前のな！！

ふざけんなああああああああああああああ！　俺が行くのは二十年前だろうがああああああああ！！　ハアハア、すまん取り乱したな、それで一番の問題は……

エヴァ　「何をしてる式、早く来い」

どつかで手加減した吸血鬼ロリババアのせいでこっちはストレスでマツハだ！　誰だ女の子とか言った奴！！　って俺だ？！！

そんな漫才をしないで早く進めろ？　俺の服装もどにかしてくれ……。

エヴァ　「フッフ、今日はメイド服だ」

式　「またかあああああああ？！！」

なぜかこいつは俺に女装させようとする、そういえばこいつ……木乃香のクラスに居たなあ、ロリババアのくせ　（ザシュ）

エヴァ　「ナンカイッタカ？」

式　「何も言ってますん、サー！！」

チャチャゼロ　「マタカヨ、旦那モ大変ダナア、クククク」

酒飲みながら言うな、つうか俺の頭の上に乗るな。

確かにてめえは外見が可愛いから乗せるのに拒否感はない、頼むから頭の上でナイフ研いだりしないでくれ……お前のせいで髪切るこ
とになったからなあ。

もう髪の毛が肩にそろえる、ショートヘアになっちまったよ。外見は小さい両儀式ですよ……自分でも時々間違える、髪の毛伸ばしたのもこれを避けるためだったんだがなあ。

エヴァ 「さあ早く行こう！ 思い立つ日が吉日だ！！」

式 「テンション高め、たかが京都行くだけだろ？」

エヴァ 「馬鹿者おおお！！」

式 「ぐほお？！！」

エヴァ 「京都の素晴らしい仏閣を見ずにいられるかあ！！」

式 「（な、なあチャチャゼロ？ あいつっていつもああなのか？）
」

チャチャゼロ 「（アア、京都ニイコウトスルトアレダ、十年前ニ
イッタラ、毎年イリビタツテル）」

……ウチの故郷でなにしてる、つうか最高位の魔をなに仏閣とかに
通してんだよ神鳴流！！ 大丈夫か？！ まあ関係ないがなあ。

エヴァ 「まずは金閣寺で、次にクフフフ、アッハハハハ……ゲ
ホゲホ」

式 「落ち着け、ハイテンションガール……京都くらいなら俺が案
内してやるから」

エヴァ 「ほんとか？！」

……こうして見ると本当に年頃の女の子にしか見えないぜ？　つつか人形みたいだから抱きしめたくなる……うん、自重しよう。

エヴァ　「なら今回は少し長いようか」

式　「まあそんな期待するなよ？」

仮面被つとくか……これで未来で狂ったりしたらヤバいしな。そんなこんなでゆつくりと歩いていく俺たちの後ろに……大量の討伐隊がいるに気づき、俺は内心で舌打ちをする。

式　「（数は二百以上か……本格的だなあ）なあエヴァ、少し獲物狩ってくる」

エヴァ　「獲物？　なんでだ？」

式　「この頃は肉を食ってなかったからな、今日は肉としよう」

エヴァ　「そうだな、この頃はお前が食品管理してるからな……魚ばっかであきてきたわ……」

チャチャゼロ　「ウマイツマミモツクツテクレルンダロ？」

式　「ああ、最大級のな」

そう言つてその場にばれないように結界と不可視の札も貼り付けておく。

その場を離れながら、俺は黒い服いつもの仮面をかぶる。

式 「んじゃ……」

とある殺人鬼の殺人開始の合図である、あの言葉を言う。

これからするのは戦闘ではなく……戦いですらない、ただの殺人だ。

虚識（式） 「零崎を始めますか」

虚刀流にして零崎……一回だけが記憶から読み取ったらできちまった。

今じゃ人殺すのにも拒否感がない、獲物はすべて……何でもである。こうなったのは三年前、俺の目の前の魔法使いを『殺されかけたとき』覚醒した。なんかわからんが目の前の敵を殺さないと済まないほどの……殺人欲に身をゆだねかけた。定期的に発散しないとまずいんだよなあ。

さあ零崎を開始しようか……。

始まるのはただの虐殺 取るに足らない物語でございましょうか、別世界で一人目覚めた零崎の殺人劇の始まり始まり。

|||||正義の魔法使い視点

私はメセンブリーナ連合から派遣された……俗に言う正義の魔法使

いと呼ばれるものだ。

今日の任務は悪の魔法使いであり、忌むべき吸血鬼である「闇の福音」の殺害とその従者である「黒の死神」も退治しようと言う任務だった。

素晴らしい、まさに正義の魔法使いの仕事だ。悪を倒し、正義こそがこの世界の本質だとあの愚か者どもに知らせてやらなければ！！今回の任務にはほとんどが真祖とはいかなくても並の吸血鬼には戦闘経験ある者ばかり……不死殺しの武器も持ってきている。

いくら強かろうとも、我らの正義の一撃をもってすれば……おぞましい化け物共も駆逐できるであらう。

モブ1 「なあなあ、今回の仕事は成功しそうだな」

モブ2 「ああ600万の報酬を二百人で分担するのは結構きついな」

モブ1 「そういえば『闇の福音』は聞くところ美少女なんだろう？」

モブ2 「なんだあ？ まさか？」

モブ1 「泣きついて来たら全員で……クハハッハ」

まああんな奴もいるが我らは正義、正義とは常に正しいのだ。

我らの加護があるから一般人たちは平和に暮らせるのだ、なぜわからないのだ？ それにこの世界の関西呪術協会というのもさっさと日本から出ていけばいい物を……俗物どもめ。

モブ1 「なんだ？ あいつ」

全軍が一斉に止まる、なんだ？

そう思つて見てみると黒い服に仮面をかぶつた男が道をふさいでいた。

モブ2 「なんだあ？ 貴様は、我らを正義の魔法使いと知つていてこんなことをしてるのか？」

？ 「はあ、こんなにたくさん居るのかあ。面倒だ」

モブ1&2 「貴様はいつたいな」

次の瞬間、二人の魔法使いの首が何かにはねられ胴体と完全に別れる。

啞然とする なんなのだ？ 目の前の男は？！！

？ 「虚刀流で終わらせようと思つたが気が変わった……」

男がまるでピアノでも弾くかのように手を上げて、そのまま下に振り下ろすと……次々と仲間たちの首落ち、何も言わない屍となる。

？ 「やっぱ鋼糸は作つといて正解だった、殺しやすいしな」

男 「き、貴様いつたい何者だ！！」

私の喉から出たのはそんなおびえたような声だった、当たり前だ……
……たった一振りの動きで三十人規模の人間を殺すことなどできるはずがない！！

？ 「ただの殺人鬼さ、名前は言っておこうか」

その仮面の者は死刑宣告のように言い放つ。

虚識 「零崎虚識、二つ名はない……んじゃ仕上げだな」

思い出した……黒い服を着て、笑っているような仮面をかぶった性別不明の「闇の福音」の従者

男 「お、お前は『黒の ……』」

その言葉を言えずに口をパクパクと動かす。

なぜ？ その答えはすぐにわかった、体が見える、何故か足の裏が……。

そんなことを思いながら私の意識は闇に消え去った。

虚識 「これにて零崎終わり……はあこの癖をどうにかしないとなあ」

あ

零崎を名乗ると全員殺してしまう、両義を名乗ると全員生き残るんだが……使え分けていくか？ 生かす仕事は両義、殺す仕事は零崎と。うん、そうしよう。

なんかこの頃キャラ崩壊どころか、だんだんと性格破綻者になっているような……まあいいか。

式 「さあエヴァも待ってるし、イノシシでも狩ってくるか」

そういえばさっきの鋼糸は零崎限定だ、両義だと魔力や剣と虚刀流を……零崎だと全武装と黒式、近衛だと仮面ライダーに……両希はすべてを使う。

思えば偽名がこの頃真名として定着してきたような……魔眼にもつけるか？ やめとこれ以上チートになられたら困る。

その後イノシシを狩って、骨付きで焼くところからか「上手に焼きましたー！！」と言う音声が流れたが無視した。

|||||さらに数週間後

つ、疲れたあ、まさかあれから三回も襲撃されるとは……おかげで最初の襲撃合わせて千人くらいは殺したぞ？ 零崎で……！

俺は悪いよなあ、謝らないと……まあ戯言だが。

殺人欲があるんだからなあ、これで10年くらいは抑えられる気がするけど……また使いそうだよ、いやあ真名って怖いねえ。

まあまあ戯言まがいの事はやめて本題に入ろう。

エヴァ 「京都よ！ 我が悲願の為！ 全寺コンプリートの為！

京都よ……私は帰って来たああああああああああああああああああああ！！ アハハハハハハハハハハハハ、ゲホゲホ」

この通り幼女がなんか核でも撃ちそうなセリフを言い放つ。
さてチャチャゼロに言うか。

式 「こんな御主人で大丈夫か？」

チャチャゼロ 「大丈夫ダ、元々アキラメテル」

おーいエヴァ、従者にあきられて　聞いてるわけないよねえ。
めっちゃ咳き込んでるし、うわぁ。

式「まあ行くか」

エヴァ「さてここは和服で行くべきだろう？」

……めっちゃ嫌な予感がしてきた。こう木乃香に着せ替え人形にされる前の感覚。

やべえあいつ元気にしてるかなあ、時空超えた会話できる機械とか創造すべきだった。

そういえば昨日、枕元に神が現れて一本のナイフを置いていったよ。
『七つ夜』をな、俺に完全な殺人鬼にさせる気か？　なってるけど
！！

エヴァ「さあさあこっちに來い、着替えさせてやろう（ハアハア）
」

式「拒否す「答えは聞いてない！！」お前は某紫の負けフラグ要員か？！」

あいつ出て勝った場面あったつけ？　あまりに無さ過ぎて覚えて……
……ちや、チャチャゼロ裏切ったのか？！

チャチャゼロ「オトナシクシロ、オレノタメダ。犠牲ニナレ」

式「はぐなぐせ、おいバカやめ」

アツ――――

――！！！！

「……………数分後」

エヴァ 「わ、我ながら完璧だ!!」

式 「もう殺してくれえ、オレノセイシンハボドボダア!!」

いかんオンドウル語まで使い出したやべえ。
今回ネタばっかだあ。

チャチャゼロ 「安心シロ、イマノオマエハ立派ナオンナダ」

式 「それちゃう、褒めることちゃう」

エヴァ 「まあいい(鼻にティッシュ詰めている)さあ行こう」

式 「引つ張るなあ、あだだっただだだ」

髪が髪がああああああああ!!

? 「この妖怪めえええええええええええええええ!!」

式 「虚刀流……『菊』」

突然の来襲だったが甘いな、もうちつと気配消せ阿呆。

……そのまま奥義までだそうと思ったがやめておく、つつかガキじやねえか、まだ六歳ぐらいの、俺はもう15歳だ。エヴァのダイオラマだっけ? そんな名前の魔法球(別名別荘)には入り浸ってい

式 「なんだガキ？」

詠春 「あんたら妖怪じゃないのか？」

式 「俺は……まあ人間だが、このロリババアは吸血鬼だ」

まあカミングアウト、つうか俺って人類だよな？ まだ人類のはず、
人外ちゃうわああああああああああああああ！！

詠春 「え？ あんた妖怪……じゃないのか？」

式 「俺は！！ 人間だ！！」

詠春（ガキに父さんと呼べるか！！）にアイアンクローを頭にかけて
痛そうにしている詠春、痛いかな？ 痛くしてんだよぉ！！

詠春 「いたたたたたただだ、や、やめてくれ！！」

式 「お前が！ 謝るまで！ 俺は！ アイアンクローを！ やめ
ない！！」

詠春 「イタタタタタ、わかった、わかったからあああああああ
あああああああああああああああ（グキ）」

あ、やりすぎた。

京都来てからの成果、ロリババア抹茶好き、過去の父さんと会う。

吸血鬼と従者（後書き）

「今日のネギラジお！ 今日のゲストはろりば」

「死ぬか？（剣を突きつけられる）」

「イエ、スミマセンデシター」

エヴァ 「ふん、今回は私の話だが……もつと出せええええええええええ！」

作「すみませんでしたああああ！　ただでさえネギまなのに原作に入っていないくて、焦っていてこんな結果に」

「ふん、まあいい。式の女装も結構見たしなあ」

「鼻血鼻血、カリスマがブレイクしてますよ？ おぜうさま」

「エヴァ 気にするな、問題無い」

「こんな幼女で大丈夫か？」

「ケケケ大丈夫ナワケナイダロウ？」

「まあいい、今回の『零崎』とは？」

作「一言で表すと最も忌み嫌われる殺人鬼集団であるいはこの世で最も敵に回すのを忌避される醜悪な軍隊にして、この世で最も味方に回すのを忌避される最悪な群体。邪悪と冒涇の宝庫……やべえ

表せてない」

エヴァ 「つまりは？」

作 「三大欲求に殺人欲をぶち込んだ奴ら？」

エヴァ 「なんだその危険な集団は?!」

作 「大丈夫大丈夫、えー……式は敵以外には零崎を始めないから」

エヴァ 「……その敵はどうなる？」

作 「皆殺し、まあそのぐらいはするでしょうなあ」

エヴァ 「……私は」

作 「辛気臭いのでここまでしめよう」

エヴァ 「くっ、まあいい次回、そうだ強化しよう」

作 「次回も」

エヴァ 「見ないと吸血するぞ？」

作 「それは俺にとってはごく褒美だな（キラ）」

エヴァ 「なら吸ってやろう」

作 「え、マジで って」

うあああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ！
！！

エヴァ 「ゲフ、次回も楽しみにな」

作 「吸われたぜ……真っ白だ」

宿がねえよ（前書き）

次回予告と違ってごめんなさい！！
次回に持ち越しです。

誤字脱字、ここが嫌だ、ストーリーに絡ませたいキャラなどありましたら感想まで、いつでも待っています！！

原作崩壊などが嫌な人はバックで戻ってください。

いいですか？ それではどうぞ！！

宿がねえよ

おらー、夷もとい両義式だ……さっきのおらーはスペイン語でこんにちはって意味だ。何言ってるんだ？俺は……。

まあいいさ、後二十年は暇なんだからあ、はあハイパー使って未来に行きたい。

この頃はライダー使っていないしなあ、ぶっちゃけるとライダーより身体能力が高くなったよ。前に本気の結界張って……エヴァの別荘を見本に創造する能力を使って作った別荘の中にも何十にも結界を張って……魔力中和もしてやつのことで測定できた。

結果だけ言う……創造の能力でどのくらい強いのか、某サイヤ人が持つてるスカウターのような物を作って測ってみた。

[illegible]

……なんだこれ？　なんとか零崎までは結界は耐えたよ、けど両義で数枚抜かれ、両希では別荘使用不能まで。

あれだ、黒式と神卦法を同時に発動して、普段の身体能力も取っ払ったら……なんつうか常時ハイパークロックアップ状態だと思ってくれ、無強化で次元の壁に突っ込みかけた。チートというかバグと
いうか……使う機会あるのか？！ 意外と両義と零崎が拮抗してたのはびっくりした。

別荘は作り直した……そういえば作者が俺の設定を修正したとかなんとか、近いうちに書くつもりらしい。なんだこのメタ発言。

自分で言っただが……偽名が多いな!! 両義式に零崎虚識に近衛夷……それぞれ使う力違うがな。

あれから少したって……詠春と別れて京都の町を見回っていた。エヴァはホクホクしながら京都を見ている、チャチャゼロは俺の頭の上に乗っている。つつか周りに居る人たちの目が痛いです、そりや仮面付けて、西洋人形を頭に乘せて着物着てればこうなるよなあ。ちなみに今つけてる仮面は狐のお面のような仮面である。ほかにも狸、犬、猫、鬼のお面がある（黒の仮面は零崎専用になりました）つつかほんと仮面外すと両儀式になってる……忍法で顔変えるか？まあそんなことを考えながら今金閣寺に居る。まだ火災になる前だから本物だ……来てよかったかも。

エヴァ 「フハハハハ、さすがだ!!」

式 「八つ橋うめえ」

パクパク、ああやっぱあんこうめえ。

チャチャゼロ 「……ゲンジツトウヒスルナ、旦那」

聞こえない聞こえない、人形がしゃべっていたり幼女が高笑いしていたりしてるが俺には関係ないんだ!! 周りの人たちも温かい目で見ないであげてえ!!

エヴァ 「……あのつつくしさは一級品だな、別荘にいれるか？」

式 「アホか!! このエターナルペチャパイババア!!」

エヴァ 「誰がペチャパイだあああああああああ！！」

式 「お前しかいねえだろうが！」

エヴァ 「うるさい仮面マニア！！」

式 「仮面をなめるなあああああ！」

エヴァ 「くくく、お前とは決着をつけないといけないなあ」

式 「いいぜ？ いいのか？」

エヴァ 「決まっているだろう？」

チャチャゼロ 「マタカ、イイカゲンニシロヨ」

式 「いくぜ！！」

俺とエヴァは同時に拳を握り、腕を上げる。
そして振りおろし……

式&エヴァ 「「じゃーんけん、ぽん！！」」

じゃんけんをした、え？ レベル低い？ いいんだよ！！

式 「俺の勝ちだ」

エヴァ 「くそおおおおお！！」

俺がチヨキ、エヴァがパーである。ふははははは、あいつの叫び声

は蜜の味だ！！

そんなこんなで京都巡りしながらエヴァを弄ったり、チャチャゼロのナイフを取り上げながら、八つ橋を食いながらも夜になりここで問題発生。

式 「どこに泊まろうか……」

エヴァ 「なんだ？ 野宿でいいじゃないか」

式 「お前はアホなのか？ ここには陰陽師もいるし、神鳴流もいるし死にたいのか？」

エヴァ 「ククク、私を心配してるのか？」

式 「当たり前だ、お前は俺にとってはもう守る対象で大切な人だからな」

エヴァ 「え？ い、いや待ては、早いぞ？！ 私たちは」

式 「いやいや、勘違いするなよ？ もう俺とお前は仲間だつてことだ」

するとすごい嬉しそうな顔から一転して、ものすごい怒った様な顔をしたエヴァに蹴られた、地味に痛い。俺、化け物だけど今は基本スペックが人間より少し丈夫な程度なんだよ！！

エヴァ 「……そうだと思っただわ！ この馬鹿者が！！」

チャチャゼロ 「ケケケ、御主人モヤツカイナコイヲシタモンダゼ」

チャチャゼロがなにか言っていたが聞こえなかった、なんかすごい笑っているんだが？ さて今日の宿をどうしようか？

エヴァ視点

私の名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル、世間一般的には「闇の福音」と呼ばれる「悪の魔法使い」であり吸血鬼だ。

私には従者が一人だけいる、チャチャゼロと言う人形だ。元は私の親が私のために作ってくれた操り人形から作りだした「私の唯一の家族だ」……恥ずかしくて奴には言えんが、600年という長い時を過ごし、共に戦ってくれた仲間だ。

私は普通の吸血鬼とは違い、真祖と呼ばれる吸血鬼の中でも高位な吸血鬼だそうだ。昔、そのせいで大勢の人間に襲われ、何度も死にかけた。

私はそのたびに人間を殺していった、最初の頃は罪悪感から自殺しかけたこともある。何日も口に食べ物をつけられずに餓死しかけたこともな……今となつてはあの頃が私にとってまだ引き返せる時期だったと思う。しかしだ、生きてく為には目の前の障害を取り払わなくてはいけなかった、身に降りかかる火の粉を振り払い、時には無残に逃げて、それでも生きて、生きて、生き続けた。

ちなみに私は不老不死だ、つまり吸血鬼になった時から成長していない。永遠に若い体、まあ言い方を変えれば少女のまま、女性としていつまでも若い体と言うのはイイものだが……せめて十五歳くらいなら胸もそこ……ゲフン。

さて、私はある男と出会った、あれはそうよく晴れた日だった。

エヴァ 「……暑い」

チャチャゼロ 「ソナナニ暑いナラ、着物ヲ脱ゲヨ」

嫌に決まってるだろう？ 私がこの日本とかいう国に来ておよそ六十年たった。

最初は合気道を使う変なジジイの元で修業をし、全国をフラフラと放浪していたら……なんと素晴らしい町を見つけた。京都というらしいが……そこには素晴らしい仏閣がたくさんあり、世界中を巡っていた私の目にも素晴らしい物に思えた、約十年前の話だがな。それから毎年行っている。

チャチャゼロ 「マツタク何回行ケバ気が済ムンダ？」

エヴァ 「フン、何回でもだ」

にしても暑い夜だ、寝苦しそうだ。

まあ私は吸血鬼だからな、夜に行動するのが一番いいのだがな。まあいい、今日は満月だ……いい夜だ うん？

エヴァ 「なんだ？」

何か黒い物がこちらに落下してるような……人の様な、人お？！そのまま地面と激突してすさまじい音が聞こえる。……い、生きるか？

？ 「う、ううん」

どうやら生きていたようだ、どうするかこのまま放置でもいいが……仕方ない起こしてやろう。足蹴りしながらな。

チャチャゼロ 「ケケケ、美少女ツテヤツダナ」

確かに腰まで届いている髪で頭で一纏めしている、そして顔も一級品だ、まさしく美少女だな。

エヴァ 「おいその女、おい起きろ馬鹿者」

罵倒しながら言うと少しだけ意識が覚醒したようだな、目が開いてきている。

もう少しか？ 今度はもう少し大きく。

エヴァ 「おい、聞いてるのか？！ 馬鹿者！！」

？ 「……お嬢ちゃん、どうした？」

お、お嬢ちゃんだと？ 貴様だつて対して私と変わらない身長だろ？！ さらに着ている着物が似合っているのにも気に入らん！！

チャチャゼロ 「へへへ、御主人コイツキツテモイイカ？」

チャチャゼロの意見を採用したいが……まずは話を聞こうじゃないか、私は「悪の魔法使い」だからな

エヴァ 「待てチャチャゼロ、少し話を聞こうじゃないか」

？ 「あーすまん、君は？」

エヴァ 「まずは自分からだろう？ レディに先に言わせるつもりか？」

六百年以上生きているが女はレディと思えばいつまでもレディなんだー！！

式 「俺は式、両義式だ」

エヴァ 「ふん、まあいい、私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」

どうやら私の名前は知っているようだな体がかたまっているが……まあいいさ。

エヴァ 「そしてこいつは私の従者の……」

チャチャゼロ 「ケケケ、チャチャゼロダ、ヨロシクナ嬢ちゃん」

式 「嬢ちゃん？ 俺は男だが？」

エヴァ 「は？ なに言っているその髪に顔……どう見ても女にか見えないぞ？」

チャチャゼロ 「ソウダゼ？ 女ニシカ見エナイゾ？」

今回ばかりはチャチャゼロに賛成しかねない、女じゃない？ 確かに少し凛々しいが髪の艶や顔の形や体型が女のそれだ。間違いなく女と言われれば通じるくらいだな。

すると式は顔を歪めながら少し低い声で言う。

式 「てめえら、ぶちのめしてやろうか？」

私はチャチャゼロに呼びかけて圀になるように指示した、まあこのくらいはしてくれるさ。次に私は詠唱破棄をしながら魔法を使う。

チャチャゼロ 「ハイハイワカッテルヨ、御主人、斬り合オウゼ！
シキイイイイイイイイイ！」

式 「軽くホラーだな、行くぜ？ 剛・魔神剣！！」

エヴァ 「ふふふ久しぶりに強そうじゃないか！ リク・ラク・ラ・
ラック・ライラック、闇の精霊29柱……魔法の射手・連弾・闇の
29矢」

式の二本の太刀から出た衝撃波がチャチャゼロの攻撃と私の魔法の
射手を迎撃しているが正直ありえない、チャチャゼロは小柄ながら
とんでもないナイフさばきと戦闘経験がある。接近戦に関しては勝
てる気がしない。それを私の魔法を迎撃しながらさばくなど……並
の使い手ではないな、私たちと同じ領域の手練れだ、油断したら負
ける。

私はさらに魔法の射手を撃つために詠唱破棄をする、すると奴の目
が黒から様々な色が混ざったわけのわからない目になっていること
に気付いた。

あれは……魔眼の類か？！ ならば！！

エヴァ 「まだまだ追加だ！ リク・ラク・ラ・ラック・ライラッ
ク、闇の精霊100柱……」

式 「いくらなんでもやりすぎだろ？！！ チャチャゼロに当たる
ぞ？」

チャチャゼロ 「ソレガドウシタ？ オマエヲ切り裂ケバイイダケ

ノハナシダ」

……さすがは私の従者だ、ならお望みどおりにぶち込んでやろう。
あわよくば破壊してくれる。

エヴァ 「魔法の射手……闇の100矢!!」

100本もの黒い弾丸が奴に向かうが……式の手にあったのは銃。
そしてその手の中に納まっている白い銃で私の弾丸を撃ち抜き、相
殺する。

なんて奴だ、左手でチャチャゼロを抑えながら撃ち抜いている。な
んなんだ?!

チャチャゼロ 「ケケケ、殺りガイガアルナ!!」

式 「お褒めの言葉ありがとうございます……ぶっ飛べ、虚刀流」
木蓮

もくれん

「」

式が左手の太刀でチャチャゼロを吹き飛ばしなら、膝蹴りをくらわ
せる。幸いチャチャゼロは小さいのでなんとか身を捻りながら避け
た。

チャチャゼロ 「危ナカッタ、今ノクラッテタラ壊レテタゾ?」

エヴァ 「それに魔法銃にチャチャゼロを圧倒する剣術の腕、そし
て拳法か……」

仕方ない、不意だが……上級魔法を使おう。

そう思った私はチャチャゼロに指示をだす。

エヴァ 「チャチャゼロ時間を稼げ」

チャチャゼロ 「ワカッテルヨ御主人、別ニ斬ッテモイイヨナ？」

式 「御託はいいから早く来い」

チャチャゼロ 「ワカッテンジャネエカ！」

式 「来いよ、殺^{キリングドール}人人形^{キリングドール}だけど そのころにはお前は八つ裂きになってるだらうけどな」

チャチャゼロ 「シテミヤガレ、殺り合オウゼー!!」

チャチャゼロに秘密裏に戦いの歌をかけておき、強化しておく、このぐらいなら言わなくても術式を展開できる。

さて私もそろそろやるか!!

式 「くっ?!!」

チャチャゼロ 「久々ニイイ獲物ジャネエカ!!」

エヴァ 「私もそろそろいくつか……リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹けよ常夜の氷雪。『闇の吹雪』凍れ」

次の瞬間奴の周りに暗闇と吹雪が発生する。

式は結界を全身に張っているようだ……まあいい。私は右腕に魔力を集め、その魔力で一本の、私よりも大きな剣を作る。エクスキ

ユーシヨナーソード、私が持つ物理術式では最高クラスにはいる術式である。

エヴァ 「まだまだこれもくらつとけ、エクスキューシヨナーソード……消えろ」

式 「や、やばいなあ」

予想外だったのか、振り下ろされる剣を一瞬遅れて太刀で受け止める。

普通に打ち合えば、強制的に物質を固体・液体から強制的に気体へと相転移させることができる筈だが……どんな金属を使ってるんだ？！

私は打ち合うのは得策ではないと思い、剣を引き寄せ、突きของ構えをとる。

しかし奴は武器をすべて影にしまい、何かの構えをとる。足を大きく開いて腰を深く落とし、敵に対して壁を作るような構え。左足は前に出して爪先を正面に向け、右足は後ろに引いて爪先は右に開き、右手を上左手を下に、それぞれ平手で構える。

後に知ったことなんだが虚刀流一の構え 『鈴蘭^{すずらん}』の構えなどこのときの私が知っているはずがなかった。

そのまま私は突きをした。

エヴァ 「ハッ！！」

式 「虚刀流……『菊^{きく}』」

そのまま二の腕と肘と背骨で剣を受け止められ……甲高い音と共にエクスキューシヨナーソードが破壊された。見事に華麗にスッパリと二つにへし折られた。私の頭が真っ白になる、そこに式が腰を捻

りながら私を狙っていた。

エヴァ 「な?! エクスキューションソードを……」

式 「続いて繰り出すのは最終奥義……」

チャチャゼロ 「御主人!!」

チャチャゼロの声で頭が戦闘に戻るがもう遅い。
目の前に……式の掌底が

式 「『七花八裂』!!」

そのまま私は激しい打撃をすべて体にくらったが……衝撃が全く来ない。

体が吹っ飛んだが……肝心の痛みがない、あれだけの打撃だ……一回ぐらい死んでいなければおかしい。

エヴァ 「な、なんだ?!」

チャチャゼロ 「ア、アレ? 御主人ナンモナイノカ?」

エヴァ 「あ、あれだけの打撃技をされたのに痛みがまったくない。何をしたんだ!」

式 「いや? ただ打撃の重さを消しただけだ」

エヴァ 「……闇の福音である私に手加減したのか?」

式 「さあな、俺は女子供は殺さない主義なんだ……つまり子供はガキ

式 「知るか……術式解放、凍土ノ太刀」

全身に冷気を纏った式は背中に氷の翼を生やししながら、手に太刀を出す。

まるで芸術品のような薄さ、そして華麗さ、とてもじゃないが戦闘用に思えないがとてつもない魔力を感じる。

その太刀を持ちながら私がまばたきした瞬間に消えたように私の目の前に現れた。

チャチャゼロ 「マズイゾ、御主人!!」

エヴァ 「……ここまでか」

式 「はああああああああああああ!!」

私はあきらめ、その太刀が私を切り裂くことを想像した。とてもじゃないが真つ二つにされたら復活に時間がかかる。

しかし太刀は私の眉間直前に止まり、私は理解できなかった。なぜだ?

エヴァ 「なんだ? 命乞いでもさせようというのか?」

式 「いや? これで戦いを終わりにしようと思ってな」

エヴァ 「な、何を言っている!! 貴様あ!!」

式 「それに外見が美少女を男の俺が一方的に戦っても……なあ」

わけがわからない、美少女? 私は自分の容姿に自信があるが……

面と向かって言われたことはない。な、なんというか、恥ずかしいか？ そんな感情が思つかべるが……今はそんなことは別にいい！！

エヴァ 「……なぜだ、なぜ『悪』の魔法使いの私を生かす？」

式 「アホか？ 悪？ 正義？ そんなもん自分で決めろ」

エヴァ 「なっ?!」

式 「俺は……ただ信じる者、つまり仲間だな。そいつらのために戦ってきた」

初めてだ、私と戦い、そんなことを言ってきた奴は……興味が湧いてくる。

なんなんだ？ この男は？

式 「俺は悩まない……目の前に俺の大切なものを奪おうとする奴が現れたなら」

エヴァ 「あ……」

式 「叩き斬るまでだ！」

エヴァ 「ふ、ふふふ、フハハハハハハ」

式 「なんか可笑しいこと言ったか？」

エヴァ 「そうじゃない、いままで私にそんなことを言ってきた奴はいなかった」

思わず笑い声が口から漏れ出す。

ククク、大切な物か……私にもあったな、しかし600年前にすべて奪われたよ。守るところか私は奪っていった、そうしなければ生きられなかった。しかし目の前の男は……いや、式は守るためと言った。

エヴァ 「『正義のため』『化け物を退治するため』『悪だから』そんな理由で私に戦う奴らばかりだった……そして私はそんな奴らを殺していった『悪』だ」

式 「……」

エヴァ 「ハハハ、私はなぜそんなことを言ってるんだろうな……散々殺してきた癖に『悪』の癖に」

式 「お前は……自分から殺そうとしたのか？」

エヴァ 「……いや、私は吸血鬼だからな。血を分けてもらうために襲ったこともあるが……自分から殺しに行ったことはない」

式 「ならなぜ自分を『悪』なんて言うんだ？」

エヴァ 「わからないのか？！ 私は吸血鬼で！ ばけ フグ！」

式 「ふざけたことをぬかすな、俺の目の前に居るのは……少しだけアクティブな女の子だ」

自嘲気味に言葉を言っていると叩かれてしまった、不思議と不快感がない。そ、それにお、女の子？！！ た、確かに私は身体年齢な

ら十歳だが……自分でも顔が赤いのがわかる。

式 「……ともかくだ、俺は自分が敵だと思った奴しか戦わない」

エヴァ 「……ク、クハハハッハハなんて奴だ。狂ってる」

式 「ああ狂ってるさ、刀が刀を使ってる時点だな」

最後の言葉は聞き取れなかったがまあいい、しかし面白い奴だ……
けどこいつも何十年もすれば死ぬんだろうな、そうだなあ、それだ
つたら。

エヴァ 「面白い奴だ……そうだなあ」

チャチャゼロ 「ナンダ御主人……オモシロイコトか？」

エヴァ 「ああ最高級に面白い話だ」

式 「お前ら何言っ」

私は笑いながら提案する。

エヴァ 「お前、私たちと一緒に来ないか？」

式 「え？」

その時の式の顔は忘れられない、ククク今でも笑いが……！
それからすぐに決めなかったが、落ち着いたら承諾した。それから
私やチャチャゼロと共に歩き出し一緒に旅をした。
数週間がたち、式に私の作った服を着せながら旅をしていた。……

女の私が言ったらお終いだろ？がすごく似合っていた、鼻から体液が出てきたが仕方ないだろう。そんなこんなで式と共に生活していたが……なんだ奴は？ 私の別荘を一目見ただけでその後、一日で作り上げ、すぐに壊したそう。外から見えていたが魔法球が爆発して虹色のオーラを纏った式が出てきた……かつこよかったと言っておこう。

その後にも影の倉庫と言う物の中から魚を取り出し、しばらくは肉が食えなかった、式の作る料理は絶品だった、料理がうまくて戦闘だって強いどんなチートキャラだ？

その間も何回か襲撃がきて撃退したりしていた、そして式にも賞金と称号がついた。「黒の死神」100万……それはナイフで大型魔法をぶった切ればこうなる、黒い着物と狐のお面をかぶっているから、怖いと思う。式が言うには自分の魔眼の能力である「直死」を使つて死線と呼ばれるものが見れるそう、線をなぞつて斬るとそれを切断でき、点と呼ばれる死線が集まっているところを突けば死ぬらしい。

とんでもない能力であり人の身で扱える力を越えている、そう言うのと式もうなづきながら肯定してくれた。

式 「俺は全力を出しても少ししか出せないから」

どうやら大きな力なそうなのでリミッターをかけているそう、最大で十分、できれば五分未満が一番いいらしい、魔眼もとてもない情報量なのでこちらも同じくらいの使用時間しか使えないらしい。私は式から話を聞いた、何故空から降つて来たのか？ いったいどういう生活をしていたのか、とかを。

式は口を開き、言ってくれた。

式 「あー、久々に全力を出そうとしたら失敗して空中に投げ出された」

どういふ失敗をしたらそうなるのだろうか？　と思っただけで言わないでおいた。

式　「結構いいとこのぼっちゃんだったよ、まあ裕福と言えば裕福だけだな」

エヴァ　「なら帰ればいいじゃないか」

私はむっとしながら式に言うとな式は悲しそうに顔を歪める。

式　「帰ればの……話だな」

瞬間私は式に謝っていた、やきもちみたいな気持ちで人の心に土足で踏み入ってしまった。こいつのあの反応からすると家族は……私の中でこいつを昔の私に重ねてみる、このときの私は何をしていただろうか、確か……親に甘えていたと思う、しかし式はまだ八歳だそう。

私は愕然とした、その後つらくはないのかと聞いてみたら笑いながら言った。

式　「はははは、つらい？　むしろ楽しいさ、なんにも縛られずに旅をするっていうのも面白いしな、それにエヴァもチャチャゼロもいるんだぜ？　退屈じゃないさ」

……とてもじゃないが八歳の思考ではないと思う、私ではそんな樂觀視できない。十歳の頃は復讐だけを考えながら過ごしていた。

もうこいつは……私の予想の斜め上に行く、チャチャゼロを頭に乘せていたら、試し切りされ髪を切られ、魔法球の中で七年もいたり、ふざけて作った魔法で山を吹き飛ばしたり……私の方が退屈ではな

いよ。

だから私は……やめておこう、あいつも人間だ。あと何十年すれば死ぬ、人間とはそういう生き物だ。あまり依存したくない、死んだら悲しい。けどあいつを噛んで眷属にすれば一生生きれるという、そんな考えまで思い浮かぶようになった。

どうしたらいい？ 私は……

|||||式視点

へろー、宿が見つからないんだなあ、これが！

どうしようこのままだと野宿だよ、マジでどうしよう、俺は別にいいんだが……エヴァぐらいは止めてやりたいんだが……。

宿主 「へ？ 無理無理、成人の大人一人いないと」

宿主2 「ガキは帰ってろ」

宿主3 「いいだろう、しかし君……やらん」「ごつとふいんがああああああああああああああああああ！！」「ぶっああああああああああ！！」

こんな感じである、もう最後なんか右手を火の属性の魔法でコーティングした後、殴り飛ばした。このター Xすごいよお、さすがター！ のお兄さん！！ とか聞こえたが無視する、それはシャイニングなガンダムの方だと思ったがな。

さて本格的にまずい、今は七時近くになっている、そろそろ太陽の

光がなくなってきたてぽつぽつと街灯が付き始めている。

式 「どうするかなあ」

エヴァ 「ふん、魔法球の時間を外と一緒にしてそこに寝ればいいんじゃないのか？」

それもいいがせっかく京都に来たんだ、宿に泊まって風呂にでも入ってもらいたいんだがなあ、そう思っていると突然後ろから肩を掴まれた。

式 「なんだ?!」

詠春 「おい、あんたらどうしたんだよ？」

まさかの父さんとの再会……会うつもりはなかったんだがなあ。
着物着て、袋を持っている詠春は俺たちを見ながら疑問を浮かべた様な顔をする。

詠春 「本当にどうしたんだ？」

式 「いや、宿がとれなくてな……探してたらこんなことに」

エヴァ 「別にいいだろ？ 野宿でも」

詠春 「うちに来るか？」

式 「は？」

こいつわかって言ってるのか？ 高位の魔であるエヴァと正体不明

な俺を招待するだど？

式 「お前はわかってるのか？ お前がしてい」

詠春 「わかってるよ、けど困っている人に手を伸ばすのは当たり前だろ？」

……ここで訂正する、父さんは父さんだったよ。
今も昔も他人のためなら自分が不利なカードすらきれる、ふふふ、
やはり三つ子の魂、百までと言うが本当だな。

式 「……本当にいいのか？」

エヴァ 「おい、私を無視して」

詠春 「いいよ、さあ行こうか」

チャチャゼロ 「ケケケ、マア頼ムゼ、ガキ」

詠春 「うわ、人形がしゃべった？！！」

エヴァ 「私を無視するなああああああああ！！！」

「……でけえ」
「……そんなこんなで青山家」

詠春 「まあ、な」

エヴァ 「素晴らしい、やはり日本の建築は良いものだ」

なんかエヴァが感銘を受けているが……チャチャゼロは寝てる、寝てると言つよりも力をためているような感じだ、つまり魔力を補給しているそうなんだが……時々「ブツタギリタイ」「殺シ合イダ」とか物騒な事ぬかしているんですか?!

詠春 「さあ行こうか」

そんなこんなで例のごとく、とてつもなく長い階段を……上るかあああああああああああ!! 飛ぶよ! ぜってい飛ぶ! さあ行くぜ!! I c a n f i

エヴァ 「上らんか! 馬鹿者!!」

ロリババア
金髪幼女に首根っこ掴まれて引きずられたよ、い、痛い段差、段差あああああああ!!

式 「らめえええ、仮面が壊れるううううう!!」

エヴァ 「やめろ!! 変な声を出すな!!」

バキ!! パリーーーーン!!

あ、仮面が……狐があああああああああああ!!

式 「この幼女年増があああああ!! なにしてくれるんじゃないあああああああ!!」

エヴァ 「うるさいわ！！ この変態仮面信者め！ 仮面の幻想に抱かれて溺死しろ！！」

式 「いい度胸だなあ、このファンシー趣味が！！ 六百歳が聞いてあきれるぜ？ お前の別荘の部屋には部屋中にぬいぐるみがあるだろうが！！ 歳考えろ！！」

エヴァ 「なっ？！！ 貴様だって別荘の部屋には武器やわけのわからない物があるだろうが！！」

式 「ああん？！ 六百歳になっても人形集めてる方がドン引きだよ！！」

エヴァ 「貴様だって何が楽しくて仮面を作ったり、収集してるんだ！！ 薄気味悪いわ！！」

詠春 「あ、あのさ」

式&エヴァ 「「なんだガキiiiiiiii！！」」

詠春 「式さんって女だったのか？」

式 「は？！」

エヴァ 「ククク、クハハハッハハ」

詠春 「え？ だってその顔は完全に」

式 「詠春、俺はなあ……」

俺は右手に魔力を集中させて力を込める。

詠春は気付いたのか謝ろうとするが……少し頭をHIYASOUK

A

式 「男だあああああああ！！！！ ていーりんくなっこお
おおおおおおおおお！！！」

詠春 「イエアアアアアアアアアア！！！」

見事なアッパーカットが顎に決まり、詠春の体が浮き上がり叫び声を上げながら吹っ飛んでいき途中の階段に当たる。

……自業自得だ。

宿がねえよ（後書き）

「今日のネギら」
作

木乃香 「えい（ハンマーを振りかぶっている）」

イ
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア

放送事故により少しお待ちを、衛生兵ええええええええええ！！

「ひどい出オチだ」

木乃香 「どういふことや？ 作者？」

作「呼び捨て?! だからリンドウ様から頂いたグラーフアイゼンを振りかぶるな!!」

木乃香 「いやいや、ウチがヒロインのはずなのに全然出番がなくて怒ってるわけないやろ？」

作 「めっちゃ怒ってますがな！！ だから待ってくれ、あ、あれだ閑話でやってやるから」

「ほんまに？」

「ほんまのほんま！」

木乃香 「後ろのせつちゃんとか素子姉さんはどうするんや？」

作 「へ？」

刹那&素子 「「作者」」

ガイアメモリ 「「WOLF（SWORD）MAXIMUM
IVE」」

作 「え、あ
」

ティウンティウンティウン

作 「ミンチよりもひでえや」

刹那 「作者さん？ 出してくれますよね？」

素子 「というか出せ」

作 「ハハハハハ、ダササシテイタダキマス」

木乃香 「閑話やね、ほんとにやるんやろか？」

作 「ハイ、アトニワグライヤッタラヤラセテモライマス」

刹那 「いったい何の閑話する気ですか？」

作 「とりあえず夷が消えた後の話」

素子 「私たちの活躍にも書いてくれるよな？」

作 「……（ぶっちゃけ、夷のせいで原作よりも強くなってるんだよなあ）」

夷 「では次回予告、そうだ強化しよう」

木乃香＆素子＆刹那 「」「」「しめが!!」「」「」

作 「それではじ」

木乃香＆刹那＆素子 「」「作者のせいだ!!」「」「」

作 「なんでだああああああああああああああああ!!」

うわああああああああああああ!!

刹那 「では次回もよろしくお願いします」

木乃香 「で、その作者はどうしたらいいんや？」

素子 「つぶせばいいんじゃないのか？」

作 「……ひでえ」

そうだ強化しよう（前書き）

すみません、タイトルと内容があっていません。

本当にすみません、何回タイトル詐欺してんだ俺?! と自己嫌悪に陥っております。

ここ最近は何語を見たり……戯言シリーズを借りて読んだり、モンハンしたり、ニコニコする動画を見たり、仮面ライダーで「ラトラーターが!」と、本当にすみません。

今回は盛大な原作ブレイクがあります、こんなのは認めない!! とか展開が嫌だという人はバックで戻ってください。

しかしこんなの全然OKと言う人はそのまま進んで読んで行ってください。

いいですか? では!!!!

そっだ強化しよう

よお夷だ、俺が何をしてゐるって？

詠春 「う、うおおおおおおおー！」

式 「甘いんだよ、バカ正直に突っ込んでくるな」

はい、なぜか自分の未来の父親を鍛えています。

なぜか？ ああそれは三日前なんだが……俺が青山の本家に行った
ら斬りかかれた。なんでもエヴァの魔の気を感じ取ったらしく、神
鳴流総出でこられたよ。さすがに奥義十連続とか死ねる、適当に「
菊」で刀折って、神鳴流の技使ったりして殲滅したよ。

そしたら俺の祖父である……まあ関西呪術協会の陰陽師やら呪術師
やら鬼やらが来て……誤ってリミッター一つ外しちゃった。その結
果関西呪術協会壊滅です、はい完膚なきまでに叩き潰した。

そりゃあ両義だけだぞ？ 使ったのは！ 零崎なんざ使えるか！！
ばっさばさと敵を倒し続け、気付いたら壊滅させてた……なにしてい
んの、俺。まあなんとか誤解をとりて青山の家に行きましたよ、ま
あすごい微妙な目で見られたけど。詠春なんかこんなことになるな
んて思わなかっただろうな。

そんなこんなで修業することになったんだが……周りの神鳴流の方
々も教えてますよ、そりゃ俺は一人で壊滅させちゃったしなあ。ち
なみに今日は犬の仮面をつけている。

詠春 「斬岩剣！」

式 「斬岩剣（弱）」

詠春の最大の斬岩剣を俺の最少の威力で放った斬岩剣で打ち消す、
すげえ残念な顔してんだが詠春がな。そりゃあ、自分の全力を最弱
の威力で消されたこうなるか。

そのまま木刀で打ち合いながら秘剣を出していく詠春、俺はそれ
をすべて木刀で受け流しなら、隙があれば頭を叩くということを続
ける。

詠春 「いた！」

式 「踏み込みが甘いし、なにより気の操作が雑だ」

詠春 「少しは褒めてくれよ……」

式 「褒めるほど何かしてねえだろう？」

そんな軽口を叩きながら進めていく。

ちなみにエヴァは俺の分身体と一緒に京都に繰り出している、俺も
行きたいが……まああれだ、壊滅させてしまったという負い目もあ
るしなあ。

修業に付き合うのっていうのが俺の罪滅ぼしなんだしなあ。

？ 「先生！ 式先生」

式 「なんだよ、あきこ明人」

明人 「いや、長が呼んでるから呼びに来たんですが」

ああ、こいつ？ あおやまあきこ青山明人、未来で素子と鶴子姉さまの父親になる
はずの男で、現在12歳である。

あの壊滅事件で大人の中に混ざって俺に挑んできて、ボコボコにし

たら「先生」と呼ばれた。なんだ？ マゾ？ マゾなのか？！ まあすじもいいし、強くなるだろうなあ。

式 「了解」

詠春 「ま、待ってくれ師匠！ 俺のしゅぎよ」

木刀 「EXCCD CHARGE」

ああ、この木刀？ 神木だけだと面白くないから、ファイズみたく拘束できるようにしてみた、そのとき衝撃波で拘束するんだが……音声も入れたら面白くな？ と思って入れてみた。

詠春 「ちよつとお！ 動けないんだが？！」

式 「ちえりお！！」

ズドンと腹に鈍い音と共にパンチする。明人の顔が引きつっているが気にしない。

崩れ落ちる詠春をしり目に歩き出す、俺。

明人 「容赦ないですね」

式 「え？ あれでも手加減の二乗ぐらいしてるんだが……本気だしたら、地球の裏側の人間すら打ち抜けるぞ？」

明人 「……冗談に聞こえないんですが？」

式 「マジマジ、大マジのマジ」

柳緑花紅を使えばできるしな、なんだ？ 明人がすごく落ち込んでいてため息ついてるんだが？ どうした？

明人 「……あなたは本当に規格外だ」

式 「一応まだ人間なん……だ……が？」

なーんか自信失くしてきた、この頃腕が消滅しても三秒程度で回復してるしなあ。どうしようか……今度魔眼で解析してみるか？ やめとこ、なんか驚きそうだし。

明人 「三日前に関西呪術協会を壊滅させておいて、よく言いませうね」

式 「いきなり襲ってくる方が悪いが……すまん、あれは仕方ない、リミッターが一つ外れたせいだ」

明人 「あ、あれよりさらに上があるんですか？」

式 「その通りだ…… H A H A H A」

まあ現在進行形でさらに実力が上がっているんだがな。

そんな談笑をしていると、長の部屋につく、ちなみに長は俺のせいで全治一週間のけがを負いました、腰が砕けたらしいが大丈夫か？

明人 「では僕はこれで」

式 「ああ、サンキュー」

明人 「ああ、そうそういえば」

式 「なんだ？」

明人 「なんで気合入れるときに『ちえりおー』って言うんですか？」

式 「それはな……」

明人 「それは？」

式 「ぶつちやけるとチェストとちえりおを聞き間違えただけ」

盛大にすつころんだ明人……大丈夫か？

そんなことを思いながら長の部屋に入る、いたって普通の和室だが防犯対策やら盗聴対策、呪術対策に魔法障壁やら……とにかく防犯体制がえらいことになっている。そして机と部屋の中心に布団が敷いており、そこに寝ている少し頭の髪の毛が白くなりかけているのは……俺の母さんの母親である近衛栄子である、このええいこ本当にあの時はすいませんでした。

栄子 「あら、来てくれたのね」

式 「ああ、で要件は？」

栄子 「やはり仮面はとってくれないのね」

実はこの人には俺は会ったことがない。実はこの人は俺が拾われる十年ほど前に病死している。じいさんや母さんに聞いたが……雲のように掴みどころがわからん人だったらしい。

式 「だから言っただろ？ 顔の傷を見せたくないだよ」

詠春には口止めしといたよ……いつか記憶消さなきゃなあ。つうかここに居ること自体、俺ヤバくね？
まあ世界の修正力がどれほどかわからんが……クククク、抗ってやるよ。

栄子 「いいわ、けれどいつか見せてね」

式 「死ぬ時くらいに見せてやるよ」

栄子 「私は死なないわよ？ けどあなたに蹴り碎かれたときは死を覚悟したけどね」

式 「すまん、本当に。つうかあの状態は手加減が効かないんだよ」

栄子 「ええ、あそこでやめておいた方がよかったわ……『ちえりおー！』で神を倒したんなんで……」

……なにも聞かないでくれ、ただ暴走した呪術師が……なんだっけ？
りよう……リョウメンスクナノカミだ！ その封印解いて、俺もろとも京都がえらいことになるどころだった。まあ、その時のダイジェストをどうぞ。

「……………ダイジェスト」

式 「こ、こんくらいでいいだろう？」

やばいやばい！ まさかりミッターが外れるなんて！！ エヴァを守るためだったから仕方ないが…… まずいぜ！！

壊滅状態だし、もうなんかみんな絶望感たっぷりな顔だよ！！

栄子 「まだです！ 私たちは負けていない！！」

やめてええええええええええええええええ！完全に悪役だあああ
ああああああああ！！腰ぶっ壊れてるのにそんな熱いセリ
フ言わないでえなに？これで「まだ立ち上がるか？」とかいえば
いいのか？！！つうかあっちが攻撃をしてきてただで俺はカウ
ンターくらいしかしてないんだが……神卦法のせいではほとんどダウ
ンしてるんだが？！！結界張って、外に漏れないようにしてるが

.....

「この程度かあ?! 土下座してでも生き延びるのかあ!」

アカン、なんかバルバ スボイスになってる、なんかめっちゃ絶望してんですが……怖いよね、絶対怖いよね。あれなんてプレイ中に全滅した時にあれほどの絶望感はなかった……いやあ、じゃあ絶望してもらおうか、うんそうしよう。

式「縮こまってんじゃねえ！」

俺がそういと一斉に残っている呪術師たちが術を使おうとする。
しかしさせん！！

式「術に頼るかザコどもが！　ぶるうううううううううあ
ああああああああああ！！」

神力を乗せた声で術式を破砕させる……これはマジで自分でも驚いているよ、いやあなんかどつかの零崎がやってたような気がする。……今は両義だし、人死には出していないはず……。……
そつえば……エヴァなら別荘に押しこんでいる、まあ無理やりだが……。

栄子 「なんてむちゃくちゃな……」

式 「（自分でもそう思うよ！！）」

呪術師 「くそお！！ このままでは！！」

そのときとある湖から光があふれ出した。

それと同時に俺並の神力があふれ出す、その光が天に届き何かが姿を現す。それは伝説とされたはずの……鬼神、1600年前に討ち倒された飛騨の大鬼神である……

栄子 「リョウメンスクナノカミ？！ なぜですか？ 封印されていたはず」

式 「ち！！ なんかやべえな！」

まだ目覚めていないみたいだが……本格的に暴れだしたらここら一帯は消し飛ぶだろうなあ。どうするか？ 神を殺すか？

栄子 「無理です、今の私たちでは……」

式 「なあ、栄子とか言っただけ？」

栄子 「なんですか？ 無駄な会話をしてる暇はないんですが？」

式 「あれを『殺してもいいか?』」

まあ耳を疑うよな……俺には降りちまった神を再び天に戻せないし、そんな技術は知らんし興味が無い。ここで封印するよりも殺した方がいいだろう。

栄子は俺の顔を見て、信じられないような物を見るように見る。

栄子 「無理です……人間が神に勝てる筈がない」

ふうん、人間で勝てないのか……なら

虚識 「殺人鬼なら大丈夫だろ?」

栄子 「いった なんですか?! この妖気は?!」

さあさあ盛り上がってきましたよ、ああ早く、早く、殺し合いたい
!!!!

虚識 「黒式・二解除」

そして俺の体から真つ黒な妖気があふれ出し、目が黒くなる。

そして心の中が真つ黒な何かに侵食される感覚がする。

栄子 「その……力は?」

虚識 「さあな、だがな俺は生きていれば神だつて殺し切る男だぜ
?」

そんなことを言っているとリョウメンスクナノカミから膨大な神力

があふれ出し、空気が振動する。次の瞬間耳をつんざくような声が響き渡る。

完全にはないが復活したようだ……まあ関係ないか殺すんだからな。

栄子 「……信じましょう、あなたの力を」

虚識 「至極承知、ではその信頼に答えようか……」

俺はゲートから妖刀と小太刀を出す。触れた瞬間に黒く染まる二刀の刀……まあ神殺しの刀として申し分ないだろうな。

虚識 「まあ行ってくるぜ」

そのまま妖力で空を飛びリヨウメンスクナノカミの目の前まで行く。するとリヨウメンスクナノカミの体が動きだし、戦闘態勢に入ったようだ……やる気か？ まあ神って言うても人工的な神なんだからあの神様より神力の密度がそんなにあるわけではないな、まあ明らかに自我がないしな。

ちなみに今の黒式は純粋な神力と妖力で構成しているので、一種の墮神となっている。

俺は黒の仮面と魔装服（いつもの黒いコート一式）に着替える。

虚識 「まあ無駄だと思うが……一応名乗っておこう」

目の前の鬼神は沈黙している。

虚識 「俺の名は零崎虚識……普通の殺人鬼だ」

リヨウメンスクナノカミ 「GYAAAAAAAAAAAAAAAAA

AAAAAAAAA!!!!!!」

名乗りの代わりか、めっちゃ大きな声を出しやがって!!!
うるさいなあ、まあいいや、それでは……

虚識 「では神を殺すために……零崎を始めますか」

リヨウメンスクナノカミ 「GAAAAAAAAAAAAAAAAA
AAAA!!」

鬼神VS殺人鬼の戦いの始まりだ!!
まずはリヨウメンスクナノカ 長い!! スクナでいいだろ!
スクナの拳が飛んでくるが片手で受け止める! すさまじい力に少
し後ろに下がる。

虚識 「ぎゃは……」

笑い声が口から漏れ出す、久しぶりどころか初めてだ……こんなに
俺に衝撃を加えたのは!! ちなみに言っておくが簡単に止めたけ
どあれでも山ひとつくらいは決り取れるよ?

虚識 「最高だ! さあ殺し合いを始めようかあ!!」

俺はスクナの拳を蹴り飛ばし、そのままバランスを崩したスクナの
体^{あやし}に怪で斬りつける、バターのよう^{あやし}に切り裂ける。

こんなもんか? 絶叫するスクナは右手を振りかぶりながらその巨
大な拳を俺に向けて振り下ろした。

しかしそれを刀で受け止めながら、俺は秘剣を出す。

虚識 「黒式奥義、二の技……幻魔斬」

黒い斬撃が向かってきた拳を「殺した」真つ二つになり半分になった腕、ちなみに魔眼を使っているから線が見える。俺はただ腕の線に沿って斬っただけだ。半分になった腕が見るに堪えないのでもう一度幻魔斬で肩から斬り落とす。

[illegible]

「うっさい、腕の一本くらいいいだろ？」

そうすると残った腕で振り払いをするがそれを受け止める。

もうその攻撃は見切った、見稽古なめんなよ？ どのくらいの力できてるのかわかんだよ。俺を二本の太刀で受け止めながら力負けしないように力を込める。神と力比べする人間……いや、殺人鬼があ。

「もう一本もらうぜ？ 黒式秘奥義……」

刀に妖力をためると黒い刀身が怪しく光りだす。

まあ秘奥義って言うけどただの斬撃にだがな。

虚識
「虚空月影刃」

まずは小太刀で月を描くように一閃した後に怪にためた妖力を解放し、黒い巨大な斬撃で相手の腕を消し去る。効果の通りに肘から下
がなくなったスクナは再び絶叫する。

さっきからうるさいんだよ!! 最後は……虚刀流で決めるか。

虚識 「無様な、神と畏られたリヨウメンスクナノカミがこの程度とは……」

スクナ 「ナメ……ルナ」

虚識 「覚醒したしたか……だがなあ、俺が居たことが運のつきなんだよ……！」

まったくだ、これで普通の術者だったら封印してくれるんだがなあ。俺は殺すさ、神だろうと聖人君子だろうが俺の敵は……殺す……！

虚識 「小便是済ませたか？ 神様にお祈りは？ 部屋の隅でガタガタ震えて命乞いする心の準備はOK？ ってお前が神だったな……自身に祈れ、虚刀流最終奥義」

今度こそ四の奥義『柳緑花紅』から放たれる、虚刀流の奥義を強制的に接続する鑪七花が作り出した奥義。ためが必要だが……あいつにとっては走馬灯でもできるだろう、あ、そうだあいつ今まで寝てたから走馬灯できるのか？ まあいいや。

虚識 「七花八裂（改）」

『鏡花水月』 『飛花落葉』 『落花狼藉』 『百花繚乱』

錦上添花』 『花鳥風月』と『柳緑花紅』から強制接続する奥義だ。これが一番強い組み合わせらしいが……それをスクナの体に叩き込む。

もはや残像を残しながら叩き込むが最後の『花鳥風月』を叩き込む前にスクナを一瞬見る、全身に奥義を受けてめっちゃ痛々しいが……まあいいだろう、天に還りやがれ。

虚識 「最後だ！ これが殺人鬼からの手向けだ！ ちえりおー……！……！……！……！」

そしてスクナの顔面にぶち当たった『花鳥風月』がスクナの頭を粉砕する、そして崩壊していくスクナ、最後にあいつは何かを言ったなあ。

スクナ 『殺シテクレテアリガトウ』

殺人鬼なのにそんなこと言うな、悲しくなるだろうが……。
まあそんなの……

式 「戯言だけどな」

〓〓〓〓〓〓〓〓 戻るよー！

式 「軽く思い出して鬱になってきた」

あの後、スクナは消滅したんだが……あの野郎、俺に神力を渡しやがった。最大値が増えたよ！ もう人間か、俺は？！ もういやだ……

栄子 「いいじゃない、まあ神に勝てる人間（化け物）がいるなんて世の中広いわ」

式 「おい、てめえ今なんか入れたよな？ 入れたよな！！」

栄子 「ゴホン、では呼んだ理由を言いましょうか」

式 「ちっ！ まあいいでなんだ？」

栄子 「これから来る、関東魔法協会の軍勢を撃退してもらいたいです。これは現関西呪術協会長、近衛栄子の…… 零崎虚識への依頼です」

式 「……いいのか？ 零崎と言うことは」

栄子 「いいのです、夫である近右衛門が流してきた情報なんです…… どうやら私たちが壊滅状態をいいことに一部の強硬派が暴走したらしいのです」

式 「数は？」

栄子 「魔法世界からの援軍も入れると五百以上でしょう」

式 「待てこれはあんただけの依頼じゃないだろう？」

栄子 「ええ、麻帆良の穏健派…… いえ連合の中立派からの依頼なのです」

式 「……そいつらの事を消したいと？」

栄子 「ええ、しかし女はいません」

式 「……闇に葬れと？」

栄子 「はい、それにあなたに対してもメリットがあります」

式 「メリット？ デメリットの間違いだろ？」

栄子 「連合は一時的にならあなたの賞金と『闇の福音』の賞金を期限付きで凍結すると……」

式 「信用ならねえ、連合が約束を守ると？」

栄子 「今は！！ 関西と関東の関係が悪化すれば、本国である連合も少なからず影響を受けます……」

式 「……今は勢力図を塗り替えるときではないと？」

栄子 「そうです！ ですか 「だがなあ！！」

俺は栄子の首に鋼糸を巻きつけて殺さないように力加減をする。
ふざけんな、結局尻拭いじゃねえか…… 本当に滅ばせばよかったかもな。

式 「お前は『零崎』をただの殺人鬼か何かと勘違いしてないか？」

栄子 「力、ハア……で、ではなんなの、です、か？」

式 「ただの自分の欲求を満たしてる……普通の人間だ」

栄子 「カッハッ、ハアハア、そうですか……では依頼は」

式 「いや？ 受けるよ？」

栄子 「そうですか、受けて……ええ？！！」

何を言ってるんだ？ こいつ、あんたから言ってきたのにねえ。

栄子 「しかし、今までの会話からすると拒否するのかと」

式 「まあな、気が変わった……まあエヴァの賞金がなくなればいいしな」

栄子 「……扱いづらいですねえ」

式 「俺でもそう思う……でいつなんだ？」

栄子 「すでに麻帆良を出ているそうです、今は岐阜に居るそうですか……」

式 「そいつらを消せばいいのか？」

栄子 「……はい」

式 「至極承知……準備万端、では行くか」

栄子 「は?!」

式 「え？ だって岐阜だぜ？ そこでやればいいんだろ？」

式 「すごく驚いてる顔してるけど……いや準備は終わってるしな。」

栄子 「……本当にあなたは規格外ですね」

式 「当たり前、まあいいや」

パチンと指を弾いていつもの恰好と仮面を被る。

まあ、あれだこれが仕事着になってきてる。……完璧に暗殺者だよ、俺。

栄子 「すみません……元々が私たちの責任なのですが」

式 「まあ、ぶっちゃけ俺も途中からワルノリしまくって奥義使いすぎたのが悪い」

確か百人くらいの神鳴流の師範代が病院送りとか聞いたんだが……やりすぎた？ やっぱり。

栄子 「では依頼の達成をすれば、あなたとエヴァンジェリンはこちらで身元は預かるということ」

……全く食えねえババアだ、俺たちを匿うことはそれ相応のリスクがあるが、「闇の福音」を手元のカードにできるってのはでかい、まあ政治的に利用されたら殺すが……。
ってこいつは死ぬんだっとな、まあいいさ。

式 「んじゃ行ってくる」

そんなこんなで転移術式を発動させながら栄子に言うと、あちらは笑顔で言ってきた。

栄子 「では行つてらっしゃい」

……訂正、ばあさん、あんたは死なせたくねえな、一応俺の祖母だしな。

金髮幼女視點

おい、ちよつと待て、作者あああああああああああああああ
ああ！！！！！！

なんだこれは！！
やり直しを要求するぞ！！

さあやらなければ、後書きで氷漬けにするぞ！！！！！！

エヴァ視点

よし、それでいい。ゴホン、色々あったが……今私は清水寺に来ている。

まったく……素晴らしい、仏閣とは美しい物だ。私の別荘に保管したいくらいだ、特に清水の舞台からの風景は絶景の一言に尽きるな。

「なんでもいいが舞台に乗り出して落ちるなよ？」

この式は……影分身だったか？ そんなものだったけど完全に式だな。

「誰がそんなバカな事をするか!!」

式「大仏に触りたくて進入禁止の場所まで行つた奴に説得力ねえよ」

エヴァ 「うるさいわー!!」

まったくオリジナルと全く一緒にイライラする、チャチャゼロはいつ通りあいつの頭に居るんだがな。

寝そべっている、うらや……ゲフン！ まあこいつも仮面を被っているから周りから変人扱いされるしな、この頃は服も着せてないし……イライラしてくる。

式 「おい、なんか不機嫌だぞ？」

エヴァ 「……なんでもない」

式 「だが……」

エヴァ 「なんでもないと言ったらなんでもないんだ！」

式 「……そろそろ飯でも食べるか」

エヴァ 「……ここを出たところに確か飯屋があつたな」

そういえばこいつ、三日前にここにある組織を潰しているんだが……大丈夫なのか？ 人死は出してはいないはずだが……。

そんなこんなで飯屋に来たんだがさあどの料理にしようか……。

式 「ふー、ふー、ふー」

チャチャゼロ 「マツタク組織潰シタ男ガ、猫舌ナンテ信ジラレナイヨナ」

式 「うつさい、昔からこうなんだ!!」

こいつは熱い物が駄目らしいのでお茶とかも、実は冷気を出す術式で冷ましている……才能の無駄遣いだな。

私はそば定食を頼み、式は普通に鮭定食にした。

エヴァ 「まったく……その猫舌は治せないのか？」

式 「神（作者）にダメって言われて無理」

……仕方ないな、にしても料理が出てくるのが遅いな。

エヴァ 「まったく店の料理は出るのが遅い」

式 「……おばあちゃんが言っていた」

たまにだがこんな感じで天に右手を上げて、ふざけたことを抜かす……微妙にあつてから困る、その「おばあちゃん」とは一体誰なんだ？

式 「美味しい物を食べるのは楽しいが、一番楽しいのはそれを待つてる間だ」

エヴァ 「いつも思うがお前のその言い方はどうにかならないのか？」

式 「仕方ないだろ？ まあいいさ飯もきたし食おうか」

……こいつ、そういえば影分身なんだから多少変なことを言っても大丈夫だろう。
消える存在だしな。

エヴァ 「なあ式」

式 「ふぐうあがう（なんだエヴァ）」

エヴァ 「私はお前のことが好きだ」

|||||||式視点（本物）

へくしょん！ ああ、なんか無茶苦茶ヤバいことカミングアウトされた気もしくないが……ああ、俺？ 今は

魔法使い 「いったい貴様は誰なんだ？！！」

ああはい、魔法使いの大軍と接触しました。
座標ミスって前に出ちゃってなあ、ヤバイヤバイ。

式 「えー、まああれだ、通りすがりのか 「魔法の射
手、火の30矢」」聞くんないか」

俺に向かってくる、魔法の矢総勢で五百以上、まあ普通にやったら串刺しな愉快的死体が出来上がるな。しかしまあ一人の人間にこれはやりすぎじゃないだろうか？

魔眼を解放して、吸収する。

式 「術式吸収……『魔法の射手』」

五百分の魔力を吸収するが……そんななかったなあ、実力が無い奴らばっかなのか？ 五百人分にしては少ないような気がするが……。

魔法使い2 「おい、待てよ。あの黒い服に仮面……黒の死神じゃないのか？」

魔法使い3 「け、けどよ、あの黒の死神だってこの数なら……！」

おめでたい奴らだ、まあ一応警告しておいてやろう。

まだ零崎を始めていないからな。

式 「あー、まああれだ、ここですっぽを巻いて逃げるなら逃げる。別に俺は追わないし、殺さそうとしない」

魔法使い 「バカを言うな！！ 我らは正義の魔法使いだ！ それに今が関西にいる、邪魔者を排除するチャンスなんだ！！」

……OK、俺は警告したぞ？ ちゃんとしたからな？
では……

式 「依頼だから……恨んでくれたって構わない、まあ最後通告だ。後三十秒で逃げなかった奴は全員殺す」

さあ三十秒間で何人逃げるかな？

まああれだ、ガチガチの正義信者たちは必死に俺を殺そうと俺に魔法を打ち込んでくるがな、俺はそれを結界で防ぐ、上位魔法を放ってくるけど……これ、古代魔法三十発撃って壊れる程度の強度だからなあ、三秒くらいで編んだ術式だから。そこまで強度ないんだよ。

まあ後十秒なんだが、全員で頑張って俺の結界を破壊しようと躍りになってるが……悪いが時間だ。

虚識 「んじゃ、殺して解して並べて揃えて晒してやろう……さあ零崎を始めますか」

まあ、ここでのことを話すと味気なさすぎるからカット。

まあ簡単に言くと古代魔法で消し去ったよ。ただそれだけ……残った人間『だった』物を処分して、転移で帰ったんだが……問題はここからだ。

京都に転移してたら、処理に戸惑って意外と時間がたち夜に帰って、栄子に報告して連合の使者と会話して「最高で三十年、最低で十年間は賞金を停止」させるとOHANASHIして決めさせました。

大丈夫大丈夫、約束やぶったら古代魔法を撃ち込むとか、

鋼系でバラバラにすんぞ？ とか言ってないよ？ほんとだよ？

ゴホン、まああれだ、俺は青山の家に泊まっているんだが……金は払ってるよ！ まあ能力で作ればいいことだ。クハハハハハ！！
！……自重しよう、今度から神鳴流の依頼とかもらって仕事行こう。

まあまあここまでは概ね順調に進んだよ、部屋に帰って俺の分身体であるフェイクと会ったんだが……ああこいつは、俺の十分の一の実力しかないが神鳴流の師範が10人で戦ってやっと勝てる程度の実力はある。一応は俺の記憶もあるから、ほんとの俺みたいだ、まあ耐久値もそこそこ……そいつに今日一日の報告をされたときに……。

式 「で、報告は？」

式^{フェイク} 「ああ、あれだエヴァが清水寺の舞台から飛び降りよう……

式 「どうしてそうなった？」

フェイク 「ああ、なんかな。詠春と一緒に修業をせがまれてな、で修業場所に行ったら生き残った師範代と鉢合わせてしまったな」

なんでもそこから口論となり、師範代たちが木刀で殴りかかって来たらしい。

そしてエヴァに勝てるわけもなく（結構若い奴らだったらしい）合気道でバッサバッサと投げてまくったらしい。

式 「いいじゃないか？ 別に悪い事やってないだろ？」

フェイク 「いや、それが……なんかあつちの火をつけちまって式オリジナルが決闘することになった」

はい？ なんか俺の耳が悪くなったか？

式 「なぜ？」

フェイク 「あれだ……どうもあの五人はあの壊滅事件に関わっていないらしくて」

式 「ああ、そういうこと。で日時は？」

フェイク 「一か月後の正午に」

め、めんどくさいなあ、けどまあいいや。

式 「良い方は？」

フェイク 「エヴァから告白されました、多分お前にだと思っ」

式 「は？」

え？ なに？ は？ ちょ。

式 「冗談だろ？」

フェイク 「ほんとだ、色男。どうやら……本気らしい」

……マジかよ。

フェイク 「エヴァならいつもの部屋に居るから行って来い」

式 「お、おい！！ 俺は！！」

フェイク 「おばあちゃんが言っていた。男と女は時として化学反応を起こす。何があってもおかしくない、まあそういうことだ、役目は果たしたぞ？」

煙が出て消える式……冗談だろ？ エヴァが俺を？

まあ気の迷いだろ？ ……まあ行ってみるか。

俺は寝巻の着物に着替えながら猫の仮面をかぶって廊下に出ながらエヴァの部屋にノックをする……ふすまなんだがな、ちなみに部屋は隣だ。

式 「おーい、エヴァ入るぞ？」

ふすまを開けるとこれまた着物を着たエヴァが酒を飲んでいた。

俺に気付くとほんのり赤い頬をしながらこちらを見る、その顔には少し驚きと羞恥が入っていた。

エヴァ 「な、なんだ珍しいな」

式 「あ、あのさ、今日フェイクと一緒に居たよな？」

エヴァ 「あ、ああそれがどうした？」

式 「……間違っていたらすまんが今日、あいつに告白しただろ？」

そう言うときエヴァの顔が赤く染まっていく、反応からビンゴだな。マジかよ、冗談で欲しかった。

エヴァ 「な、なぜ……それを?!」

式 「い、いや今日あいつからの報告を聞いてだな」

やべえ、なんか緊張する!! ……落ち着け、落ち着け。

心臓がバクバクしてる、俺が告白されたわけじゃないだろうが!!

落ち着け! 前世と数えたら三十路いつてんだぞ!!

式 「まあなんかの間違いだ」その通りだ」

エヴァ 「その通りだよ、式い」

次の瞬間、俺はエヴァに押し倒された。

いやちよつと待てええええええ!! なに? 幼女に押し倒される男ってどうよ!! さらに真祖の筋力でまったく動けない!!

エヴァ 「お前のことが好きなんだよ……式」

熱を帯びたように赤くなる目、あれー？ 吸血行動のときに赤い目になるって言ったよな、確か……。

式 「え、エヴァー！！ 落ち着け！！」

エヴァ 「大丈夫だ、落ち着け……少し考えればこうすれば良かったんだ！！ 永遠に私と……」

チャチャゼロはどうした？！！ 助ける！！

エヴァ 「チャチャゼロ（邪魔者）なら別荘に入ってもらったよ」

おかしい、こんなのエヴァじゃない！ 魔眼を使って、エヴァの状態を確認する。

見る、視る、観る、診るとこいつは……俺が昔ふざけて作った「素直になる程度な薬」の効果？！！ おiiiiiiiiiiiiiiii！ フェイク！！ あいつだなあ！！

効果は、まあその名の通り素直になる程度の能力だ。昔、木乃香が素直に俺が作っていた、ファイズ人形の場所を言わないから作ってみただけなんだが……それでとんでもないことになってな、まあの中に語るうか。

式 「（確か解き方は昔の……適当に作ったから覚えてねえ！！）

エヴァ 「怖いのか？ いいさ、怖がっても気付いたらもうお前は私の物（従者）だ」

まずい、噛んで俺を従者にするつもりか？！！

くそー！！ あんまり力入れたらエヴァを傷つけてしまう。

エヴァ 「最初から躊躇せずに不老不死にしてしまえばよかったんだ」

式 「え、エヴァ落ち着け！！！ 喝！！」

エヴァに向けて気を込めた声で吹き飛ばす。一応部屋に防音の結果も張ったし、外に漏れることはないだろうな、エヴァが俺の体から離れて部屋の壁に当たる。

すかさず、俺はこの前魔法使いから見取った術を使う。

式 「戒めの光矢！！」

一回しか見てないから結構ヤバイが重ねて十個くらいやっておけばいいよな。

エヴァ 「くうう！！ 離せ！！ 式い！！」

式 「エヴァ、今解いてや」

エヴァ 「違う！ 最初は薬の力だけど途中からは本心からなんだ！！」

式 「エヴァ？！！」

どういうこつたい、え？ ということは途中から？ いつから？！！

エヴァ 「……仕方ないだろ？ お前だけだったんだ、六百年以上生きて私を完全に受け入れてくれたのは……」

式 「エヴァ……」

エヴァ 「最初は京都から出たらお前と別れるつもりだった、お前は寿命がある人間だ。早めに別れた方がいいと思ったんだ」

式 「で、フェイクに告白したのはなぜだ？」

エヴァ 「……影分身と言っただろ？ そんなことを報告するとは思っていなかったんだ」

式 「……マジかよ」

エヴァ 「ああ、それから薬を渡されてな、飲んだら自分が抑えきれなくなっただけ。結果は……ごらんの通りだよ。欲望に負けてお前を襲ってしまった」

エヴァの体から力が抜ける、目からは涙があふれていた。

……おいおい、頼むよ、泣くなよ。

式 「エヴァ……」

エヴァ 「すまん、迷惑だよ……私の欲望を満たすためにお前を眷属にしようとしたんだ。最低だ……お前を不死の化け物にするところだったんだ」

式 「あ、あのさ」

やっべー、言うの忘れてた……まさかエヴァ、俺を普通の人間だと思っていたのか？ いやーうれしいね、なんかここだけ普通の人間

扱いされるのは久しぶりだ。

式 「実は俺も不死なんだ」

エヴァ 「は？」

式 「ああ、だからエヴァと同じ不老不死だ。まあ二十歳まで成長するんだが……」

エヴァ 「じゃ、じゃあなんだ？ 私が悩んでいたことは……」

式 「すでに解決してるなあ」

エヴァ 「あ、あうあうあうあうあうあ」

やべえ、不覚にも可愛いと思ってしまった。真っ赤な顔している顔が可愛いな。

エヴァ 「じゃあ……私はどうしたらいい？」

式 「何がだ？」

エヴァ 「お前への好意だ」

式 「……どうしようかな」

本当にどうしようか……考えろ、女の子……いや年齢的には女性か？ まあいいや、その告白だ、一生の付き合いになるだろうな……ちゃんと答えないと、な。

エヴァ 「……私はどんな答えでもいい、しかしちゃんと答えてくれ」

式 「（まったくあの偽物は……面倒なことをしてくれた）俺は……」

……ほんと面倒だ。

式 「エヴァ……」

エヴァ 「なんだ？」

式 「俺は……まだわからないんだよ」

エヴァ 「は？」

式 「い、いや、あれだまだお前のことが嫌いか好きかどうかかわからないんだ」

エヴァ 「なんだ？ 優柔不断か？ 生殺しを私にさせるのか？」

式 「素直な気持ちを言うとエヴァの気持ちは嬉しいし、こんな美少女に告白されたなんて……男冥利に尽きる」

これは素直な気持ちだ……まあ外見はまだ十歳程度の子供の姿だけど、美少女だと言うことはほんとだと思う。

エヴァ 「ま、待て！ うれしいが……受け入れてくれないのか？」

式 「そうじゃない、まだ判断しきれないところがあるんだよ」

エヴァ 「つまり……まだ私への気持ちがわからんと?」

式 「まあそうなるな」

優柔不断、ヘタレと言われても仕方ないと思う。
つつか言われなきゃおかしい、ヘタレだろ、俺。

エヴァ 「……一か月だ!!」

式 「何がだ?」

エヴァ 「一か月の間にお前は判断しろ!!」

……え、マジでか? 一か月で決めると?!

エヴァ 「一か月後、この部屋で私はお前の判断を待つ!!」

……どうやら一か月後、別の意味で俺は決闘しなければならないよ
うだ。

こっちの方が厄介だよ……頼むぜえ、フェイクは後でお置きしよ
う!! 絶対だ!!

そっだ強化しよう（後書き）

作 「今日のーネギラジオ、ゲストはこいつ」

フェイク 「よお、夷^{フェイク}だ。つうかテンション低いな！！」

作 「今週のオーズ（仮面ライダー）で……ラトラーターコンボの扱いが酷くて、さらにやっとなたグリードの完全体の扱いだよ、あれはひでえと思ったよ」

フェイク 「ライダー好きだよな」

作 「クウガから見てるんだよ、最近昭和も見直してる。仮面ライダーBLACKのキレがやばい、あれを最近の仮面ライダーに見習ってほしい」

フェイク 「ここにきて、今回は色々チャレンジしたな」

作 「批判も覚悟してる、盛大に原作ブレイクと強引な展開だったしな」

フェイク 「まあ俺のせいなんだがな」

作 「……最初はお前はこの話以外は出さないつもりだったんだが」

フェイク 「え？ どうしたの？」

作 「準レギュラー入り」

フェイク 「マジでか?!?!」

作 「ああ、お前には重要な役割をしてもらっ

フェイク 「いいのかそんなこと言って？」

作 「結構後だから気にすんな」

フェイク 「で、エヴァの扱いは？」

作 「……正直今回でちゃんとしなといけないなあ、って思った
らこうなった」

フェイク 「つうか、今回は原作崩壊がひどかったなあ」

作 「ふつうに夷の実力ならあのくらいの事起きるだろうしな」

フェイク 「……さいで」

作 「まああれだ、今の夷は零崎になりたてなんだよ」

フェイク 「どういうこと？ 覚醒したのは五歳の頃なんだろう？」

作 「まあな、けどエヴァとの出会いまで全然殺していなかったんだ」

フェイク 「え？ それだと結構やばくね？」

作 「まあ今は大量に殺してるから安定してきてる」

フェイク 「俺には大丈夫だろうな」

作 「大丈夫だ、お前は『両義式』の部分で作られた奴だから……」

フェイク 「一安心だよ、俺も零崎になるんなんて嫌だからな」

作 「まあそんなだが……ここ最近、オーズが面白くなってきてるから文章が書ける、書ける」

フェイク 「で、全部消えたと……」

作 「ああ、今度の閑話で使おうとした奴もな」

フェイク 「どんまい、では次回予告、決闘のS／選んだ答え」

作 「では次回も」

フェイク 「見ないと魔法の射手をぶち込む」

作 「……さあて、これからファイズとアギトを見よう」

フェイク 「お前ほんと好きだなあ、ライダー」

作 「今再放送してるからな!!」

フェイク 「はあ、こんな作者だが……見捨てずに見てやってほしい、それでは次回まで!!」

作 「さようなら」

決闘のS／選んだ答え（前書き）

すみません、今回は夷の選択と色々詰め込みすぎて過去最長となっております。

それに慣れないことをしたので……うーん、微妙かもしれませんが楽しんでいってください。

原作ブレイク、ライダー登場どんとこいやー！！　な人はお進みください。

嫌な方は戻ってください。

いいですか？　では始めましょうか。

決闘のS／選んだ答え

ぐつともーにんぐ、夷改め式だ。ああ、すまんすごいテンション低いのは……スルーしてくれ、ああはい、もうこの頃は別荘に入って一人授業してますよ。

主に零崎の殺人衝動を抑えるために色々頑張った、フェイク……俺の分身体に手伝ってもらったよ……クククカカアハハツハハハツハハ……あ、やっべ、ゴホン。
ではダイジエストでどうぞ

|||||||ダイジエスト

虚識 「フェエエエエエエエエエエイクくウウウウウウウウウウウウウウん……！」

フェイク 「悪かったから……
オリジナル 落ち着け式……！」

虚識 「テメエエエエエエエエエエ、何してくれてんだよおおおおお
おおおおお……！」

フェイク 「しゃべり方……！ それとキャラ崩壊が……！」

虚識 「お前はマジで殺して解して並べて揃えて晒してやろう……
零崎を始めますか」

フェイク 「ま、待て、何のムリゲーだ。周囲いっぱい鋼系の網！
！そしてどこぞの慢心王みたく空間から剣が飛んでくるし……！
避けられ」

ギヤアアアアアアアアアア！！！！

虚識 「まだまだああああああああ！！」

フェイク 「千の雷を十五連射するなあああああああああ
！！」

う、ウワアアアアアアアアアア

虚識 「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄
無駄無駄」

フェイク 「がほ？ ぼべら！！（音速のスピードで殴られている）

虚識 「ちえりおーーーーーつつつ！！」

ガアアアアアアアアアアアア！！！！

フェイク 「も、もう勘弁してください」

虚識 「だが断る、虚刀流・『雛罌粟』から『沈丁花』まで打撃技
混成接続、それと『七花八裂（改）』を強制接続、奥義『七花八裂
（改）・接続編』」

ドガガッガガガガッガ！！ ズシャアアアアアアアアアアア
アアアア！！！！

虚識 「貴様の死に場所は！ ここだあ！ ここだ！ここだ！ここ

だあああ！」

フェイク 「ちょ、待ってそれはキャラが」

熱い熱い
いいいいいいいいいい！！！！

虚識 「ラストおおおお！！ 黒式・三解除！！」

フェイク 「くそう！ アイテムを」

虚識 「アイテムなぞ使ってんじゃねえ！ 破滅の完全破壊」
ジェノサイドプレイヤー

ぎゃああああああああああああああああああああ

||||||| 回想終わり

と、あんな感じで何百回以上、戦い続けたら制御に成功……ノリにノリすぎて別荘ver2も破壊してしまった。いやあ久々に頑張った、なんか途中から記憶がなくなってるんだが……まあ結果だけ言くとフェイクが「ごめんなさい、ごめんなさい」とこんな感じで謝り続けてるが何したんだ、俺は……。

なんかあいつも作って、三年たつが……個性出来てきたよな、あいつの仮面は俺が作った仮面を勝手にかぶるし、エヴァには薬渡すし、もうあいつ嫌だ。

詠春 「うおお！！」

式 「……だから、突っ込むなと」

明人 「もらいました！ 斬が」

式 「はいはい、甘い甘い」

突っ込んでくる詠春に避けながら足をかけて転ばせて、明人には斬岩剣を放つ前に気弾を放ち、吹っ飛ばす。もちろん手加減してるぜ？ 今日猿の仮面だ。

明人 「うわ！」

詠春 「げふ！！」

式 「二人ともその年じゃ強いかもしれないけど……全然甘いぜ？」

詠春 「一太刀くらいは入れさせてくれよ」

明人 「いてて、その気弾どうにかしてくれませんか？」

式 「まったく神鳴流なんだから飛び道具くらいは避けてくれ、詠春は猪突猛进、つまり何も考えずに突っ込む癖をどうにかしろ」

詠春 「けどよお、俺はまだ六歳だぞ？」

式 「俺はその頃には父親に四六時中、命狙われたよ」

まあ、あれのおかげで魔眼に直死がついたんだが……少々そのせいで少し、少しだけだぞ！ 厳しくしてるが……才能がヤバい、なんだこいつ、教えたことをスポンジのごとく覚えていつてる、後数年後くらいには奥義は出せるだろうな。

式 「んじゃ、お前ら今日も重りを持って山十周な」

詠春 「またかよ……つうか何キロ？」

明人 「あきらめろ、詠春……どうせ二十キロだ」

式 「いや三十キロ」

明人&詠春 「無理無理無理！！」

修業開始から二週間、こいつらにはこんな感じで修業させている。
手合せ 走り込み 気の制御 休憩（飯） 手合せ 鬼ごっこ、と
まあこんな感じ……鬼ではないだろ？ これで俺の昔の修業を見て
みるか？

走り込み（重しありで三十周） 手合せ（師範代三人程度） 休憩
（だがたまに父さんの襲撃が） 木乃香や刹那、素子と遊ぶ（と言
う名のリアル鬼ごっこ） 鶴子姉様との武器使用禁止鬼ごっこ 母
さんに服を着せられる 風呂（ときどきどころか、必ず素子が居る、
たまに木乃香と刹那）……あれ？ 目から水滴が……これに比べた
らこいつらの修業がどれだけ楽か、手合せなんか俺に気強化無しで
戦えとかないわぁ、勝ったけど……。

式 「行つて来い、六歳の頃の俺の修業より楽だから……」

詠春 「し、師匠?! 震えてますよ?」

明人 「式先生を震えさせる修業を……いったい誰が?」

式 「（お前の娘と目の前のガキにだよ）」

仮面をつけてるっていいよね、表情見せないんだもの、楽で楽で見せたらヤバいんだがなあ。

式 「行けや、さつさと……行かないと鬼ごっこのときにアレより恐怖音出すぞ？」

詠春 「ハハハハ、イッテキマース」

明人 「デスヨネー、ジョウダンデスヨ、ハハハハイヤデスネー」

背中に重しを背負いながら走っていく詠春と明人、そうそううちの山は結構距離がある。さらにコンクリートで舗装されてないから足腰を鍛えるのもってこいだ。ちなみに4キロくらいはあるだろう、俺は一時程度で終わらせるよ？ 数百キロの重し持ってな。

……まああいつなら四時間あれば終わるだろ？ そういえば後一週間で決闘と……あーうー。

思い出したら顔が熱くなったぜ……どうしようか、これから京都に一緒に行く約束してるんだが……どうしよう……！！

〓〓〓〓〓〓 詠春視点

はあはあ、あ、青山え、詠春だ。息絶え絶えですまない。

つつかあの鬼、外道悪趣味かめ

詠春 「ぶべら？！！」

いたー！ー！ー！！ なんか顔面にぶつかったんだが？！！ なんだ？！

と、思っで足元に落ちている何かを拾うと……扇子だった、で書か

れてる言葉が「お前、今日の鬼ごっこは修羅の仮面でやってやるよ」……終わった、アハハハ朝まで気絶コースだ。

明人「詠春……どんまいだ、というか俺もとばっちりだよな?!」

すまん、明人……やばいよお、前に「この女顔鬼畜野郎!!」と言ったらすごく黒いオーラで「お前に相生拳法の神髄を見せてやるよ」と言われて……夜の鬼ごっこ言う名の拷問だよ!! 森の中だから暗いし!! 変な声、それに化け物!!（魔眼の幻術を使っています）そして常に後ろに気配を感じているのに誰もいないし、気を抜くと後ろに衝撃をくらうし!! でそれを朝までされたよ……そのせいで二日間くらいは後ろに気配を感じたら振り向いて攻撃するし!! もう最悪だった。精神的には強くなつたよ、実力的にも……あの人は手加減がうまい、まああれだ。本人談なんだが「俺が本気でしたらこの世界滅ぶよ?」と言ったから、笑えなかった。なまじ、手加減に手加減をかけて、手心までいれて、その上にリミッターまで入れて本来の得物使っていないし、魔力で刀の刃を包んで切れないようにした……らしい。

いやいや待ってくれ、あの人、めちゃくちゃ赤みがかかった太刀二本で、ばっさばっさと薙ぎ払っていたよな? 式神? 出された瞬間に衝撃破で戻されて、術を使おうとすれば魔法が飛んできて、数人がかりで結界に閉じ込めようとしたら掌底で打ち抜かれて……みんな絶望しきつたよ。

あそこまでボロボロにされたのは初めてだったんじゃないか? さらに独断で復活させたりヨウメンスクナノカミをあつさり天に還さ……いや、殺したんだっけ? まあいいや、とにかく規格外な人だと思う。つうか俺のせいなんだけどさ、まあばあさんが許してくれまし大丈夫なんだけど、みんな敵意むき出しだし肝心の師匠は無視してるしなあ。

つつか俺的には俺たちが悪いと思うんだ、というかたった一人の人間に関西最大の組織が潰されたなんて思わないだろうな。

まあそんな人に教えを受けさせてもらえるなんて……剣士としては最高だと思うんだ！ 絶対強くなって、あの人の隣に立ってやる！！まあその前に……

詠春 「なあこんなの十周できるのか？」

明人 「……自信なくなってきた」

俺だって六歳なんだ、もう少し軽い訓練にしてくれ！！
師匠おおおおおおおおおお！！！！

詠春 「そういえば桜は元気にやってるかなあ」

俺と同じ年の近衛の長女であり幼馴染なんだけど……たしか、そいつも師匠の訓練を受けているはず……大丈夫かなあ。

〓〓〓〓〓〓式視点

式 「ほいほい、式神の制御いつてみようか」

桜 「は、はい！ 先生」

……ああ、なぜ？ 思うだろ？ 俺が一番聞きたいよおおおおお
おおお！！ なぜ両親の修業の面倒を見なきゃいけないんだああ
ああああああああああ！！

桜 「斬鬼頼んだで！」

札から鬼である斬鬼を出すんだが……見た目はあれだ、なんで仮面ライダー斬鬼なんだよ！！ 最初出てきたときは響鬼もいるのかと思っただけじゃなかったよ！！ 母さんが使役している変わった鬼とか言われてるけど違うよね、ギター持っているよ？

斬鬼 「なんだ？ 呼んだか？」

式 「（うん、しゃべり方が違うけど、斬鬼だ）」

桜 「うん、先生との修業やから頼んだで」

斬鬼 「まあいいか、そこのお前、本当に人間か？ いつも思うが……」

式 「（鬼に言われちゃおしまいだなあ）多分人間？」

斬鬼 「なんつう言い方だよ……まあいいか、俺はただ術者に力を貸すだけだからな」

……これはこの時代に来て知ったことだ、つつかやっぱこの世界は色々なものが混ざってるよな、まさかだと思っけど……ガチの死徒二十七祖とかいないよなあ。頼むから来ないでくれよ？ 俺だってそんなヤバい奴らと戦いたくない。

斬鬼 「まあいいさ、さあどうするんだ？」

式 「今日はあれだ、近距離に持ち込まれた時の対応をしようか。」

桜「一応お前は確かに陰陽師としての素質はかなりある。しかしだなあ、陰陽師っていうのは接近されたとき、例えば斬鬼が倒されたり、不意をつかれて接近戦をされたらやばいだろう？」

桜「う、うう、そう言われると……」

斬鬼「俺が負けて術者を傷つけると？」

式「……あめーよ」

仮面「CLOCK UP」

俺は加速して斬鬼の背後をとる。ああ、この仮面？ ふざけてクロックアップモードをつけた猿仮面。こわいよねえ、魔眼で解析したら作れたよ、いやあ自分のチート加減にあきらめがついてきたよ。俺は斬鬼の首筋の線に七つ夜を当てる、斬鬼は気付いたようで驚きの声を上げる。

斬鬼「……何をしたんだ？」

仮面「CLOCK OVER」

式「別に？ 超高速で動いて、首にナイフ当てただけ」

桜「ぜ、全然見えへんかった」

斬鬼「くそ、俺も焼きが回ったか？」

そりゃ仕方ないだろ？ つつか反応されたら困るよ。七つ夜を首から離しながら、少し苦笑する。

式 「今見たく気抜いたら、消されてたとかあるからな」

斬鬼 「……音撃さえできれば、お前なんぞに負けはないさ」

桜 「さすが先生や！　ウチ、尊敬してるで！！」

式 「一応、俺、お前の母親の腰を蹴り碎いた男なんだが……」

桜 「いいんや！　将来の旦那さんやから」

……はい？

式 「……アハハハハ、ナンカゲンチヨウガキコエルヨ」

桜 「何言いてはるんや？　組織ひとつ潰した方が婿になるなんて……ウチもそうやけど、組織にとっても良い事や」

斬鬼 「ほう、まだ小さいのに頭がいいな」

式 「……」

あれ？　なに？　婿？　はい？　いやいやいやいや、俺って奴は……なんかやばいフラグを立てたか？　つつか婿？！！

式 「なんかの間違いだろ？！！」

桜 「いいやないか……そ、それにウチじゃだめ？」

ガフー！！　な、なまじ小さな頃の木乃香と似てる顔だから破壊力が

やばい。上目使いはまずい……シスコンって言うな。

だが……どないしようか、ここでフラグ折っておかないと、木乃香生まれなくて歴史も変わって、あれ？ けっこうやばくね？

式 「ま、待て詠春とかいるだろ？ それに今決めるな！！」

桜 「じゃあ、式先生は好きな人が居るの？」

……そういえばそんなこと考えたこともなかったな。
俺が好きな人？ たくさんいるが……？

式 「え？ いるぞ？ 妹とか修業仲間とか……あ、後は家族とか」

桜 「そういうのじゃなくて！！ 女と男の関係で好きって意味や
！！」

式 「……さあな、まあいい修業に戻るか」

斬鬼 「おいおい、逃げるなよ」

式 「あのな？ 俺は……」

俺は無詠唱で魔法の射手を桜と斬鬼に向ける、その数百以上。
さすがに桜も顔が真っ青になっている、大丈夫大丈夫、非殺傷にし
てるから……SYUGYOUしようか。

桜 「すみません！！ 先生怒らんといて！！」

斬鬼 「俺も悪かった！ だから」

式「許さん、さあさあ蠅のように舞い、花びらのごとく散つてくれ」

い、イヤアアアアアアアアアアアアアアア！！！
ウワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！

!!!

とまあこんな声が一時間くらい、響き渡ったそう。

桜視点

ウチの名前は近衛桜、六歳や。

まだまだ術者としては駆け出しなんやが……この前とんでもない事件が起こったんや。たった一人の男にウチら関西呪術協会が壊滅させられて、えーと神様も還されたらしいんや！

ウチはびっくりした、まさかたった一人の男に壊滅させられるなんて……ウチの母様も負傷したそうやけど、正直死んでもおかしくなかった、って言うってたんや。

びつくりしたんや、母様は泣き言ひとつ言わずに組織をまとめ上げているすごい人や、ウチの憧れでもあるんやけど……布団に寝ててウチに言ってきたんや。

栄子 「なあ桜？ 私はあの戦いで死んでいてもおかしくなかったんや」

「何言いてんの！ 現に母様は生きとるやないか」

栄子 「違う、私らはな、手加減されたんや。その気になれば式はんは私たちを皆殺しにしてもおかしくなかったんや」

その言葉には恐怖と後悔が入り混じってたんや、あの母様が「関西の猛虎」と呼ばれたお方がこんなに不安げに言うなんて、式先生の恐ろしさが垣間見えたんや。

栄子 「最初は強大な魔の気配を感じたから……青山が対応したんやけど、ものの三十分で制圧されたんや」

そうなんや、最初は仮面付けた変人と「闇の福音」が来たってことで最初はそんなに真面目に対応しなかったんや。そしてまず、青山家の若い方々から飛びかかって行ったら、ただの手刀で制圧されて次に師範代、そして当主まででいったんやけど、その人たち曰く「手刀で刀をぶった切る奴」「結界を張っても拳の衝撃が飛んでくる」「最強の神鳴流の使い手」などなど、聞いたら嘘や！ と思うことばかりやった。実際、まだ戦っていない若い修行僧たちにはただのデマだという噂まで流れているけど本人はまったく気にしていない。エヴァさんと一緒に京都に出かけたり詠春と明人さんと一緒に修業をしたりしてる。たまに青山の当主さんと話をして酒を飲んだりしてる。

一週間前にウチの先生として紹介されたんやけど、初対面の感想は「変な人」だつてそうやる？ 誰だつてなんか変な仮面……先生は確か「マスク・ザ・斉藤のマスクだ！」つて言ってたけど……なんか南米の方にありそうな仮面やった、それに黒色の着物、正直仮面のせいで似合っていなかったんや。

式 「えーと、お前が近衛桜か？」

桜 「そうやけど……あんたが式？」

式 「ああ、俺が両義式だ、かあ ゴホン桜、今日からお前の戦闘面での講師をやることになった」

桜 「戦闘面？」

式 「ああ、お前の母親から言われてな……正直気乗りしないが依頼なんぞでな」

桜 「ふーん、じゃあこれから式のことは式先生って呼ぶ！」

式 「せ、先生ってお前……まあいいや」

そんなこんなで始まったんやけど……めっちゃきつい。

基本的に先生はウチに走り込みや、回避の仕方などを教えて……まあなんか神鳴流の方々がやってることをしているんやけど、最初は走り込みで息がきれてしまったんやけど、その状態から回避訓練、先生がランダムに飛ばしてくる魔法の射手（非殺傷）を避け続けるんや、一回当たったらどこが悪かったのか、どうすれば良かったのかとかを言ってくれるんやけど、おかげで回避だけは一級品になったんや。周りの攻撃が遅く感じるしな！！ あ、あれ？ なんか目に涙が……泣かないんや！！ ウチは近衛や！ グスン。

あの人、ほんと鬼畜なんや、魔眼を使って偽物を作り出したり、この頃は三百六十度すべてから来るんや、一番びつくりしたのは地中から出てきたとき……あれはびつくりしたんや。

それに詠春もやったって言う「鬼ごっこ」あれは地獄や、先生は幻術も使うから死んだはずの人の声が聞こえたり、く、蜘蛛……ああ口にするのも恐ろしい生物を巨大化させた生物なんて見させて……あんときは泣き叫んだなあ。

さらにあの人、忍法とか言ってウチに化けたり、母様や父様に化け

たりするんや。前にどうやってやるのか見てたら……言えへん、んな方法なんて言えへんって。

しかしあの人はウチに逃げることにしか教えへんのや、うー、ウチだって詠春をま　ゴホンゴホン、今日は色々聞いてみたんや、まずは嘘ついて告白して……詠春にしたかったなあ、あいつほんま、鈍いしな！！　なんかイライラしてきた。
すごく師匠がテンパってる、クフフフなぜか嗜虐心が……。

式　「あのな？　俺は……」

あ、あれ？　先生？　その空中に浮いているとんでもない数の魔法の射手は？　まさか打ち込みませんよね？

桜　「すんません！！　先生怒らんといて！！」

斬鬼　「俺も悪かった！　だから　」

式　「許さん、さあさあ蠅のように舞い、花びらのごとく散ってくれ」

ウチはその一時間、いかに先生が手加減したかわかったんや。いつもの三倍のスピードくらいの矢が何本も何本も……ウチは決めた先生を怒らせないようにしようと……。

|||||式視点

式「やっぱ弟子はいじ　ごほん」

あやゆく本音が出るところだった、いやだつてあそこまで叫んでくれるとなあ。斬鬼も斬鬼で面白かったし、俺つてSなのか？　まあいいさ、今は詠春達と軽く打ち合つて風呂に入つて汗を流してきた。飯も食べて、幸せいつぱいだ、ここの飯代は出してるし一応客人だが、当主の奴とも結構仲良くなつてるし、まあまあだ。まあまだ目の敵にするアホもいるだろうが、あれだけの実力差を見せつけても向かつてくるアホはいるもんだな。修行僧ごときが勝てると思つてんのか？　まさか風呂場で襲撃されるとは……まあ全員「ちえりお八裂」でねじ伏せたがな、まあちえりお八裂つて言つても連続で八回ちえりおつて言うだけだが。

たぶん外に裸の僧が八人くらい転がつていているけどな、素顔は見られていない、風呂用の仮面があるからな！！

式「えつと、エヴァは部屋かな？」

そう思いながら歩いていくが……正直めっちゃ緊張している。どうしよう、エヴァの部屋まで来たんだが……帰つてもいいかな。

エヴァ「式いー、入つてもいいぞー」

式「答えは聞いていない　てか」

あきらめて部屋に入ると部屋の中央に金髪でよう　あれ？　なんか身長デカくなつてねえか？　体型もツルペタではなく少し平均より大きいくらい。……なぜ？！！

式「え、エヴァ？」

エヴァ 「そうだぞ？ 式なんだ見とれてたのか？」

式 「はつきり言つとそうなるな」

エヴァ 「あ、え、ま、待ってくれ、そんなストレートで言われると恥ずかしいぞ?!」

式 「まあタネはわかってるんだが……幻術だろ？」

エヴァ 「……ああ、本来ならこうなっていただろうという、可能性を計算して作っている。質感もあるぞ!!」

するとエヴァが抱き着いてくるがいつもは俺の腰の部分に抱き着くんだが……大きくなったせいか、俺と同じくらいだからなあ。いや、まああれだよ、色々と当たってるんだよ、素子のおかげで結構耐性についているがな、あいつほんと抱きしめると胸もとに寄せるから窒息しかけたこともあるよ……あれは一瞬だけだけど、天国見えたよ。

エヴァ 「ふふふ、どうだ？」

式 「あんまバカやってないで行くぞ？ 俺だってコレのために時間を割いたんだ」

チャチャゼロ 「へへへヨカッタ御主人、ヤッパ式ノ頭ノ上八居心地ガイイナ」

式 「そこの刃物人形、おとなしくしてろよ？」

チャチャゼロ 「ケケケ、言ワレナクテモナ。御主人ノデートハ邪

魔シナイサ』

エヴァ 「ちや、チャチャゼロお!!」

式 「はいはい、漫才してないで行くぞ？」

そんなこんなで京都に出かけると……周囲の目がビシビシと俺につき刺さる。そりゃあ外見美女（今は二十歳だそうです）が仮面付けて頭の上に人形乗せた奴と一緒に歩いていればこうなるか……さらに俺の腕に抱き着いてれば周りからの嫉妬の視線がきつい、なんか人でも殺せそうだよ。

「くふふふ」

式 「なんだよ、そんな嬉しそうに笑って」

「好きな者に抱き着いて嬉しくない者はいないだろ？」

式「なっ!!」

エヴァ 「チャンスだ」

驚いた瞬間、俺の仮面をはぎ取った。　つて待つてくれえええええ
ええええええええ！！

式「ちょ！返せ！！」

エヴァ 「いやーだ。デートの時から仮面をとれ」

式「すぐ恥ずかしいから!! 頼む! 返してくれ!!」

「なんだ？ お前の顔だつてきれいじゃないか」

だからだよ！ 女顔だからだよ。周りの人間なんかびつくりしてるよ！！

そりや猿の仮面の下からでてきたのが美少女の顔だからなあ、自分が言うのもなんだが……両儀式が基本だからな、だまってりや美少女だからなあ。

「くっ！ スペアの仮面を！！」

「エヴァ、
「させんよ!!」

スベアの仮面を出そうとしてもすべて回収される。

うあああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ
 !!!!!!!!!

式
「頼むからかぶらせてくれえええええええええええええええええ！」

「ハハハハハ、させんぞ、式！」

そんなこんなで京都巡りをしたんだが……仮面をつけさしてもらえず、最後まで巡らされましたよ、神鳴流の剣士に目撃されかけて危なかったよ。

とりあえず六時には帰ったんだがなんとか仮面を取り返したよ。さて今はエヴァと別れて俺は鬼ごっこをしている。かれこれ三時間弱か？ もうそのぐらいいは立つてるが今回はゲストも参加してる。

「（相生拳法・背弄拳、すごい技だと思ったが……本当にすごい

かったなあ、マジで後ろに居ても気付かれないなあ)」

俺は相生拳法……まあ詳細は刀語を読んでくれ、簡単に言うと素早い動きによって相手の背後に一瞬で回りこんでしまう拳法だ、ちなみに前に居るのは詠春……最初やったときよりも反応が早くなっているな、多分、今のこいつなら避けることだけなら師範代にも勝てるだろうな。明人にはフェイクを行かせて……卑怯？俺はこいつらの修業前にこいつたぞ？

式「俺は『何だって』使っし、お前らに卑怯千万と言われようがどうだっていい」

こっいつたぞ？卑怯千万って言われても仕方ないよねえ。

明人「き、気弾があああああああああああああああ！
！……！」

フェイク「H A H A H A 逃げろ、逃げろおおおおおおお！！
！」

詠春「だ、だから後ろにいないでくれえ！！」

式「……くけけけけけけ」

詠春「だから笑うのやめてええええええええええええええええええええええ！！！」

式「嫌だ、くくくく、おーにさんこちら、てのなるほうへ」

詠春「いやあああああああああああああああ！！！」

う、まだメンタル面を鍛えなきゃなあ。

式 「こいつらも強くなって貰わないと……」

最低でも詠春には一人で五百人程度は戦えるほどになってもらわないとな。

零閃でも覚えてもらおうかな……後は千刀流の応用でどんな武器でも使えるようにしておくか？ いや、やめとこあいつは刀の方がいいだろうな。

後は……桜には格闘戦もできるようにしてやろうかな、CQCでも教え込んで、虚刀流もほんの少し教えて刀と銃には素手で勝てるようにしてもらおう。

フェイク 「に、してもだ式オリジナルいいのかこんなに過去に介入して……」

式 「まあいいだろ？ にしてもだ、俺はどこまで行くんだろうな」

フェイク 「式？」

式 「チート、バグ、まあ聞こえはいいさ」

フェイク 「後悔してるのか？」

式 「まさか……近衛である俺も、零崎である俺も、両義である俺も、全部俺なんだしな。後悔っていうよりも人間を越えちゃまっているなあって思ってたさ」

フェイク 「俺は人間じゃないが……」

式 「なんだ？」

「お前ほど人間を形をした化け物を見たことねえよ」

式「だな」

フエイク
「頑張れよ式」
ホンモノ

ホンモノ

式「とっとと消えろフェイク（ニセモノ）」

「はいはい、セリヌンティウス、まあこれも
フェイク」

式「走れメロス、まあなこれも」

式&フェイク 「「戯言だけどな」」

一週間後

式 「はあ面倒だ」

「まあまあ、落ち着きなさいな」

式 「なぜ俺がやらなきゃいけない、今度こそ本当の意味で壊滅さ

せてもいいよね？ 答えは聞いてない！！」

栄子 「式はんも少し抑えて！ あんただったらほんまやりかねん
のやー！！」

一か月の時が過ぎて約束の決闘の時間だ……やる気がなくなってる。

五人なんだが、修業を見ていたんだが……そんなに実力がある方じゃない、ヘタすりゃ刹那だって勝てるくらいだ、まあ刹那だってあの歳で頑張っているし……正直に言うが、メモリ発動時ならたぶんだが、今の神鳴流で勝てるのは父さん、素子に鶴子姉さまくらいだろう……あ、あと母さん、あの人は主婦じゃないよ？ たまーにだけど妖怪退治とかしてくるよ？ 事務的な事もできる。

式 「だるい、今日は働きたくないでござる」

栄子 「ほんま、あんたって人は……やる気があるときと無い時の
差が大きいなあ」

式 「いいだろ？ この頃は残滅任務に駆り出しゃがって……」

つい三日前に零崎として違法組織の摘発&残滅してきたからなあ。
一緒にやった……たしか天ヶ崎 健だったか？ なんか引つかかる
んだよなあ、あいつの使った式神が妙に千草さんの式神ににてたん
だが……まだ十五歳なのに式神を操る術に関してはそこそこだった
なあ。

式 「はあ、あいつらは俺に勝てるなんて幻想を持ってるんじゃない
だろうか」

栄子 「そのとおりなんやけど……」

式 「はあ、ある英霊が言った言葉を言ってやろう、そのときに」

俺と栄子はそのまま道場に向かう。俺にとっては慣れている場所だが今回だけはまったく慣れない。

道場に入ると無数の厳しい視線と若い神鳴流の剣士五人が瞑想しながら待っていた、ちなみに周りには師範代と修行僧、まあ師範代のほとんどがけがをしてるがな。エヴァはすでに道場におり、頭の上にチャチャゼロが乗っていた。

詠春 「師匠ー！！ 頑張ってええー！！」

桜 「先生なら楽勝や！」

明人 「すいませんが今回は先生を応援しますよ」

やめろ、ばか弟子共が周りの視線が信じられない目で見られてるぞ？！ あ、青山の当主はサムズアップしてやがる……いらねえよ！
じいさんの応援なんざいるかああああああああああああ
！！

エヴァ 「フン、式なら心配ないな、叩き潰せ」

チャチャゼロ 「オレガ殺ッテモイイヨナ？」

頼む、俺を応援してくれるのはわかるがやめとけ、剣抜きかねないから！！ チャチャゼロ、お前は自重しろこのボケ！！

式 「や、やる気がガリガリ削られる」

栄子 「狸の仮面外したらどうですか？」

式 「……嫌だ、絶対やだ」

ああもう、叩き潰してやるよ、はい徹底的に！！

剣士1 「来たか、逃げずに来たのは褒めてやる」

剣士2 「まああれだ、お前が関西呪術協会を壊滅させたのはうそ
だろ？」

式 「さあな？ 俺はただ向かってきた敵を倒しただけだが？」

剣士3 「まあいいさ、お前はここで負けるんだし」

剣士4 「……ふざけた仮面など取れ」

嫌なこった、取ったらとったでお前らうるさいだろ？

剣士5 「さあ始めるか……決闘のルールは五人ぬ」

式 「めんどいから全員で来い」

ざわ！ とまわりの修行僧だけ騒ぐ、師範代たちは表情で「やっばりそうするのか」みたいな顔をしている。

詠春 「これ、もう勝負決まってね？」

明人 「ああ、式先生少しキレてるし」

桜 「母様、こっち来て一緒に見ようやー」

栄子 「はいはい、じゃあ式はんも頑張って」

式 「はいはい、もう殺して解して並べて揃えて晒してやろう、ってくらい頑張りますよー!!」

つつかなんかこの言葉が口癖になってきたような気が……はははは、そんなわけが……。

剣士1 「貴様なめてるのか!!」

剣士2 「いいだろう！ その慢心、へし折ってやるよ!!」

なんかみんな臨戦モードだねえ、まあいいさ。

式 「お前らは俺に勝てるって言う幻想を抱いてるだろうけど、有名な赤い英霊の言葉をくれてやろう」

剣士3 「なめてんのか？」

剣士4 「……仮面を取れと」

栄子 「では神鳴流の剣士五人と両義式の決闘を始めたいと思います」

剣士5 「長もなめているのか？」

式 「理想を抱いて、溺死しろとな」

式「行くぜ！！ちえりお——！！！」

五人の腹にそう叫びながら拳を叩き込み、道場の壁にめり込みながら全員気絶する。

栄子 「そこまで……勝者、両義式！」

詠春 「うん、師匠ならやると思ったよ」

明人「当たり前の結果ですね」

「さすがは先生や！！」

「当然だな、手加減されてそれではな」

「旦那、今度殺シ合イシヨウゼ！」

式 「まあこんなもんだろ？」

まあ周りの修行僧に牽制に一言、言っとくか。

式「今でわかっただろ？……お前らじゃ俺には勝てないさ、
 しかしたなあれを見ても俺に向かってくるなら……」

極上の殺意と共に言おうか。

式「殺すぞ？」

栄子 「……彼の言う通りや、へたな事したらアカン、ウチらと彼
とじゃ実力の差がちがいすぎるんや。ちなみにこれでもリミッター

付きやからな？」

そんなこんなで決闘が終わったんだが……剣士五人はひどく落ち込んでしまっていた、まああんな大勢の前で無様に負けたんだし仕方ないかあ。

つうかりミッター付きと聞いた時の修行僧の絶望した顔は……まああれだ仕方ない。

俺は気にせず道場を出たんだが……さつそく百人程度の修行僧から修業を頼まれ、軽くもんでやった、使ったのは木刀のみ、あつちは全員真剣……けど勝ったよ。そしたら全員に「教えてください！先生！！」と言われました。

式「つ、疲れたあ……」

エヴァ「フン、あのぐらいで疲れたと言うな！ まったく……」

たまには酒もいいかなと思って、エヴァと一緒に酒を飲んでいるんだが……まったく酔えない、今、エヴァの別荘の一部屋で飲んでいるんだが……あちなみにエヴァの別荘には城が入っていた。レーベンスシュルト城……俺の別荘には小屋がぼつと一つと広大な大地があるだけ、一通りの修業場所は用意したんだがなあ。

エヴァ「しかしうまいだろ？ 酒は」

式「苦いだけだ……うまいなんて、思わん」

エヴァ「の、割には呑んでいるな……もう樽一つ分はなくなったぞ？」

式「また作ればいいだろ？ 俺に質問するな」

やばい、やばいなんか口調がああ刑事みたくなってる……多少は酔っているのかな？ 今は夜に設定されてて、月もきれいだ……。

エヴァ 「今日は言葉が荒いな」

式 「……酔ってるのかもな」

エヴァ 「でだ」

エヴァが椅子から立ち上がり、俺の目の前に来る。まあ……約束の
一か月だしなあ。

式 「いいのか？ たしかあの部屋で」

エヴァ 「別にいいだろ？ ここでも……でだ、式、お前の選択を聞きたい」

式 「……なあエヴァ、俺はな。殺人鬼なんだ、必ずしもお前を幸せにできるわけじゃないんだぞ？ 最悪、世界が俺の敵として俺を殺そうとするんだぞ？」

エヴァ 「……気づいていたさ、旅の途中お前が……殺人を侵していることなんて、お前の体からうつすら匂いがしたぞ？」

式 「吸血鬼だしな……でだ、俺は史上最悪最低最凶とんでもびつくりな奇想天外摩訶不思議災厄の殺人鬼だ」

エヴァ 「お前はそんな奴じゃないぞ？ そんな奴なら私はあの戦いで死んでいたはずだ」

式 「…………嫌じゃないのか？」

エヴァ 「フン、それにお前が殺してきた数など…………私に比べたら赤子程度だ！ それに私がその程度の女だと思うのか？」

……………ずっと俺は「零崎」ということを負い目に感じていた。素子や刹那の気持ちだって気づいていたさ、けどな、俺と一緒に居たら絶対にあいつらはまともな道を歩けないだろう…………俺はそんな人間だ。

式 「ああ、考え直すなら今のうちだ、こんな狂ったや」

俺はその言葉を言えずに口に何かが触れた。

エヴァの顔が超至近距離に見える、あれ？ なんか唇にやわらかい物が…………？

エヴァ 「う むちゅ ふはぁ！」

式 「むぐ？！… ふはぁ！！… いったい何しやがる！！」

エヴァ 「これが私の気持ちだ…………元々狂っているさ、お前のせいで恋…………狂っているさ」

式 「…………本当に？ 俺でいいのか？」

エヴァ 「お前…………だからだ」

至近距離にエヴァの顔が見える。月が反射して金髪がキラキラと輝いているように見える…………俺は。

式 「エヴァ、いや……エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」

エヴァ 「なんだ？」

式 「……お前の気持ちを……受け入れる」

エヴァ 「ほん……とか？」

式 「ああ、お前と共に生きるよ……エヴァ」

エヴァ 「う、うぐう、ひぐっ！」

式 「エヴァ?!」

エヴァ 「ち、違う！ 嬉しいんだ!! 泣いてなんかいない！」

式 「あー、はいはい」

やべえ、すごくエヴァが可愛く感じる……マジで惚れたかも。

チャチャゼロ 「ケケケ、オメデトサン旦那、御主人！」

式&エヴァ 「「ちや、チャチャゼロお?!?!」」

まずい！ さっきの会話が聞かれてたなんてマジで恥ずかしいんだが?!?! あれ？ なんかチャチャゼロの足元に魔方阵が書かれているんだが……？

チャチャゼロ 「ケケケ、パクティオーノ準備八万端ダゼ？」

式 「ぱくていおー？」

エヴァ 「……簡単に言うと契約をすることだ。あの魔方陣は本契約の物だな」

式 「へえー、それで？」

エヴァ 「……契約の方法がな、あの、そのな」

式 「エヴァ？」

エヴァ 「キスなんだ……それに本契約と言うのは一人だけできて一生続くものなんだ」

式 「いいじゃないか？」

エヴァ 「……いいのか？」

式 「吸血鬼と殺人鬼が本契約なんて、本物の鬼だって素足で逃げ出すぜ？」

エヴァ 「ク、クハハハハハその通りだな！」

俺たちはそのまま魔方陣の上に乗る。

チャチャゼロ 「トットトヤリヤガレヨナ！ オレダッテコンナナレナイコトシタンダぜ？！！」

式 「ははは、チャチャゼロありがとうな」

エヴァ 「式……」

式 「まあな、ベタなセリフになっちまうが……これからよろしくな？ エヴァ」

エヴァ 「ああ、こちらこそな式」

そして、俺たちは目を閉じてお互いの唇を合わせると確かに何かにつながったような感じがする……まるで霊脈と繋がっているような感じだったがな。

エヴァ 「カードが出たな……」

式 「これは？」

チャチャゼロ 「パクティオーカードダナ、コレガ契約ノ証ダナ。
ツマリ旦那ト御主人ノ愛ノ証ダ」

エヴァ 「なんなんあなんなんあなんあ、何言ってるんだああああああああ！！ このボケ人形……」

式 「落ち着け…… えーと、あれ？ 黒の服と仮面を被ってる俺か？」

そこに書かれているのは俺の絵であった。

えーと何々？ ざ、「フェスティバル残滅殺人」？！！ なんじゃこのとんでもない二つ名は！！ さらに手に持って……何も持っていない？

エヴァ 「『虚刀・鑢』？ なんだ？ このアーティファクトは、とりあえず呼び出してみる。呼び出すには『来たれ（アダット）』

だ」

式 「まあいいさ、アデアット！」

すると俺の頭の中に何かが流れ込んでくる。

……そういうことね、これは虚刀流の記憶だ…… はははは、完全に虚刀流が使えるようになったわけだ。

エヴァ 「なんだと?! アーティファクトが変わった?!!」
完了形変体刀虚刀・式『?!!」

式 「はははは、本当に完了形になっちまったな。でだ、エヴァはどうするんだ？」

エヴァ 「わ、私も欲しいが……従者契約で私が主となったからな……」

式 「もう一度やって、エヴァのカードも出そうぜ……不公平だ！」

エヴァ 「ま、待 むぐう!」

パアと光が輝いてまたカードが出てくる。

今度はエヴァのカードだが……絵には黒いローブをつけて黒い翼に赤い目をしている。

エヴァ 「なにになに?」 『十字架を背負う者』^{クルースニク}? フン、なんて皮肉めいた二つ名だ!」

……クルースニク? いや待て、あれじゃないよなあ?!! あんなのだったらマジでマズイぞ!」

「え、エヴァとりあえず出してくれないか？」

「いいだろう、**アデアット!**」

するとエヴァの今の服から黒いローブ姿になり、赤く目が光る、そして髪の毛が浮き上がり、帯電した漆黒の翼が背中から出ている……さ、最悪だあああああああああああああああああああああああああ!!!

式 「なんてこつたい」

エヴァ 「な、なんだ？！ 力が溢れるぞ？！ フハハハ、今
 だったら全人類を相手にしたって勝てるぞ！！」

実際その通りだ、その力はかつて数百万人単位で虐殺した”世界の敵”であり、全ての救いを拒んだ聖職者の力なんだからな、三日あれば世界なんぞ破壊できるだろう。

とりあえず戻すときは「去れ（アベアット）」だそうだ。俺はそれに従い、服装がもとに戻る、仮面はしてないさ。

エヴァ 「とりあえず、お前のコピーカードを渡すぞ？ お前も私のカードをコピーして渡せ」

そんなこんなでカードを渡していく俺、とりあえず影の倉庫に専用の場所を作りそこに保管する。

そんなこんなで魔方阵から出ようとするとき、エヴァが胸を押さえて苦しみます。

式「エヴァ?!!!!」

エヴァ 「え？ き……」

式 「き？」

エヴァ 「きゃあああああああああああああああ！
！……！」

式 「ガガーリン……！」

良いアッパーだ……あれだ、一言言つか「地球は青かった」

決闘のS / 選んだ答え（後書き）

「こいや!! この出来立てホヤホヤカップル!!」

「うるさいダメ作者!!」

作「くそう、お前らのやつ書いてるとき、マジでわかんなくて悩
みまくったんだよ!」

「慣れないことするからだよ」

「エヴァ ナイスだ作者、次は私と式のデー

「ストップ、次は閑話だ」

夷「またか?!」

「ああ、それと夷、俺が前にお前に言ったこと、覚えてるか？」

夷「なんだよ、あれか？ 二十万いったら閑話……まさか？」

「すまん、行っちゃった」

[illegible]

夷「こんな駄文に?!?!」

「正直驚いてる……ネギま効果すげえと」

エヴァ 「では次は？」

作 「現代に戻って木乃香たちの閑話」

夷 「おいおい、俺とエヴァは出番なしか？」

作 「まあな、あれだ、設定上ではお前が居なくなつて一年後の設定だ」

夷 「……木乃香、刹那、素子すまん」

作 「まあ、お前の設定も書くから、かなりの長編になるかもな」

エヴァ 「どのくらいなんだ？」

作 「設定も入れると二万文字くらい？」

夷 「多い！！ 多いよ！！」

作 「だってお前の設定で一万文字いきそうなんだもの」

夷 「マジでか！！！」

作 「つつか今回のおにさんこちら、は大丈夫なのか？」

夷 「それよりも俺は、フェイクとの掛け合いのあのセリフを言うてもいいのかなあ」

エヴァ 「ではしめるのか？」

「ああ、頼んだカップル！」

夷「ああ、んじやしめますか」

「フン、いいだろう次回……」

夷&エヴァ 「感謝感激雨あられ」

夷
「次回も……」

「見ないとエクスキューションソーードで消すぞ？」

作「さて閑話書くか」

「宿題やんなくていいのか？」

「大丈夫だ、終わってる」

[illegible]

「このバカどもが」

フェイク 「次回もお楽しみにー、そんじゃあなー」

「と書いたのですが修正したので、次回バカ×結婚×戦争開始」

夷「誠に申し訳ないです、この駄作者をこれからもよろしく願

い
し
ま
す
「

バカ×結婚×戦争開始（前書き）

だいぶ遅れました……全然書けません、今回は強引な展開ばかりで納得いく出来ではありませんが楽しんでいただけたら幸いです。

ハヤテ様、クロワッサン様の小説とクロスしていますので気になった方は『IS 「白を纏いしHeaven Sword」』と『これはゾンビですか？』いいえ、ただの？病弱です』、で検索してみてください。とても面白いのでぜひ読んでください。

いつの間にやら三十万アクセス、いやはや作者は見たときに思わず息をのみました、これも皆様、読者様のおかげです、本当にありがとうございます。これからもよろしく願いたします！！

ではどうぞ！

バカ×結婚×戦争開始

久しぶりだな、式だ。

……あれから何年もたった、つうか十年以上たったよ。早いなあ、スクスクと育っていく弟子たちを見ていると子供を育てている様な気持ちが出たよ。まあ結果だけ言うとなと詠春と

桜と明人……強くなったよ。一年前に三人に対して鬼ごっこしたら……不生不殺を攻略された、嘘だと思ったかった、さすがの俺も手加減に手加減をかけて真心までかけたんだが詠春が罔になって、桜が呪術と斬鬼の音撃で拘束され、明人に式の太刀をぶち込まれて、手加減しろよ、つうかあのとき黒式使ってたから半妖だったんだが？ あやうく消されるところだった……（まあそのあと喜んでるあいつらの鬼ごっここのレベルを上げたのは仕方ない）まあ、俺が育て上げたせいかな……桜が素手で詠春を圧倒しやがった、あいつ真剣持ってたんだが？ あれか？ 虚刀流の動きを教えたからか？ ……この前、笑いながら師範代クラスの人間を素手でボコボコにしていたんだが……うん、母さん、あんたを魔改造しすぎたよ。

詠春もひどいよな、何度も何度も死の淵に追いやったらそのたびに一段階くらい強くなっていったんだが？ この戦闘民族だよ、大妖怪クラスを単独で残滅しやがった……「近衛」の俺だったら負けるな。このごろは達観してきたのか一人称が俺から私になってたな、つうかあいつこの頃白髪が生えてきただろう！！ この前洗面台の前で「……白髪染めすべきか？」とかなんか命かける戦いに行くような眼をしてたぞ？

明人は……結婚しやがった、うんもうさ、なんか結婚式に出させてもらったんだが……すごくうれしかったよ、息子が嫁さんもらって幸せそうな顔したら、うんリア充？ ふざけんなよ？ 愛し合う二人を邪魔する奴は馬に蹴られて殺して解して並べて揃えて晒してやるつ、つうか出てこい。……まあ、あいつに結構相談されたよあな

どんな事したら女は喜ぶかとか、ケンカしたらどうしたらいいとか。まあ俺の場合だと女装したりベットのう　ゲフンゲフン、にやんにやんしたり。ケンカしたら？　終わる世界に術式兵装、それにアーティファクトをフルに使ってくるからな？　別荘を何回壊したと思ってるんだよ、十数個だよ。もうあれだよ、エヴァなんてアーティファクト使ったらチートになるぞ？　再生早いわ、移動速度が音速超えるわ、上級魔法は連続して撃ってくるわ……アグレッシブだなあ。

そしてときどき寝ぼけて別の世界に行ったりしたよ、ときおりゾンビやら吸血忍者やら零崎やらがいる世界……まあ臆って奴にすべて任せておいたが二度目には少し怒ってたなあ、怒ったら性格違うしほかの人たちも襲ってくるんだが……一撃で全員の攻撃弾き返したら顔を引き攣らせたんだが？　それとISとか言う世界にも面白い奴もいたし、たしか一夏だけ？　つうかほかの世界も融合しててなかなかカオスだったが面白かったな、天剣とか言う奴等も面白かったし、あとは平行世界の俺にもちよっかい出したな、まあいいだろ。

色んな世界にちょっかい出していたら、いろんな奴に追われて、戦って、見取って、仲良くなって、変身して、カメンライドして、つて前の二つは同じことだ。

まあそんなこんなで京都に十年いたら、いつの間にやら居ついてしまった……まあ鬼やら妖怪やらと酒飲んだり、修業したり、いじmゲフンゲフンなんでもないです。

式　「……で、俺はなんで麻帆良に居るのかね」

エヴァ　「仕方ないだろ？　今の私たちは関西呪術協会所属だぞ？」

で、なぜか麻帆良に来てしまった……つうか栄子に頼まれたんだが麻帆良に親書を届けてこいと言われました。今日は狐の仮面だぜ。

チャチャゼロ 「ソウイエバ今日ハナンカウルサイナ、祭り力？」

式 「確か『麻帆良祭』やらなんやらがやってるはずだ」

エヴァ 「面白そうだな、行ってみないか？」

式 「でお前はナチュラルに胸を当ててくつつくな」

周りの目が痛い、つつか男の嫉妬の眼が痛い！！

エヴァ 「ふふふ、お前は何年たってもそこはウブだな」

式 「最初の方は知識なくて真つ赤だった頃のエヴァに戻ってほしいよ」

チャチャゼロ 「夫婦漫才モイイガドウヤラ来タミタイダゾ？」

式 「ようやくか？ 一時間遅れだぜ？」

今俺たちは麻帆良の入り口で待たされていた。

目の前からフード被った麻帆良の関係者が来た……怪しいよ？ つつか結界の認識障害なかったら通報されてるよな？

魔法使い 「ようこそ麻帆良に両義式様、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル……様」

……なあキレていいか？ ここ破壊してもいいか？ こいつ因果ごと破壊してもいいか？

つつかエヴァの賞金も十年前に凍結されてるんだから別にいいだろ

うが。

式 「まあいいさ、んじゃとつとおつかいを終わらせますか」

エヴァ 「そうだな、帰りはここでデート」

チャチャゼロ 「緊張感ネエナ」

||||| 学園室

近右衛門 「そうかあなたたちが……闇の福音と黒の死神ですか」

……あれ？ 俺の眼は正常か？ 目の前の人物は三十年前の近衛近右衛門……まあ四十代いつてるだろうが頭が……正常だと？！！あれか老後から伸びたのか？！！ つうか髪の毛フサフサ！！しやべり方違っし！！

式 「あ、ああそうだな」

エヴァ 「どうした式？」

式 「い、いや知り合いの事を思い出してた」

近右衛門 「まあいいですよ、お二人方はこれからどうするのです

か？」

式 「うん？ まあ麻帆良祭を見て、そんで帰るよ。あんたらも俺らが居ると色々と困るだろう？」

近右衛門 「……申し訳ない、栄子がお世話になっているというのに」

エヴァ 「まあ仕方ないだろう、私たちは悪の魔法使いだからな」

式 「……俺、一応魔法剣士（？）なんだが」

エヴァ 「素手で鋼鉄切り裂いた男が剣士か？ 拳士の間違いじゃないのか？」

式 「だから虚刀流は剣法だからと何度も」

エヴァ 「ありえんだろうが！ 無刀の剣士など！！」

式 「うつせい！！ 無刀なめんな！！」

エヴァ 「謝れ！ 剣士に謝れ！！」

近右衛門 「あ、あのー」

式&エヴァ 「「ああ？！！」」

近右衛門 「い、いえ（めっちゃこええ！！）」

そつえばとある世界で思考を読み取れる能力も手に入れました、

ON/OFFもできるからなあ。つうかこの頃は見稽古封印してるんだよなあ、見取りすぎて自分でも把握してないからな。

近右衛門 「で、では武闘会でも見たらどうですか？ ちょうど今ぐらいでは決勝戦でしょうから」

式 「良いかもな、エヴァは？」

エヴァ 「別にいいぞ？ お前と一緒になら」

チャチャゼロ 「ゴ覧ノ有様ニラブラブダヨ、ドウニカシテクンナイカ？ 甘スギテ酒マデ甘クナツタンダガ？」

近右衛門 「若いつていいなあ」

チャチャゼロ 「……チナミニコイツラニ寿命ハナイゾ？」

式 「結構いるんだな」

エヴァ 「ふん、暑苦しいだけだろ？」

ただいままほら武闘会に……すまん飛びすぎだよな、まあ仕方ない文句は作者に言ってくれ。もうだめなんだあいつ。

アナウンサー 『さあーさあーやってまいりました、決勝戦』

あれ？　なんか出てきたのは赤毛のガキなんだが……　なんちゅう魔力だよ、木乃香くらい、いやちよつと下かな？　にしてもあの顔どつかで見たことあるんだよな……　えーと三歳ぐらいの時に父さんの書斎に行ったときに見た様な見てないような。

アナウンサー　『さあ今回は自称天才の　』

？　「へっ！　御託は良い、さっさと始めろ！」

アナウンサー　『まあまあ、さあ紹介しましょう！　今回、飛び入り参加の十歳の参加者！！　　ナギイイイイイイ！！　スプリングフィールドオ！！』

|||||ナギ視点

よお！　俺の名前はナギ・スプリングフィールド、俺は最強の魔法使いになる予定の男だ！！　覚えておけ！

親父の魔法学校を中退して適当に流れ着いたのは……　日本の魔法学校、麻帆良学園、そこで武闘会するって話じゃねえか！　何でも最強を決める大会だとか……　最強の魔法使いになるんだ、この程度ぶちのめしてこそその魔法使いだ！！　（激しく違ってますが？！！　作者）

まあ軽く乱入したら弱い、弱すぎて欠伸が出る。もう少し骨がある奴いないのか？　（ちなみにナギの無詠唱の魔法の射手は軽くコンク

リート砕く程度の力)

まあ最強だからな!! 俺が強すぎるのか。

ナギ 「はっ! この程度かよ、もっと強い奴はいないのかよ?
今なら戦ってやるぜ?」

アナウンサー 「強い! 強すぎるぞ!! 弱冠十歳にしてこの
強さ、決勝戦を数秒で終わらせたー!! さあ誰か、誰か奴を止め
る奴はいないのか?!」

まあ、居ても敵うはずねえよ、だって俺だしな。まあこれで賞金も
もらったし、また旅にで

? 「はっ! その程度で満足してるのか?! ナギさんよおお
おおおおお!!」

次の瞬間、舞台に誰かが飛び込んでくる。

見てみると変な仮面を被った、着物だっけな? そんな服着た奴が
舞台に立っていた。

? 「さあさあ来ましたよ、来ちゃいましたよ、来てやったよ、挑
戦者だ」

ナギ 「……何者だよ、あんた」

? 「あんたじゃない……マスク・ザ・零崎だ!!」

ナギ 「面倒だからゼロザキな?」

零崎 「いいぜ? ほらナギさんよお、御期待にそって現れてやつ

たぞ？」

アナウンサー 『今度は変な仮面が乱入しやがったぞお！！！！！
どうなるまほら武闘会！！ 挑戦者の名前はマスク・ザ・零崎！！』

変な野郎だが……不思議とオーラみたいな威圧感を感じるぜ、久々に大物かよ……これだから戦いは面白いんだよ！！

ナギ 「はははっはは、おもしれー、おもしれえぞ！ ゼロザキ！
」

そういうと変な仮面を被ったゼロザキが構えをとる。
俺も構えを取りながら……どうどうと名乗る。相応の相手でしな、それにカッコいいだろ？！！

ナギ 「俺はナギ・スプリングフィールド！ 将来、最強の魔法使いになる男だ！」

零崎 「いいだろう、俺はマスク・ザ・零崎！ どこにでもいる……
…仮面マニアだ！」

訂正するよ、コイツただの変人だっ！！

|||||||マスク ではなく式視点

やっべー、勢いで出てきたはいいがこれじゃ変人だよな？ まあいいな、残念ながらこの十年間で仮面中毒が酷くなりすぎて、他の世

界の仮面やらマスクやらとって来たしな。例に出すとある大佐の仮面、とある反逆した王子様の仮面やら、元ネタを知っていた仮面もあったがオリジナルとってきました！ まあ色々、運命変わっちゃったときはその世界の神と戦ったがフルボッコできたんだが？

……あれ？ 神ぼっこっていいの？ まああの世界の神だし、神様はなんも言ってこないしいんだろ（実は神様はため息ついています）

まあ目の前のナギを見る、十歳としては強いほうだろう……こんなガキが両義式と共闘して世界救うのかよ……って式って俺じゃん！
！ まああの両義式は出てこないのか？ おかしいなもうすぐ戦争なんだが？

ナギ 「行くぜー！」

むっ？ なんだ無詠唱の魔法の射手か……遅延魔法で体の周りに展開させる、ひい、ふう、みい、よお……九つか、まあこの年ならすごい才能だな。居るんだな、天才って、いやバグキャラ？

ナギ 「オラオラオラオラ！」

零崎 「無駄無駄無駄無駄！」

魔法の射手を素手で弾き飛ばしながらどこぞのタイムストッパーよろし叫ぶ。

うーん、この頃キャラ崩壊が激しくなってるな二週間ぶりはキツイな……メタ発言はここまでだ！！

ナギ 「なんだよ！ あんたは！」

零崎 「残り百八十秒、それまでに俺を捕まえてみる」

[illegible]

ナギはさらに無詠唱で魔法の射手を出す……制御がなっちゃいないな、所詮は魔力でのゴリ押しか、んなもんで勝ち続けられるほど世界は甘くねえんだよ。

俺は着物の袖からとある世界で覚えた劉と呼ばれる、一種の生体工
ネルギーを使い糸状にする、そのまま展開している魔法を切り裂く。

ナギ 「嘘だろ?！」

零崎 「まあエミヤのバカ野郎と同じこと言っが……全力で来い、さすれば、この身に、届くかも知れんぞ?」

とある世界に行つたときに出会つた英霊の事を思い出す、元気にやつてるかなあ、とりあえずあの世界の歪みは全て殺したし……いや、まさかあんなところで死徒二十七祖と戦うことになるとは、いやはや勝つたけどな。そういえば影の倉庫、もとい武器庫の中にあの『約束された勝利の剣』をもらつたんだが……使い道ねえよ！ 現代に戻つたら刹那にでも上げようかな、つつかメモリあるし大丈夫なのか？

ナギ 「くそがつ！」

単純な魔力の塊をぶつけてくる、それを蹴り上げて回避すると目の前には拳を振るおうとするナギが居た。今の一瞬で瞬動で近づいたのか……末恐ろしいガキだな、こいつマジで。

零崎「良い攻撃だ、思い切りもいい……だがもう少し周りを見る」

俺は糸でナギの体を止めるとナギは驚いたような顔をしながら俺にらむ。

なるほど、あの大量数字マニアこんなことしてたのか……あいつやっぱ趣味が悪いな、つうかこれに輪切りにされた俺って……orz

ネギ 「な、なめんな……こんなもん引きちぎってやるよ！」

零崎 「頑張れ頑張れ」

後六十秒、さあさあもつと見せるよ、お前の力を。

ナギ 「なめんなあああああああああああああつ……！」

強引に疑似魔力暴走で引きちぎったな、ヘタすりゃ暴走して吹っ飛んでたのにな……アホか？ 父さんから聞いた話じゃ、鳥頭やらアンチヨコ見なきゃ詠唱できないとか何とか……うん才能の塊じゃなけりや宝の持ち腐れ、豚……いや鳥に真珠？ まあいいや。

アナウンサー 『すごい、すごいぞおおおおお！ 何者だ？！ あの仮面の人物は……！ 圧倒的です……！』

ナギ 「黙ってろ……！ 今逆転してやるよ……！」

後三十秒、そろそろ本気ださせるか？

零崎 「はっ！ この程度かよ、自称最強の魔法使い（笑）は」

ナギ 「くそがあああああああああああああ……！」

ナギがこぶしを握りながら突っ込んでくる、魔力を込めており普通の人間がくらえばとてもスプラッタな物が見えるだろう。まあそれを障壁で受け止める、こんなもんじゃねえだろ？

零崎 「こんなもんか？」

ナギ 「あああああああああああああああつ！」

叫びながら自身の拳に魔力を込める、すさまじいの一言だな。まだ荒いがこれがうまくなればどれだけ化けることか……将来に期待だな、余剰魔力が体から漏れ出して光ってやがる、うゝん完璧に俺が悪役だな……殺人鬼だけだな！！

ナギ 「ぶち抜けるおおおおおおおつ！！」

夷 「残念時間切れ」

ナギの体内に埋め込んでおいた鋼糸から衝刺を放ち、ナギの意識を奪い取った……はずだった。

ナギ 「があああああああああああつ！！」

夷 「ゑ？」

決まっていたと思っていたら気力が、それとも俺がしくったかわからないがナギがこぶしを依然として握りながら突っ込んできた。あらま、まあいいさ。そのまま突っ込んできたナギに回し蹴りを叩き込み、場外に吹っ飛ばす、派手に壁にぶつかり今度こそ気絶したらしい……マジで末恐ろしいガキだ。

夷 「まあ、及第点かな？」

アナウンサー 『しょ、勝者！ 謎の仮面人間、マスク・ザ・零崎
イイイイイイイイイイイイ！ 素晴らしい戦いでした！
！』

そんなことを言っていたが俺は瞬動を使い、エヴァの元まで戻る。
エヴァは……カップラーメン食ってやがった、ああ百八十秒、つまり三分で終わらせてやろうと思ったたら食われてた……ちくせう。

エヴァ 「おお、格下相手に何分待たせてるんだ？」

式 「うつさい」

仮面を狐に戻しエヴァからカップラーメンを奪い取り箸ですする、
がここで思い出してくれ俺は……猫舌だ、つまり

式 「あちゃあああああああああああああああああ
あっ……！」

〓〓〓〓〓〓それから数日後
式 「もーいかい」

？ 「まーただよー！」

？ 「式さん？ 手加減してあげてくださいね?!」

？ 「大丈夫なんやろうか……ウチ心配になつてきたえ」

はい、式です。あれから京都に戻り数日間がたった、賞金は全てナギに渡しておいた。まあ金はあつて困らないよな？ 俺？ 色々と平行世界とかで商売してるから、つい最近だと四十口径のIS用の銃を作ったな、あれ？ 三年前だっけ？ まあいいや、広くやつている……主にフェイク（俺の分身）に丸投げしてる、月何億も送られてきて何に使うんだ？ とりあえず孤児院作ったり（俺の分身体偽装済み配置）株に投資してみたり（なぜか当たる）魔法関係の道具作ったり、おもちゃ作ったり、仮面作ったりと……うん普通だ。

？ 「式はーん？」

式 「すまん考え事してた、えーともういいかい？」

？ 「もうええよー」

今遊んでる子？ ……何の因果か、三歳の天ヶ崎千草さんだよ。

そして父親の睦月^{むつき}、母親の望^{のぞみ}十年前、睦月と会い、そこで式神を見せてもらったんだが……未来に千草さんに見せてもらった猿鬼だった。あれだ、過去にこんなに干渉していいのか？ 平行世界にすげえ手を出しているが一時期は紫ババアに追われ、ひどい目にあつた……幻想入りなんざしてたまるかよ。

三歳の千草さん……千草と呼んでいるがな、いい子だよ？ まったく親に似ないで育つてくれてありがとう。

睦月 「式さん、ひどい事考えてません？」

式 「気のせい、気のせい嫌だなー睦月」

睦月 「それで何度あなたに危険にさらされたか」

……正直に言うぞ、それお前が突っ込んで行った結果だからな？

憑依系の妖怪に疲れたときに式の太刀で助けて、囲まれていたときは巻き込み覚悟とある世界の冥王様の砲撃を撃ち、札も持たずに仲間を助けに行った時など怒りを通り越してあきれた。ともかくこいつにはかなり苦労させられた。

望 「……式さんに何度も助けられたのに、それはないわ」

睦月 「い、いや修業などは」

望は現在、主婦をしながら術者としても活躍中、こっちは睦月のように猪突猛進ではないが……最初はめっちゃ嫌われてた、まあ親父さんの腰の骨を蹴り碎いたらしいから（今では笑いながら酒飲む仲間）一番最初は飛び蹴りされました……つうか千草さんと似すぎててびっくりした、まあ母親似だったんだなあ。

千草 「はやくー！ 式はん！」

式 「了解、んじゃ遊んでくる」

ちなみにチャチャゼロは修行僧たちを百人抜きをしている、エヴァは最近ハマって来たのか生け花……正直、やってる姿はグツときます、すんまんせん本気で惚れました……なんか批判きそうだが作者頼んだぞ？

今日はめでたいことに弟子の結婚式、まあ詠春のだが……まあ相手は桜なんだがな。

つつか早いなあ、十数年なんて長いと思ったら意外に短いぜ、あんなに小さかった詠春が結婚か……明人もそうだが弟子が結婚するとさびしいが幸せになるな。

式「つつかお前はもう少し精神面で強くなれよ……たぐどこで間違えた？」

詠春「う、うつうつ……」

明人「いい加減にしろ、そろそろ式だぞ？　つつか二年も待たせやがって」

そうなんだよ、このバカは付き合って四年近く、まあ無意識にイチヤイチヤしてたからそれ以上かな？　そんなこんなで二十歳過ぎて桜が強硬的に婚約しました……方法？　ただ斬鬼と共に本山に殴り込みかけただけだが？　全滅しかかりました、エヴァが色々と教えるから……ああ、怖かった。

夷「まあ大丈夫だろ？　あんだけのことやって振ってたら殺してたぞ？」

詠春「私はどうしていつもいつも……」

夷「それはいつもだろうが……はあ、お前はだからヘタレなんだよ」

明人「というよりも往生際が悪いぞ？」

詠春 「あ—————う!—!」

……だめだこりゃ、どうする？

1・ぶっ飛ばす

2・こぶしでぶっ飛ばす

3・蹴りでぶっ飛ばす

4・次元のあなたにボツシュート

……碌な選択肢がねえよ、まあ仕方ないか。

夷 「おら逝って来い、そんで幸せになってこい」

詠春 「……はい」

|||||そのころ、女性陣は……（三人称視点）

エヴァ 「よし……きつかったら言え、今日はばっちり決めてやるからな」

桜 「ありがとうな、エヴァさん」

栄子 「まあまあ、やっぱり筋がええ、エヴァさんの作る服はええよ」

エヴァ 「ふふふ、正直作るのに一週間かかったからな。会心の出

来だ」

鶴子 「すごい！ 桜さんきれいや！」

桜の着付けを満足そうにするエヴァ、心なしか表情も緩んでいる。

白い和服を着る桜は美しいの一言に尽きる。エヴァはこれを作るために一週間別荘に引きこもった、材料は全て夷が能力で作ったものである（本気で作ったので夷用にもう一着作ったのは秘密だ）今日は結婚式だが出席者は少ない、夷にエヴァ、明人にその娘である鶴子、栄子、そして近右衛門は来ていない（仕事を立て込んでいたそうで血の涙を流したらしい）

なぜ……と疑問に思うだろう。近衛家の一人娘である桜と結婚する詠春はゆくゆくは関西のトップとなるだろう。結婚式は盛大に行うべきだろうが桜が拒否して、大きな結婚式の前に親しい人たちと式を挙げたいと言ったのでこの結婚式が決まった。

桜 「ごめんな、母様もエヴァさんも鶴子ちゃんも、ワガママを言っ
てまって」

鶴子 「ええんや、幸せそうでよかったえ」

栄子 「まったくあんたは少しワガママでええんよ」

エヴァ 「まったくだ、誰に似たんだか……」

桜 「ふふふ、ありがとうな。ウチは幸せ者やな」

嬉しそうに笑う桜、とてもじゃないが詠春との結婚のために本家に突撃した者には見えない。そうして立ち上がり、神社に向かう。近衛家にある小さな寺の前に行くためだ。

桜 「……なあエヴァさん」

エヴァ 「なんだ？」

ちなみにチャチャゼロは御留守番である、今頃やけ酒を飲んでいるだろう、それにより夷の秘蔵の酒を飲み、ひと悶着あるがそれは別の話。

そして寺の前まで行くと詠春が待っていた。周りには夷たちが待っていた、ちなみに夷は仮面を取り素顔を見せていた。

式 「来たか、似合ってんぞ」

桜 「ありがとう……先生」

式 「なに弟子のためだ……先に言っておく、幸せになってこい！」

式が優しく笑いながら道を開ける、そのまま進んで行く桜。
そして詠春の前まで行き、見つめ合う。

詠春 「……さ、桜」

桜 「言葉はいらないんや、詠春……いや詠春さん」

そのまま距離を詰める桜、詠春は一瞬身を震わせるが覚悟を決めたように桜の肩を掴み、そのまま口を開く。

詠春 「自信はない……けれど私でよければ……夫婦になることを許してくれ」

桜「……はい」

そのまま二人は距離を詰め、唇を重ねる。

式は笑いながらどこからか出した笛をだし演奏する。エヴァは少し羨ましそうに見ていた。栄子は笑いながらうつすらと目に涙をためていた。明人は鶴子を抱き上げながら優しくそうに笑っていた。鶴子も笑っていた。

そのまま宴会モードに突入し、夷が酒樽ごとがぶ飲みしたり、桜が詠春に抱き着いて詠春が気絶したり、子供モードのエヴァが鶴子と遊んだり……そうして楽しい時間は過ぎていった。

||||||翌日（式視点）

あ、頭が痛い、さすがに樽三十個はきつかったか……酔いつぶれたぜ、くそ頭がガンガンする。

式「あーう、詠春ー！ 水持って来い……ウブ」

やべえ気持ち悪い、このまま酒をリバースカードするわけにもいかないしな……エリクサーでも使うか？ 意外といろんな世界のエリクサーあるんだよな、全部まづいがな。

式「詠春？ ……あ？ なんだこの紙？ えーとなになに……ハッ？」

そこに書かれているのは詠春の文字、見間違えるはずがない十年以上の付き合いだ、そのぐらいの事はできるが……内容が。

詠春 「すいません、まだ自分に自信が持てないので修業に行つてきます。心配しないでください、必ず帰ってきます」 近衛 詠春

[illegible]

すっかり忘れてた……父さん、修業に出るんだった、やつべもう十年以上前の記憶なんざ忘れてるよ！……まあ素子や木乃香たちは忘れてないぞ？

ど、どないしよう。

そんなこんなでも時間は過ぎていく、初めは桜は泣いていたがなんとか持ち直し、いつか帰ってくる詠春のために花嫁修業いじめをしていた。たまにエヴァと旅行に出たり、鶴子の修業いじめをしたり、ケケケざまあ！！　まあ睦月たちとも親交を深めたり、千草と遊んだり……色々あった、んでまた平行世界にちよっかい出しながら適当に実力を高めながら適当に暮らしていた……そして

栄子 「式はん……戦争が。ヘラス帝国とメセンブリーナ連合が戦

争を始めよつた」

物語は動き出した。

バカ×結婚×戦争開始（後書き）

作 「久々のネギラジオ！ ゲストは最強の魔法使い（笑）」

ナギ 「（笑）じゃねえよ！！ つうかなんだよ、あの扱い！ さらに展開モロモロパクってるだろ！！」

作 「……うん、少し変えてるけど鋼殻のレギオス十二巻のリテンスVSレイフォンだな」

ナギ 「俺が噛ませ犬みたいな感じだろうが！！」

作 「だから最後に反撃させただろ？！！ 当初では圧倒するつもりだったのに！！」

ナギ 「なんで入れたんだ？」

作 「実は読者の方からリテンズの台詞を使ってほしいとあったんで」

ナギ 「そうなのか？」

作 「ああ、色々と迷惑をかけてしまったしな。せめてもの罪滅ぼしに書いてみた、一応夷は剋が使えるからな」

ナギ 「でもさ、剋って武芸者とかしか使えないんだろ？ なんて使えるんだ？」

作 「ああ、実は吸収の魔眼の能力で剋を吸収、そしたら使用可能

に……」

ナギ 「むちゃくちゃすぎる!!」

作「仕方ないだろ？ まあ次回から少し夷には退場してもらって戦争を書くぜ、主人公はナギ、お前だ！」

ナギ 「当たり前だろ？俺は最強なんだからな！！」

「まあ原作崩壊はするかな」

ナギ 「マジか？」

作「ああ、とりあえず詠春は原作より強くなってるし、とりあえずお前はアンチヨコなしで詠唱＋オリジナル術式でもやっておけ」

ナギ 「おい
いいい
いいい
いいい
いいい
いいい
！！
なんじゃそりや！」

作「H A H A H A、これから学校もあるから絶対遅くなりますので、そこら辺はあしからず。それとオーズ一年間お疲れ様でした」

ナギ 「関係なくね?！」

「いいんだよ、感動できたしフォーゼに期待してんだよ」

ナギ 「本当に特撮好きだな」

作「ふふふ、ゴジラシリーズもいけるぜ。また作ってくんないかなあ」

ナギ 「まあ無視してしめるか、次回「紅き翼」」

作 「では次回も」

ナギ 「見ないとぶっ飛ばす！」

作 「でだ、今閑話も書いているんだが……」

ナギ 「へえ、何書いてるんだ？」

作 「いやクロスさせてもらっている、ハヤテ様の朧くんの世界に行ったという話を書いているんだが」

朧 「どうも」

ナギ 「ゑ？」

作 「許可はもらっているから書いているんだがな、今度の戦争の終盤くらいに入れたい」

ナギ 「嘘だろ、おい!!」

作 「良い表情だ、それが見たかったのだよ!!」

ナギ 「誰かこいつ止めるおおおおおお!!」

主人公設定とオマケ（前書き）

今回はノリで作った夷の設定を書いています。

本編未使用な物まであるのでネタバレが嫌な人は戻ってください。

いいですか？ それではスタート!!

主人公設定とオマケ

主人公設定

両希夷りょうきえい

年齢 八歳

好きなもの

甘い物、仮面ライダー、豆腐、木乃香の笑顔、天道語録、動物、飲み仲間の鬼たち、刀集め、刹那の噛んだ時の顔

嫌いなもの

自分を実験した天使、両義式、近衛の名しか見ない者、女装、鶴子との特訓、正義の魔法使い、殺すこと

性別 男

容姿

ぶつちやけ美少女にしか見えない、空の境界の両儀式の顔とそっくりだが少し男らしさがプラスされた感じである。髪の毛は黒で腰まで伸びている、邪魔なので一つにまとめている、まあポニーテールのような髪型。町を歩くと十人中十人振り向くであろう男の娘。本人は気にしてないが時折見せる、女の顔に周囲の人は『両性類？』とまで言っている。本人は男だと言っているが……。

参考

前世では両親が早く死に、親の愛情というものを知らないらしく、詠春や桜の愛情が新鮮だったようで、人の好意というものには人

倍嬉しさを感じる、が自身に好意……つまり好きという感情を相手から読み取る能力が著し損なっていて（鈍感とも言う）そういうことに關してはまったく気づいていない。（素子や刹那の感情も弟感覚か、修業仲間だからという風にしか見ていない）前世では温厚で人当たりもよく交友関係も良かったらしいが彼女はいなかったらしい。

事故で死んだ時（本人は覚えていない、実験の弊害らしい）天使であるルシフェルの実験台となり魂の転生を受け持つ部分をいじられ、消滅させられそうになったが神がなんとか力を注ぎこみ魂だけはつなげられた（そのとき注がれた神力のせいで霊脈と契約してしまつた）チート能力をもらい転生したが……捨て子であつた、そのとき近衛詠春と近衛桜に拾われ、息子となり近衛夷となつた、そして八歳のとある道場での試合で捨て子であることカミングアウトされてしまい、近衛の名を継げなくなつた。

肉体は普通の子供だが……徐々に神力が体に定着しており、人間と言うよりも天使になりかけている、魔力はナギ・スプリングワールドの二乗だが現在も成長中であり、夷は霊脈と契約しているので実際の魔力は無限である。気は普通だがこれも成長中であり、現在は大戦中のラカンより少し少ない程度であり、霊脈を使えばこちらも無限になる。これらは胸の首飾りでリミッターをかけている。ほかに妖力の使用が可能になっている（誤って妖怪の血を飲んだため）魔力、気のリミッターは五段階に設定してある、そして妖力のリミッターは三段階に。事実上、全てのリミッターを外すと赤き翼全員と戦つても勝てる力があるが……妖力、魔力、気が完全に扱えていないので本気を出すと自身の力のせいで体が爆散してしまう（一度だけそれをして本当に吹き飛んだらしい）身体能力も無駄に高く、撃たれた弾丸すら見て避けられるほどである、感覚神経の反応がクウガのペガサス並なので五分間程度なら新幹線の動きすらゆっくり見えてしまうがその後は反応が少し鈍る。この頃は強化なしで龍種すら片手で倒せるようになったらしい。

弱点という弱点はないこともないが……熱いものが苦手でいつもフーッしないとお茶とか飲めないらしい。妹の木乃香にめっぽう甘く、本人は厳しくしてるのだが肝心の所が甘いので意味なし母親に女装をされて月一くらいの頻度でやってるらしい、売ると軽く万はいくらしい。仲間が傷つくとめちやくちやあわてる、初の刹那の怪我の時は包帯を持つてくるほど（実際は転んだとき軽く切っただけ）嫌いなものの両義式と正義の魔法使いは親の仇のように嫌っている。両義は自分と似ていて、転生者の可能性があり麻帆良で魔法使いに英雄のような目で見られるのが嫌だからだ、後は麻帆良にいる、アスナや真名や刀子やシスターシャークティを残していることにひどく怒っている、しかしオーバースキルと呼ばれる所以である多彩な才能には感心している。正義の魔法使いにはただの『正義』の意味をはき違えている奴等としか思っていない、調べてみた正義の魔法使いの末路には反吐が出るほど嫌っている、木乃香の麻帆良行きを反対したのは木乃香の力を狙って暴走する奴等がいるかもしれないから（実際夷が七歳の時に一部が暴走して木乃香を誘拐したが偶然来ていた夷が撲滅し、学園長は激怒し魔力を奪い辞めさせた）後は実際にさらに来た魔法使いの考えが信じられないほど狂信的であったからであつたから（このせいで東西で戦争が起きかけた）最近の悩みは女装に慣れてきた自分がいることと木乃香のブラコン具合である。

ちなみに神からもらった能力は仮面ライダーカブトとアクセルに変身、成長限界突破の才能、刀語の見稽古の能力、どんな道具でも創造できる力、さらにおまけの魔眼（この頃神眼になりかけている）

使用武器&装備

・木刀（二本）

麻帆良の世界樹から少し拝借してきた木でできている木刀、長さが両方違うので夷は右手に長い木刀、左手に短い方をもった二刀流で戦っている。神木で作ったせいか悪霊や下級の妖怪なら斬っただけ

で消滅する。

・ヒビイロノタチ

仮面ライダーカブトの装甲であるヒビイロノカネで作った長さが違う二対の太刀、刀身が赤く（朱色）染まっており繰り出される斬撃には魔力が込められており斬撃を飛ばせる。元々はカブトの状態で使える太刀が欲しかったから作ったが普通の時にも使えるようにした。すべてが（柄まで）ヒビイロノカネでできているのでダイヤモンドすら両断できる硬さを持ちがこぼれなどしない。ここで説明しておくがヒビイロノカネとは日本に伝わる金属であり、正式名称は『ヒビイロカネ』伝説のオリハルコン級の超金属である。

・エンジンブレード

言わずとも知られた仮面ライダーアクセルの武器、ガイアメモリの力を発揮するための武器であり斬撃系の武器でも使えるが魔改造され、結界破壊、魔力増幅機能、魔力、気を纏わせることが可能となった、重さは三十キロ、人間が使える携行武器の重さではないが劇中……つまり仮面ライダーWでは鈍器のように扱っていたが、夷は片手でも振るえるので剣の役目是可以する。

・カブトガジェット

三機作っており、情報収集能力、索敵機能、ジャミング機能があるガジェットなのでギメメモリもある。ゼクターをもとに作ったので外見はゼクターそっくりである、AIがあるので自立行動可能、角つまりカブトホーンは厚さ150mmの鉄板すら貫通可能な硬度を持っている。

・妖刀・怪^{あやし}

偶然夷が五歳の時に見つけた妖刀、元々は名刀だったが人の血を吸いすぎて妖刀となった刀、血を求めており夷以外が触れると乗っ取られる。刀身は真っ赤な血のような色であり、封印していたのだが夷が所有者となったのでついていた悪霊を夷が直死で斬ったので正確には妖刀ではなくなったが妖力を流すのが効率がいいので黒刀ではこの剣を使う。

・小太刀

名前は無いが詠春の刀だった『夕風』を作った鍛冶屋から夷のために作られた、いわゆる専用武器である。まあ夷が黒刀用に改造してしまったので黒く変色してしまっている。切れ味は名刀レベルなので心配はない。

・魔法銃『ジェフティ』『アヌビス』

魔力弾を撃つ魔法銃であり白と黒の色である。魔力弾は威力が自由に換えられるので手加減をするときはこれを使う。元々は廃棄されるはずだった、ベレッタM92を改造した銃、グリップ部分が指がかりやすいようにへこみがあるグリップパーツを追加しており、スライドとフレーム部分が若干長くなっていて、内部構造がほとんど改造されている。マガジンを入れる部分に小型の魔力変換機を入れており使用者の魔力を変換して弾丸とするので事実上魔力がなくならない限り無限に撃てる、各パーツを魔力保護しているので壊れる心配もない。

・首飾り

夷のリミッターでもあり魔法発動体である首飾りである。気を使った結界から神力の結界に変わったのでさらに防御力が上がった。外せば全リミッターが外れるが今のところ夷は外す気がない。

・黒のコート

普通のコートだったが夷は魔改造し、魔力障壁を常時展開し、防弾コートであり零距离での戦車の主砲を撃たれても平気な頑丈さ、そして優れた衝撃吸収能力、ぶっちゃけ夷は『魔改造しすぎた』と言ってしまうほどバグな性能の防御力を持ったコート、夷の身長におおじて適度な長さとなる、任意で長さを変えて全身を包み込むことも可能。

・黒の仮面^{ヘルメット}

夷がふざけて作った仮面だが……強度は最強レベルであり、被っているときに音声も換えられるようになっていて。視界も意外と広く140度くらいなら軽く見える。変装用に夷は持っている。

・各種仮面ライダーのベルト

アクセルドライバーとライダーベルト（カブト）の事、あと一つベルトを開発中である。

・影の倉庫

偶然、影に物をいれたら収納できた謎の機能、神のせいだろうか。夷はこれのおかげで場所に困らずにいるがこの頃入れすぎてカオスになっていているらしい、自分でも何が入っているのかさっぱりだが、武器などは専用の場所に収納してるからわかるらしい。

・カメラ

いつも持ち歩いているカメラ、夷の趣味であり思い出としておきたいという夷の願いを叶えるものである。元々は詠春が持っていたが機械音痴であったため、五歳の時に夷が奪い取った。外見は仮面ライダーディケイドの門矢士を持つカメラの色を黒くしたような感じである。中身は最新式のカメラの性能の五倍である。

術式解放

夷のリミッターを夷自身が外すための術式、魔力と気は五段階、妖力は三段階にかけてリミッターをつけている。

・黒式こくしき

妖力のリミッターを外すもの、このとき副作用か魔力に気も少し解放される。全三段階があり段階ごとに技と奥義がある。

一では目が漆黒に武器に妖力が流れ込むので武器が黒く染まる、技は月下斬、奥義は黒百合、二段階、三段階目はわからないがかなりの力で最終的には九尾の狐並の妖怪状態になる可能性がある。元々は「闇の福音」とか言う魔法使いの「マキア・エレベア闇の魔法」と呼ばれる魔法をまねたものであり、制御が少し甘い。

・神卦法

究極技法である咸卦法の魔力と気の融合以外に神力を混ぜたので夷はこう名づけた。身体能力、魔力、気ともに解放される全四段階にリミッターをかけているが一段階目でも十分な力を持っている、技

近衛の朝は叫び声から始まる。これは夷が四歳の頃の話である。
木乃香と夷はいつも一緒に寝ている、いや木乃香が強制的に一緒に寝ているのだ。ぬいぐるみ感覚で抱き着いてくる木乃香に夷は精神がガリガリ削られていく。木乃香は可愛い女の子だ、そんな女の子に毎晩抱き着かれて平気な男がいないわけがない。まだ四歳だが前世も合わせると二十歳くらいになっているのだ、人並みの性欲もある。

夷 「イ、イタイイタイイタイ、しまってる！！ しまつて
」

木乃香 「大好きやー、兄様！！」

ボキボキボキと鳴っていけない音が夷から発せられる。
つつか夷の顔が赤から白くなっている、なんか口から魂みたいなものが出てるが近衛の家では当たり前の光景です。

木乃香 「えへへへ」

夷 「ウフフフ、シロイオハナバタケガミエテキタヨ」

…… 本当に大丈夫なのか？

詠春 「ではいただきます」

夷 「いただきます」

木乃香 「いただきますーす！」

刹那 「いただきます」

桜 「はい、たくさん食べなさい」

ひと悶着があつたが朝食を家族で食べる夷、今日はごはんにかめの味噌汁、サケの塩焼き、漬物と朝には望ましい食事だった。箸を使いながら食べていく夷だが……木乃香と刹那がまだ箸の扱いになれておらず、ぼろぼろとこぼしていく。

木乃香 「うー、うまく食べれへん」

刹那 「……うまく使えへん」

この頃は刹那もこの面々だけなら京都弁を使いだした。

夷 「はいはいはい、ちょっと待ってろ」

ふきんと箸を使ってご飯粒などをふき取りながら、箸で皿の上に乗せていく。

三秒ルールさえ破らなければ落ちたごはんすら食べれます。

夷 「これでいいだろ？」

刹那 「ありがひょう……ありがとうえーちゃん」

夷 「お前の噛み癖慣れてきたよ」

木乃香 「兄様、兄様食べさせてー!!」

木乃香が餌を待つ、ひな鳥のように口を突き出す。

夷は苦笑しながら木乃香のサケを箸で持ちながら口に運んで食べさせる。

木乃香 「やっぱり兄様に食べさせてもらうのが一番おいしいんや」

刹那 「えーちゃん、えーちゃんウチにも!!」

夷 「ハハハハ、もう何でもいいや」

すでに少しあきらめかけている夷、詠春と桜はほほえましそうに見ていた。

詠春 「今日は素振りと走り込みだな」

夷 「まあいいが……」

詠春 「夷は鶴子との特訓が待ってるぞ?」

夷 「……俺はまだ全然弱いぞ?」

詠春 「行つて来い、最強の剣士から手ほどきを受けれるなんてうらやましいぞ?」

刹那 「えーちゃん、頑張れや」

夷 「……俺死ぬんじゃね?」

朝食を食べた後には夷と刹那は神鳴流の修業を、いつもは詠春が見ているがたまに夷は鶴子に修業をつけてもらっている。

今回は音声だけで楽しんでもらう。

夷「えーと、なんで俺は武器なしで鶴子さんは武器もってんですか？」

鶴子 「もしも武器が壊れて、武器がないときの逃走するための修業や」

「……ちなみに鶴子さんが考えたんですか？」

鶴子 「ウチの師匠である、両義式……式師匠が考えたんや」

夷「……えーとそれ修業じゃ」

「師匠が言つに修業らしいんや」

夷「……いやいやいや、それ修業じゃなくてそれはそいつのうさばら」

「……逝くでー！！」

夷
「
字が
ちが
」

うあああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ

木乃香 「ねえねえ、なんで兄様髪型がアフロになってんの？」

夷 「……どこぞの鬼畜師匠が考え付いたアホな修業のせいだろうなった」

詠春 「……強く生きる（遠い目）」

夷 「あれ？ どうした父さん？ 父さん？！ なんでガタガタ震えてるんだ？ 父さん、父さー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ん！ー！」

途中でハプニングもあったが昼食の時間である。今日は天ぷらにうどんである、夷はうどんが大好きだが……近衛の家のうどんの値段を聞いた瞬間、残さないようにしようと思ったのは仕方ないことだ。

夷 「くう、やはりエビは最高だ」

木乃香 「兄様エビ食べ過ぎー！」

素子 「エビはウチの物やぁあああああああああああああ
あー！」

第一次エビ争奪戦争勃発、今日は昼食を食べに来た素子も参加しており……拳句の果てに。

詠春 「……皆さん、エビは私の物ダァァァァァァァァァァァ
アー！ー！」

近衛詠春参加。

夷 「負けられない戦いがここにある！！ 斬岩剣！！」

木乃香 「このかハンマー……！！」

素子 「甘いんや、ちびつこども！！ 斬魔剣」

詠春 「甘いのはあなたです！！ 斬岩剣！！」

ぶつかり合う箸とハンマー、桜と刹那はただその光景を見ながら静かにキレていた。

その様子に気づかない四人、さらに激しくなっていき風圧で天ぷらが吹き飛ぶ、箸と箸が交差するが……

桜 「四人とも？（ニコニコ）」

母さん（最終兵器）がそれを鎮圧する。

まずは夷の頭を掴み詠春にぶつけ、木乃香のハンマーを箸で受け止め、刹那が素子の箸を吹き飛ばす。

ニコニコと桜が笑っているが後ろでは般若が浮いている……持つている箸がピシリとひび割れる。

桜 「詠春さん？ なにやってんや？ そんなにOHANASHI
されたいの？」

詠春 「ア、ハハハハハ、ソナワケナイダロウ」

桜 「ええわ、今夜はお楽しみや」

夷 「ごふう、何気に母さんが最強な気が……」

桜 「あんたは木乃香を止めなさいな、撮影会開くで？」

夷 「嫌ああああああああ」

桜 「木乃香？ あんたはそのハンマー捨てようか？」

木乃香 「で、でもなお母様、ウチは」

桜 「（後で夷の生着替え写真を……）」

木乃香 「ウチハンマー捨ててるんや！！」

刹那 「やめましょうか？ 素子さん？」

素子 「刹那邪魔するんか？」

刹那 「芋が一番おいしいんです！！」

……これが近衛の昼食風景である。
なにこのバイオレンスな食卓？

夷 「はい、今日は缶けりをしようか」

木乃香 「缶けりかあ、兄様が鬼な！！」

夷 「強制的?!」

刹那 「えーちゃん、早く始めようよ」

夷 「……なんてこった、俺に味方はいないのか？」

昼食を食べた後には木乃香や夷、刹那は一緒に遊ぶ今日は缶けりのようだが夷が鬼なんてことはいつもどおりだ。

夷 「1、2、3……」

木乃香 「勝てば官軍やああああああああ!!」

木乃香がカウント中に缶をけろつとするが夷はカウントを続けている。

木乃香の足が缶に触れる瞬間、足を掴み投げ飛ばす。

木乃香 「うにゃー……あ!!」

刹那 「このちゃん?! 仇はとるで!!」

夷 「7、8、9（缶けりちゃん）」

そんなことを思いながら缶けりと言う名の戦いは始まっていく、その後は何も言うまい。

ただ夷が圧倒したと言っておこつ……だって姿隠していないから缶を踏めばゲームが終わるからである。

夷 「なんか妙に今日は一日が速いな」

だってキンクリしてますから。まあ今は夕食である。
たまには包丁を握るのもいいかと桜が作っています、もちろん味も保証つきですが桜も忙しいので滅多に作りません。

木乃香 「まだかなあ、ウチ、お母様のご飯大好きなんや」

夷 「ある人は言った」

刹那 「うーうー、今日も楽しみでしゅ……です」

夷 「（もうツツコまんぞ？）美味しい物を食べるのは楽しいが、一番楽しいのはそれを待つてる間だ」

木乃香 「うん、ウチもそう思うで！！　なんかこう……ワクワクする感じや」

桜 「出来たでー！！　みんな温かいうちに食べなさい？」

今日はハンバーグであった。ハンバーグの上に焼いたチーズがのっている。副菜としてブロッコリーとトマトが添えられていて食欲をそそる、夷も木乃香も刹那も待ちきれないよう箸を持ってスタンバイしている。

詠春は仕事の都合で夕飯に間に合わないらしい、血の涙を流しながら仕事をしている。

桜 「いやー、式はんのチーズハンバーグを作ったんやけど……」

夷&木乃香&刹那 「『『いただきまーーーす』』」

桜 「ふふふ、はい、いただきます」

夷 「さあて、今日はエンジンブレードの改良をするか」

夜、夷は自分の部屋で武器の整備をする。

ちなみに朝木乃香と一緒にいたのは木乃香が夷の部屋に勝手に入るからである。

夷 「で、パーツパーツ……ちゃららちゃっちゃちゃー」

出てきたのは……魔力増幅炉、なぜ？！

夷 「ふふふ、皆さん忘れかけてるかもしれないが俺には創造する能力を持つてんだぜ？ それに魔法炉は魔眼で解析すればいい！！」

誰に言ってるのかわからないが……作者さえ忘れかけていた設定であつた。

夷 「ここをこうしてこうやって、ここに取り付けければ」

ガチャガチャとエンジンブレードを改造していく夷、その手はむちゃくちゃ早い。

夷 「出来たあああああー！！」

こうしてエンジンブレードが魔改造されたわけだが……。

夷 「げ、もう10時かよ」

作業を始めたのが七時なのでまる三時間は作業してたわけであり、夷の様子を詠春が見に来るのだ、バレたら結構面倒なことになるので夷は速攻で装備など道具を影のゲートに放り投げる。

夷 「今日もいい日だったなあ」

そっぴいなながら眠りにつく夷。

これが夷の四歳の頃の日常であった。

主人公設定とオマケ（後書き）

作 「今日のネギラジオ！！ 夷……出てこいや！！」

夷 「どうも主人公の夷です」

作 「今回はお前の設定を書いてみたんだが」

夷 「はつきり言ってチートすぎないか？」

作 「仕方ないだろう？ そのためのリミッターだ」

夷 「でリミッター外したら爆散するって」

作 「ああ、大マジ」

夷 「なんてこったい」

作 「それに妖刀は早めに出す」

夷 「……ネタバレ乙」

作 「しかたないだろう？ これだって学校の試験中に考えた奴なんだから」

夷 「作者に絶望した！！ だから英語で赤点なんだよ！！」

作 「てめえだって、前世は英語赤点なんだよ！！」

夷 「ウソダ……ウソダンドコードン」

作 「まあいいや、あ、アンケートの方はまだですから安心してください」

夷 「じゃあしめるか？」

作 「次回のタイトルコールは別にいいよ、別れの挨拶だけで」

夷 「じゃあ頼んだ」

作 「では次回も」

夷 「見ないとライダーキックだ」

作 「それではサラダバー」

閑話のE / 黒歴史（前書き）

……まずは謝罪を。

書いていたデータが吹っ飛び最初から書き直したので本来の半分程度の長さに……。

すみません愚痴ってしまつて。

今回アンケートにご協力くださった皆様。

皐月二八様、ゆや様、なおぼん様、KEN様ありがとうございました。

感想、訂正、ここが嫌だなどありましたら感想まで……それではどうぞ。

閑話のE / 黒歴史

……あれ？ あんたらは？

まあいいや、これを読むのか？ 物好きだなあ、俺が0歳……つま
り赤ん坊時代の話だぜ？ え？ 閑話だから見せると？ いやいや
待ってくれ、ちよつと作者に許可は……とってるのかよ、はあ、ま
あいいや。

これから見せるのは第一話のすぐ後の話、俺こと両希夷が近衛の家
に行ったところからだなあ、見せるのはいいが……まあいいさ、じ
ゃあ始めるか。

そうだなあ、あの日の話はしたくないんだが……じゃあ前置きはこ
れぐらいにしようか。では両希夷の赤ん坊時代の閑話の始まり始ま
り。

|||||一話終了の後

ぼんじゅーる、夷だ。詠春と桜に……いや父さんと母さんに拾われ
て家まで来たんだが……なんじゃこのデカさは……！

夷 「ばぶうううううううううう？！！（でかいいいいいいいい
いいい？！！）」

詠春 「ど、どうした夷？」

桜 「お腹がすいてしまったんやろ、後であげるからな？」

……えーと、今俺は赤ん坊でさらに生まれて間もないらしい、まだ授乳期だ。で食事と言えば母体からのぼにゅ……まてまてまて俺はさつきまで（？）十六歳の男だったんだぞ？ 思春期まっただ中の男に……あうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうと、そんなバカな事をしていたらバカに長い階段を登っていた、なげえアニメによくある階段だなあ。

詠春 「さて、皆にどうやって説明しようか」

桜 「政治的な面はウチがやると言ったやろ？ 詠春さん？」

詠春 「すまん、お前には苦勞をかけてしまうな」

夷 「ばぶうう？（なんか黒い展開だなあ？）」

つつか 政治的ってなに？ こんな大きな家だから派閥争いとか、後継ぎ争いとかに巻き込まれちまうのか？ 嫌だなあ、俺は気楽に1000年くらい行きたいんだが……本当に不老不死なのだろうか？ 神の一言を信じるならそうなんだが。

夷 「あ、ぶうあぶうあ（ま、どうにかなるだろ）」

そう考えながら目を閉じる。

温かいな、今母さんに抱かれてるんだがすごく温かいなあ、俺は親を物心つく前に亡くしてるから……こういうのは初めてだよ。

そんなことを考えているうちにウトウトとした気持ちになった後、俺は眠りについた。

「なり……！！　　こんな子供を……！！」

詠春 「養子縁組などし……この子は……どもになるんだ!!」

「うるせえよ、黙れ、人がせつかく気持ちよく寝てるのに……！」

そう思った瞬間、俺の体から勢いよく何かが噴き出したような……

詠春 「なっ?! すさまじい魔力だ……木乃香以上か?!」

「な、なんですと！！ この赤ん坊は危険だ！
いますぐ殺すべきだ！！」

……物騒だな、そんなに魔力……。ちよつと待てえええええええ！
！　この世界には魔力があるのか？！　それに父さんの驚きようからすさまじい量らしい。神様エ、あんたは俺をどんなやつ（怪物）にしちまったんだ？　見稽古だけでもチートなのに！！

夷「（実際に自分にやってみるとこの見稽古は『あれ』よりかは劣化バージョンらしいな）」

そう俺は刀語の見稽古と言ったが別に鑢七実の見稽古とは言っていない。

まああのチートな見稽古と共に病魔をプレゼントなんざもらいたくもない、確かにあの見稽古は強力で、最強で、最凶だ。一度見れば覚え、二度見たら盤石、戦略のへつたくれもない、ただ相手の動きを見て、視て、観て、診て、看れば自分自身の力にしてしまう……努力なんていらぬ、天才中の天才、鬼才と言うべきも異端の力、

さらにそれが自身を弱くする技術なんて……俺にはその劣化版、いやこの魔眼も同時に発動すれば完璧な見稽古ができるはず。

俺は健康体で見稽古（劣化）も持っているが……十分だろう。

詠春 「それでもこの子は私の息子にします！！ 異論は認めません！！」

？ 「し、しかしその子供は危険です！！」

俺はまだ知らないがこの師範代が将来、俺の正体をばらした師範代だった。まあ覚えてなかったんだがな。

閑話休題だ。

詠春 「くどい、それにこれはチャンスです。木乃香と夷、二人の強大な魔力があれば東と……魔法使いと和解できるかもしれません」

夷 「（……なんだ？ なんかごちゃごちゃしてるのか？）」

東というのはわからないが……魔法使いはいるらしいな、神様あんた俺をどんな世界に送ったんだよ（魔法と気でなんでもできる世界です）

まあいいがな、相手も納得したようで父さんから離れていく、大丈夫かな。

詠春 「心配するな、お前は私の息子だ」

夷 「ばぶう（そうかい）」

詠春 「さあ、お前の妹に会いに行こうか」

い、妹?! そういえば木乃香とかいう名前がちらほら出てたが…
…どんな子だろうな。
可愛い子で頼む(キリ)

夷 「ばぶう(なぜこうなった?)」

木乃香 「あぶうああぶ」

現在木乃香と呼ばれてた赤ん坊と会ったんだが……俺と同じくらいの
幼い子供だった、まあ妹だって言われた時点で俺ぐらいかと思っ
たんだがな。

めっちゃ俺見てキラキラしてますよ目が……手にはピコピコハンマ
ー持って、イタイタイ叩くな!! ちょマジでいたいからやめて、
俺の体は精神は十六だが身体年齢は一歳にも満たしてないんだ。だ、
誰か木乃香からハンマー取り上げる!!

このときなぜ本気になって木乃香からハンマーを取り上げなかった
のか、あの時の自分を殴りたい、子供だから大丈夫だよな、と思っ
ていた自分が……数年後、ハンマーで神鳴流の技を受け止める最強
ハンマー使いが出来上がるなんて思うか? モンハンのハンター真
っ青なハンマー使いだよ!! なんであいつふざけて気強化の俺の
一撃を受け流しやがって!!

……なんか未来から電波が送られたような、まあ気のせいだよな?

木乃香 「あぶう!!」

夷 「あぶ?!(イタイ?!)」

詠春
「ハハハハ、仲がいいな」

夷 「ばぶう　うううううううううう！！！」どこがだあ
ああああああああああああ！！！」

ただ単に殴られているだけですが?! いい笑顔しないで妹よ!!
 ちょ、待つて待つてええええええええええ!!

[illegible]

「詠春さん！！拾った子を息子にしたって本当なん？」

詠春 「うん？ ああ素子か？ そうだよこの子だ」

素子 「うわー、かわええわ、良い目もとるし」

……えつと目の前に肩ぐらいで髪の毛を切りそろえてる女の子が俺を抱き上げたんだが？ 誰だ？

夷 「あぶう？（誰？）」

コテンと首を傾げると女の子が顔を赤くする……これが赤ん坊の最強兵器、ニコポか！！　なんて威力だ、赤ん坊が可愛がられるのがよくわかった。

ふはははは、ニコポさえあれば俺はいつでも甘えられる！！と、思っていた時期が俺にもありました。

桜 「はいはい、とりあえず素子ちゃんちよつと離れて。授乳しなきゃいかんのだ」

夷「ばぶうう？！（やべええ？！）」

[illegible]

桜 「さあ、ご飯時間や？」

夷 「あぶう（オワタ）」

結局俺は……プライドどころか、自身の精神すら放棄した。
プライド？ ああ食えたよ。

〓
 〓
 〓
 〓
 〓
 〓
 〓
 〓
 ご飯の時間が終わり……

「……（試合終了後のボクサーな感じに白くなってる）」

木乃香 「きやはははは（夷の頬をつついて喜んで）」

素子 「なんか元気ないなー、大丈夫か？」 夷

詠春
「いろいろあつたからな、
疲れてるんだろう」

父さん、違います。十六年生きてきた俺のプライドが『プライド？それは捨てるものだ』状態になってるからです。ああ早く授乳期から抜け出したい。

素子 「うー、プニプニや。かわええー」

夷 「あぶぶぶ（もつとづにでもなれ）」

成すがままに流される俺……ああプライド？ 月曜日のゴミ捨ての日に捨ててきたよ。

あははっははっははは転生ってきついなあ、神さまあ、あんたを殺したくなってきたよ。

なんかプニプニされるのが普通になってきたよ、木乃香さんあんたもプニプニだからな？ 赤ん坊のマシユマロの様な肌なめんな、おれだってプニプニするう！！

木乃香 「あぶ」

夷 「あつぶう？！（がはっ？！）」

ハンマーで叩かれました、正確に俺の脳髓を狙ってるんだが……？ この子本当に赤ん坊か？ とあるリリカルな魔法少女のアニメに出てくるあいつじゃないだろうな？

まあいいそろそろ俺も眠たくなってきた……お休み。

…… あーあ、黒歴史、黒歴史。見せたくないんだよ。

これが俺と木乃香や素子の出会いの話だ、次はこの時代から四十年前までさかのぼった俺の話、まあ見たければ見ればいいさ。

閑話のE / 黒歴史（後書き）

「今日のネギラジオ！！ 夷！！」

夷「もうツツコまんぞ？　　つつか今回もわけかんない分を書き
やがって!!」

作「……まあな」

「どうしたんだ？ 作者元気ないが？」

「いや、今回とある発表がある……アクセス解析ってわかるか？」

夷 「たしかお前が怖くて見れなかったやつか？ それがどうした？ お前が『別に俺の小説だから…… 5000くらいでいいや！』とか開き直ったあれだろ？」

「そうなんだが……俺もこれ書いてる時に初めて見たんだ」

夷
「結果は？」

「十万アクセス越えてました」

夷 「え？ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ
ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ
ええ ええ ええ ええ！ ！！！」

「正確には109'930アクセス、15'479ユニークだ」

夷 「こんな駄作にそんなに？ 仮面ライダーなんて全然出てないのに」

作 「まあ今回は十万記念閑話でもあったってわけだ」

夷 「で今回は名に話すんだ？」

作 「ああ、お前の能力、見稽古についてだ」

夷 「そういえば……俺の見稽古は鑢七実の見稽古じゃないのか？」

作 「ああ、簡易版、と言うか劣化版だなあ。まあお前の場合は魔眼でそれをカバーしてるんだがな」

夷 「そういえば作者は刀語は好きなのか？」

作 「ああ、一番好きなキャラはとがめだったなあ、ちえりおは面白かったし最後がな」

夷 「ちなみに一番苦手なキャラは？」

作 「鑢七実だな」

夷 「マジか？」

作 「大マジ、俺が一番苦手なキャラだ」

夷 「理由は？」

作 「怖かったからだなあ、大きすぎる力、そして常人なら何度も死んでいる病魔、見稽古と言う、ある意味では神眼並の目、はつきり言うところまでチートなキャラは初めて見た。自身の力の制御ができないのはわかるんだが……耐え切れないうてなんだよ」

夷 「……強大すぎる天才か、もしも吸血鬼の再生能力とか見取つたらどうなるんだろう？」

作 「マジやめてくれ、あの人ならなりかねないから」

夷 「次行くか、そういえばどうして仮面ライダーをカブトとアクセルにしたんだ？」

作 「俺が好きだからだよ、アクセルはファイズとどっちにしようか悩んだ」

夷 「……全部スピード特化のフォームがあるなあ」

作 「そういえば平成だけで順位をつけて面白かった順にすると、一位クウガ、二位龍騎、三位カブト&アギトなんだよ」

夷 「うわぁ、初期のライダー祭り」

作 「好きなライダーだと一位カブト、二位ファイズ、三位クウガなんだよ」

夷 「赤ばっか!! つうかクウガは好きなんだよな?」

作 「あれは最高傑作だと思う、特に最後の殴り合いのシーンは仮面ライダーでも屈指のシーンだろう。笑いながら殴る者と泣きなが

ら殴る者、当時はまだ幼稚園くらいだったから泣き叫んだよ」

夷 「まああれは子供向けと言うよりも大人向けだったような気がする……」

作 「ライダーネタなら一時間は話できるぞ？ あんまり設定とか覚えてないがな」

夷 「ちなみに一番嫌いなライダーは？」

作 「ガイ（龍騎に出てきたライダー）あれは王蛇に倒されてすつきりした、ライダーは好きだけどあいつだけは好きになれないんだ」

夷 「……そ、そうかそういえばアンケートがあるんだっけ？」

作 「ああ、そうだった。すみませんがハーレムメンバーをもう決めようと思います、あとストーリーに絡ませたいキャラ、敵対させてほしいキャラも同時に募集します」

夷 「え?! ま、まっ」

作 「今のところのハーレムメンバーは、木乃香、刹那、月詠、素子、明日菜、エヴァ、真名、千草、茶々丸、古、裕奈……^{クーフエイ}って多いなあ!!」

夷 「こ、これ以上増やすのか？」

作 「あ、あれだ一番書かれた人物の上位三位までを入れよう……これ以上はまずい」

夷 「で、ストーリーに絡ませたいキャラも募集したいと……」

作 「ああ、そうだ。ですので感想にどんどん書いてください」

夷 「このぐらいか？」

作 「ああ、それじゃあしめるか」

夷 「ああ、次回、感謝感激雨あられ」

作 「次回も!!」

夷 「見なきゃぶつた切る!!」

作 「次は二十万でもいったら閑話するか」

夷 「はははは、いくわきゃねえだろうが」

作 「そうだな、それでは次回まで」

夷 「お楽しみに!!」

感謝感激雨あれ（前書き）

今回は二十万記念＋追加の設定などを入れました。
閑話もいれましたので。

チート駄目絶対な方は戻ってください。
ではどうぞー！。

感謝感激雨あられ

キャラ設定式

名前 両希りょうき 夷えびす

年齢 15歳

性別 男

好きなもの

甘い物、仮面ライダー、豆腐、木乃香の笑顔、天道語録、動物、飲み仲間の鬼たち、刀集め、刹那の噛んだ時の顔、武器を改造すること、弟子を弄ること、仮面集め

嫌いなもの

自分を実験した天使、両義式、近衛の名しか見ない者、女装、鶴子との特訓、正義の魔法使い、辛い物、熱い物、ルシフェル

容姿

ぶつちやけ美少女にしか見えない、空の境界の両儀式の顔とそっくりだが少し男らしさがプラスされた感じである。髪の毛は肩口で切りそろえられていてまんまの両儀式になってしまった、斬った理由はチャチャゼロのナイフ研ぐときに誤って斬ってしまった、だそうです。町を歩くと十人中十人振り向くであろう男の娘。

本人は気にしてないが時折見せる、女の顔に周囲の人は『両性類?』とまで言っている。本人は男だと言っているが……。この頃は仮面を被っているのでエヴァとチャチャゼロ以外に素顔を見せていない。女と言われるのが嫌なので忍法で顔を変えようとしているが……

参考

前世では両親が早く死に、親の愛情というものを知らないらしく、詠春や桜の愛情が新鮮だったようで、人の好意というものには人一倍嬉しさを感じる、が自身に好意……つまり好きという感情を相手から読み取る能力が著し損なっていて（鈍感とも言う）そういうことに関してはまったく気づいていない。（素子や刹那の感情も弟感覚か、修業仲間だからという風にしか見ていない）前世では温厚で人当たりもよく交友関係も良かったらしいが彼女はいなかったらしい。

事故で死んだ時（本人は覚えていない、実験の弊害らしい）天使であるルシフェルの実験台となり魂の転生を受け持つ部分をいじられ、消滅させられそうになったが神がなんとか力を注ぎこみ魂だけはつなげられた（そのとき注がれた神力のせいで霊脈と契約してしまった）チート能力をもらい転生したが……捨て子であった、そのとき近衛詠春と近衛桜に拾われ、息子となり近衛夷となった、そして八歳のとある道場での試合で捨て子であることカミングアウトされてしまい、近衛の名を継げなくなった。

肉体的にも精神的にも成長し、もうこの世界では勝てる者がいないほどである。現在の魔力は魔法世界の魔法使い全員とナギ×10人である。気では地球上の生物と同等程度。神に身体的なりミッターを解かれたことで霊脈のバックアップができるようになり無限の魔力と気を手に入れた。神力もあり総量は神二体分くらい、妖力は大妖怪が束にかかって也太刀打ちできないほど……ぶっちゃけこの世界の全員がかかって倒せないほどの実力、スクナの神力ももらい総量が増えた、後、神卦法を発動したらDMCのネの魔人化のときみたく後ろにスクナ似の鬼神がでるようになった（動きをトレースする）。身体能力は全開状態ならハイパークロックアップ以上のスピード、力は地球を真つ二つにする程度、なので全力は出さないように名前に力を持たせ、名前にリミッターをかけた。なので名前

を変えながら戦う。

弱点という弱点はないこともないが……熱いものが苦手でいつもフーッしないとお茶とか飲めないらしい。妹の木乃香にめっぽう甘く、本人は厳しくしてるのだが肝心の所が甘いので意味なし母親に女装をされて月一くらいの頻度でやってるらしい、売ると軽く万はいくらしい。仲間が傷つくとめちやくちやあわてる、初の刹那の怪我の時は包帯を持つてくるほど（実際は転んだとき軽く切っただけ）零崎化（この世界では夷以外は発現しない）したので殺人鬼となったがあくまで『零崎虚識』を名乗っている間だけ殺人欲がカンストしている、別にむやみやたらと人殺しはしないが……敵対するものには容赦せずに殺しているが女子供は殺さないという心情があり、殺しはしない（やったとしても九割九分九里）基本的には零崎化している^{ヘイ}と黒の仮面と黒の服装を着ているので（いつもだが……）連合からは「黒の死神」「絶対強者」「会ったら恥も捨てて逃げる」「殺人鬼^{キリングオーガ}」とも呼ばれるほどの悪名、一方では人助けもしてるので「黒の救世主^{メシア}」「心優しき鬼」「敵対しなければ心強い」「女装ノ神」と呼ばれていて必ずしも悪名だけではない。零崎を始めるときは恒例の「零崎を始めますか」と言う、この言葉は強制空間結界の発動キーともなっていて周囲一キロは転移不能、破壊不能の結界にとらえて殺す。

使う名前は今のところ四つ、「両希夷」「近衛夷」「両義式」「零崎虚識」これに序列をつけると一番は両希、二番はギリギリで両義、三番は零崎、四番は力の差がありすぎる近衛である。

エヴァと出会い、さらに正義の魔法使いが嫌いとなった。エヴァと共に戦うとき以外は零崎を使い皆殺しにしている。あまり過去を変えたくないのに関わらないようにしているが……そんなことするほど運命の神（作者）が甘くないのでなんか過去の人々と対面している。別荘で七年近く修業したため……年齢が15までに成長し、容姿が両儀式になってしまっている。本人はこれを隠すために仮面を被っているがこの頃は寝るとき以外は仮面を被りっぱなしだ。

ちなみにチート能力は仮面ライダーカブトとアクセルに変身、成長限界突破の才能、刀語の見稽古の能力、どんな道具でも創造できる力、さらにおまけの魔眼。最近、自分でも強さがカンスト&精神が崩壊してきたと思っている（特に零崎モードは）しかしまったく直す気もなく、いまの自分はこうなんだと自己完結してる部分が多い。現在の夷（強化無し）でも人間を越えているが無意識に神力を封じているのだが無意識に体の正常化をするために使っているの？とどんどん総量が多くなっているのには気づいていないし、魂が人間と言うよりも神や魔王クラスの位になっており某有名な死徒二十七祖の一角、一位のとある魔犬の絶対殺害権も及ばなくなっており逆に瞬殺できるようになっている。さらに悪いことに直死の能力の魔眼との適合が高く、文字通りの「直」接視で「殺」す魔眼となっており無機物の線や点すら見えるようになっていたのでその気になれば地球すら「殺せる」が殺す気はないし、一度見てみたら点の部分がデカすぎるのでやる気が起きなかつたらしい。魔眼は神から譲渡された目であり、ON/OFFは比較的簡単にできるが本気をだすとON/OFFできないようになるそうだが、主に夷は解析、理解、複写、直死、吸収を多用している。

見稽古も進化というよりも研磨され本元の鑢七実の見稽古以上のスピードで見取れるようになっていて、言葉に表せば「一目見れば完全、二回目は無い」と言わんばかりに動きを見ただけでわかるし、その人になりきれることも可能、つまり同じ動きで戦闘することも可能である。夷の虚刀流は完全ではなくすべての技ができるわけではない、血刀である「鑢」を魔眼のおかげで解析できたのだがその影響が「刀」に拒否感を感じるようになった。

なぜか無類の仮面好きになってしまい、今影の倉庫は仮面だらけになっている。

ちなみに虚刀流とは刀を「使わない」無刀の流派だがその理由は、代々刀を握る「才能がない」がために手「刀」や足「刀」を使う「剣法」である。しかしこれは一子相伝の技術であり、夷も覚えてい

る記憶から見取ったものが多く、エヴァとパクティオーするまで未完成だった。これにより夷は刀を持つ才能も失うが成長限界突破の才能と見稽古により再び剣を握れるようになった。

両希夷のデータりょうきえいす

虚刀流・式

虚刀流の技を夷自身で昇華させた物、通常の虚刀流は対人戦闘だけ想定されたものであるが……夷は対神、天使など人外の者たちへの対抗策へと昇華させたため一撃一撃が必殺の威力を持っている。エヴァとのパクティオーで虚刀流の技術をすべて覚えたのだが新たに銃対策の構えを作ろうと試行錯誤中である。

構えと奥義一覧

・虚刀流零の構え 『無花果』

虚刀流零の構えで、実際に構えないので構えと言えないがあえて名称をつけるとうなるらしい。自然体によっていつでも攻撃態勢にうつることができるのが特徴。この使い手」曰く、構えとは無駄の他に何でもないらしい。

・虚刀流一の構え 『鈴蘭』

足を大きく開いて腰を深く落とし、敵に対して壁を作るような構え。左足は前に出して爪先を正面に向けて、右足は後ろに引いて爪先は右に開き、右手を上左手を下に、それぞれ平手で構える構え。

奥義・『鏡花水月』

一の構え『鈴蘭』から掌底を繰り出す、虚刀流最速の技である。

・虚刀流二の構え 『水仙』

身体を開いた『鈴蘭』とは対照的な半身の構えで、前後の同じ高さに配された両手は、平手ではなく貫手で構える構えである。

奥義・『花鳥風月』

二の構え「水仙」から繰り出される奥義。半身で前後に貫手を配す構えからの貫手。

・虚刀流三の構え 『躑躅』

ぶつちやけると作者が忘れしたのでわからない。

奥義・『百花繚乱』

三の構え「躑躅」から繰り出される奥義。両手が刀で塞がれていても発動できる奥義であり、下から打ち上げる膝蹴り。

・虚刀流四の構え 『朝顔』

虚刀流の中で唯一こぶしを握る構えであって両足を横に向け腰を落としたしながら、身体をちぢこめるようにした状態を保つ構え。

奥義・『柳緑花紅』

四の構え『朝顔』から放たれる打撃透徹の奥義である。その一撃の前ではどのような防御も意味をなさず、外側はそのままに内側のみを破壊する奥義、つまり神鳴流と言う斬岩剣 式の太刀である。

・虚刀流五の構え 『夜顔』

両足を肩幅の広さで左右に揃えて、両手はゆるい平手の形で肘を折りたたむようにして胸の前に構える。雪上のような悪条件の足場にも対応できる。

奥義・『飛花落葉』

五の構え『夜顔』から放たれる両手での張り手である。左右の肩に同時に張り手を打ち込むことにより、その打撃力を全身の表面に伝達させ伝導させる。つまり内側を破壊せずに外側のみを破壊する装甲破壊の技であり、四の奥義『柳緑花紅』とは対の奥義である。虚刀流における鞘打ち。力加減次第では、相手を殺さず、意図的に戦闘不能の状態に陥れることができる。虚刀流で唯一手加減「できる」奥義。

・虚刀流六の構え 『鬼灯』

首を固めた頭部の左右に手刀を配置し、両肘を対称的にそれぞれ前に突き出しつつ、両脚は爪先立ちにした非常に自由度の高い構え。前後の自由移動に対応した七の構え『杜若』とは対になる構え左右の自由移動に対応した構えである。

奥義・『錦上添花』

左右方向自在の足の運びからの奥義であり、両手で放つ水平手刀で

両脇を打つ奥義。

・虚刀流七の構え 『杜若』

足を平行に前後へと配置し膝を落として腰を曲げ、上半身を軽く前傾させる構えから駆け出す。静止状態の零歩目から一步目に至る後ろ足の踏み切りと、一步目から二歩目に至る前足の踏み切りの間において移動速度を一気に減速させることで相手を見誤らせる、緩急をつけた変幻自在の足運びの構えであり、六の構え『鬼灯』の対となる構え。居合い抜き対策として有効で、相手の剣が速ければ速いほど成功率が跳ね上がる、原作では宇練銀閣の「零閃」に対抗した。ただし前後の動きには強いが、左右の動きには対応していないという弱点を持つ。

奥義・『落花狼藉』

足を斧刀に見立て、全体重を乗せ加速させた前方三回転かかと落とし。足場がある場所では威力が3割増となるが、夷は改良し空中でもそれを可能にさせた。

・最終奥義『七花八裂』

最終奥義と言っているが原作での虚刀流七代目、鑢七花が蝙蝠と戦う前日に考え付いた技であり、虚刀流の打撃技混成接続を応用した奥義の強制接続する奥義……だが弱点は『柳緑花紅』を放つ時の溜め動作によるタイムラグ（『柳緑花紅』は若干のためが必要のため）だが即応性があり、技名通りに七人の相手を同時に相手にできる。

・最終奥義『七花八裂（改）』

ためによりタイムラグを失くすために一番最初に繰り出す奥義を『柳緑花紅』に固定し、もっとも威力がある順番に奥義を出す、改良版である。出す順番は『柳緑花紅』『鏡花水月』『飛花落葉』『落花狼藉』『百花繚乱』『錦上添花』『花鳥風月』である。

????

夷のリミッターと霊脈とのバックアップがあることによってできる。

黒式と神卦法を同時に最大解放及び身体能力が人間どころか神すら超える、霊脈があるため、星が生きている間だけなら（この頃は世界と繋がりがかけているのでその心配もなくなってきた）夷にいつても魔力供給できるようになっている。しかし反動も強くヘタをする。と世界そのものを壊しかけないので夷は封印している。

魔眼

夷が神からもらったものだが……成長限界突破のせいで成長が止まらずにいる。解析、理解、複写、直死、吸収、分解、霊体感知、幻術の力を持ち夷曰く「眼光だけで殺すことも可能である」発動していると夷の目の中が様々な色が混ざったわけのわからない目になっている（空の境界の両儀式の魔眼状態を少し暗くした感じ）。最大解放時間は強化前は五分、強化後はどんなにもつても一時間である、それ以上は脳が溶け出す。

首飾り

木乃香からもらった首飾りであり、リミッターの源である。強大な魔力と気を抑え込んでいるのと神力ですでに位が聖遺物級になっており、普通の人間では生命力を封じられ死に至るほどのものである。夷ができる最大級の結界を何十に薄く張っており、さらにどんな環境でも錆びず、壊れず、劣化しないようにコーティングしており絶対に壊れないようになっている。もしも壊れたら夷の力が常時開放になり……超高密度の神力と魔力や気、そして妖力があふれ出し、最悪世界が滅ぶ。

夷の仮面コレクション

黒の仮面を作ったときにほかの仮面を作ろうと思って作っていたらあれよあれよと言う間に百種類以上、色々なアニメのネタ仮面も作っているらしく影の倉庫に専用の場所を作ったほどである。お気に入りは狐の仮面とマスク・ザ・斉藤の仮面である。ライダーの能力

をもとにして作った、マスクライダー（夷命名）を作り、被っているときだけ、そのライダーになりきるといってとんでもない物を作った。

どんな道具でも創造できる力

適当に夷が頼んだ能力だが……この頃は魔装服や仮面、刀やお仕置き用の武器などまともな物を作っていない。一応は制限はあるが「一日にできる物は五つだけ」だけであり基本なんでも作れるが、魔眼で一度理解してしまうので自力で作れるものばかりである。一応神殺しの武器も作れるらしいが槍一本作っただけで相当疲れたそうです。この頃は仮面の材料くらいしか作っておらず、涙目である。

影の倉庫

自分の影に物を放り込むと異次元に収納してくれる、いわゆる某青狸のポケットである。

この頃は自分自身でも何が入っているかわからなくなっており、別荘の七年間を使い、掃除したら……自分の小さい時に作ったあまりに危険なものがたくさん入っており、そういうものはすべて処分したがまだ力オスである。なぜか各種ライダーのベルトが入っているが作動しない、ただのレプリカであるがカブトとアクセルのベルトは作動するがもう一つだけ切り札として夷が保管してるものがあるが、今となっては夷自身が強くなりすぎたのでお蔵入りかもしれない。

術式吸収

吸収の能力の魔眼を使う、文字通りの相手の「魔法を吸収」するものであり、伝 伝の「残滅眼」を参考にして作ったものであり、そのまま吸収して魔力を補給したり、そのままの術式を利用して術式兵装をすることも可能である。

・参考

この名前は夷の本名であり、本気を出すとき以外はこの名を使わない。本来の夷のスペックを引き出す名前であり、序列も一位である。ほかの三つとは比べ物にならないほど強大であり、その力は神すら凌駕しうる力である。この名は使わないようにしている、使うと三日間程度は動けなくなる。あまりの力に世界の方が耐え切れないので結界を張ってあまり世界に干渉しないようにしなければならない。

両義式りょうぎしきのデータ

夷が過去に居る人物である「卓越者」オーバースキルへの嫌がらせをしようとしていた、しかし案外気に入っており今では夷ではなく式と自分から名乗るようになってきた。

この名前だとなぜか人が全員助かるのもつばら護衛任務なのは任せる（バリバリ）なんてなあ。序列は二位であり神卦法を使った近接格闘は無類の強さを発揮する、好んで使うのはナイフ『七つ夜』と二対の太刀「ヒヒノタチ」魔法銃『ジェフティ』『アヌビス』…そして虚刀流である。たまにバルバト 化するが完全なネタである。

神卦法

究極技法である咸卦法の魔力と気の融合以外に神力を混ぜたので夷はこう名づけた。身体能力、魔力、気ともに解放される全四段階にリミッターをかけているが一段階目でも十分な力を持っている、技や奥義はないがこの状態で仮面ライダーに変身すると能力が大幅に上がっている。これを発動中は虹色のオーラのようなものが出るのは制御しきれない神力や魔力、気があふれ出したものである、下級の妖怪や悪霊は近づくだけで消滅、人間や生物には気絶させるほどである（なんていう555ブラスター）本気を出せば解放時に半径

一キ口内のすべてを消滅させることができる。そして常時魔眼が発動状態になり、その時の目の色も虹色に様々な色に変わるようになる。すでに別荘のおかげで七年近く修業したおかげで完全制御した。三つの力を反発させて利用しているがヘタをすると体爆散してしまうので分量を間違えたら、人間爆弾になってしまう。

ヒヒロノタチ

仮面ライダーカブトの装甲であるヒヒロノカネで作った長さが違う二対の太刀、刀身が赤く（朱色）染まっており繰り出される斬撃には魔力が込められており斬撃を飛ばせる。元々はカブトの状態で使える太刀が欲しかったから作ったが普通の時にも使えるようにした。すべてが（柄まで）ヒヒロノカネでできているのでダイヤモンドすら両断できる硬さを持ちがこぼれなどしない。ここで説明しておくがヒヒロノカネとは日本に伝わる金属であり、正式名称は『ヒヒロカネ』伝説のオリハルコン級の超金属である。夷の神力に反応していて切れ味がどんどん上がっているのだが夷は気付いていない。

魔法銃『ジエフティ』『アヌビス』

魔力弾を撃つ魔法銃であり白と黒の色である。魔力弾は威力が自由に変えられるので手加減をするときはこれを使う。元々は廃棄されるはずだった、ベレッタM92を改造した銃、グリップ部分が指がかりやすいようにへこみがあるグリップパーツを追加しており、スライドとフレーム部分が若干長くなっていて、内部構造がほとんど改造されている。マガジンを入れる部分に小型の魔力変換機が入れており使用者の魔力を変換して弾丸とするので事実上魔力がなくならない限り無限に撃てる、各パーツを魔力保護しているので壊れる心配もない。この頃はCQCにも手を出し始めたので銃を持ったまま格闘できる技術が欲しいと思っている。

七つ夜

とある神様（読者様）にもらったナイフ、とある「直死の魔眼」を持つ者のナイフであり

飛び出しナイフで、柄の部分に七つ夜の文字が書かれている……らしい（作者はネットで探しまくってようやくわかったものです、間違っていたら指摘をお願いします）直死の魔眼とよくなじむらしく、遊び半分で使うことが多い。零崎では本気で殺しに行く。

忍法「足軽」あしがら

元々は真庭忍軍十二頭領の一人で真庭 蝶々（まにわ てふてふ）の忍法であり、歩法の一つらしいが本人いわく重力を無視した動きをすることが可能になる忍術。夷は主に手加減ように使っている。荷物を持つときに有効活用してらしい。ちなみに実際に重力に逆らっているわけではなく、ただの歩法的一种である、虚刀流で使っているのは打撃の重さを消すために使っているのである。

・参考

神力と魔力、気が充実している、いわばバランス型の戦い方が可能であり、両義でも世界と戦って勝てるほどである。

零崎虚識せうしきのデータ

見稽古と魔眼の併用により、夷の過去の記憶から再現した零崎を見取ったときに潜在的に覚醒し、五歳の頃に完全に目覚めてしまった夷の負の部分の感情を押し込んでできた存在であり、原作通りの『殺人鬼』である。このとき仮面と黒い服を着ているので「黒の死神」と呼ばれるようになった。零崎だが女子供を殺さない主義であり、零崎としては異端中の異端であり……敵以外にはめちやくちや優しい。戦闘が始まると残虐非道な攻撃と専用の結界で相手を逃がさない、得意な得物は鋼糸であり、黒式を使った剣術など、武器なら何でも使う。

序列的には対したことがないが……厄介さは序列一位である。

零崎の開始の言葉は「零崎を始めますか」でありこのときには女子供以外は皆殺しにする。子供の基準は人間なら二十歳、他の人外では見た目が子供なら見逃すが……向かってくるなら殺す。二つ名はバクティオーカードから「殲滅殺人^{フェスティバル}」

鋼系

夷が作った、「殺すためだけに」作られた系、見た目は普通の系だが神力で作りだした系であり理論上では全ての物質を切れる筈である。長さを自由に調節でき……最大は不明である。元ネタは鋼殻のレギスのリテンスの鋼系を参考している。単一分子という特殊素材を参考に作っているので本当に何でも切れる。

黒式（改）

エヴァの本物の闇の魔法を見取り完全に制御した黒式、純粹に妖力と神力だけの解放となったので零崎によく合うようになった、完全開放すると夷が……

奥義・技一覧

・黒式・一

最初の解除、30パーセントの妖気と10パーセントの神力を解放する。目が淡色になり、身体能力もアップする。

秘剣・月下斬

まず右手で切り上げるときに武器破壊をし、その後無防備なところに月を描くように弧のように左手の刀を振るう。

奥義・黒百合

連続十連続の高速突き、両手の刀を使い突きをし、最後に切り上げて終了する。

・黒式・二

60パーセントと30パーセントの妖気と神力を解放する、目が淡色になり、体から黒いオーラ（結界の役割もできる）を纏い身体能

力も格段にアップする。

秘剣・幻魔斬

斬撃を飛ばす神鳴流の「斬空閃」の威力と範囲を倍増させた物。

奥義・虚空月影刃

左手の刀で月を描くように一閃した後、右手の刀でそれを一閃する
ように妖気を纏った巨大な斬撃で攻撃する技、このときのためが必要
だがあらかじめ刀にチャージすることも可能。

・黒式・三

100パーセントと50パーセントの妖気と神力を解放する最終段
階、目の魔眼が常時発動になり、黒いオーラが体全体を包み込み、
さらに妖気を飛ばして攻撃することするようになった。

秘剣・？

奥義・？

妖刀・怪^{あやし}

偶然夷が五歳の時に見つけた妖刀、元々は名刀だったが人の血を吸
いすぎて妖刀となった刀、血を求めており夷以外が触れると乗っ取
られる。刀身は真っ赤な血のような色であり、封印していたのだが
夷が所有者となったのでついていた悪霊を夷が直死で斬ったので正
確には妖刀ではなくなったが妖力を流すのが効率がいいので黒刀で
はこの剣を使う。最近は無崎のときに使っているので血のせいでさ
らに強力になっている、つまり妖刀に戻ったわけだ。血を求めてお
り斬刀狩りの能力も得たのではや「人を斬るため」の刀となった。

小太刀

名前は無いが詠春の刀だった『夕風』を作った鍛冶屋から夷のため
に作られた、いわゆる専用武器である。まあ夷が黒刀用に改造して
しまったので黒く変色してしまっている。切れ味は名刀レベルなの
で心配はない。こちらも零崎に使っている、そして五百人程度斬つ
たので軽く妖刀になっている。夷のせいで刃こぼれしないように魔

力を纏わせていたら、魔力吸収の能力を手に入れた魔法使い殺しの刀となってしまうた。障壁なんぞ紙程度に斬り裂けるがあくまで「吸収」してるだけなので許容範囲キャパシティを超えると崩壊するが許容範囲は夷の最大魔力（初期）なので早々壊れない。

斬刀狩り

元々は鞘の中に血液を入れ、その状態で居合いをおこなうことで、居合いの素早さを飛躍的にアップさせる斬刀『鈍』 限定の奥義なのだが妖刀・怪あやしと小太刀の鞘と刀身に似たような構造を入れ、こちららは素早さではなく切れ味をあげる。鞘に戻さずに切れ味を上げることもできる。

仮面と魔装服

仮面はDARKER THAN BLACKの黒ヘイの仮面である。服装のほうも黒のロングコートで手袋もしており、全身が真っ黒である。ちなみに服の方は零距离で現存する地球の兵器の直撃に耐えられるほどの強度、対ショック性も高く大気圏から叩き落されても大丈夫である。手袋は鋼糸用であり、誤って自分を傷つけないためである。

・参考

殺人鬼であるが基本的にはやさしい性格であり、零崎を始めない限り殺しはしない。この頃は制御にも成功しており殺人衝動も抑えてきた。完全なる接近戦タイプであり、残滅戦にもっとも適したものである。接近戦と残滅戦なら両義より上。

近衛夷のデータこのええびす

完全に仮面ライダーの力しか使わないときの名前になったのだが……ライダーがいらない子状態なのでしくはらくは使われないかも……強さ的には最弱あり夷も最近ではライダーになることに拒否感も持

っているので……どうしよう出番がない。

仮面ライダーカブト

元はZECTと呼ばれる組織に作られた「マスクドライダーシステム」その一号目のライダー、作者が一番好きなライダーであり間違つてベルトを買ってしまったことは仕方ないことだ。……主に戦闘では「マスクドフォーム」防御力が高いフォームで戦い、とどめは「ライダーフォーム」と呼ばれる超高速戦闘が可能なフォームで行う。ちなみに「CLOCK UP」というのは体を駆け巡るタキオン粒子を操作し、時間流を自在に行動できる状態を指し、ベルトの右側のスイッチを押すことで発動する。「RIDER KICK」とは必殺技であり破壊力は19tだが改造により40tとなった、波動に変換したタキオン粒子で威力を高め、時空を自在に動き回る敵を原子崩壊・消滅させる。跳び蹴り・回し蹴り・横蹴りのいずれかを放つ、放つときはゼクターの側面のボタンであるフルスロットルを三回押し、ゼクターホーンを倒す。

ハイパーフォームも説明しておく公式チートである。最大の能力と言えば「HYPER CLOCK UP」と呼ばれる、単純なスピードのみで時間を自由に移動できる、もちろん過去にも未来にもクロックアップの数十倍のスピードであり、クロックアップすら止まって見える。ハイパー状態のライダーキックは左についているハイパーゼクターのホーンを倒し、後は通常のライダーキックと同じことをするだけである、破壊力は30tだったがこちらも改造により100tの威力で飛び蹴りをくらわせるものである。

仮面ライダーアクセル

作者のストライクゾーンにど真ん中に飛び込んできたライダー、いわゆる二号ライダーと言うもの。ベルトがバイクのスロットルを模した変身ベルトであり、上部中央のスロットにアクセルメモリを挿入しパワースロットルを捻ることで、装着者をアクセルに変身させ

さがカンストしており、ゲームで言うバグキャラである。強さも成長限界突破のせいで底なしである。

パクティオーカードについて

エヴァとの本契約により手に入れたカード、ここで補足だが夷はただ複数の本契約できる、これは魂が神並になったおかげである。

ここで夷のパクティオーカードを紹介します。（すみませんラテン語がわからないので英語表記です）

名前表記 RYOUNGI SHIKI（両義式）

称号 FESTIVAL（残滅殺人）

色調 Prisma（虹色）

徳性 Murder（殺人）

方位 centrum（中央）

星辰性 Nigrum foramen（黒い穴）

ローマ数字 ？

アーティファクト 完了形変体刀虚刀・式

こんな感じである、アーティファクトのおかげで完全に虚刀流を扱えるようになった。

こんな感じだが今度修業編も閑話として入れたいと思ました、なので楽しみに！！

|||||ここから閑話

木乃香 「嘘や、嘘！！」

詠春 「落ち着きなさい木乃香！！ 私だって信じたくありません

素子 「あつちはあつちで大変そうだなあ、まあいいがな」

刹那 「楽しみですよ……ほんとえーちゃんが居ると退屈しませんね」

ガトウ 「ほつと！ こんな感じでいいのか？」

タカミチ 「師匠！！ それはそこじゃありませんよ！！」

裕奈 「お父さんも！ 手伝って！！」

明石 「い、いや父さんはそんなにちか」

夕子 「あなた！！ しつかりなさい！！」

明石 「式さんがいればなあ」

近右衛門 「これこれ、ケンカはいかんぞ？ まったく老体にムチ打ってこんなことをすることになるとはの」

クーフエイ 「お腹すいたアル」

木乃香 「みんなあと少しや」

職員 「が、学園長！！ ガトウ先生！ タカミチ先生」

近右衛門 「どうしたんじゃ？ そんなに血相抱えて？」

職員 「……こ、近衛夷君の件なのですが……」

ガトウ 「なにかあったのか？」

タカミチ 「……」

職員 「……現在行方不明になっているそうです」

パリン、と皿が床に落ちる音がしたんや。ウチが落としたとわかるまで少し時間がかかったんや。

木乃香 「う、そ」

刹那 「このちゃん!!」

素子 「木乃香! まずい!!」

木乃香 「なあおじいちゃん、何かの間違いやろ? な、そうなんやろ!!」

エヴァ 「またか……あいつ似の奴はどうして置いていくんだ? なあ式い」

アスナ 「木乃香……」

これが一年前の話や。

さあさあこれから始まるのはただの閑話でございます、転生者であり、殺人鬼であり、守りし者である……「両希」「両義」「近

衛」がない物語の始まり始まり

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」刹那視点

刹那 「ふっ！ ふっ！！」

木刀を振る、日課として千回は振れとあの人に言われたからだ……私が大好きなあの人に。

刹那 「っ！！！」

つい怒りで振りが荒くなる、いけないいけない、落ち着け、なにごととも頭を冷やせあの人だって言ってたじゃないか。

夷 『おばあちゃんが言ってた。剣士ならクールであるべき……沸騰したお湯は蒸発するだけだ』

って言ってましたっけ……もうあれから何年も過ぎた感じがします。あれから必死の搜索が続けられました、思念や魔力痕跡、ありとあらゆる物が使われ搜索はまだまだ続いています。今日までなにか見つかったと言っ報告はありません、むしろ何もなかったと言っ報告しか聞きません。

鶴子さんや長、果ては青山家の当主様の明人様、桜さんの式神の斬鬼さんも探し続けました、周辺の妖怪たちもです。えーちゃん、あなたただけ人脈あるんですか？ 大妖怪も探すって……まったく、本当に規格外の強さと優しさですよ。私には無い物をもちつぎなんですよ……えーちゃん。

刹那 「斬岩剣！！」

最後に技を使って調子を確認めると空からバードが飛んできます。
あ、これはえーちゃんから託してもらったメモリと言う奴です、自立行動可能で私のペットみたいな感じです。

バード 「！！」

刹那 「はいはい、今日もこのちゃんは元気なんですね？」

バード 「！！」

刹那 「え？ アスナに撃墜されかけた？ まったく……まあいいです、引き続きお願いします」

そうするとバードの姿が消えていきます、ステルスにはいったのですね。私でも見つけるのが困難だと言うのにアスナは本当に強いです、私では手も足もでませんでした。一度、模擬戦をしたらボロボロにされてしまいました。

刹那 「私もまだまだですね……」

もうすぐHRですがもう少しだけ振りましょう。

……しかし私の時計が一時間ずれていて、それに気づかず登校したらタカミチ先生に怒られてしまいました。

|||||素子視点

素子 「……」

教師 「はいでは200ページを見てくれ」

私は今、すっごく眠い……どのくらいかと言うともう首がカクン、カクンしてるくらいだ、まずい……昨日、本を書いていてまともに寝ていないんだ。さらに間が悪いことに今は三時間目で英語だ。私は英語が苦手でよく夷に教えてもらっていた……プライド？ なんだそれは？ 食えるのか？ 私は英語がすごく苦手だ、文章読解？ 単語？ わけわからない。

これだったら剣術をやっている方が楽しい、特に夷との戦いは本当に楽しい。姉さんも言っていたが「どんどん強くなっている、まるでウチの動きを吸収しているような動きやった」って言ってたしな。

一年前のあの日、私は……いや木乃香や刹那も連れて、私たちは京都に帰った。

そこであつたのは長い髪の女の子と後ろ髪を一纏めにしたメガネをかけた綺麗な人にあつたんや、どうやら二人とも夷の手紙に書いてあつた「月詠」と「千草」って人みたいやつた。

千草 「初にお目にかかります、天ヶ崎千草と申します」

素子 「私は青山素子、よろしくな千草さん」

千草 「千草でええですよ？ 素子」

素子 「わかった、千草……これでいいな？」

木乃香 「ウチの名前は近衛木乃香や、よろしゅうな千草さん」

刹那 「桜咲刹那でしゅ……です、以後お見知りおきを」

月詠 「……月詠と言いますえ」

刹那のいつもの癖がでたところで私たちは話を始めた。

二人とも夷に世話になっているらしく、月詠なんかは家に住んでいるそうだ……うらや ゲフン。

月詠 「ウチ、ウチのせいや。ごめんなあ、夷はん……ウチは……やっぱり疫病神やったんや」

千草 「誰もあんたは責めてないやろ？ ……ウチやって悔しいんや、夷はんをもう少しちゃんと見てれば……」

素子 「お前らのせいじゃない、だが……もしもこれが誘拐ならやった犯人はもうお天道様が拝めない体にしたる……」

木乃香 「ウチもや……兄様を誘拐？ なんやそりや、ウチらにケンカうつてるようなもんやな」

刹那 「ふ、二人ともお、落ち着いて！ ここで私たちが何しようかと無駄ですよ……」

刹那の言葉で正気を取り戻す……アカンアカン、クールにや。

まったく私も修業が足りない、もっともっと強くならなくては……

月詠 「ウチは嬉しかったんや、ウチは誰にも相手してくれへんかった。初めてやったんや、夷はんが初めてウチを人間と認めてくれたんや。なのに……なんでや……」

刹那「……ウチですよ、あのひとやこのちゃん、素子さんと会わなかったらウチはどうなってやったんやろ？ほんとそう思うんや」

木乃香「せつちゃん……」

この後、長が来て月詠が麻帆良に行くことになり木乃香や刹那のクラスに入れるように学園長が手配したそうだ。結局一週間滞在したが何も証拠となる物がなかったので私たちは麻帆良に帰って行った。

月詠は麻帆良に着くとその大きさにびっくりしながらもクラスに溶け込もうと頑張っているらしい

教師「起きろ、青山」

パソコンと教科書が何かで叩かれる感触を頭に感じる。

ゆっくりと頭が覚醒する……どうやら記憶を思い出していると思い込んで寝ていたようだ……頭がぼやとしたような感じがする。むう、昼休みは寝ようと決心する。

教師「お前には宿題をたっぷり出してやるからな」

素子「ふぁーあ、はいすみませんでした」

そのまま寝ばけ頭のまま授業を受けるがイマイチ授業を思い出せない……眠い。

どうしていなくなったんだ？ 夷……。

そのまま夜となる……今日は停電日だ。

つまり今日は敵が大勢来る、毎年毎年思うが今日くらいはやめてくれないか？ バカみたいな数の敵と戦う、最低でも百以上。なんだ？ 寝不足なのにさらに寝不足にする気か？ エヴァの別荘で一日休養をとっておいてよかった。

今年は特に多いらしい……まったく、同じ関西呪術協会から派生した組織もいるみたいだから……複雑だ。だけど倒すことに躊躇しない……戦闘での迷いは死に繋がる、姉さんに何度も言われた、最初斬った時、私は何かが崩れる感覚がした。それが恐怖だと知るのは戦闘が終わった後だ、戦いに恐怖を感じない者はいない……はずだ、夷はそのところどうなんだろうか。

タカミチ 「虚刀流『木蓮』！！ なにぼけつと突つ立てるんだ！！ 素子君！！」

素子 「す、すみません！ 斬岩剣！！」

タカミチ先生は私とは違う「剣法」を使っているらしい、師匠さんの秘伝の技を教えてもらったらいいんだが……最終奥義は教えてもらえなかったらしい、なんでも「これは最終奥義というよりも……適当に考えた技だから、自分で考える」だそうです。なんですか？ その師匠は？ なんでもタカミチ先生はこの流派を覚えたら剣刀が使えなくなったらしいです。なんですか、本当に。

タカミチ 「くっ！ こうも数が多いと！！」

素子 「そうですね……決戦奥義さえ使えれば、あれを使いますか？ 夷が考え付いたあの複合奥義……」

素子 「斬魔剣 弐の太刀 百花繚乱！！」

式の太刀の特性である「魔を斬るための剣技」と複数の敵を相手するためのこの剣技なら！！思った通り、飛んで行った気はタカミチ先生やほかの魔法先生に当たらず、魔である鬼たちを切り裂く。うまくいった集団戦が苦手な私だがこの技は重宝できる。夷はこういう人間を「殺さない」ための剣技はたくさん考えていたしな。斬魔剣の式の太刀とは相性がいい。

タカミチ 「なら僕も！ 虚刀流奥義『双花三撃』！！」

タカミチ先生が飛びかかった三体の鬼に奥義を連続してくらわせる。後で聞いた話だがあれは奥義の強制接続をさせたものらしく、師匠が使った最終奥義も虚刀流の奥義全七つを組み合わせただけという物だったらしい。

素子 「でも……まだまだいますね」

タカミチ 「そうだね……あと百くらい？」

うじゃうじゃと今回は本当に多い、自分の武器が最高クラスの妖刀でなければもう血と肉のせいで切れ味どころか刀身が限界だっただろう。

本当にこの「ひな」と呼ばれる妖刀は素晴らしい切れ味だと思う、まあ飲み込まれないようにしないといけないんだがな。

素子 「（まずい、私たちは大丈夫だが……周りの魔法教師や魔法生徒が限界だ）」

タカミチ 「……これはまずいね」

私はこの程度なら京都でも体験したし、タカミチ先生だって曲がりなりにも英雄と呼ばれた「赤き翼」の一員だ。周りの先生たちとの力量やら経験が違うが……ここにいるのは今年新任された先生にまだ未熟な生徒ばかり……はつきり言うとは足手まとい、よく言っても教本通りの素人。さっさと撤退してくれたほうがいいんだが……プライドだけ高くて「せ、正義のため!!」とか言っているだが……斬っていいか？ 斬っていいよな？

タカミチ 「素子君、やめときな？ 僕だって居合い拳を使いたくて仕方ないんだ。これだから正義を妄信するバカは……」

……タカミチ先生がすごく苛立つてる、心なしかタカミチ先生の後ろに鬼神が見える。まずいそろそろ終わらせないと……。

|||||||？視点

イギリスの片田舎からよつこらつせと数時間、やつのことで日本に來たんだが……あのバカ親父は弟の世話をしてるだろうか、心配になつてくる。あつちにはいいちゃんや母さん、スタンのじじいやネカネがいるから大丈夫……あのはず、あのバカがまた「俺の魔法を見てろ!! ネギ!!」とか言いながら魔法使つてねえだろうな、古代魔法を子供のあやしに使うな、つうか王家の魔力で鎮静化すればいいしな。母さんの必殺の張り手さえあれば大丈夫だ、時折父さんと甘々空間を作り出すが……大丈夫だ。あれでも王家で王女だしな、ネギが変な方向に成長することはないだろうな。

羽田空港から荷物……まあ自分の武器や魔法具、服に仮面を入れて

いる車輪付きの旅行鞆をコロコロと転がしながら、麻帆良行きの電車に乗る。

アナウンス 「次、麻帆良、麻帆良」

？ 「……もう着いたのか？ はええな」

単に俺が寝ていただけなようだが……東京から麻帆良は結構遠かったらしく、一時間以上寝てしまったせいか、体を動かすと節々の骨が音を鳴らす。意外とイギリスからここまでの道のりの疲労からか結構疲れを感じる、俺は十三になるが……正直、夜更かしとかきつい。

俺は疲れた体にムチを打って電車のドアから出る、ちなみに今は零時ぴったりだ。まったく飛行機が遅れたせいで三時間も遅れた、一応念話でじいちゃんに連絡したから大丈夫だと思うんだが……自動改札口に切符を入れて、出ると辺りは真っ暗だった。

まあそれもそうだな、今は停電中で駅以外はすべて停電だそうだなんでもメンテナンスがどうたらこうたら……で停電中では駅はあらかじめ予備電源があるんだとさ、駅員のおっちゃんに聞いた。

？ 「まあにしてもだ、なんだこの異国情緒溢れ過ぎな町並みは……」

俺の正直な感想、まだ四月だから結構肌寒い、今の俺の恰好は白い着物と言う日本伝統の服装だと聞いたんだが……母さんからな、で寒いだろうからって赤いジャンパーを着ている（まあ普通の両儀式の服装です）これだけでも結構寒くない、下がスースーするが仕方ないだろう、ちなみに靴は編み上げブーツである。

まあ恰好の印象から動きにくいかと思っただが別に邪魔ではないし、動きやすい。まあ戦闘でも難なくいけるだろう。

？ 「うーん、でもさっきから感じるこの魔力は？」

どこぞのバカか知らないがとんでもない量の魔力を使っているバカがいる。

なんだ？ 悪魔召喚でもする気か？ まあいいや、じゃあちよつと懲らしめにいきますか……。

||||| 刹那視点

刹那 「数が多い！！」

真名 「無駄口叩くな！！」

何だって私がこんなに相手しなければならない！！ このちゃんには一応アスナがついているから大丈夫だろうけど…… もう真名と一緒に二百体くらいの鬼と戦ったぞ？！！ ほかの先生や生徒は撤退してしまった。

刹那 「まったく子供二人以外は全員撤退」

真名 「これは…… まずいかもね！！」

そんなことをいいながら真名が連射しているのは魔法銃『ジェフティ』『アヌビス』と言う銃らしい、師匠から受け取ったものらしいが素晴らしい性能に威力だ、何度も危ないところを助けてもらった。

後は周りに二百体くらいいるな……これは本格的にまずい。疲れが体を鈍らせる、バードはこのちゃんの護衛に行かせてるし……まずい、こんなことなら呼んでおくんだった。

真名 「っ！！ 刹那！！」

刹那
「あつ！」

少し油断したところで敵の攻撃を受け止めきれず『夕凧』が私の手から離れる。

しまったと思った瞬間、周りの鬼たちが私に向かって飛びかかる。間に合わない、真名の援護も私が羽を出すことも間に合わない……死んだかな？

「えーちゃん、ごめん」

[illegible]

真名の悲鳴が聞こえるが私には敵の動きが止まって見えた。これが……走馬灯をする時間か？ そう思った私は今までの人生を振り返るとあの人の事ばかりだった。

刹那 「（ごめん、ごめんな、このちゃん、えーちゃん、ウチこ
までみたいや）」

そして目を閉じる、何秒たったかわからないが暗闇の中では何もわからない……目を開けると敵が空中に浮いている。

いつまで浮いているんだろうと思うっていると私に襲い掛かっている鬼がずれていく。胴体が、頭が、全身が……するとバラバラになっ

た鬼が私の足元に落ちる。

次の瞬間、肉を切るような音と共に周囲の鬼が一斉に切り裂かれる。

真名 「まさか……これは?!」

刹那 「いつたいたんなのですか？」

? 「これでしまいと……まったくこんな小さな子供まで戦っているなんて、ここは平和の国だろ？」

声が出たので振り返ってみると赤いジャンパーに白い着物着て、顔にピアスの様な仮面を被っている奴がいた。手には手袋をしていて、右手には大きな旅行鞆を持っていた。

真名 「うそだろ？」

刹那 「誰だ!!」

? 「俺? 一応名乗っておくか、ただの殺人鬼の零崎虚識でありまたの名を……」

そいつは一つ間を開けて言う。

キョウ 「キョウ・スプリングフィールドだ」

そう名乗った。

「シキ視点」

術者 「はあはあこれで！！ 俺の全魔力と命をささげて！！」

遅かったか、もう最終段階だ。もうこれは殺すしかないな。

そう思いながら旅行鞆から『七つ夜』と仮面を取り出す。仮面を顔につけて……準備完了！

術者 「アハハハハ、俺の命と共に！！ 悪魔を召喚する！！」

そういうと魔方陣が赤く光り出す、光が収まるとそこには二百達くらいの下級悪魔と明らかに伯爵級の悪魔がいるんだが？！！ 予想外だよ！！ 殺しがいがあるなあ。

伯爵 「ふう、久しぶりの下界は汚い蠅に呼び出されて戦いかあ」

キョウ 「おーい、その悪魔さん」

伯爵 「なんだ？ 貴様は？」

キョウ 「通りすがりの殺人鬼だ、覚えておけ」

俺は自分の魔眼で悪魔の「点」を七つで突く、すると悪魔はフラリと倒れ……死んだ。

相変わらずだが俺のこの目は凶悪だな……まあ、三十秒程度しか全開できないがな。

悪魔 「オマエハ一体？！ ソノ眼ハ……魔眼か！！」

「グアアアアアアアアアアアア！」

ほとんどの悪魔が消えたが、少し残っている奴らをナイフで解体する。

うーん、消化不良だなあ。

「……おろ？」

「刹那あああああああああああああああああああ
あああああ！！！！！」

おお、なんつう声だよ。あれ？　なんか刀だったか？　そんな武器を持っている女の子が悪魔に……鋼糸を飛ばして全身の線を余すことなく切り刻み、バラバラにする。誤って女の子もバラバラに仕掛けたのは仕方ない事だ！！

とりあえず周りの悪魔も解体する。いやあ、「卓越者」の鋼系は使いやすいし殺しやすいなあ。たしか曲絃系だったか？ 数十メートル先の敵を指先一つで解体できるのはいいなあ。

「うそだろ？」

「誰だ！！」

……まあ名乗っておくか。

キヨウ「俺？一応名乗っておくか、ただの殺人鬼の零崎虚識で
ありまたの名を……キヨウ・スプリングフィールド」

二人とも驚きで固まっているが……まあいいや

||||| 木乃香視点

停電の次の日、真名とアスナの様子がおかしかった。せつちゃんもや、何かソワソワしてるような雰囲気でしたんや。

木乃香 「アスナ？ どうしたんや？」

アスナ 「なんでもない、大丈夫よ木乃香…… 大丈夫」

刹那 「……このちゃん、そろそろ時間ですよ？」

ううアカン、そろそろ席に座らないと…… そのとき予冷のチャイムが鳴ったんや。

そろそろタカミチ先生が来るな。

？ 「ういーす！ さあさあ授業始めるぞー」

木乃香 「え？」

そこにいたのはスーツを着た…… 兄様やった。

刹那 「えー…… ちゃん？」

？ 「今日からお前らのクラスの副担任になることになった……」

キヨウ 「キヨウ・スプリングフィールドだ、よろしく」

それを聞いた瞬間、ウチの目の前が真っ暗になったんや……。

感謝感激雨あられ（後書き）

作「今日のね」

木乃香 「なんや、あれはあああああああああああああ
あああああああ！！」

「ATTACK - BURST」

「ぎゃあ ああああああああああああ！！！」

放送事故少しお待ちを……

「こ、木乃香さんいきなりディエンドはきつい……」

木乃香 「グラーフアイゼン！！」

「すいませんでしたあああああああ！」

木乃香 「今回の閑話といい、前の話といい！ 兄様の貞操はウチのものや！！ 処女も兄様にささげるんや！！」

作「小学生がそんなことを言うなああああああああああ
あああああああああああ!!!」

木乃香 「兄様はウチのもんなんや……誰かの物になるんだったらこんな世界いらない!!」

Dドライバー 「G4 / RYUGA / OHGA / GLAYBE / K
ABUKI / CAUCASAS / AHKU / SKULL FINA
LKAMENRIDE - DI・DI・DI DIEND」

木乃香 「全部！！ いなくなっちゃえばいいんやあああああ
あああああああああ！！！！」

夷 「このバカ野郎おおおおおおお！！！」

Dドライバー 「KUUGA / AGITO / RYUKI / FAIZ ,
BLADE / HIBIKI / KABUTO / DEN - O / KIVA
FINALKAMENRIDE - DE・DE・DE DECA
DE」

木乃香 「アハハハハ！！ えびに、ウチもんにならないんだ
ったら死んじゃえ」

夷 「くそ！！ もとに戻れ！！！」

木乃香 「アハハハハ、えびにiiiiiiiiiiiiiiii！！！」

夷 「くそ！！！」

Dドライバー 「ATTACKRIDE - BURST」

Dドライバー 「ATTACKRIDE - BURST」

ダガンダガン！！

木乃香 「キャハハハハ、さすがえびに！！！」

作 「いつか……わかる」

夷 「そういえば作者は俺の特訓編を閑話として入れたんだっけ？」

作 「ああ、そういえばお前の能力制御描写を書いてなかったしな」

夷 「……まあいいや、つうか俺の能力値、チートすぎるだろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

作 「しゃーない」

夷 「なんだよ、全力でしたら世界崩壊って……！！」

作 「そこまでの気はなかったけどな」

夷 「……そういえばいつになったら俺はあの天使を殺せるんだ？」

作 「ああ、閑話終わったらキンクリするから」

夷 「またかよ」

作 「十年ぐらい？」

夷 「は？！！」

作 「では次回 そうだ修業しよう」

夷 「作者ああああああああああああああああ！！」

そうだ修業しよう（前書き）

前回から約二週間……まことに申し訳ない。

駄文ですみません、全然書けなかったのにISに手を出してしまい……お詫び申し上げます。

今回のスランプは本当にひどくて、さらに旅行などの予定もありさらに新しい小説も書いてしまい……申し訳ない。

こんな文章やだ、と言う人はケフィアにどんどん言ってください。

感想などストーリーに絡ませてもらいたいキャラなどありましたらどうぞ。

では始まり始まり。

それと今回は軽くほかの作者様の小説とのクロスがあります。まあ少しなんです……許可はとっていますので。ハヤテ様、クロワッサン様ありがとうございます。

そっだ修業しよう

はいな、夷だ……いや式か。この頃はやりすぎたと思ってる、寝ぼけていくつかの世界に行つたしてしまつてな。特に……臃だっけな。鑢七実の見稽古とマトリックスの身体能力はすごかった、まあ病魔もすごかったがな（あやゆく見取っちまうところだった）。まさか異世界に零崎がいたとは……「人間失格」やら「自殺願望」やら「人類最強」やらに絡まれたよ、結果？ 勝つたけどな「人類最強」はヤバかった、町が一つ消えたよ（まあ全員の技術は見取つたが）おかげであいつの身体能力をそっくりそのまま見取つたぜ！！まあ零崎をなめてた、あやゆく解体されるところだった。まあ舞織だっけなあ、あいつの手を直しておいたんだが……ついてきそうになつたんだよなあ、さすがに無理だつたけどな。い、いや、来ないよね？ あのスーツの変態紳士と顔面刺青……それと人類最強に喰われかけた、いやあればヤバかった、逃げるために魔力全力とクロツクアップで逃げたらついて来たんだが？ ……人類？ まあ零崎を見取つたおかげか、殺人欲も制御できてるしな。つうかあの世界はよく壊れないなあ、そういえばあの臃精神の中に二つの人格なんて持つてたなあ。そういえばあのバ力野郎な「人類最終」は無事かなあ、襲つてきてなかなか強かつたから半分以上の本気だして撃退したんだが、まあ大丈夫だろ。「人間失格」は大丈夫だろうか？ 精神と肉体弄つて寿命のばしたんだが……まあ足を洗えばそれに越したことはねえよな。

それに一夏だつたか？ そんな奴の料理スキルはよかつた……なぜかレギスの天剣たちが居たんだが？ あれだよサヴァリスだっけな、戦闘狂だつたけど学ぶことが多かつたよ、久々に殴り合いに目覚めたよ、おかげで結構虚刀流のアイデアが考え付いたがな。あとはリテンスの技をすべて見取らせてもらったよ、さすが本家本元無理やり戦つて覚えた甲斐がある、今なら百メートル先の敵でも殺

して解して並べて揃えて晒してやんよ。まああの一夏も強かったなあ、危ない危ない、あやゆく殺しかけた。心にすげえ傷ついていたがな……殺人鬼に言わせてもらえば別に正当防衛だろ？ まあいいさ、人の考えは千差万別だしな。で、あの年増ババアなんだ？ あいつの年齢軽く……まあいいや、ISかあ面白い世界だったなあ。まあ俺には勝てないがな、なかなかだったが銃器程度で傷つくほどの軟な皮膚じゃねえんだよ……うん人間やめたな。

うん、あれだ今日はなぜか影の倉庫の中にある修行用のシュミレーターで、直死の魔眼使いを出してみるか……ちなみに俺は別荘ver3だがな。思い切って自分ができる最高の素材を使って作っているので全力だしたって三時間くらいは耐えられる……筈だ。

うーん強さは今の俺の一段階、上で魔眼の制限解除……さすがに『まで出されないように設定つと、ほんと誰なんだろ？』使ってください」って書いてある手紙とデイクイドドライバーまで……誰が入れたんだ？ まあ修業になるからいいがな。

夷 「まあいいや、出てこい！ 両儀式！！」

式 「……なんだ、お前は？ ああ、まあいいさ」

式がナイフを構えると静かに目の色が変わる。直死の魔眼……実際に見ると俺のより強力なんだな、まあ「見取る」から問題なしだがな

夷 「最初から臨戦態勢かよ……まあいいが」

式 「……生きているのなら、神様だつて殺してみせるさ」

夷 「なら殺して見せるよ！！」

そついつてありえない速さで俺に接近する式……正直、念のため身

体能力を一段階上げてなかったら体がスッパリ裂かれて、上半身と下半身がコンニチワしてたところだ……今の身体能力は互角だが……このままだと負ける。俺は七つ夜で受け止めながら式を見ると……すごい嬉しそうなんだが。

式 「へえ、このくらいはいけるんだ……もつと速くするぞ?」

夷 「ま、マジかよ」

あ、最近なんだが見稽古のON/OFFができるようになったから式の動きは見取ってない。見取るとすぐに終わらないけど勝負がつかなくなる……まったく見稽古はチートすぎる。
式はナイフを小刻みに振りながら、時々大ぶりを入れる。……これで本気じゃねえとかマジ勘弁、刀を持たせたらどうなるんだよ!!

式 「まだだ!!」

夷 「くっ!! 畜生!!」

ナイフで受け止めながら相手を見るが……誰かが言ってた「お前は猫か」と言うセリフがよくわかる、つうか猫だろ?! まずいつてなんか回転しながら攻撃したり、猫のように丸まって回転して避けたり、もう嫌だこれで人間とか信じないぞ?

力もある、スピードもそこそこ、魔眼はある……たぶんこいつだけでも麻帆良に攻めは入ったら勝てるだろ。駄目だ、やばい。

式 「どうした? お前の力はそんなもんか?」

夷 「こなくそおおおおおおおおお!!」

式 「……やればできるじゃないか」

虚空移動と足輕を併用してやっと追いつけた……強さのペースを零崎にしたのが間違いかもしれない、あの状態の俺は結構速いからなあ。

そんなこんなで打ち合っっていくんだが……ぶっちゃけナイフ戦だとあっちが上だよ。

式 「……俺の眼は特別製でな。物の死が視えるんだよ」

夷 「知ってるさ、俺も同じもん持ってるからなあ!!」

式 「なら……説明はいいよなあ!!」

ガキंगाキンとお互いのナイフをぶつけ合う。まあナイフでこんな戦いしたらえらいことになるけど……主にナイフがな。まあこの七つ夜も相手のナイフもえらい強度だし……大丈夫かな？

式 「見切ったぞ？ お前の「線」を!!」

夷 「しま」

油断した俺に一気に接近して、式のナイフが俺の左腕をそつと撫でる様に俺の左手を切り裂く。するとバターのように左腕が肩から裂けていき、俺の腕が地面に落ちる。すぐに出血を止めるために術式を組んで止血をする。

ぐっ!! やられた……さすがに俺も「死亡」した腕を再生はできない。……てか俺にも線はあったんだ、死ねるのかな？

夷 「オラ!!」

しかし俺も右足で式のナイフを蹴り上げ、無詠唱の燃える天空でナイフを跡形もなく消す。

い、イテえ、久々にダメージを負ったよ。まさか俺の魔装服も突破するとはあなどれないよなあ、直死の魔眼……つつかやばい、防御力もヘチマもあつたもんじゃねえ。こちらは片手、あつちは……OH。

式 「……使っていいんだな？」

夷 「できればやめてくれ」

式 「黒桐が言ってた、こういう時は……『だが断る』」

夷 「黒桐おおおおおおおおおおおおお……！！！」

マジであの普通じゃない普通のあの野郎！！ マジでぶつ殺してやる！！

つつか本当に刀を握った式の雰囲気が変わっている、確か自己暗示で脳の機能を作り変えて戦闘に特化させてるんだっけ？ そんな設定だったはず……。

式 「……」

夷 「くそ、さらに速くなったのか？！！ こっちは片腕なんだが！！！」

式 「どうやらここまでみたいだな……死ね」

夷 「なんとおおおおおおおおお……！！！」

俺は片手で刀を受け止めるがさつきよりも数段……下手をすれば別人のような動き、そして女の力だと思えない力……正直武器一つでここまで変わるとは驚いている。

七つ夜も優秀だがリーチの差、力量や俺のナイフの熟練度がひくさ（今は見稽古で見取った技術はすべて封印して、自分で培った技術のみでやっている）が決定打になっている。

夷 「……くそつたれ」

式 「終わりだ!!」

夷 「虚刀流奥義……」

正直片手がない状態でできる奥義はあることはあるというか……そういうことも想定したが付け焼刃みたなもんだから無茶すぎる、ならあれをするか。

式は刀を持ちながら俺に接近する……人間やめてるだろ、あの動きこれで「人間です」とか言われたら俺は泣く、俺だってもうほとんど人間どころか人外ではなく……化け物だな。

式 「ハア!!」

夷 「『七花八裂』応用編!!」

俺は右手一本で奥義を行使する、片手でできる奥義をすべて行使するが式の刀が砕けただけで式はすべて避ける……忘れてた未来予知もできるんだった、体は飛んだ破片で少し切れただけだった。しかしそのまま式は砕けた破片を手で掴み、その破片を俺の右肩に突き刺す。

式 「俺の……勝ちだ」

夷 「……ああ、そうだな」

そのまま体に刺した破片を動かし、右肩の「線」を斬るつもりらしい。

だがなあ、俺に仮面をつける時間を与えたのは失敗だったな！！
実は刀を砕いた時にとある漫画の仮面を出すときみた、仮面を出せるように術式を組んだ……以外に簡単だったよ、影の倉庫から出るところを顔の部分にしたらけなんだがな。

夷 「残念だったな！ 今日はずの仮面だよ！！」

仮面 「EXCCD CHARGE」

鬼の仮面から出た赤い光が右足に流れる、それと同時に右肩を一閃され右腕も切り落とされる。血が噴き出す……畜生、失血で意識がぼんやりしてきた。けれど、それを堪えて右足を式の腹のところまで上げる……俺の……

夷 「勝ちだ、両儀式」

式 「なっ？！ ぐあー！！」

俺の足から赤い棒状の光が式に向かって伸び、円錐型になりその体を固定する。

そして赤い円錐に右足を突出しながら飛び蹴りをかます。

夷 「ちえりおー……っっっ！！！！」

そして式の体に疑似クリムゾンスマッシュを当てると式の体にも文字のような物が浮き上がると式はゆっくりと倒れながら光の粒子になる。

それと同時に俺も倒れる。なんとか勝てたが……もうボロボロ、あれじゃ今の俺だとなんとか全盛期の父さんと相打ち程度だろう、さっきの戦いだって両腕どころか下手したら四肢を切断されてダルマにされてもおかしくなかった。つかされない方がおかしい、すごいラッキーだったよ、最初から刀だったら開始五分くらいで死んでた。ちなみにこの修業シュミレーターにはレベルがあり、今のだって50レベルであれば自重してほしい。さらに素敵機能で怪我や修業中の戦いで死んだ場合などすべて回復してくれる、しかし疲労だけはかんべんな！

夷 「（や、やべえ今回は少し寝るか）」

そのまま瞼が閉じていく、予想以上に血を流しすぎたようだ。頭がうまく回らないし、視界はぼや……け、てき、た。まずい……エヴァ。

そんなこんなで眠ってしまった俺は懐かしい夢をみた、まだ修業時代の頃の話だな。

〓〓〓〓〓〓〓〓〓三歳の頃

詠春 「今日からお前は神鳴流の修業を始めますよ、夷！」

やつほー、なんか久々どころか……時間を巻き戻した感じがしなくもないが、まあいいさ。あんなチートライダーみたいなことしないでくれよ？

夷 「具体的になにするんだ？」

詠春 「まずは素振りからだな、今日は最初だ……百回はやりなさい」

夷 「ほいほーい」

まずは木刀を持って……振る！ まあモデルは素子さんにしよう、見稽古で見取っているからまあ動きを真似して……振る！！

徐々にスピードを上げていく、そうして二十分で終わらせるが俺の体力は結構疲弊されていた、父さんは感心したように俺を見る。

詠春 「……さすがは私の息子です、では今回は気の制御をしましょうか」

夷 「ハアハア、でな、なにするんだ？」

詠春 「まずは体の中の気を感じることから始めましょうか。今からあなたの体に気を流します」

俺の体に父さんの手が触れる、すると何か温かい物が流れ込んでくる感じがする。

まあこれが気なのは数年前からわかっている、暇なときに魔力の制御をしていたら（知識はなぜか頭に）何か別の力を感じた。でなんだろうと少し魔眼で解析してみた……死にかけた。どうやら人間の体を解析しちまったようで脳の許容量を超えたらしい……あの時は

一日ダウンしていた、二歳にして死にかけろ……アホか？　つつかアホだな。

詠春 「見ていなさい！　これが『斬岩剣』です！！！」

すると父さんの持つ木刀に気が集中する、そして目の前にある岩に向かって木刀を振る。

……一拍空けて岩が一刀両断される。高密度の気の集中で木刀の切れ味……いや、木刀に乗せた気で斬りやがった。なまくらでも名刀に早変わりな技だなこりゃ。

夷 「……やれと？」

詠春 「できたら怖いですよ？」

ええっと確か……

夷 「ざーんがーいけー……ん（笑）」

詠春 「（笑）？！　なんで？！　……ってできてるうつつうつつうつつうつつうつつ……」

夷 「できちゃった」

なんか適当にやったらできたよ……その後に斬魔剣に斬空閃と色々教えてもらったが一度「見取ってる」俺はすべてできた。

なんか父さんは「……ラカン並のバクキヤラだな」と少し落ち込んでいた……うん、ある意味で俺はバクキヤラだからな。

今日の特訓は終わった後、木乃香に泣きつかれ、刹那は少し不満げ理由は稽古を俺だけにつけさしてもらっているかららしい、本当に

面倒だ。

「……………！！！！！！四歳

夷 「むにゃむにゃ」

？ 「……………！！」

夷 「なっ？！！」

殺気を感じて飛び起きたら目の前で真剣を握る父さんが居た。

そのまま俺に向けて振るう、紙一重。その言葉通りに俺の着てる着物を斬っただけで体は斬られなかった……やべえ、軽く今のは死ねた。

夷 「何しやがる！！」

詠春 「朝ごはんの時間だ」

そういつて刀を鞘に納めて部屋を出ていく……後に残ったのは着物を斬られた俺とぐちゃぐちゃになった布団。数か月前から親父が弓矢やら刀やら、果ては母さんに協力を求め、呪術で狙われ、木乃香ハンマーや刹那に木刀で叩かれ、素子さんに修業をつけてもらおうとしたら模擬戦でボコボコにされ……泣いていいよね。

夷 「うん？」

少し時間がたってお手伝いさんが来て俺の部屋を掃除にしに来たん

だが……そのお手伝いさんの体に「線」が見える、それに複数の……なんだこりゃ？

「（ついに殺気のせいでおかしくなったか？）」

なんか頭がフラフラするがしばらくすると「線」が消えた。まあちよつと疲れてるだけだろうな。そんなこんなで着替えようとタンスを開くと……

『これきてやにいさま！！　このか』

妹からのプレゼント（女物の服）だった。わざわざまだ字があまりきれいではないが、ちゃんと書けてることに俺は感動したが……

夷 「これはないだろ おおおおおおおお
 おおおおおおお おおおおおおお
 おお！！！」

血の涙を流しかけた。

まあその後のことだが妹と少しOHANASHIをしてきた、二度とこんなことしないと約束させたし……まあ服の件は別にいい。ああ、まったくいい、俺はいつも自主練として山に籠って神鳴流の技を改良していた。

とりあえず思ったこと……奥義の使い易さは最高だと思った。まあ基本的な神鳴流の奥義と言えば「斬岩剣」「斬魔剣」「斬鉄閃」だろう。ここで一つ前世の記憶にピキーンと来た、ティルズでは複数の秘技や特技を合わせた技を奥義と呼んでいたことがあった、まあ例を出すと「虎牙破斬」と「魔神剣」これを合わせると「魔神双破斬」と言う奥義となる。まあこれは斬岩剣だと「飛天翔駆」みたいな単発の奥義みたいなのに分類されるはず……まあうちくはここ

まで俺が何したいかっていうと、秘剣を組み合わせで新たな奥義を作りたい。まあ手札は何枚もあった方がいいだろうな。

夷 「やっぱ二刀流にするか？」

そう考えるがあまり理想的じゃないし……もう少し強くなつてからにしようと思った。とりあえず使える秘剣を思い出す。「斬空閃」「百花繚乱」「斬光閃」……絶望したあ！！秘剣のほとんどが放出系の技だよ、どうアレンジしろと！！

夷 「……うつん？！ ない物は作ればいいさ！！」

とりあえず俺は影の倉庫からある物を出す……それは。

夷 「記憶転写装置 ！！」

なんかどこからか聞いたことがあるようでないようなBGMが聞こえたが……気にしない、まあ遅いと思うがこの小説はフィクションです、実際の名前などはすべて他人のそら似です。

夷 「まあテイルズの技が欲しいだけだからなあ」

そんなこんなで過去の記憶からテイルズの記憶だけを転写する……二歳くらいの時に寝ぼけて作ったものがこんなところで役立つとは……。

あー、コレ、アビスにレジェンディア、それとデステイニーだよ……ああ、懐かしいバルバさんにぶち殺されまくったよなあ、もう難易度上げたらもう悪魔だよ。ジューダスにはお世話になった、本当に。

夷「オーケー、これ以上みると色々見取っちまいそうだからやめとこ」

なんかバルバさんやら、色々なボスキャラの技まで見取っちゃった……どうしようか。

夷「……出てこいよ、気付いてるぜ？」

妖怪
「へへへ、バレテタカ」

あつきからなーんが見られてる感じがしたんだが妖怪だったとは……うーん、正直戦っても勝てそうにないんだが中級妖怪クラスなんだがねえ。

「妖怪様が人間になんの用だ？」

妖怪「食ヲセ口！」

やっぱりねええええええええええええええええ！！ アブな！
く
そつたれ避けるのが精一杯だよ！ なんつつ速さだ見切れねえ！！

夷「くそつたれが！！」

妖怪 「ソレ程ノ魔力……食ッタラ俺ノ力ハサラニ協力ニナル!!」

夷「ガッテム！！　ちくしょう！！　三十六計逃げるが勝ち！！」

妖怪「逃ガスト思ウ力!!!」

氣強化した脚力で逃げようとするが妖怪に逃げる前に頭を掴まれ、

が問題なしだ……つうか魔眼に「直死」の能力がなくなってるなあ。その名の通り「直死の魔眼」というのは死を見る魔眼だ、常人なら発動しただけでも発狂し、死に至る魔眼……物の死が視える、それは「線」と呼ばれる物が視え、さらに集中すると「線」が集中しているところを「点」言うらしい、その「線」を斬ればその部分は「死」んで使い物にならないそうだ。さらに「点」をつけばその人物は「死」ぬという物だ。しかしながら、リスクも高く発動し続けると脳が溶け出すという、「眼」と「脳」がワンセットな魔眼だ。

夷 「いちいち騒ぐな、妖怪だろうが？」

妖怪は肩を押さえながらうめく、正直ここまで痛がるのは意外だった。

まあいいさ、俺は影の倉庫から厨房からちよろまかしたナイフを取り出す。調理用だが魔眼のサポートもあれば斬れるだろうなあ。

妖怪 「マ、待ッテクレ！！ オ、俺ガ悪カッタ！！」

夷 「……プライドとかないのか？」

妖怪 「頼ム！！ ナッ、イイダロウ？」

まあ、戦意消失した相手を殺すのは嫌だし、前世でも俺は殺す、つて言う行為は嫌だしな。

そう思つて俺は後ろを向いて歩き出そうとすると……ズブリと何かを刺した様な音が、生々しい音がした。

あ、れ？ おかしいな、な、んで俺の体にあの妖怪、の、腕が生えてるんだ？

痛いと言うよりも熱い……俺の服が、木乃香が選んでくれた服が真っ赤になつていく。後ろを向くとさっきの妖怪が笑っていた。

妖怪 「バツカジャネエカ?! マサカ本当二見逃ストハナ!!
中身ハヤツパリガキダツタカ!!!!」

夷 「ガフツ」

口から流れ出す真っ赤な液体が止められない、腹の腕が抜かれてとんでもない量の血が流れ出す……やべえ、頭がぼやっとする。
血を流しすぎたのか、頭に白いもやの様な物がかったようになり、体がまったく動かない。

……ざまあないな、甘ちゃんだったってわけか。よく二次創作の主人公たちが敵を見逃すと「甘い」と言っていたがその通りだな。俺は怖かったんだろっうな、転生してチート能力を持っていたも……ははは、くそつたれが。

妖怪 「サア、食ベルカ」

まずいますい、動け動け動け、そう願っても俺の体は動かない。
妖怪は笑いながら俺に近づいてくる、ああもうなんてこつたい。たしか不死とか言ったから死ぬことはないだろうけど死にたくないなあ。

夷 「……」

妖怪 「イタダ」

夷 「ナイフでも食ってろ」

俺は力を振り絞り妖怪の頭にある「点」にナイフを突き立てる。
妖怪が倒れて静かに消滅する……もうだめだ。そのまま意識を失っ

た俺、目覚めた時には家族全員に刹那と素子にも泣きつかれた。

五歲

この頃、自分自身のチート能力が嫌になって来たよ。虚刀流も覚え
たんだが……特性まで見取っちまうて一時は刀使用不可と言う状況
に、あれはひどかった。刀を振りかぶれば後ろに落とし、振り下ろ
せば前に零す……刹那に負けちまったよ、地味に悔しかった。まあ
その後無刀で……まあ虚刀流なんだが、記憶転写装置の弱点がある。
俺の記憶に残ってるものしか転写できない、まあつまりアニメとか
で描写されてない攻撃などは見取れないので……まあ不完全な虚刀
流なんだが。この頃殺人に対して抵抗がないんだよな？ 時々だが
刃物……いや尖ってるものであれば殺せるようになってきてる。…
…なーんか忘れてるんだよなあ、この前に使ったときに曲絃系の扱
い方を学ぶときに久々に零崎が読みたくなつたから転写して読んだ
んだが……いや、まさか？ そんなはずはない。

「えびにい？」

木乃香 「いつまでも兄様は恥ずかしいんや！」

ハッハ、ハア、鬱だ死のう。そう言つて俺はロープを輪つか状にして天井につけ、首をそこにかけ

素子 「ご飯や なにしてんの?!?!」

木乃香 「素子姉さん!! えびにいを止めてや!!」

夷 「フ、フフフいいさ、いいさ、どうせ俺は兄ですよ」

素子 「やめときい!! まだ早い、早いんや!!」

夷 「かはは、もう俺は自分を殺して解して並べて揃えて晒してやらなきゃいけないんだ」

ワーワーギャーギャー なにしてんの!! 母様! えびにいを止めてえ!! まかしときい……やめなさい夷!! ドゴーーーーー
ーーーーーン（殴った音） あ、あれ? 動かなくなってもうた? えびにいいいいいいいい!! 夷うううう
うううううううううう!!

し、死ぬかと思った。つつか無意識に気で強化した張り手しないで? 俺死ぬよ? つつか俺じゃなかったら死んでたよ?

あの後、ご飯を食べて木乃香と口を聞いていない……妹の『兄様』
と言う言葉を生きがいにして生きていたが俺はここまでみたいだな。
死にたい、ガチで死にたい、でも死ねないんだよねえ。

夷 「とりあえず、昔の記憶から俺の刀扱ってた頃の記憶を見て実力取り戻さないと……」

？ 「近衛夷だな？」

夷 「おじさん誰？ あれか分家の人？ 近衛の家に用事でもあったのか？」

？ 「いや、私は君に用があるのだよ。ラメテル・ラル リラ・ラル ラグン」

…… たしか前にここに来たゼクトだっけ？ そんな奴が教えてくれたなあ、えーと確か今のが始動キーだっけ？ 魔法を唱えるための…… 熟練者だと無詠唱でも行けるらしいが実戦で戦うのはこれが初めてだなあ。

魔法使い 「君を連れて行けば関東はさらに力を得る筈だ…… 我々正義の魔法使いがな！！」

夷 「いやいや五歳児になに期待してんの？ バカなの？ あほなの？ 死ぬの？ 死にたいの？」

魔法使い 「口のきき方がなっていないな、それでも学園長の孫なのかね？」

夷 「学園長？ …… ああじいさんの所のへばい魔法使いか、じいさんが愚痴を父さんに言ってたぜ」

実際、あんなけつたいな結界があるのに侵入、さらには魔法生徒まで動員して警護に当たらせるなんて…… 普通は大人のお前らがやれよ、つつかお前らが強かったら魔法生徒もいらなくね？ 経験値稼ぎには持って来いだが夜だぜ？ 健やかな成長は夜に始まってんだ

よ、寝かせるよ。俺？ ハイパークロックアップって便利だよね…
…事情は察してくれ、頼むこの頃はベルトも作ってるからなあ。

魔法使い 「さすがは関西だ……子供の教育もなっていないな」

夷 「好き勝手、向こう（火星）から来て無理やり麻帆良を奪い取った連中よりマシだが？ つうかそんなくだらない事してないで…
…まあ冗談なんだろう？ 用件は関西呪術協会の近衛詠春にか？ ご苦労様、んじゃ案内するよ」

魔法使い 「風の精霊11人。集い来たりて敵を打て……魔法の射手・連弾・雷の11矢」

そんな言葉を言うと男の周りに光る何かが浮かび上がる。えーと確か基本魔法の一つだっけ？ ゼクトに初手で全弾避けたら「やはりお前はこの頃からバグか？」と言われたんだが？ 初対面だよな？ ハイパークロックアップで未来の俺がやったのか？ まあ俺が力ブトに変な機能つけすぎててわけわかんなくなってくるからな。

夷 「危ないなあ、当たったらどうするんだよ？」

魔法使い 「さすがは英雄の息子……ということか？」

夷 「やめときな、あんただって今東と西が戦争したくないだろ？」

魔法使い 「……それが狙いなんだよ。君はわかってないね、自分の立ち位置が」

夷 「……はい？」

なんかすごく神妙な顔してるんだが……俺が何をした？ 虚刀流を学んで、遊び半分で神鳴流を覚えて、直死の魔眼を制御して……ぶっちゃけると何かしたか？

魔法使い 「君は危険すぎるんだよ、君が思ってる以上に君の実力は危険で……あらゆる組織が欲しがっている。我々、正義の魔法使いもね」

……あれ？ なんだろ？ 目の前の奴に怒りを感じない、昔の俺だったら確実にこちら辺でキレてる筈なんだが？ そういえば……目の前の奴を「殺したい」と思ってる俺がいる。

そっいえばこの頃、悪とか正義とかどうでもよくなってきた。いかに敵を殺すか……その一点か木乃香たちを守るための物しか考えてない。

……そうだな、正義ってなんだ？ そもそも目の前のこいつは俺にどんな信念で立ち向かってくるんだろうか？

夷 「なあ、おじさんは俺をどうするつもりなんだ？」

魔法使い 「君を誘拐する、大丈夫だ。君も正しい魔法使いになれるさ」

夷 「知るかよ、俺は五歳児だぜ？ 難しい事はわからない」

おかしい、本当におかしい。目の前のこいつに向けてるのは……殺したいって感情だけだ。

魔法使い 「君もわからないのか？ 世界には不幸な人たちがたくさんいる。それを助ける仕事につけるんだ……どう思う？」

どう？ どうって……

夷 「『何も思わねえよ』アホか？ 不幸？ 決めつけてんじゃねえよ、てめえらがやってんのは『侵略』だろ？ 『救い』でも『救済』でもない……自己満足の塊だよ、くそつたれ」

一回だけ資料を見せてもらったことがある……そこに書かれたのはひどい物だった。気に入らない物は魔法で残滅し、老若男女皆殺し、全てはガロメセンブリア元老院の傀儡、ただの人形、まあタカミチたちは何か企んでいるようだが、知らんがな。

夷 「……帰ってくれ、俺は『殺したくないんだ』」

魔法使い 「……無駄だったか、まあいいさ。元々は『コレ』を使つてやろうとしてたからね」

夷 「なんだその巻物……」

男が取り出したのは一個の巻物……かなり古いようでなにやら呪文が書かれているんだが？

魔法使い 「これは悪魔を……それも魔王級の悪魔を無条件で召喚できる、もののなさ」

夷 「……」

開いた口がふさがらない、魔眼で確認したが……マジだった。このままだと魔王級の悪魔が召喚される、そしてどうなる？ 今の関西

呪術協会は大戦中の損害は軽微だが……それでも完璧とも言いにくい、麻帆良に行ってる人もいる、魔法世界に無償で救いの手を伸ばしてる奴だっている。もしも召喚されたら、今の俺じゃ勝てない、魔王なんてものに人間が立ち向かえるわけがない……力の差が歴然だ。

夷 「そんな、そんなことしてみろ！！ 京都は消え去り！ 東と西の泥沼という名の戦争が起きるぞ！！」

魔法使い 「それがどうした？ 敵を『倒す』ことに躊躇はいらないだろう？」

は？ 倒す？ 殺すではなく？ ……ふざけるなよ

夷 「『倒す』だと……」

魔法使い 「そうだ、正義が悪を倒す！ これほどいいものはない！！」

ああ、そうか結局俺も『理想ばかり』追いかけてたんだな。『殺す』『殺さない』守ることに犠牲がつきものだ、味方も敵も……俺は怖かったんだ。人を殺すのが……木乃香を守るとほざきながら……俺は、ライダーにはなれないな。

そうだな、名前を変えよう。俺が殺すときに使う、あらゆる意味での『殺し名』を……まあ決めようか、俺は殺すが無差別には殺さない、女子供は見逃そう。まあまだ甘いだろうが……確か零崎っていう殺人鬼の中に『条件を満たさなきゃ殺さない』奴もいたなあ。俺もそうしよう、俺の大切なものを破壊する奴は……殺して解して並べて揃えて晒してやんよ。

そうだなあ、零崎ってのはいいな。理由もなく殺す集団か……まあ

この前読んだってこともあるんだがな。何て名前にしよう……零崎、
零崎……

夷 「ああ、そうだなあ 虚刀流から一文字とって、『虚』識か」

魔法使い 「何をぶつぶつ言っている?!」

夷 「ああ、そうだな。ここは有名な戯言遣いのセリフを少しアレ
ンジして言ってみるか。……もう理想を見続けるのは 飽きた。
そろそろ零崎を、始めてみよう」

ああ、そうだ俺の名は……

虚識 「零崎虚識……まあ殺して解して並べて揃えて晒して刻んで
炒めて千切って潰して引き伸して刺して抉って剥がして断じて刳り
貫いて壊して歪めて縊って曲げて転がして沈めて縛って犯して喰ら
って辱めてやんよ」

魔法使い 「なめるなああああああああああああああああ
ああああ!」

そして俺は手に魔力を集め、魔法使いをなく

夷 「ハッ!」

盛られて……後はご想像にお任せします。

エヴァ 「ふふふ、この体は便利だ。十歳から二十歳まで自由に体を変えられるんだからな」

式 「あー、はいはい」

なんか泣け崩しに告白受けて、付き合って、体合わせて……正直最初は面白い奴だったんだけどなあ、本当に惚れたかも……うん、まあこれも

式 「戯言だけだな」

作 「うん、今日だってテイルズ オブ ザ ワールド レディアント マイソロジー3をやらずにひたすらに書いたんだもの」

夷 「まてやこのやろっ」

作 「後はまだ読んでなかったラノベを読んで……ああ、デート・ア・ライブは面白かった!!」

夷 「……お前蒼穹のカルマも読んでたしな（駄目だこいつ早く何とかしないと）」

作 「H A H A H A こちらまだ終わってねえゲームが……ロックマンゼロゼンシリーズ終わってねえんだよ!! Xシリーズもそうだけど!!」

夷 「おい、ついていけるのか？ もう何年前の話なんだよ」

作 「うつさい!! ちなみに作者はX9もゼロ5もいつまでも待ってます」

夷 「……（駄目だこいつ）」

作 「にしても旅行が地味にキツイ……体がイテエ」

夷 「運動しないからだよ、ただでさえ運動部でのモヤシと言われた男なのにさ!」

作 「うつさい! それに俺はスタミナが少ないのは仕方ない!!」

夷 「なぜだ!!」

作&夷 「「帰れ！」」

作 「まあそういうことだから」

夷 「つつかこの後書きも数えて何回目だ？」

作 「ぶっちゃけネタ切れ、これからはアニメとか布教するために
そのの特設コーナーでも作ろうかと」

夷 「やめとけ」

作 「とくに……エルフェンリートなんてどうだ？」

夷 「しょっぱなからグロイものなんて見るかよ!!」

作 「作者は正直、あの子には幸せになってほしかった。つつかが
ち泣きした作品だからね、グロイとか置いといて……ヒロインが不
憫すぎて」

夷 「……ハッピーエンド大好きなんじゃねえのか？」

作 「ガンアクション物も見るから……たまあーにだけどソツチら
へんのアニメを見ることがある。ガンアクションと言えばブラック・
ラグーンは良いと思うぞ？ まあお勧めはしないがな」

夷 「あれもあれで救いなくね？」

作 「二丁拳銃は作者の憧れです、HELLSINGでのアーカー
ドの旦那には惚れたよ」

夷 「いやいやいや、人間好きとか言いながらボロボロに殺しますよ?!?!」

作 「いい加減にしないと色々な人たちに怒られるからな。あ、それと今出したアニメは十五歳未満の方は絶対にググらないでください、これはフリじゃありませんのあしからず……どうしても見たい方は自己責任で。結構悲惨なシーンがありますので」

夷 「では次回まで……」

木乃香 「ちえりお！ ふふふ、やっと言えたで」

夷 「お、俺のしめが……」

作 「では次回まで上記のアニメについて知りたい方がいらっしやいましたら質問をどうぞー」

転生者（前書き）

遅れましたあああああああ！！！ 申し訳ない、ゲームをしていたらこんな……申し訳ないです。

ナギ 「今回は俺が主役なんだよな！」

ああ、それね。ナギ、お前を主役と言ったな……あれは嘘だ。

ナギ 「嘘おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！」

ではどうぞ！

そして謝罪します、今回私はある読者様のご要望を裏切りました、本当に申し訳ないです、しかし後々の展開に必要なだったので止むおえず出してしまいました、こんな作者ですが……これからよろしくお願いします。

転生者

転生者 「うあ、あああああああああつ！」

夷 「これで終わりだくそつたれ、神卦法・二！」

ああ、こんにちは。久しぶりの挨拶だな、夷だ。

いや、あれから数か月、俺とエヴァとチャチャゼロは共に魔法世界に入った。念のため栄子に連絡用の札も渡したし、フェイクも向こうに残した……まああいつでも父さんクラスの力は持つてるしな問題はここからだ、俺は日本のゲートがないから近場のゲート……まあイギリスなんだが、久しぶりにバイクに乗りながら観光もかねて、ちなみにバイクはデイクイダー、悪いが創造する能力なら何でも作れるんでな、改造でもなんでもござれた。一種の無限機関を搭載してるから燃料切れの可能性もない、まあ認識障害などを使いながら行ったんだが……途中にありえない奴らに会った。

宝具を自在に操る慢心王、血統付きの零崎、どこぞの死神代行やら……明らかにこの世界にいない奴等が俺とエヴァ……正確にはエヴァに襲い掛かった、正直宝具程度なら対応できるようにしておいたしな、死神代行なんか魂ごと消し飛ばしたしな……ぶっちゃけると零崎は楽勝でした。俺が異常すぎるだけなんだがな。

んで慢心王の能力をすべて消失させて拷問 OHANASHIをしてみた、そしたら指を切り……まあ色々したら簡単に言ってくれましたよ、いや物騒な手はツカッテナイヨ？ この赤いの？ コレハケチャップダヨ？

まあそれで知ったんだがこいつらは転生者らしい……同類ですか、つつかどんな能力を貰ってるんだよ。……俺の方が悪質？ 使ってるのは見稽古……今は封印してるんだが今回は解放したよ、霊力の扱いは三十年前くらいに覚えたよ。

別荘使ったりしてたよ、さすがにヤバいすぎるからな……下手に力もつと暴走すると大変なんだよな。で奴らが言うに好きな力をやるから転生しろだと……おいおい、そんなにホイホイ転生させるなよ、平行世界の中じゃ、大量の転生者が居たせいで消滅した世界もあった、その神？　ぶっ殺しましたがなにか？

エヴァにはすでに俺が転生者と言ったがな……まあ拒否されたらすべての記憶消して、大戦期までおとなしくしてようと思ってたら

エヴァ　「それがどうした？　私は吸血鬼だぞ？　転生者よりもよっぽど化け物だろう」

やっべ、泣けてきた。まあその後いい雰囲気のに詠春が乱入したからぶっ飛ばしたのはいい思い出。

で目の前に居るこいつは某蛇のコードネームを持つ男そっくりの男、まあ鋼糸で拘束してるから動けないからな。こいつは中々の身体能力だったが……まあ勝てるわけねえだろ？　化け物が人間に。

転生者　「た、助けてくれよ、俺はただ『ネギま！』に介入したかっただけなんだ！」

夷　「……『ネギま！』ってなに？」

転生者　「し、知らないでこの世界に来たのか？！」

夷　「仕方ねえだろう……まあ俺が居たのが運のツキだってことで」

転生者　「お、同じ転生者だろう？！」

エヴァ　「ふん、私の体目当ての奴らと一緒にするな！　こいつはな、私がお」

式 「あー、どうしようか。今戦争中だし、適当にぶらつくわけにもいかない しなっ！」

俺は突然飛んできた剣のような物を蹴り飛ばす。久々にこの世界での強者に会ったな…… いったい誰だ？

？ 「あー、あー、お前が超越者オバスキルでいいのか？」

式 「…………… ゑ？」

お、俺が超越者？ Why、なぜ？ 理由を簡潔にのべよ。

？ 「お前、龍樹ナガシヤに喧嘩売っただろ？」

式 「誰？」

？ 「ほら全長100mを超える巨大な龍だよ」

…… ああ、あのじゃれついて来た龍か、帝国に寄つたらなんかじゃれついて来たから戦い（遊び）してたんだよな、純粋な身体能力だけだったから苦労したぜ。また遊ぼうと約束したんだが…… 喧嘩は売ってないが？

式 「はいはい、それで筋肉マッチョ君」

エヴァ 「…… まだ終わらんのか？」

？ 「お、いい女…… って待て待て、殺気出すな！ 超越者……！」

あ、あれ？　なんかぴくぴくとラカンが痙攣おこしてるんだが？
まあ追撃に……

式「蟲ピン」

ラカン「があ？！　があああああああああああああ
あああああつ！！」

ラカンの腹に全長三メートル前後、四角錐状の形をした巨大な杭を腹に打ち込む、まあ投擲してだが……これ？　とある世界に行ったときに『とても優しい主とものすごく怖い従者さん』からもらった蟲駆除用の物だよ。蟲？　世の中には知らない方が良い事があるんだよ、綺麗な人に極上の殺気と共に言われた瞬間、死ぬかと思っただぞ？　世界にはまだまだ強い人が居るんだな、間違つて見稽古で見ちゃったけど……ああ、怖かった、絶対魂ごと消滅させられる覚悟しないと勝てねえよ。

エヴァ「おい、なんか変なことになってるが大丈夫なのか？」

式「……まあ、あの人の武器だし『生物をそのままの状態で“保存”する事が可能』だからな」

転生者の腹に十本くらい刺したら簡単に口開いてくれたよ、わざわざ痛み止めまで打って精神崩壊させないために色々やったしな……外道？　エヴァや木乃香の体目当てで来るやつに手加減できるかよ。

チャチャゼロ「マツタク俺ノ出番無シカヨ」

式「仕方ねえだろ？　でだ……ラカンだっけ？　誰を殺すんだ？」

ラカン 「……………」

式 「もう一本逝く？」

ラカン 「あーあー！ わかったよこん畜生っ！ 無理だ無理！！
こんな依頼やってけるか！！」

式 「わかればいいんだ、まあとりあえず……俺ら行くから」

その場から歩き去ろうとするエヴァと俺、頭にはチャチャゼロ。

ラカン 「ま、待ってくれ、薄情ものー！ 鬼！ 人でなしー！」

式 「殺人鬼ですがなにか？」

一時間たったら抜けるようにしてあるし、回収されないように自然
消滅するように改造はしてる……ヒイロノカネぶった切ったこの
金属なんだ？ 蟲^{ムシ}ピン……恐ろしいなあ。

ラカン 「無視しないでくれええええええええええええっ！！」

アーアーキコエナイ、キコエナイ。

「……………時は過ぎて……
夷　「くっ!!」」

転生者　「よええ、ヨええよ!!」

大ピンチ、ピンチすぎて笑えないぜ？　ただいまオスティアの町中……というよりも戦時中、帝国が攻めてきたところに偶然入ったかな。エヴァ？　危険だから捕縛して別荘にぶち込んでおいたよ。

いつも通りにすれば問題なしだった……筈だった。最初は俺は戦争の様子見をする予定だった、便利だよな光学迷彩つて……まあ段ボール被りながら潜入していたら開戦していた、その中に赤毛のあのバカや詠春、見慣れない男と……俺の魔法の師であるゼクトが居た。なんてこつたい、まあ見学していたら敵艦から撃たれた精霊砲がかき消された、なんだと思うと中央の塔からの『何か』が精霊砲を無力化していた。

式　「おいおい、魔法無力化だと？　とある右腕のバカじゃあるまいし」

久しぶりに解析の魔眼を使う、0.1秒もかからずに解析が終了したので結果を見てみると、生前愛読していたライトノベルの世界に行ったときにあった、ツンツン頭のバカみたいに魔法を無力化していた。

兵士　「さすが……『黄昏の姫御子』だな」

……黄昏の姫御子？ 俺は導かれるまま塔までディケイダーで走る……塔に突入するときってバイクだろう？

式 「I'm absolutely crazy about it!（楽しすぎて狂っちまいそうだ!）」

兵士 「ど、どこか うああああああああああああああああああ……」

久しぶりに『アヌビス』と『ジェフティ』を両手で撃ちまくりながらバイクで突進する。そのままバイクを上にして、壁を登る。そこに精霊砲やら魔法や矢を撃たれるがすべて銃弾で迎撃する、ちなみに兵士は殺してねえよ。そのまま最上階に突っ込み、石の壁を破壊しながら内部に突入した。

式 「到着、おもしろいって誰？」

？ 「……ダレ？」

目の前には鎖でつながれ、ボロボロの服を着ている……あれ？ どこかで見たことあるような橙色の髪をした少女が一人居た。……ひどいな、感情の色が見えない、おいおいまさかこの子が最終兵器だって言わないよな？ こんな子を？ はははははは。

………つぎけんなよ？！ 全てを任せたのか？ 王国？ ハッ！ 自分の国すらまともに守れないのか？！！ ……今はこの子の事だ、口から血が出てる、それを指でふき取り頭を撫でながら聞く。

式 「俺は両義式、お前は？」

？ 「ナ、マエ？ ……」

式 「名前ぐらいあるだろう？ 俺なんていくつも持ってるがな」

？ 「アスナ……アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテ
オフユシア」

式 「長いからアスナ アスナ？！！！」

アスナ 「ドウ、シタ、ノ？」

おいおいおいおいおいおい！ 目の前に居るのが未来
で木乃香の同室になる、両義アスナか？！ 全然雰囲気違うよ？！

式 「こつちの話だ、今鎖解いてやるからな」

アスナ 「ダメツテ、ネエサンガダメツテ、コウシナイトワタシガ
キケンニナルカラツテ」

……感情を殺され、ただの兵器として扱われてるのか？ 糞くらえ
だ、どの世界にも最低な奴らは居るもんだな、殲滅しておくか？

式 「まあよく頑張ったな」

アスナ 「ガンバル？」

式 「な、なんて言えばいいんだろうな？ ……まあ後で色々教え
るからな、とりあえず『開け』」

言霊を使って鎖を外す、同時にアスナが倒れてこんで来る。どうや
ら体が動かないらしい、俺は腕の中に抱きかかえる。……にしても

どうする？ 本当に面倒になって来たな。

ナギ 「こつちだn ってゼロザキ?!?!」

詠春 「し、師匠?!?!」

式 「よお、鳥頭、バカ弟子久しぶり……後ろの二人は初めましてか？」

？ 「ふむ、いい動きじゃな」

？ 「これはこれは変な仮面を被った人ですね」

式 「殺すぞ？」

？ 「おお、なんちゅう殺気じゃ。……お主、人か？」

式 「どうでもいいだろ？ ショタジジイ、まあ何かの縁だ。俺の名は両義式、その青y 近衛詠春の師匠で……通りすがりの一般人だ!!」

ナギ 「てめえが一般人なわけないだろうが!!」

詠春 「少しは自覚してください……まったく」

ああ？ 世界にはな、力持ってるけど一般人になってる人間もいるんだよ、俺だって力自覚して生きていけるならしたいが……バトル案外戦闘マニア狂らしい、その世界のラスボスに戦いを挑んだりしたしな

？ 「面白い方ですね、私の名はアルビレオ・イマ。気軽に『アル』

とても呼んでください、得意魔法は重力魔法、『紅き翼』での役割は主に後衛からのバックアップや作戦の立案などですね」

式 「……紅き翼？」

？ 「次はワシじゃな、ワシの名前はゼクト。主にこのナギの師匠をしておる」

式 「……つうか紅き翼って何？」

その場にいた全員がずっこける、まあアスナは相変わらず無表情だが少し驚いているな。うんうん、わざと言ってよかった、本当は知ってるのさ。

エヴァ 「シキイイイイイイ！」

俺の影から勢いよく、エヴァが出てくる、つうか……。

式 「あ、忘れてた」

エヴァ 「何が忘れてた、だ！ 貴様と言う奴は……決着をつけるか？」

詠春 「師匠にエヴァさんも落ち着いて！ 今は戦争中ですよ？」

アスナ 「……ヘンナ、クウキ」

式 「うゝん、茶番もそろそろいいか、うんじゃそろそろアスナを誘拐するか？ ？」

紅き翼全員 「……待て待て待て……」

エヴァ 「子供か……私とお前は子供を」

まあ色々あったんだが……とある世界で不覚とつてしまい、生殖機能を破壊された……うん、なんか因果ごと破壊されたから再生できねえ、殺しても治らないし……はあ、まあしょうがないと言えましょうがない。

とりあえず外では俺の『偏在』たちが戦ってるだろう、俺の小指程度の力を持つてるがリミッター外してない俺と同じ程度の力だしな、ナギが百人居たって勝てないだろうな。

詠春 「いいんですか？ 師匠」

アル 「私はむしろ式さんに賛成ですよ、か弱い少女 ええ幼女を監禁している連合に力を貸したくありません」

式 「……エヴァ、アスナを近づけさせるな」

アスナ 「？」

エヴァ 「お前は知らなくていい、私の名前はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ。母親気分で甘えてくれ！」

アスナ 「ハ、ハハオヤ？ ナニ、ソレ」

ゼクト 「……下種共が親の愛情すら知らずに、ただ兵器として育て上げたんじゃない」

ナギ 「許せねえ、許さねえぞっ！」

式 「はいはい、んなこと言ってる暇あったら逃げんぞ、今は俺の結界で止めてるが……鬼神兵もたくさん、集まってるみたいだな」

俺の偏在たちからの情報によると……十体くらいの鬼神兵が俺の結界を破ろうと必死こいてやってるらしい、あれ？ かしいな、理論上は蟲ピンに耐え切れるくらいの強度の結界を張っちまったせいかな？ 俺はお茶を飲みながら考える、うーんやっぱお茶は落ち着くな

アスナ 「ソレ、ナニ？」

式 「お茶だよ、心配すんな。今から広い世界に旅立つんだからな」

俺はお茶を飲みほし、デイケイダーを影に収納する。そして蟲ピンとキーブレードを持つ……ネタが多い？ 作者に言ってくれ。

式 「んじゃ、少し遊んでくる」

ナギ 「俺も行く！！」

詠春 「師匠ばかりいい恰好はさせません」

式 「そりゃいい、三百歳のジジイにやらせんなよ？」

アル 「……あなたって、何歳なんですか？」

式 「さあ？ 百超えた時点で忘れた」

平行世界、別荘などで遊んでいたら三百年程度たってたからびつくりしたぜ……あれだ、百年って長いかな？ って聞かれたら『短い』

って答えるよ？ いやあ楽しかったな、学生に変装したり、社長したり、オペラ歌手になったり、衛士になったり……あ、べーた？ 潰して親玉も現在、俺の偏在達が潰しに行ってるよ、俺の腕位の実力かな？

ゼクト 「なんと！ ワシよりも高齢なのか？！」

式 「うつせい、人は若いと思えばいつまでも若いんだ！！」

イライラしたので蟲ピンを一万発撃ち込む、結界に弾かれると思ったらバターのように弾かれたね、あらまあこりや改良かな？ 外から断末魔の様な悲鳴が聞こえるが……悪いな、今非常に腹がたってるから手加減する気はない。

そのままキーブレードを持ちながら塔から出る、目の前には死屍累々な兵士たちが……死んでないけどね まだ残ってる鬼神兵の一体を狙ってキーブレードを振り下ろす。

式 「真・雷光剣（短）！！」

範囲を絞った真・雷光剣を放つ、元々広範囲殲滅技だったが範囲を絞ったらえらいことになった。まあ鬼神兵を一撃で葬れるんだ……十分な威力だな、おっともう一体がこっちに向かってきたな、まあ倒す気がなかったが……ネタ技行けぜ！！

式 「天に竹林光って唸る！ 死ぬほど痛いと轟き叫ぶ！ 爆熱……」

体内のコジマ粒子（汚染除去済み）を解放する、運が悪く世界を移動したら目の前にコジマキャノンことINSOLENCEとっさに発動した吸収の魔眼で吸収したら……体内に留めることに成功した、

エヴァ 「まあ仕方ないだろう、次はもつといいところに連れて行ってやるう！」

意外と子供好きなエヴァ、京都に居るときは子供たちと遊んでいたっけ、いいのかなあ神明流。まあいいか酒吞童子すらいるんだ、つか京都襲われる心配ないだろう。

式 「んじゃ、いk」

転生者 「ちよつと待ったあああああー！」

声がしたので見てみると……なぜかどこぞの金髪ソルジャー顔をした男が、また転生者かよ。この頃一週間に一回のペースで見つかるんだが……G？ Gなのか？！

転生者 「アスナちゃんを連れてどこに行こうとしてやがるー！」

式 「どこつて……色々かな？ 世界を見せてやりたいし、つうかお前誰だよ」

転生者 「クラウドだー！」

あ、頭痛くなってきた。たぶんこいつ、転生して間もない。なんか体から出てる覇気と体の運び方がグチャグチャだし、剣の持ち方も力任せのいい加減……うわあ、昔の俺見てる感じだよ、虚刀流習得した時の俺だよ。

エヴァ 「また……あいつらか？」

ナギ 「なんだこいつ……何者だよー！」

式 「あー、ナギ？ 紅き翼とエヴァとアスナ連れて先行け」

ナギ 「ふざけんじゃねえぞ？！ 俺は最強の魔法使いになるんだ
っ 絶対に」

エヴァ 「良いから来い！ 式の邪魔をするな鳥頭！！」

詠春 「お気をつけて師匠！ 体運びはめちゃくちゃですが……実
力は確かなようです！」

アル 「すみません、私たちのリーダーが……あなたならできます
よ」

ゼクト 「ふうむ、まあいいじやろう、無理はするなよ？」

アスナ 「……シキ」

式 「なに？」

アスナ 「……ガンバッテ」

次の瞬間、エヴァが転移札（俺特注）を使い、転移する。あ、ナギ
がエヴァに殴られて連れてかれた、まあ子供だから手加減してんだ
ろ。

まああれなら俺でも簡単に追えるな。そう思いながらク……転生
者に向く。

式 「で、何の用だよ」

クラウド 「お前だって原作ブレイクを狙ってエヴァちゃんに近づいたんだろう？ つうかなんでエヴァちゃん大きいの？」

式 「原作ブレイク？ …… ああ、この世界の物語の事か、別に壊す必要はないが」

クラウド 「ならお前は素直に消えてくれないか？ 怪我はしたくないだろう？」

うわあ、本人ならしない笑みしやがって筋肉がえらいことになって、端正な顔立ちが台無しどころかひどくなってんぞ？！ つうか余裕な感じだな、まあチートな能力を持っていればそうなるだろうな。

式 「はあ、言っただろう？ アスナに世界を見せるんだ、てめえに関しては俺は何も言わない、静かに暮らそうが楽しく暮らそうが関係はないが……エヴァに手出したら殺すぞ？」

極上の殺意と共に返事をするが相手はまったく表情を変化させない。……へえ、面白いな、久しぶりに良い奴だな、この頃は腰抜かして残滅兵器発動させるアホばっかだったから……きついです。

クラウド 「まあ睨むなよ……まあいいさ、ここで死ねよ、出てこいバハムート……！」

式 「え？ おまつ！ おいバカやめ」

次の瞬間、オスティア上空に真っ黒な龍のような生物が炎を纏いながら降りてくる。

おいおいおいおいおい！！ こちら辺を吹き飛ばす気か？！ これだからチートすぎる奴は嫌なんだ！！ 俺が言う

な？ …… 知らんがな。

クラウド 「吹っ飛ばせ！！」

式 「マジで吹き飛ばからやめろ！！ 結界！」
タリスマン

オスティア全域に結界を張る、まだ逃げてない一般人もいるんだぞ？！ メガフレアでも撃ってみろ、全滅するぞ？！
結界に異常なまでの衝撃を感じながら制御を怠らない、ミスった瞬間、こちら辺は吹っ飛ば、エヴァたちが逃げてくれてよかった。

クラウド 「すごいな…… だがっ！！」

式 「いい加減にしろ！！ 右手に気、左手に魔力、中央に神力！
神卦法・二だっ！」

クラウドが合体剣のような物で斬りつけてくるので神卦法を発動させる、魔眼が解放されたことで視界がえらいことになる、死線やら相手の武器の効果やら…… 情報量パねえよ、糞が。
久しぶりにヒヒノタチを出して受け止める、並列思考で結界の操作も忘れない。バハムートうざいです。

クラウド 「変な仮面をつけやがってっ！」

式 「いたずらに力使うな！ ここを吹っ飛ばす気か？！」

クラウド 「お前さえ死ねば、ハーレムでもなんでも作れるしな！
！」

式 「ああそう、ちなみに聞いておくが…… 近衛木乃香にも手

を出すつもりか？」

クラウド 「当たり前まだ、あんな美少女とは仲良くしたいだろ！」

式 「気が変わった」

虚識 「てめえはここで死に腐れ、来たれ（アデアット）」

服装が着物だったのが、いつもの黒の^{ハイ}コートに変わる。

あーあ、静かにしてたら力奪って輪廻転生に戻してやるうかと思っ
たが…… 木乃香に手を出すつもりなら容赦しない。

クラウド 「はっ！ こけおどしかよ、服装が変わった程度でどう
した？」

虚識 「いや、てめえはここで殺して解して並べて揃えて晒して刻
んで炒めて千切って潰して引き伸して刺して抉って剥がして断じて
刳り貫いて壊して歪めて縊って曲げて転がして沈めて縛って犯して
喰らって辱めてやんよ」

まずは目の前のくそ野郎の合体剣の死線を見る、うゝんさすがにル
シフェルが造った物か、普通じゃ壊せないな、まあヒノタチなら
いけるがな。そのまま合体剣を切断し、細切れにする、本物なら奴
から受け取ってるし別にいい。

クラウド 「ハア？ 壊れないって言ってたのに！！」

虚識 「面倒だから蟲のように標本になつてろ」

零距离から蟲ピンを使い、腹に突き刺して地面に張り付ける。念の

ため両手のひらと両足にも突き刺して置く。それでも表情を変えない、目の前の『蟲』……痛覚ないのか？ せつかく悲鳴をバツクにバハムートを消し去ってやろうと思ったのに。

クラウド 「くそっ！ 痛みがないけど……気持ち悪い！！」

虚識 「さあて、あのバハムートをどう料理してやろうか」

上空で頑張っているバハムートを魔眼で視る。
スタンバイ、スタンバイ…… GO！

虚識 「標的『バハムート』消去」

消去の魔眼を使ってバハムートを文字通り消し去る。存在ごと消し去るから、最初は脳が爆散して死んだなあ、懐かしい思い出を思い出しながら目の前の『蟲』を見る、すごく怯えてるな。

クラウド 「ば、化け物！」

虚識 「俺もお前もそうだろうが、つつかチートな能力持つてる奴で化け物じゃない奴はいないさ、つつわけとつと死ね」

クラウド 「く、くそっ！ アルテ」

虚識 「ジャックポット
Jackpot」

アルテマを言う前に頭を『アヌビス』で撃ち抜いて殺す、これで死んだようでごつたりとする。まあ頭吹き飛んでるからな、見たところ不死者でもあったんだらうけど、悪いな。不死殺しの銃弾使ってるから地獄に行ったな。

虚識 「《チート保持者に転生したよ、ただしかませ犬》みたいな
っ！」

兵士 「ま、待て！！」

去れ（アベアット）していると兵士が集まってくる、すでに零崎は
終了したし戦う気はないしな。

兵士 「この国を救ってくれて感謝する、しかし貴様は危険すぎる
！！」

式 「まあそりやそうだ、だがお前ら程度の連中で勝てるのか？
鬼神兵も呼んで来いよ。全員殺して解して並べて揃えて晒してやる
うか？」

まあただの脅しだしな、周りの兵士は怯えながら……しかし詠唱を
始める、なに？ 俺悪役？

式 「それでは兵士諸君、ご苦労様、ここら辺で失礼する」

俺は転移札を取り出し転移しよ

？ 「待て！！ アスナを返すのだ！！」

式 「ほえ？」

兵士 「あ、アリカ様？！！」

アリカ 「貴様、その仮面に着物！ 『^{オーバスキル}超越者』という者か！」

[illegible]

アリカ 「貴様、何をやったかわかってるのか?! この国を滅ぼすつもりか!」

式「ハア、お前こそ……はき違えるなよ、小娘」

俺はさっきの蟲の時よりも濃密な殺気を出す。

アリカは目を見開いて……しかし毅然としながら立っていた。

アリカ 「な、何を言っている？」

式「さっきの結界がなければ、この国は地図上から消えてたし、
てめえだって死んでた」

アリカ 「なんだと?! アスナさえおればそんなク

式「いい加減にしろ！！ てめえは妹を兵器としか思つてねえのかよ」

「わ、私……は」

（誰が妹を兵器に扱う者がいる！）

式「……なるへそ、なるほど、別に兵器とは思ってないようだな」

アリカ 「何を言っている！ 兵士たちよ、目の前の男を捕縛しろ！」

（な、なぜわかった？ 思考が読めるのか？！）

あら、すぐわかったのか。うん、さすが未来の女王様、無能ではないな……とりあえず、アスナの事はまた潜入して聞いてみるか。

式 「そんじゃあ！ ちえりお！」

今度こそ転移する、なんかアリカが言ってたが……まあいいや。

|||||アリカ視点

私の名前はアリカ・アナルキア・エンテオフユシア、ウエペルタテ
イア王国の王女だ。

私には妹がいる、しかし私と妹は生まれてすぐに引き離された。妹には能力があつた、それは我が王家で稀に発現する魔法無効化能力^{マジックキャンセル}。妹は幽閉され力の制御だけをさせられた、それだけなら私はまだ父を恨まなかった。……妹の扱いはとても人間をするような物ではなかった、感情を失くし無機質な目ですべてを見る妹、私には恐ろしく感じられた、同時に怒りも感じた。たった一人の妹だ、私にとつては大切な妹を存外に扱う父親には殺意を覚えてくる。私は努力した、遊ぶ時間も寝る時間も惜しんで勉強、王女としての振る舞い、戦

闘、できることはすべてやった、いつか父を乗り越え国に立ち、アスナを解放するため。

そんな折、戦争が起きた……最悪だと思った、これではアスナはますます壊れる。魔法無力化能力さえあれば、戦艦についている精霊砲だって無力化できる。文字通りの最終兵器……アスナの様子を一度見に行ったのだが……ひどい、ひどすぎる、最低限の服装、食事、世話、王族にするような行為ではない。さらにアスナには呪いがかけられている、もう二十歳はいつてはすなのに見た目は幼女……成長を阻害する魔法だ、そのせいで長く生きさせようと言うことだ、反吐が出る。

しかし王女として国民を……国を守らなければいけない、最低な姉だ、何もしてやれないのに、助けようとは……しかし、神は居るのかもしれない。

帝国がオスティアを襲ったとき、ある報告が来た。アスナが誘拐された。

その後、がむしゃらに会議室から飛び出した。報告では誘拐したのは超越者と呼ばれる、最近魔法世界に現れた、「絶対強者」それには誰も勝てないらしい。

私は外に出ると信じられない物を見た、巨大な龍がオスティア上空にいるではないか……最悪だと思った、アスナは誘拐された、あんな龍に攻撃されたらこの国はおしまいだと思った。しかし何かに阻害されているのか、龍が吹く炎はオスティアを焼くことはなかった。私はまた塔に向かって走り出した、邪魔なドレスのスカートを破り走りやすいようにし、体を王家の魔力で強化する、そのまま走り続けると……奴がいた。私は声を出して生死を促す。

アリカ 「待て！！ アスナを返すのだ！！」

静止した超越者は顔に仮面を被っていて、顔が見えなかった。

アリカ 「貴様、何をやったかわかっているのか?! この国を滅ぼすつもりか!」

式 「ハア、お前こそ……はき違えるなよ、小娘」

次の瞬間、感じたこともない殺意を感じる。私は足が自然に震えるのが分かった、奥歯がガチガチとかみ合わない、しかし私はその恐怖を押し殺し超越者に向かって言う。

アリカ 「な、何を言っている?」

式 「さっきの結界がなければ、この国は地図上から消えてたし、てめえだって死んでた」

アリカ 「なんだと?! アスナさえおればそんなk」

式 「いい加減にしろ!! てめえは妹を兵器としか思ってねえのかよ」

アリカ 「わ、私……は」

誰が妹を兵器に扱う者がいる! 私がそう思った瞬間、奴はニヤニヤしながらうなづく。

式 「……なるへそ、なるほど、別に兵器とは思ってないようだな」

アリカ 「何を言っている! 兵士たちよ、目の前の男を捕縛しろ!」

動揺しながら兵に命令する、いったい何者だ?! 多分龍を消した

のもこいつだろう、男か？ 女かわからない！！

奴は手に持っていた、札のような物を再び顔の前に持ってくる、転移札か？！

アリカ 「待て！ 超越者！！」

式 「そんじゃあ！ ちえりお！」

そして超越者が消える、周りの兵士たちも呆然としている。

アリカ 「……撤収だ、この場に居ても仕方ない」

兵士 「よいのですか？」

アリカ 「奴の実力なら逃げ切ることも可能だろう、さあ今は軍を再建しなければ！」

アスナ……勝手な願いだが、姉としての願いだ。頼むから無事でいてくれ……私の妹だから、絶対助け出すぞ、待っていてくれ。

「……………」その頃のアスナ
アスナ 「……大きい」

エヴァ 「ふふふ、アスナも大きくなれば大きくなるかもな」

エヴァの胸を凝視していました……ドンマイ、姫さん。

作 「お前らには原作で死ぬほど働いてもらっからいいよ!-!」

チャゼロ 「続キハ？」

作 「あ、はい。なので今度また閑話を行います」

チャゼロ 「ナンノ閑話ダ？」

作 「『これはゾンビですか?』いいえ、ただの?病弱です?』の
ハヤテ様とのコラボ閑話、夷が の世界に行ったら」

夷 「あれ? マジでやんの?」

作 「この前メッセージで許可をもらった、本当にありがとござ
います」

夷 「マジでやんか…… 臃の奴の胃が死ぬぞ?」

臃 「どうも臃です」

夷 「お前の出番はまだ先だ」

作 「では次回予告、チャチャゼロ」

チャゼロ 「マイイヤ、次回『これはゾンビですか? いいえ、た
だの仮面バカです』ナンツウ題名」

作 「次回も!-!」

チャゼロ 「見テクレ、チェリオ」

夷 「でだ、今回使わせてもらった武器についての説明をしなきゃな」

作 「ああ、まずは感想であつたタケ様のご要望から急きょ『キーブレード』を使わせていただきました、ネタに困っていたので、ありがとうございます!!」

夷 「今度は蟲ピンか？」

作 「こちらは人気ネギま!二次小説、『魔法先生ネギま!』カレカノ・ライフ!」 皇月二八様にいただいたので使わせていただきました!メッセージでの許可ありがとうございます、いつも楽しく読ましていただいています」

夷 「この説明だな、全長三メートル前後、四角錐状の形をした巨大な杭、ハクさんと呼ばれる最強の従者の『蟲駆除用』の武器(?!だ、恐ろしいことに生物をそのままの状態で“保存”する事が可能らしい。まあつまり刺しても死なないらしい、最大射程約二億キロ(地球と太陽間の距離より少し長い)、最大追尾時間八〇年強、最大連続射出数三七億本(毎分)だそうだ、さらに障壁突破効果有りですごく泣ける武器だよ」

作 「さらに量産可能だしな、本当にありがとうございます!もしよければ感想で贈り物をいただけましたら、積極的に使って行こうと思います!」

木乃香 「ウチのディエンドドライバーみたくな? (ドライバーをケフィアに当てる)」

朧 「では次の閑話でよろしくお願いします」

作 「それでは！」

これはゾンビですか？　いいえ、ただの仮面バカです（前書き）

一日で完成できましたのでどこか誤字脱字、朧くんのしゃべり方が違うところが多々あると思います。

それでもよければ読んでいただければ幸いです。

今回クロスさせてもらったのは『これはゾンビですか？』いいえ、ただの？病弱です』ハヤテ様の作品です、気になった方は検索を！

えーでは今回は初クロス作品なので少し緊張しております、ですがハヤテ様や皆様に楽しんでもらえれば幸いです、それではどうぞ！！

これはゾンビですか？　いいえ、ただの仮面バカです

……これは俺がとある平行世界に行った時の話だ、まあ期待しないで読んでくれ。

あれは……たしかエヴァと初めての……ええっと、まあ夜を共にして、意味？　アガツガガツガガツガガツガガツガガツガ、い、言えるか！！　まあ一言、すごかったです。

式　「あーう……眠い」

エヴァ　「zzzzz」

俺が先に起きたようでも別荘のベットから起きあがった、うん、シーツやら体がえらいことになってるし、エヴァ少し隠しなさい、色々見えてるから！　悪戯するぞ？！！　ま、まあし、したしったたったたったたったたったた。

エヴァ　「むうう、シキイ」

式　「……ガハッ！！」

口から色々出しながら服を脱ぎ、洗浄する。旅の途中で魔法で服やら体を洗う術式を作っておいてよかった、俺はいつも通り着物を着ながらエヴァにシーツをかぶせる、このままだと第……何ラウンドいったけ？　十回から数えてねえよ。

式　「むう、眠い」

予想以上の体の疲れか、俺は失念していた……今首飾りを外してい

ることを、まあこの別荘は俺の本気に耐え切れるようにしてるから問題なし、さらに言う俺の右手の余剰魔力が残っていることを、ふらつく俺は床に倒れ込もうとする、俺は手を前に出して体を支えようとするが、そのまま床をぶち抜いた。

式 「彘?」

そのまま何かえらいことになっている切れ目に転げ落ちる。

つつかとおさに魔眼で確認したらコレ、次元の壁だよ!! ボツシユート?! ちくしょおおおおおおおおおお!!

式 「嫌ああああああああああ……………」

そのまま次元の壁が閉じていき、俺は落ちていく……………どんどん落ちていく、そして……………

? 「へ? だ」

式 「ぎゃあああああああああああああ!!」

そして俺は別世界の死神と出会った。

||||| 数十分後

フレイ 「なるほどなるほど、で次元の壁をぶち抜いたと……………君さ、人間?」

夷 「すまん、まさか死神と頭ぶつけて悶絶するとは……」

フレイ 「前代未聞だよ、まさか次元の壁をぶち抜いてやってくる人間がいるなんて」

夷 「本当にすまん、リミッターかけるのを忘れてた」

フレイ 「うーん、じゃあ私がリミッターつけてあげるよ!!」

夷 「は？」

目の前の少女は死神のフレイ、なんでもつい最近死神をやめたらしい……死神やめるってなんだよ、そんなホイホイやめていいのか？駄目だよな、つつか本当にどうしよう、なんかリミッターかけるとか言ってるけど、エヴァに心配かけたくないんだ。

フレイ 「はいっとリミッター」

次の瞬間、俺の力が削ぎ落とされるようなそんな感覚に陥った。何しやがった?! 魔眼でかくに 魔眼の力も落ちてるよ!!
まあ解析は使えるから、見てm

『解析結果、身体能力……百分の一に減少、ギリギリ銃弾かわせるよ！ 魔力……木乃香以下、妹に勝る兄はいない！ 気…… H A H A H A お父さんと同じくらいだね その他、神卦法及び黒式使用不可、妖力と神力完全封印、影の倉庫の一部の武器使用不可、パクティカード一部の力封印、特殊能力成長限界突破と見稽古以外使用不能、結論……今のためえじゃ地球は碎けねえよ』

夷 「なんじゃこりゃあああああああああああああ
あああああああああああああああつ！！」

フレイ 「ちょうどいい感じだね！」

夷 「なにこの弱体化！！ マジですか？！」

うわぁ、余裕でエヴァに負けそうだよ！！ どうしよう……解除し
てm

次の瞬間不思議な浮遊感が足元に感じる、あれ？ なんかデジャビ
ウが？ あれ、足元の地面はどこ行った？

フレイ 「せっかくだからウチの世界で遊んで行ってね 向こう
にはあなたみたいな転生者いるから」

夷 「『 じゃねえよ！！ ちくしょおおおおおおおお
おお……」

またもや落ちていく感覚、そして何かが聞こえた。俺はそれが聞き
間違いであってほしかった。

間違えて宇宙に送っちゃった

次の瞬間、真っ暗な空間に出たと思ったら息ができずに一度死んで、
生き返ったらまた死んで……それが百回以上続いた、さすがの俺も
宇宙空間では生きられないよと思いつながら死と再生を続けていると
体の内部が変わっていく感じがする、まるで必死に適応するような
…… 彘？ まさか

『成長限界突破のおかげで真空、宇宙、水の中で生身で活動可能に

なつたよ！ やつたね！！」

夷 「おいバカやめろ！ つうか本格的に人間やめちゃったあああ
あああああああ！！」

まさか死にまくって適応したとか笑えねえよ、なんか息してないけど生きてるし、ちなみに俺の体はマイナス百度までなら耐えられる。で余裕をもって前(?)を向くと……青い星が……OH、地球ジャマイカ、ゲソゲソ侵略でゲソ! ……古いか、さすがにわからないよな、結構面白かったから生前から覚えてる漫画なんだが。

夷 「んじゃ、あれの真似をするか……変身」

久々にカブトのベルトを巻いてゼクターを呼び出す、そして腰のベルトに装着させる。

ゼクター HENSHIN... CAST OFF、CHANGE
「BEE TLE」

即行でキャストオフをしてライダーフォームになり、地球に向けて飛び出そうとするが……いけません、足場がない。仕方ないので背中に魔力を集めて、爆発させてみる、思ったよりうまくいってクルクル回りながら地球に向かう、俺がなにをしたい？ ふふふ、それはな！！

夷「我が魂はZECTと共にあり
いいいいいいいいいいい！」

仮面ライダーメテ……ケタロスの真似だよ！！ 生ライダーで大気圏突入をする、温度的にも装甲的にも耐えられるようだな、そのまま大気圏突入する俺は途中で色々な国の衛星に攻撃されたがすべて

魔法の射手で迎撃させてもらったよ。

夷 「はーっはっは！！ 地球よっ！ 俺は落ちてきたああああああああああああっ！！」

この頃高笑いがエヴァから移ってきたと自覚し始めてる俺であつた。そのまま日本の上空に落ちた俺はさすがにヤバい思い、ディケイダーを呼び出して乗る。意外とわからない物だがディケイダーはヘタをすれば並行世界の移動・陸・海・空・宇宙空間での走行・ミラーワールドへの突入もお手の物、このバイクチート、さすがディケイド汚いぜ！！ だが好きだ！！

夷 「どうしようか、まあまずは降りるか……」

||||||||||？視点

？ 「まったくなんで僕がこんなことを？」

こんにちは、僕の名前は鑢す鑢おん俗しやうに言う転生者です、詳しく知りたい方は『これはゾンビですか？』いいえ、ただの？病弱です』を読んでください……なぜ宣伝したのでしょうか。

？ 『まあいいでしょう、あの世界の神ケフィアが宣伝した方がいいと思っだからやったのでしょっ

鑢 『七実、メタ発言は止めてください』

この方は僕の精神に居る、鑢七実、もちろん刀語の七実ですが……
ゲーム、アニメなどを嗜む、ただのオタクになりかけている方です。
……ハア、どうしてこうなったのでしょうか、誰か教えてください。
なぜ七実が僕の精神に居るのかは作品を読んでください……ってそれじゃわかりませんよね、簡単に言うところある死神が放り込んだ体に僕が入り、魂がごちゃ混ぜになったそうです、ちなみに僕が主人格です。

七実 『それで久々に出てきた、あの死神はなんと言ったのですか？』

鑢 『なんでも面白い奴を送るから会ってみろ……と、誰なんですよっね』

七実 『まあまさか異次元から来た、あなたと同じ存在とかだったら面白いんですが……』

鑢 『アニメとゲームのやり過ぎです、まったk』

？ 「ヒイイイイイイイイイイハアアアアアアアアアアアア
アー！ 大気圏からのバイクはスリリングだなあ、おい！」

………え？ なんてしょうか、嫌な予感がします。潤様に追いか
けられてる時や顔面刺青やらに追いかけてられるような感覚が……。

七実 『すごいです、落ちながらバイクを操作していますね……ダ
テです』

鑢 『誰?! そして七実さん、DMCじゃないんですから!』

七実 『現実を直視してください、完璧にバイクに乗って曲芸しますよ？　すごいですね、あれほどのバイクさばきは滅多にお目にかかれませんか』

朧 『……滅多に、ってあんな乗り方するバカはいませんか？！』

？ 『かはははは、今なら空だって切れそうだ！！』

なんとというか破天荒な方ですね。あ、こちらに降りてきた。

軽い音と共に降りてきた人を見ると……女の方のようですけど……なーんか引つかかるんですね。

七実 『あれ？　あの人両儀式に似てませんか？』

朧 『ええと、たしか空の境界の主人公だとか何とか』

七実 『はい、彼女の動きをしたら私たち死にますが』

朧 『どんな動きなんですか、それ』

？ 『……疲れた、腹減った、つつかここd　　って誰か居た

？！ー！』

向こうが気付きましたね、多分彼女（？）がフレイが言っていた人なんでしょう……いや、異世界から来たとかマジ勘弁ですよ？　いやほんと。

七実 『人はそれフラグと言う』

朧 『ドヤ顔しながら言わないでください』

？ 「おーい、精神世界で話し込むのもいいがこっちに気付けー！」

朧 「なっ?!！」

なぜわかったのでしょうか？ 只者ではありませんね、警戒をしましょうか……

？ 「あれ？ マジだった？ すまんすまん、適当に言っただけだから合ってるとはな」

朧 「て、適当に言わないでください」

？ 「まあいいや、あのアホ死神のせいでこの世界に来た……」

七実 『あ、ホントだった』

朧 「……どうしてこうなったんですか？」

？ 「どうした？ まあいいや、俺の名前はここの いや、りよ
いやいや、ぜー」 待て待て、もういいや両希夷だ」

……もういいや、って名前くらいちゃんと行ってくださいよ。にしても一つ、ぜー……その次なんですか？ まさかぜろにつながりませんよね？ 嫌ですよ、同類と戦うなんて。

朧 「夷さんですか、僕の名前は鑢朧、ただの病弱です」

七実 『……夷ですか、えびすなら神の名前ですね』

朧 『ああ、七福神の恵比寿のことですか？ そんな深いこと考えてませんよ』

ちなみに夷の名前はサッポロビールのエビスビールから取りました、飲んでたらふと気づいて……パソコンで「えびす」と打ったら「夷」と出たのでそのまま夷にしました、それとお酒は二十歳まで駄目ですよ！（by作者、実話の話で作者は未成年です、無礼講だったので一缶飲んでしまいました）

||||| 夷視点

目の前の病弱（自称）の事を一瞬魔眼で見る、とアラアラ、マジでした。ひどいなこの世の病魔がこれでもかと詰め込まれてるよ、見稽古でコピーしてないけどな、つつかこの体で動いてる時点で奇跡なんだが……にしてもどこかで見た顔なんだよな。

夷 「えーと、どこだっけなあ？」

朧 「……何を悩んでいるのかわかりませんが、一つ聞きたいんですが」

夷 「何？ 答えられるものだったら答えるよ？」

朧 「まさか異世界人とか言いませんか？」

おお、こいつ勘がいいな。ほんとのことだし言うか、にしてもこいつも転生者か、うゝん俺以外の転生者って初めて会うしな、とりあえず実力が落ちてる今じゃ、本気だしたって（強化無し）地面に地割れおこすくらいなんだがが無理だよなあ。

夷 「その通り！」

朧 「……マジですか？」

夷 「マジですー！」

この頃読唇術を会得しようと過去のアニメの記憶を見てたんだが……エヴァとの行為の時はヤバかったなあ、人の心をダイレクトに聞く……うん、あの時はヤバかった。とりあえずまだ甘いが……ともった自分を後悔した。

？ 『朧、言っただでしょう。異世界人じゃありませんか』

朧 『誰だってアニメみたいな事を考えますか？！』

？ 『ここは元はラノベの世界ですよ？ いいです、交代してください、私がしゃべります！』

……あ、あれ？ 誰かいるんだが……どっかで聞いたことがあるよ
うな、ナタを持った少女や病弱最強の姉やらの声なんだが、なぜか
目の前の朧の雰囲気が変わる……はい？

？ 「こんにちは夷さんでしたか？」

夷「……お前は誰だ？ 朧じゃないよな」

「これは失礼しました、私の名前は鑓七実と申します」

[illegible]

七実 「どうしたんですか？」

いやいやいや、鑢七実？ ああ、のブラコンでヤンデレで草むしり（人間）が得意な七実さんですか？！！ 俺の見稽古の本来となってるわけか、こりや魔法や現実離れた攻撃はNGだな、コピーされて撃たれましたwwとかシャレにならん、魔力があるかわからんがな、念のためだ、アニメ本編でも自分の体を弄った人だ、多分無理に使えるんじゃないね？ 俺は勝手に自分の体が改造されるからな、放射能も効かないんだよなあ俺の体……どうしてこうなった？

七実 「一つ質問をしていいですか？」

夷
「あ、はい」

七実 「……あなたは女性ですか」

夷「怎？」

あ、あれ？　そう言えば仮面は？　……つけてない、つまり素顔がモロばれしてる？！　うわあああああああつ！　この頃は仮面付けなきゃ落ち着けないから常時装備してるんだが忘れてた……うにゃあああああああああああああつ！！！！
あああああああああああつ！！！！

夷「……男だよ、ってかなんで鑢七実がここに居る?! あんたは死んだはずだろ?」

七実「ああ、あなたは私の事を知ってるのですね? ……はい、死にましたがなぜかのこ体に押し込まれたんです」

……事情を聞いてみると無茶やったなあ、と思った。通常魂の融合なんて馬鹿げたことは誰もしない、ヘタをすれば消滅か、どちらの人格も消えて両方を足して÷2した感じの奴が出てくる、うん、こんなに魂の均衡が保ってるのは奇跡だな、よっぽど合ってるのか、それとも……まあいいや。

そんなこんなで……臍の家に行ってみたんだが　すごく怖かった、なんかポニーテールの人には一緒に並んで歩いてたところを見つけられたら剣?　葉っぱ?　まあいいや、そんなので斬りつけられました、いやあ忍術ってあるんだね、見稽古でコピーしてみたが……使いにくい、正直神明流の奥義とかなり相性悪いんだが……。で家に入って紹介されて、吸血忍者のセラフイムさんだそうだ……えーと、吸血鬼の忍者?

次は無表情の銀髪の女の子……こいつが一番ヤバかった、強大な魔力のせいで因果律にすら手を出してた、いやあびつくりしたまさか魔力総量で負けるとは。にしても無表情なのに俺をにらんだような気がするんだが……なぜ?!　俺が何をした!　あれか、嫉妬か?　俺は男だよ、野郎に欲情するアホじゃない!　……危険だったの
で少し封印しようとしたら力が制限されていることを思い出した。
で名前はユークリウッド・ヘルサイズ……ネクロマンサーだそうだ、お茶を飲みながら言われてもな、しゃべると強制的に運命を変えるらしい……見稽古で見取らないでくれよ、頼むから。

次に短髪の元氣そうなアホ毛少女、なんだっけな……悪魔男爵ハルナちゃんだっけ?　自己紹介の時に言われた名前が……『男女さんおこあんな』

しにてええ、さすがの俺もキツイです。今は魔力が枯渇してるらしいが魔装少女らしい……うゝん、どっかで聞いたことがある名前ばっかなんだよね……。

ああ、あと一人、コイツは別にいいだろ？ え？ 駄目？ ただの変態なんだが……初対面で『下に穿いてますか？！』と聞いて来たんだが蹴り飛ばして、足で踏んだら……止めておこつ、マジで気持ち悪かった。

夷 「で、この変態の家に居候してると」

朧 「はい、残念ながら」

ユー 『……これからどうするの？』

夷 「まあこの世界を見て回ろつかな、だいぶ俺の世界とは違うようだしな」

セラ 「まあ、あなたならできるでしょうけど……できれば剣の師事してほしかったのですが」

変々……歩 「俺の名前表記ひどくね？！」

夷 「黙れ変態、男に欲情すんじゃないねえ」

歩 「ご、誤解だあああああああっ！」

ハルナ 「で、男女さんは元の世界にどうやって帰るの？」

うぐう、は、ハルナさん？！ 頼むから俺の名前をそう呼ぶな、い、妹の形した悪魔と修業仲間の形したあ（ry）と未来のお嫁さん候

補のかた（ry）を思い出す、いやあああああああああああああ
あああつ！！　そ、それだけは勘弁してくれ！！　え？　穿ける
？　それらめええええええつ！！

夷 「とりあえず体動かして、封印を解くしかないよなあ、本気だ
したらここら辺吹っ飛ぶが」

朧 「……ちなみに本気を出されたらどのくらいの強さなんですか
？」

夷 「ええつと、ゼウスだっけ？　あの駄神と殴り合って引き分け
るくらいかな？」

ユ 「ゼウス？　駄神つてもしかして……」

夷 「暇つぶしに天界に行ったら少し喧嘩してな……あやゆく存在
末梢されるところだった」

七実 『本当に人間ですか？』

ハルナ 「神様？　ここにいるじゃん！」

夷 「うんうん、ハルナはそのまま健やかに成長してくれ」

で、実際問題マジで封印をどうするか……方法は二つ、戦いながら
封印を緩めて、緩んだところ最大出力の神力をぶち込んで崩壊させ
る。もう一つはやった本人が解呪する……無理だよねー、あの様子
だとやる気ねえよ。

朧 「本当にどうするんですか？」

七実 『私としてはリアルな両儀式が居るだけでOKです』

朧 『あなたもアニメキャラでしょうが……』

朧は精神と話してるし……あ、良い事思いついた。

夷 「朧……」

朧 「はい？」

夷 「俺と戦え」

夷 「そんなこんなで別荘にやってきました」

とりあえず、仮面はかぶっておく。今日は龍の仮面だ。

七実 『これがネギま！の別荘ですか……感動的です』

朧 『どうしてこうなったんですか？』

と言っわけで別荘ver53に連れてきた、零崎の俺でも耐え切れるからな、本気の俺の小指程度の力だろう、まあ縛りな戦いもして

みたかったしな……っていつも修業装置でやってるか。

隼 「マジで戦うんですか？」

夷 「大丈夫だ、俺だって弱体化してるし、かなり制限してるからな」

七実 『……まあ大丈夫でしょう』

夷 「んじゃ、少し待ってろ。……いやいや遊びで作った次元斬じやなくて、コジマキャノンでもない、あつ……ロトシリーズ（防具）、あつたディケイドドライバー……！」

隼 「……とてつもなく危険な物ばかりなんですが」

七実 『ロトシリーズは見てみたいですな、でなぜ仮面ライダーのベルトなのでしょう？』

隼 『見てたんですか?!』

七実 『……ネットって便利ですよ』

夷 「まあなんかぼろくそに言われてるが変身つと」

ドライバー 「K A M E N R I D E - D E C A D E」

そしてディケイドに変身する俺、え？ 何故変身する？ そりゃお前、見稽古で技会得されたらめんどくさいし、この世界にどんな影響を与えるのかわからないだろ？ ライダーだったら真似される心配はない。

朧 「……もう驚くのは飽きました」

七実 『朧、朧！ 生ディケイドですよ！！』

朧 『うるさいです、少し静かにしましょう！』

夷 「始めていいか？」

朧 「少し待ってください……」

次の瞬間、朧の爪が伸びる……えーと、あれか？ 真庭忍法『忍法爪合わせ』か？ まあいいや、ライドブッカーをソードモードにして……戦闘開始。

まずは朧の動きが見たいので牽制として縦に大ぶりの攻撃をする、それを交わし俺の『点』を狙ってくる朧、ライドブッカーで受け止めながらしかたないので神明流の技使うか……。

夷 「斬岩剣！」

朧 「ッ?!！」

俺は斬岩剣で朧の爪をすべてたたき折る、いい音をしながら砕けていく爪、朧は俺に対しての認識を改めたのか、さっきまでの雰囲気とは違う真剣な表情をする。まあ青白いんだが……全開だったら直し切れることもできるが、まあいいだろ。

朧 「殺曲……」

夷 「何 ぐあ?!」

隴が歌いだしたと思ったら俺の背中に衝撃が加えられる。全方位から隴の歌声が聞こえる……正直めちゃくちゃ怖い、なんか背中ばつかに衝撃がイタイイタイ、ライダーだから着物の防御力が反映されないからきつい、これだったらめんどくさがらずに改造すればよかった！！

夷「（ちよつと手加減しすぎたか？ めんどくさくなってきたから……）」

「ATTACK
RIDE -
CLOCK
UP」

クロックアップして周りを見ると俺の真後ろに立っている朧が……
うわぁ、えげつない攻撃だなぁ。まぁクロックアップもえげつない
か、んじゃ終わらせるか。

ドライバ 「FINAL ATTACK
RIDE-DE・DE・DE・DE・DE・DE」

スクラッチ音と共に十枚のカード型のエネルギーが現れる、俺は飛び上がり臍に向かって飛び蹴りの体制をとる。ちょうどその時にクロックアップが解除される。

「どこに行っ
たんですか？！」

七実 臃、上です！

夷 「せりや ああああああああああつ！」

そのまま十枚のカードを通過して朧の腹にキックを当てる、が妙に

硬い感触のせいでうまく決まらなかった。俺は魔眼で確認するために変身を解き、魔眼で視てみると……あれ？ あいつが来てる和服、俺の魔装服の素材でできてるんだが？

朧 「ゴフツ！ 中々危なかったですね、しかし」

夷 「あ、あのさ、その服の素材……どこで手に入れた？」

朧 「え？ ああ、この服の素材ですか？ 部屋に置いてあったんですよ、なんか無造作に」

……………あ

〓〓〓〓〓〓〓夷七歳の頃の話

夷 「でけたあああああああ！！ 次元斬！」

当時の夷はチートな武器を作りまくっていた、現在はそうではないが……影の倉庫の中が力オスなのはこの頃が原因だろう。

今度は次元の壁を壊せる代物シロモノを作り上げたらしい、そして横にはさつき作ったばかりの鋼系の試作、ヒビイロノカネで作り上げたナイフ、それに魔装服が置かれていた。すべてバグな力を持っているが夷は失敗作だと思っている。

夷 「後は出力ちょー」

次の瞬間、次元斬の刃の部分が光る。どうやら暴走してるそうだが、夷は自信が組める最高の結界を張る、もしも世界を切り裂いたりでもしたら世界消滅するので。

次の瞬間、暴走した次元斬が空間を切り裂いた、そして切れ目にさっきまでの道具や武器が落ちていく、それに気づかない夷は消滅の魔眼を使って地道に消滅させていた。失くしたと気付くのは消滅させてから一時間後である。

「……………」夷視点

夷 「や、やつちまつたあああああああああつ！
！」

朧 「何がです？ まあいいです、そろそろ終わりにしましょう」

朧が取り出したのは俺が特注で作った『神力印の鋼糸』あ、やばい、あれでバラバラにされたらさすがの俺もやばいかも……。

七実 『さあ蠅のように舞い、豚のような悲鳴を上げなさい！！』

夷 「キャラちげえ！！ 七実さんに何があつた？！！」

朧 「何でもいいです、じゃあさようなら……」

夷 「し、死ねるかあああああああつ！！」

この後、何度も死にそうになりながらもなんとか引き分けと言う形で朧との戦闘を終わり、お詫びとしていくつかの道具を置いて来た。その後はバイクに乗りながら世界中を回った。その途中に本当の零崎やら人類最強やらが襲ってきた、ここではダイジエストでお送りします。

「……………顔面ストラップの場合

？」「かはは、傑作だぜ」

夷「……………えー、なんで居るの？ 零崎人識さん」

人識「へえ、俺の事知ってるんだ。まあいいさ」

夷「おっと、そんな甘つちよろい系遣いじゃ殺せないぞ？」

人識「いいね、この頃はこれで死ななかった奴が少ないんだよ」

夷「えーと……………すまんが道急いでるからそんじゃー」

人識「殺して解して並べて揃えて晒してやんよ」

夷「やつぱりいいいいいいいいいいいっ！」

その後、十二時間にも及ぶ鬼ごっこにより町の一角がぶっ壊れるという事態が夷は力を取り戻し二十パーセントくらいなら本気と神力を出せるようになった、ちなみに余談だがこの後、消化不良だった人識が『偶然（夷が呼び出した）』朧と会い、戦いを挑まれフラスレーション発散に使われ、さらに事後処理までしたのは余談だ、その時ものすごくキレていた、と追記しよう。そのまま夷は世界中を

飛び回った。

「……………人類最強の場合

？ 「お前大丈夫なのか？」

夷 「たかがメインカメラ（頭部）がミンチにされただけだ！！」

？ 「おまえ人間じゃねえよ！」

夷 「失礼な！ えーと哀川さんだっけ？」

？ 「上の名で呼ぶな下で呼べ。あたしを苗字で呼ぶのは敵だけだ」

夷 「えーとまあ人類最強に挑もうとしたし……………まあ俺零崎だから」

？ 「……………はははは、なんだ先に言えよ、ならあたしの敵だな」

夷 「かはは、人類最強、いや『哀川潤』……………力取り戻すために戦ってもらっぜ」

潤 「かかつてきな、全力で戦ってやるよ」

その後の事はあまり知られてはいない、ただ二人の戦いは激しくその戦いは一日以上も続いた。結果は夷が五十パーセントの力を取り戻し、デコピンで哀川潤を戦闘不能に追い込んだ、その過程で町一つが地図から消えたのだが……………これにより殺し名、呪い名が^{まじないな}集結し、一つの小さな戦争が起きたのだがそれを止めたのが夷、潤と人識やほかの変態の零崎などを食い止めていたのが朧であった、そのとき

に朧と七実が魂を融合させたのはまったくの余談である。

夷は戦争を止めた後、強引に封印を解いたのだが封印の術式を強引に解いたせいなのか、なぜか生殖機能を跡形もなく破壊された……というよりも無くなったと言った方がいい、ちゃんと男の象徴もあるのだが肝心の子孫を残す機能が消滅したのだ。

そのまま夷は朧に別れを言わずにフレイと言う死神の元に行き本気でぶちぎれて殺しかけたことは朧は知らない、その頃の朧は……

朧 「あの野郎おおおおおおおっ！！ 面倒なことしやがって！！」

七実 『ふ、ふふふ腐腐腐腐、もう今日で一週間はゲームもアニメもしてません……あの腐れ女顔が（ニコオオオオ！）』

もう色々と限界であつた二人だつた。

ちなみに夷は……

夷 「生きてるなら神だつて殺し切る！」

神々 「……黙れ人間がつ！！」「……」

百体以上の神との戦いを始めていたとき。

これで俺の閑話は終わり、この後もこの世界には何度も行つたんだが……行きたびに朧に殺されかけるといふ……まあ事後処理しなかつた俺が悪いんだが問答無用で死線を斬るのやめてくれ、何度死んだことやら、あ？ 神？ ああ、あれか、何とか勝利修めたよ、なんか神々が俺の能力をはく奪しようとしてたんだが……なんか『な

ぜできない?!』とかほざいていたから虚刀流で皆殺しとまではい
かないけど何体かは殺したなあ、間違つて死線切っちゃった　死
ぬんだな神様つて、まあ俺の世界の神様が謝りに来たんだが向こう
の神々が畏れちゃつて、ゼウスまでくる始末……とりあえず、色々
やつたら十年たつてた事実、急いで帰ると黒い笑みをしたエヴァが
……とりあえず聞いてみるとあれから一日しかたつてないらしい、
それで生殖機能の事を話すと……うん、ショックで泣き出しちゃっ
たんだな、これが。

まあそんなこんなで懲りずに平行世界に手を出しまくつて、たまに
神と戦つて魔王になつたり、一国の王様になつたり、将来『人類種
の天敵』と呼ばれる男の運命を変えたり、間違つて原作ブレイクし
てしまつたり、なぜかディケイドになつて世界を回つたり、ロボッ
トに乗つて戦つたり、ありとあらゆる世界の仮面に手を出してとあ
る世界の管理局に『生体ロストログア』と呼ばれて追われたり……
と数え上げればキリがないほどの事をしていた。

まあ臆、言つておく……お前と会えて、俺は　最高の
弄り相手を見つけたよ、これからもそつちに行つて、めちゃくちや
にしてやんよ!!

これはゾンビですか？　いいえ、ただの仮面バカです（後書き）

作　「ネギまラジオ！」

夷　「こんにちはこんばんはこにやにやちは、夷です」

作　「やあまさか本当に一日で書き上げれるとは」

夷　「頑張ったな、今まで一万字超えるのには三日かかったのに」

作　「一番驚いているよ」

夷　「にしても戦闘シーン手抜きじゃね？」

作　「ぶっちゃけるとお前ら戦うと別荘吹き飛ぶから質素にしてみた」

夷　「改めて思い出すとこの世界が一番大変だったなあ」

作　「まあ生殖機能が壊れたのは……俺が考えたんだがな」

夷　「まあ気兼ねなくエヴァと（バキーン）したり（ガガッガガ）で（チュドーン）それと（閲覧禁止）」

作　「一応この作品十五歳以上対象だが……十八やりたいのだからノクターンに行かないと、まあ作者は未成年だから無理だが」

夷　「にしてもだ、俺の名前」

作 「はい？」

夷 「マジなのか？」

作 「ああ、初期設定は正義感、熱血、猪突猛進だったなあ。で生まれたのが感想であつたチートオブチート、性格がコロコロ変わる主人公だよ」

夷 「作者だつてそうだろ?!」

作 「うゝん、昔から話し相手が大人ばっかだったし同年代の友達が少なかったしな、昔っから敬語だし先生にもため口言えないんだな、これが」

夷 「なんつう人生だよ」

作 「まあ何回も死にかけたしな、確か運が悪かったら頭と胴体が切り離されてオープンゲットするところだったぜ」

夷 「それ違くない？ まあいいや、本当に今回ありがとございまして!!」

作 「さて次回予告」

夷 「次回『完全なる世界／絶望のR』……不吉だな」

作 「では次回も!!」

夷 「ちえりお!!」

~~~~~本番前

朧 「ああ、はい、ここをこう」

七実 「私はこうしゃべればいいんですね？」

夷 「おい、二人とも今日はありがとな」

朧 「まあ偶にはこういうのも」

七実 「帰ってゲームしたい」

夷&朧 「「おい!!」」

ケファイア  
監督 「本番ハイリマース」

夷 「んじゃ頑張ろうぜ」

朧 「はい」

七実 「わかりました」

監督 「5・4・3・2・1……始め！」

今回はハヤテ様本当にありがとうございました、こんな場ですがお礼を申し上げます。また機会があればこういうのをやってみたいので許可さえあれば書きます、つかバリバリ書きます。

……なんかすいません、ではまた次回までさーよーなーらー！

## 完全なる世界／絶望のR（前書き）

と題名していますが、絶望それほどしません。

だってこの小説はお気楽＆バカ小説です、シリアスがシリアルになるのはいつもの事、真面目？ そんなもんとこの昔に捨て去りました。

激しく原作ブレイク＆強引な設定＆詰め込み過ぎた、そして書き方……その他もろもろを無視できる方はお進みください。

良いですね？ それでは……どうぞ！！

## 完全なる世界／絶望のR

よお、夷です。あれから少したった……意外にお咎めなし、なんでも俺がバハムートを消したのが、よかつたらしい……あー、なんかぶつ潰してやりてえ。

前線から外れた紅き翼　まあ、俺たちなんだが意外にやることはたくさんあった。まずは孤児の保護、けが人の治療、軍でできない魔物の討伐、そして転生者どもの駆逐……一番最後がきついですが、この頃は趣向を変えて、大量残滅しか持っていない奴らが来るから……地形が変わるなんてザラだ、あー、一番きつかったのは十人くらいで召喚獣だっけ？　そんなので一気にぶち込まれた時、いやあアスナやエヴァやナギたちが無事でよかった……俺は下半身吹っ飛んだけどな。（その後キレた、詠春とエヴァにダルマや氷漬けにされてたなあ）

そんなこんなで、辺境の地に家を建ててみた……まあ紅き翼の本拠地みたいなもんだ、セキュリティもばっちり、家だって蟲ピンの金属を応用した物で、家の周りに幻術もかけたから……心配ナツシング（死語？）

新年を迎えても連合と帝国は小規模の小競り合いもするだけ、ぶっちゃけなんの問題なしだ、意外と艦隊にダメージ与えたのが大きかったか……うーん、おもいつきし歴史に關与しちまったが大丈夫か？　今のところはタイムパドックスも出てないし……俺が修正力も超越したら話は別なんだがな。

まあダラダラと言っていてもしようがない、アスナの様子だが……うん、連合潰そうかと思つたよ。体はあざだらけ、呪いとも言える成長阻害の魔法……解除したいが馴染みすぎて、自然に消えるまで待った方がいいらしい。この頃はなぜか俺に抱き着いてくるんだが、それとエヴァ、黒いオーラ出すな、相手は幼女だぞ？　俺が欲情するわけないだろ？

エヴァとアスナだが……うん、良好だよ、よく二人で仲良く寝てる様子をチャチャゼロが見てるらしい、たまーに喧嘩もするがな。

式「てなわけで、今日は鍋パーティーだ、野郎ども今日は食うぞ！」

アスナ「ナベ？」

エヴァ「まあ色々な食材を入れて、楽しむ料理だ……そうか、魔法世界に無いな」

アスナが不思議そうに首を傾げる、昔の刹那を思い出す……大丈夫かなあ、とりあえず並の奴らには圧勝できるようにしたつもりだな。

無表情だが雰囲気は楽しそうだな、無理して外で鍋してよかったぜ。

ナギ「これが『鍋料理』か、肉投入」

詠春「ば、バカっ！ 火の通る時間差というものがあってだな、最初に鍋に入れるなんて論外だ！！」

ゼクト「ほほう、久しぶりじゃな。四十年ぶりじゃ」

アル「フフフ……知っていますよ、詠春。日本ではあなたのような人を『鍋將軍』と呼ぶのでしょうか？」

ナギ&エヴァ「な、鍋將軍（だと？）」「」

なーんか激しく間違ってるんだが……ただ、詠春は仕切り屋なだけ

だ。昔からこういう物を仕切るのがうまかったな、誕生日会やらもそうだったが、うんうん二百年前だが覚えてるぞ。

アスナ「ナベシヨウグン……エイシュンハナベシヨウグン」

式「アスナ、その知識は捨てろ、いらん……てか肉ばつかじゃねえか！！いいよ、先日狩ってきた『ラオシャンロンの肉』をぶち込んでやるよ！！」

エヴァ「そ、それはっ！！式、よくやった！！」

詠春「このアホ師匠おおおおおおおっ！！」

ゼクト「若いもんはいいのお」

式「俺は三百歳だがな、お前の方が若いな、ゼクト」

この頃はゼクトと酒を飲む機会が多くなってきた、うゝん、歳食ったら酒がうまくなってきたからな、意外と話し合っしな。

ナギ「詠春が鍋將軍なら、リーダーの俺は最強の鍋將軍だな！！」

アル「あなたはなんでも『最強の』を入れなきゃいけないんですか？」

アスナ「ジャア、シキハナンナノ？」

式「……エイシュン、ナギ、アスナノキョウイクニツイテ、ハナシガアルカラ……覚悟しろよ？（にっこり）」

ナギ&詠春「（ガタガタガタガタ）」

エヴァ「バカやってないで食うぞ、私がすべてやっておいたからな、感謝しろよ？」

アスナ「シキ、オナカヘツタ」

式「よしよし、熱いから気を付けろよ」

ちなみにアスナは天然だ、熱いお茶を一気飲みしたり（即行で吐き出した）わさびをそのまま食べたり（口を押えて泣きついて来た）……うん、癒されるわー、刹那ポジションがここ最近いなかったからなあ、エヴァも夜みたいだな、姿ならOKなんだが……見せたら見せたで俺が嫉妬しそうだが。

鍋には野菜と肉がバランスよく入っていた、まあ肉の量が少し多いが大丈夫だろう。まずはポン酢を少量受け皿にかけて、だし汁を入れて準備完了。

式「アスナ、食べる前は？」

アスナ「イタダキマス」

エヴァ「偉いじゃないか、よし肉を食っていいぞ？」

式「肉ばっか食うな、エヴァみたくなさー      とらあっ?!」

頭に衝撃が来る、見てみると広辞苑が握られている……この時代にあったっけ？

エヴァ「私がなんだって？」



式「誠に申し訳ありませんでした」

詠春「……お二人とも結婚しないのですか？」

エヴァ&式「……あ、忘れてた」

全員（アスナ除く）「……忘れてたんかい！！！！」

素で忘れてた、エヴァと結婚したら……あれ？ 俺の名前どうなるの？

まあ今は鍋を食べようか。

アスナ「フーフー、ハグハグ」

式「フーフー、もきゅもく あつがああああああああ  
あ！！！！」

ナギ「……なんで、俺よりも強いのに猫舌なんだよ」

アル「おいしいですね……この肉は？」

式「はひ？ ほれは、らおふあんろんのにふはよ（はい？ それは、  
ラオシャンロン肉だよ）」

ゼクト「……お主は本当に熱い物が苦手じゃな、まあこの肉はうまいのじゃがな」

アスナ「……オイシイヨ」

式「しゃりや、よはった（そりや、よかった）」

エヴァ「式、水だ」

もきゅ、もきゅ、もきゅ……あー、死ぬかと思った、具体的には臍の陰謀でセラさんの料理食わされた時のような感じだよ。

式「もきゅもきゅもきゅ」

アル「……なぜ口からそんな音が？」

アスナ「キニスルナ」

ナギ「アスナ?!」

そんなこんなでいつの間にか、鍋の中の具材が無くなる。

ナギ「あれ？ なくなっただのかよ」

式「あー、大丈夫だ。具材は大目に取ってある」

詠春「ええ、師匠がどこからか持つてきましたね」

正確にはとある主さんからもらった野菜なんだが……マジでうまい、野菜がうまいと感じたのは初めてだな、ちなみに俺はセロリが食えない。……どうやって作ったんだろうか？俺も作りたいが才能がこれぽっちもないからやる気が起きない。

式「まあ気に……クロックアップ」

俺は久々に仮面の力でクロックアップする、そのまま現在進行形で迫っている剣を蹴り上げる。そのままアスナをエヴァの後ろに持っていく、安全を確保して鍋に結界を張る。

仮面『CLOCK OVER』

エヴァ「なっ?! 敵か!」

式「エヴァはアスナの傍に、ナギと詠春もだ! ゼクトとアルは俺の援護を!」

ナギ「命令すんなっ! だがやるけどさ」

詠春「一体どこのバカですか? 師匠の食事中に乱入するアホは」

ゼクト「モグモグ、うまいのお」

アル「ゼクト……あなたって意外とアレですね」

ラカン「食事中失礼……ッ! 俺は放浪の傭兵剣士ジャッ」

俺は言わずに、とある妹さんからもらったハリセンをラカンに向けて振る。そしてハリセンから、衝撃波みたいな水が飛び出す、そのまま地面を削りながら、ラカンに向かって行くと吹っ飛ぶラカン、青ざめながら叫ぶ。

ラカン「な、ななななんでお前が居る?!」

式「アッハハハハ、誰かに教えられなかったか? 食事は大切な物だと、てめえは俺を怒らせた」

エヴァ「アスナ、向こうで鍋を食べようじゃないか」

アスナ「……ウン」

ナギ「死んだな」

詠春「無茶しやがって」

その後の事は音声だけでお楽しみください（by作者）

式「アハハッハ、ランドローラだ！」

ラカン「ま、待ってくれ！ そのハリセンどうなってやがる？！」

式「URYYYYYYYYYYYYY」

ラカン「たか、くじやく、ごめんなs                    ?!!（連続でハリセンが命中）」

式「蟲ピン」

ラカン「またかあああああああああああああつー!!！」

|||||一時間後

ラカン「モグモグ、つまるところ、そういうことなんだよ」

式「かくかくうまうまうーうー　ってわけか、把握した」

アル「わからない?!　　と言っかなぜナチュラルに食事に入ってきてるですか?!」

あの後、三本くらいの蟲ピン&ハリセンコンボでボコボコにしていたら、腹が鳴ったので一時休戦、その時ラカンの腹も鳴ったので食わせることに。そしたら依頼の事を話し出したので聞いてみると、帝国からの依頼だったらしく、俺たち紅き翼が危険だと思っ奴等が高額で雇ったらしい。まあ俺が居ることは想定外だったらしいが。

ラカン「ハッハハハハ、負けちまったなあ。どうすっかな、これから」

ナギ「俺たちと行かねえか？」

ゼクト「……本気か？」

ナギ「ああ、だって面白そうじゃん！」

アル「ふう、まあ、さっきのを見てしまったら……さすがに同情しますね」

詠春「師匠がいいのであれば、私は構いません」

アスナ「zzzz」

エヴァ「zzzz」

式「まあ、エヴァもアスナも寝てるし……帰るか、ラカンも来いよ、うまい酒もあるぜ」

ラカン「おっ、いいねえ」

そんなこんなで撤収しようとする、エヴァとアスナは先に転移させておいた、もちろんベットに……うん、今日はいいい日だ、新しい仲間、うまい飯、そして

転生者「両義式いいいいいいいい！！」

式「……蟲が、死に晒せ」

蟲ピンで貼り止めると悲鳴をあげる転生者、何も考えずになぜ突っ込んでくる？ なんでも俺がエヴァと仲良くしてるのが許せないらしい、ああ、そうそう俺はこの世界の物語は知らん、同じような世界には何度もう行ったがな。

ナギ「またかよ……この頃多いよな」

ナギたちには「奴らは少し特殊な方法で強大な力を持った連中」と話した、嘘は言っていないぞ？ 特殊なのは本当なんだから、にしてもこの頃本当に多い、ゴキブリのように一人居たら十人、この前は三十人とか……全員、天に還して輪廻転生の輪に帰ってもらったがな。ぶちぎれたときは全員殺してるが……ごくたまにだ。

式「（つつかこの頃、『両義』でも対応できてるから怖い……リミッター設定し直すか？）」

転生者「畜生！！ てめえだけは許さねえ！！ エヴァちゃんとイ

チャイety」

式「ボツシュートです」

とあるスキマババアから見取った能力を発動させる、そして天界にそのままボツシュート。正直、俺はこの能力があまり使えない、うんうんやっぱバカだからかなあ……。

ラカン「なんだったんだ？」

詠春「ただのアホ共ですよ……ハア」

本当にため息つきたいのは俺だよ、まったく。

あれ？ フェイクから念話？

式「はろはろしにがm」

フェイク「そんな場合じゃねえよっ！ 早く出やがれ夷」  
オリジナル

式「どうした？ 千草が病気で起こしたか？ 万能薬はまだあ」

」

フェイク「今、そっちに行ってる睦月と望が転生者に襲われてる！

！」

式「……座標は？！！」

くそっ！！ だから来るなと言ったのに！！ 睦月と望は関西呪術協会所属だからな、この戦争に後方支援として参加してたはずだが……くそっ！ 実験台に使うつもりかよ？！！ ほとんどの転生者





転生者『初めまして両義式君、僕は……まあいいや。とりあえずあんたを殺せば、一生遊んで暮らせるらしいから……うーん、でもこれじゃあ演出不足かな』

式「あ、っあああああああああああ！　虚刀流奥義  
『七花は――』

転生者『動くな』

その一言で俺の体が動かなくなる。同時に頭が急速に冷えていく。状況確認……目の前には顔と手を血で染めた高校生くらいの男が余裕の表情で立っていた。

足元には……変わり果てた睦月と望が倒れていた。悲しい、すごく悲しいけど泣けない……零崎になった弊害か、それとも長く生きたのが原因か、わからんが涙が一切でなくなったな。んにゃことはいい、とりあえずこの俺の動きを止めている能力はなんだ？

転生者『さっすが神様がくれた能力、「言葉の重み」も完璧じゃないか……』

式「変なしゃべり方をするな……その顔に鉛玉ぶち込んでやりたいよ」

本当にキレてる、だがリミッターのせいで魂を人間まで落としてるせいか？　たく、この程度の能力で俺を止められるとは……油断した。

転生者『アハハハハ、この程度なの？　聞いたより弱いんだけど』

式「黙ってる」

まずいな……、久々にキレて「両希」を使おうとしてる。あれ使うと……暴走するんだよなあ、俺が制御しきれてないってのがあるが。

転生者「……にしても、この倒れてる二人の最後の台詞聞いてみる？」

抑えろ……爆発させたら、この世界が終わる。

転生者「式さん、千草を頼みます」だってさ。アハハハハ、本当に笑つて」

夷「黙れ、屑」

俺は足を動かして奴の笑い顔にパンチする、しかし奴は避ける。

転生者「危ない、危ない、オートパイロット反射神経がなかったら危なかったね」

夷「……神卦法・神」

俺の体が急に軽くなりすべてのリミッターが外れていく。

目の前の屑は笑いを止めて、代わりに怯えた様な顔をする。

転生者「あ、あああああ、ま、待ってくれ、悪かった。その二人を生き返らせる、だから許してくれ」

夷「『できるのか？』」

転生者「オールフィクション僕の実力の一つ大嘘憑きでできる」

夷「『じゃあやれ』」

転生者「……ここに居る二人を                      生き返らせる」

その言葉を言っても……二人は生き返らない。  
屑は焦ったように言葉を口にする。

転生者「ど、どうして?!                      まさかルシフェルの奴、この魂を使っ  
て                      」

夷「『生き返らないのか?』」

俺はエコーがついた言葉で喋る、屑は顔を真つ青にしながらあたふ  
たする。

つつか俺の姿にビビってるのか?                      体から高濃度の神力、魔力、気  
が溢れてるだけだぞ?                      ああ、戦闘になれてないのか。

転生者「ち、違う、ルシフェルの奴だ!                      あいつのせいだ!」

夷「『たしかにあいつのせいだろうよ……けどよお、お前を殺さな  
きゃ                      二人に見せる顔がねえんだよ』」

俺は純粹に屑を殴る、当たった瞬間砕け散る屑、しかし次の瞬間に  
はその場に立っている。青ざめた顔をしながら、腰を抜かしていた。

転生者「大嘘憑きのせいかな?                      い、いやだ、死にたくない」

夷「『……本当に屑だな、お前には死すらぬるいよ……一生、空気  
として生き続ける』」

俺はそのまま魔眼で奴を見る、そして分解の魔眼を使って奴の体を分解する。肉に、炭素に、そして空気に……まだ知能が残っているようなので能力を封印しておく、多分奴の能力は勝手に発動するんだろ？な、まあ空気にして一生生きてる、どうやら不死の様だしな……まあ知能があるから何かしらするかもしれんが、全能力封印したしな。

俺はそのまま睦月と望を回収する、体の表面が腐敗している……もう見たくない。元気な頃の二人からは想像できない、こんな死に方をする奴等じゃなかったはずだ。……俺のせいかな？俺が居たからこうなったのかな……もつとはやく転生者を殺しておけばよかったんだ、無慈悲に、そうすれば二人が死ぬことはなかった。

フェイク「オリジナル夷！……間に合わなかったのか？」

夷「……二人を埋葬してやってくれ、俺は」

そのまま銃を持って近づく転生者を射殺する。

……どうやら向こうからやってきたみたいだな、嬉しくて笑っちゃうよ。

フェイク「なんつつう数だよ、百人はいるぞ！」

夷「好都合だ」

俺はそのままアデアットをする。服装が変わり、手には鋼糸が握られる。片手には銃を握る。フェイクは丁重に死体を棺桶に入れて転移札を使う。

フェイク「……無茶するなよ？ さっきので体キツイだろ？」

夷「……知るかよ、とにかく早く行けよ、巻き込んで死んでも知らねえぞ」

フェイク「千草は……どうする？」

夷「……記憶を消して、俺が殺したことにしろ。そうすればあの子には生きる目的ができる」

フェイク「お前が育てれば、いいじゃないか！！」

夷「……育てる資格なんて、俺には無い。頼むフェイク」

フェイク「……わかったよ」

そのまま消えるフェイク、そして突っ込んでくる転生者ども……まあ死んでも天に還るからいいかあ、生かしておくのが面倒になって来たし。

夷「Let's start the party!!（イカレたパーティの始まりだ!!）」

転生者たち「「「死ねええええええええ!!」」」」

奴らに突っ込みながら……もう一度叫ぶ。

夷「I'm absolutely crazy about it!（楽しすぎて 狂っちまいそつだ!）」

さあ……イカレた人間のパーティーを始めようか。

「……………フェイク視点

千草「あつ、式はん!!」

フェイク「……千草、実はな」

俺は人形だ、所詮は式から作られた人形、最初はただの影分身、次に肉体を作られ人造人間、自我も覚醒してるらしいが……結局はあいつの記憶から形成されたものだ。戸惑うな、言うんだ、彼女に。

フェイク「お前の両親が死んだ」

千草「……なに言ってるや？ 父様も母様も帰ってくるって言いたもん」

……どうすんだよ、死体もあるが腐敗が酷くてとてもじゃないが見せるものじゃない。

フェイク「事実なんだ……ごめん」

千草「冗談なんやろ？ うそなんやろ？」

フェイク「……冗談じゃない、すまない」

すると千草の眼から涙があふれてくる、今年で六歳か？ ……死ぬことはなんなのか、知ってるよな。

千草「嘘や！ 嘘やああああ！ ああああああああああ！！」

フェイク「すまない、俺にはこのくらいの償いしか考えられない」

俺は千草の頭を掴む、オリジナル夷オリジナルだったら掴まなくてもできるだろうけどな、まずは消去と改変だな。

千草「何するんや？！」

フェイク「すべて忘れろ、そして……生きてくれ」

消去した影響か、気絶する千草。それを支えながら頭を撫でる、オリジナル夷オリジナル……俺からの嫌がらせだ、精々苦労しやがれ。俺は改変しながら、記憶に少し細工する。

その後、関西呪術協会に行き、遺体を火葬した。千草には立ち会わせなかった、そのまま俺は逃げるように京都を出た、その後は俺の勝手な行動だ、まずは……世界中のゲートを破壊する、もう関西呪術協会から死者は出させない、絶対にだ！

|||||||式視点

あれから数か月はたっただろうか？ いや、数年かもしれない。俺はエヴァにもアスナにもナギにも会わず、ずっと別荘で修業していた。

目的は自分の力の制御、この先ルシフェルを見た瞬間に怒りが爆発して本気を出しかねない、もしも世界が崩壊したらやばい、あの時だって神様からめっちゃ怒られたからな。なんとか制御をしたら何日たってるかわからない状態だった。

正直、あの時は精神を保つために零崎になりながら戦っていたからな、正直記憶がない。気付いたら視界いっぱい死体の山ができていた、戦っていた感触は残っているのに記憶はないなんて……どんな戦い方をしたのかわからねえ。

式「何してんだろ、俺」

急に虚しくなってきた。転生して、良い事もあった、楽しかったし前世じゃ信じられないほどの力も手に入れた、けど……人は生き返らせることができない。

神様に話したが睦月も望も天界に魂がないらしい、ルシフェルが絡んでいるらしいが……。

俺はもしもを考えてみる、IFの話だ。いやこの世界の本当の話かな？ もしも俺が転生しなかったら……死ぬ人はいなかったんじゃないか？ 睦月も望も……連合の討伐者達だって、俺がしたことと言えただけの原作ブレイク、むしろ歴史の反逆だ。本来の道筋から外れた行動……俺は今まで考えたことがあったかな、自分の行動でどれだけの人を不幸にしているのか、どうしたらいい？ 死ねばいいのか？ この体では自殺もできない、電撃でやられてもへっちゃら、空気がなくても生きれる、太陽にぶち込まれても燃え尽きない



体、唯一死ねるのは魂を消し去られた瞬間かな？ はははは、化けもんじゃねえか……この体、不老不死だって目じゃないほどの。

式「……何してんだろ？」

もう一度呟く、この別荘では向こうが一秒たてば一年、まあ不老不死用の別荘だな。

膝を抱えて体育座りをする、なんか虚しくなってきた。エヴァに相談したら確実に甘える……てか殺人鬼でこんな事するの俺だけだろ、三百歳も生きて何してんだ俺、そういえば身内が死ぬのはこれが初めてかな？ うん、どんな世界でもハイパークロックアップで元に戻せた、けどこの世界ではだめだ。ルシフェルが時空に干渉してるせいか、無茶な時空に關与することをするとかこの世界が消滅するらしい。

式「悪魔は泣けないか……なら、化け物になく権利はないな」

とりあえず言っておく、俺たち転生者は化け物だよ。死んだだけであら不思議、チート持って「俺TUEEEEEEE」できる、拳句の果てには物語に關与だ、運命に抗うのはその世界の人間の特権だ。それを平気でやる、その結果死ぬ人間もしらずに……俺はいくつもの世界でそんなことをやり続けた、……臍には迷惑かけたなあ。

式「どうするんだよ？ 今さら戻るのか？」

ここで残りの七百年生きるのもよくなってきたな……

式「ここで死ぬのも一興……てか？」

木乃香「ウチに会ってないのによくそんなこと言えるなあ、このア

ホ兄いいいいいいいいいい！！」

式「は？！　こ、こn　タラバガニ？！！！！」

お、俺は幻覚を見てるのか？！！　二十年後に生まれる筈の妹に、  
どこかの鉄槌の騎士が持ってたハンマーで殴られたんだが？！！  
つつかいてえ！

木乃香「何してるのかと思ってたら、こんな場所でメソメソと……いい加減にしいや」

夷「こ、木乃香？！　なんで居るんだよ、と言うか大きい？」

木乃香「十五やからな、このバカ兄！！」

夷「じゅ、十五？！！　そりゃあ体も大きいはずだな、相変わらず  
胸は中途h　」

木乃香「変態兄がああああああああ！！」

夷「カードリツチは使うなあああああ！！」

そのまま鬼ごっこに突入する、後ろからは殺気の波動に満ち溢れた  
妹、どうしてこうなった？！！

〓〓〓〓〓十分後

木乃香「ぜーぜー、あ、謝る？」

夷「なんか知らんがすまん」

木乃香「式さんの言う通りや、メソメソして……隠し事して、ウチを一人ぼっちにして、つつちゃんやせつちゃん、素子姉さん、千草さんもどれだけ心配したと思うてるの?!」

つつちゃんって誰?! あ、月詠? 月詠なの?! つつかまた式のやろつかよ!! もうタグに『式のせいだ!』って入れようかな? メタ発言禁止? だが断る。

にしても綺麗になったなあ、あれから……七年かな? うんうん、全体的に幼さが無くなって女の子だな、これで和服着たら男どもはイチコロだな、まあ渡す気はないがな……シスコン? それは全世界の兄に対する褒め言葉だ、この野郎。

木乃香「死のうと思ってるんでしょ?」

夷「木乃香、どれほど知ってる? 俺の事」

木乃香「不老不死のこと、すごい力持つてること、それと……本当はえびにいが血のつながった兄じゃないこと」

……ほぼすべてじゃねえか!! 木乃香が死ぬまで待っていようと思ってたのに!! 両義式……面倒なことしやがる! って二十歳になったら知るんだった……あー忘れてた。

木乃香「兄様……いや、夷さん」

夷「むず痒いから兄様かえびにいで」

木乃香「嘘ついた罰や」

夷「じゃあ、木乃香さん」

木乃香「……うん、やめよか」

正しい判断だ、妹よ。ふははははは、一度呼びなれた名前から逃げることはできないのだよ！！　　つつか妹に他人行儀でされたら俺自殺するよ？　前世で妹みたいに可愛がつてた女の子に「うざい」と言われて、首を吊りかけたしな！

木乃香「兄様……なんでや？　なんで一人で背負いこもつとするんや？」

夷「……木乃香は知らなくていいんだ、お前は何も知らずに幸せに生きてくれ」

木乃香「嫌や！ ネギ君やキヨウ君に言われたけど、そんな嫌や！ 何も知らずに兄様が傷ついていく姿なんか、見とおない！」

夷「俺は死なない、不老不死だぞ？ 大丈夫だ」

木乃香「~~~~ツ!! このバカ兄!!」

ぐびやら！？　またハンマー？！　ギガントの方だし、つうかまた筋力上がったなあ、合気道だろ？　やってんの。

木乃香「ウチはな、好きな人が傷ついてる姿なんか見たくないんや！」

夷「おいしいおいしい！！なに言ってるの、この妹さん！」

木乃香「ほんまやで！ 兄様のパンツが無くなってるのもウチのせいやー！」

夷「知りたくなかった妹のカミングアウト、誰かこの子止めてええええええええええー！」

つつか、時々なくなってたのはそういう事か！！ まさか刹那もやってないよな？ やってないよね。

木乃香「せつちゃんもや！」

夷「泣けるぜ」

レオン、マジ泣けるよ……今何してんだろうか、ゴリス クリスと一緒に戦ってるのかな？ つつかあの世界はマジトラウマなんだが……。

って、違う違う。

夷「結局何しに来たんだ？」

木乃香「……会いたかったんや」

夷「俺に？」

木乃香「うん、もう兄様の匂いつきの和服が切れてきたから」

夷「父さああああああん、妹が、妹があああああー！」

木乃香「せつちゃん、つつちゃん、素子姉さんも言ってたえ」

夷「逃げてー！俺の服超逃げてえええええええ！」

木乃香「良い台詞や、感動的や、だが……嗅ぐ！」

本格的に木乃香の事がわからなくなってきた、こんなブラコンでしたか？　ウチの妹は……題名つけるなら『俺の妹がこんなに変態なわけない』で決定だな。

木乃香「変態やない、淑女や」

夷「木乃香、その知識は捨てなさい、即行で」

木乃香「だが断る」

夷「ドウシテコウナッタ」

本格的に頭を抱える、ものすごく痛いです。

木乃香が近づいて来てるが反応できない、顔を上げると目の前には木乃香の顔が……近いです、兄さんは既婚者……って籍入れてないよなあ。

木乃香「兄様、聞きたいことあるんやけど？」

夷「なんだ、妹よ」

木乃香「ウチの事……好き？」

夷「大好きさ！ 当たり前な事聞くなよ、妹を可愛がらない兄が居るか？ いやいない！」

木乃香「じゃあ、女としてのウチは？」

夷「アホなこと言うな、妹に手を出す兄じゃねえぞ」

木乃香「近親相姦って人類は普通にやってると思うけどなあ」

夷「木乃香？ お前は普通に生きる、俺みたいに異常になるな」

木乃香「兄様は優しいなあ、本当に……誰にでも優しい」

な、なんか木乃香の眼が濁ってきてるんですが……昔見たヤンデレの眼によく似てる様な、いやいやウチの妹がそんなことになってるはずが

木乃香「ウチだけに優しくればいいのに」

ナツテマシタ、もうどうすりゃいいんだよ！！なに？ ヨスガニソラってる？ やかましいわ！　なんで妹関係持たなきゃなんないんだよ、俺は嫌だぜ？

夷「……木乃香？ それは異常な事だぞ？　というか演技するのやめなさい」

木乃香「えへへへ、ばれてた？」

夷「何年兄妹やってると思ってるんだ？　木乃香の仕草、行動はお見通しだ」

たしか、あの頃ドラマにはまっついていて演技の練習をしてたな、ポー

カーフェイス上手かったなあ、一回だまされたよ。

木乃香「そういえば兄様、元気になった？」

夷「木乃香、悪いが俺はもう二度とお前とは会わないよ。……ごめんな」

悪いがこれは決めたことだ、木乃香に会いたいけど……千草さんに合わせる顔がない。それに殺人鬼の兄を持つなんて人様に言えないしな、ここで木乃香と別れた方がいいだろう。

木乃香「なんでや？ みんな待つてるんや、帰ってくるのを待つてるんや！！」

夷「……もういいから、もういいんだ、俺の事を『忘れる』」

俺は言霊を使って記憶をけ　せない？！！　なんでだ？！　木乃香に俺の言霊を跳ね返す術はない筈だ？！  
驚いている俺に木乃香は近づき……唇を　　って、おいマジですか？！！

木乃香「ん、んん」

夷「こ、この　　んんん！！」

やべええええええええええ！！　背徳感たっぷり、刺激的なキスだよこんちくしょおお！！　妹にされる兄……アハハハハ、死にたくなってきた。

たっぷり二十秒くらい……ま、まあエヴァとはそれ以上してるから大丈夫か、うー口の中がえらいことに……背中に冷や汗いっぱい。



木乃香「ふう、御馳走様」

夷「御馳走様……じゃねええええええええええええ！なにしてんだよ！」

木乃香「ファーストキスやからな」

夷「むしろそうじゃなかったら、初めての相手をぶつ殺す!!」

ちなみに俺のファーストキスは素子……修業で動けないところを、ううう、思い出すとい恥ずかしくなってくる。とりあえず、俺の称号にこの前、七実さんからもらった「片付けができない子供」と「妹に手を出した兄」を入れなきゃな、うわぁーなんて称号だよ、テイルズの称号なんて目じゃねえ。

木乃香「じゃあ責任とってな」

夷「お前は兄を破滅に導きたいんだな？」

木乃香「……でも帰ってきてほしいのは本心や」

夷「はあ……たく、帰ったら覚えてるよ？」

「終わったか？」

木乃香「あ、式さん」

い、いつの間に？！ 俺の反応よりも早く動ける奴がいるなんて……

夷「おい、てめえが両義式かよ、素顔見せろ。てめえにはいつも迷惑してんだよ」

式「んなこと言つなよ……はあ、なんだこの芝居」

夷「てめえ……なめてんのか?!」

式「はあ、まあすぐにまた会えるから……大丈夫だ、問題ない」

夷「不安しかねええええええええ!!」

式「安心しろ……お前ならやれる」

夷「つつか素顔は?」

木乃香「兄様そっくりや!!」

やつぱりかあ……今は俺の黒の仮面<sup>フェイス</sup>ぱいのをつけてるしな、わからねえが確実に実力はあっちが上、仕掛けるか?

式「まあ……頑張れよ?」

木乃香「またね、兄様!!」

夷「お、おい!　って行つちまったか」

呼び止めようとした瞬間、消えた二人……時間跳躍か?　つつか式の野郎、俺と似すぎじゃないか?　足運びから仕草までほとんど同じだったんだが……どうなつてやがる?　まさか

夷「うんな、わけねえよな」

やっぱりやめておこう、これはあくまで予想だ……にしてもだ。

夷「エヴァの事話してねえよ」

激しく現代に戻った時のことを思い、再び頭を抱えた。

その後、考えを未来に丸投げするために修業用シュミレーターを使って強敵たちと戦い、たまに死んで……気付いたら一年たっていた。急いで別荘から出ると……黒いオーラを出しているエヴァが……その後、エヴァの別荘に連れてかれ、その……はい、行為をしました。その後詠春に睦月と望の事を言ってから、俺は魔法世界に居る神明流と向こうの世界から来た兵士たちを転移札で送り返しながら、魔法世界のゲートを破壊し続けた。ゲートさえなければ移動手段がないしな、ざまあみろ。

|||||二か月後

ナギ「はっはっはー！！ 千の雷！」

式「ビックハリセン！！」

ヒヤッハアアアアアアア！ 悪い戦艦はハリセンで落としたりやおうねえ！！ はろはろ今は水が出るハリセンで戦艦を落としている、色々と強化したらこうなった。ああ、エヴァたち？ エヴ

アはほかの地区で『私の魔法は世界一イイイイイ！』とか言いながら戦い（フィーバー）してるし、ラカンはずがに参加できないので帝国の兵士の撤退の援護（殺さないように言っている）、詠春たちはアスナの警備……だったが今は参戦中。

どうしてこうなったか？ ああ、連合のくそ馬鹿どもが無能すぎだな、ヘラス帝国は大規模転移魔法という戦法をとって連合の巨大要塞グレートブリッジを攻略、正直聞いたときはその指揮官に拍手したよ。最高の戦法だな、インパクトもデカいし、なにより帝国の主戦力を思い切って敵のど真ん中にぶち込む戦法は好きだな。

ともあれそれから連合は後手後手に回り、帝国は領地を拡大、それも一気にじゃない。ちゃんと支配する土台を固めてだ、うんうん、向こうの指揮官は本当に有能だな、支配した土地では略奪も起こっていない、むしろ援助している……あれ？ 連合が負けた方がいいんじゃない？

しかし然うは問屋が卸さないのか、連合は俺たちを呼び戻した。まあ戦力外通告を受けてる俺たちはもちろん断った、つつかアスナがすごく不機嫌だったしな、しかしナギが「ここで盛り返したら英雄だよな！」と言った瞬間に連合の役人が首を振り、ナギが一人で行きそうになったのでしぶしぶ戻ったわけだ。

そして紅き翼の活躍のおかげで領地をどんどん戻して行つた、まあ帝国兵は俺の場合は転移させて生かしている、殺すどおりがないしな、むやみに殺すより生かした方がいいだろう？ 甘い考えかもしれないが、時々転生者が乱入してきたがこちらは俺が処分するので問題なし、たまに良い奴もいるから交渉して違う世界に、神様と相談して行ってもらっている、憎いけどさ、無差別に殺すほど落ちてないしな。

あれよあれよと言う間にグレートブリッジ奪還作戦が開始、ここは危険すぎるので俺とエヴァ、ナギの三人で行くことにした。アスナ



ラカン「ってなんかきb h wさうヴいあv ああああああああああ  
ああ!!」

式「さらに……かーめーはーめー……ぎゅっとしてドーン!!」「

ラカン「アテヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

チュドオオオオオオオオオオ！！！！

汚い花火だぜ！！　　今はフランの攻撃のモロパクだ！！　　かめはめ？　やると思ったの？　やらねえよ。

エヴァ「あーはっはっはっは！！ 気分がいいぞ、今ならこちら辺  
 一帯を消し飛ばすことができそうだ！！」

ナギ「俺ってTUEEEEEEEEEEEEEE!」

夷「誰かああああ！ お医者様はいっらっしやいますかあああああ  
あ！！」

グダグダですまない。

ともあれ大活躍（一名電撃による火傷、気弾による爆発で重体）だったので快勝となったわけで喜ばしいだろう。とりあえず帝国と連合の戦力差は五分五分、向こうは数が多いし練度も高いからなあ、艦隊を失ったはずだからすぐには来ないだろうな……帝国の保護下にあつたいくつかの村は亡命していたので、ラカンを向かわせておいた……くつくつくこれからこき使つて行こうか。

ちなみに今回の戦いでは詠春たちも途中から参戦していた、アスナ？ フェイクがなぜか転移札で来たので警護に回した、その後はさ

つき行った通りなことに、つつか帝国がかわいそうだったぜ。そしてなぜか紅き翼』の面々にファンクラブが出来たとか、そしてナギたちにも二つ名がついた、ナギには『千の呪文の男』……こいつ、千も呪文覚えてねえぞ？ 詠春は『サムライマスター』これは妥当だろう、戦艦の精霊砲ぶった切ってたしな。アルは『重力使い』捻れよ、つつかこいつエヴァよりも年上なんだって？ ゼクト『何あの子供、古代魔法撃ち過ぎワロタww』ネタすぎるだろ、頼むから自重してくれ作者。で意外の意外エヴァ『雷撃の氷帝』まあ『終わる世界』とテラボルト級の電撃を同時に操ってたから……ファンクラブもできたらしいが、男も居るらしい、残滅しようかな。最後が俺『超越者』……ああ、なんてこつたい、さらにもう一つ『えつと……なんですか？ あのハリセン』などなど、ファンクラブは全員仮面をつけているらしい……嬉しいやら悲しいやら、ちなみに男か女か意見が分かれているらしい、両性類とか言ってるバカも居るがな……殺していいか？

で、紅茶を飲みながらとある人から送られてきたアップルパイを食べている……うめえ、マジでうまいぜ、エヴァの黒焦げ丸焼け肉と天と地の違いだな、そしてなぜか目の前に居る、少し渋めの男性と子供。

？「ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグだ、こっちはタカミチと言  
う」

タカミチ「よ、よろしくお願いします！」

式「もきゅもきゅ、ごくん。で？ よくここまで来たな、用件は？」

ガトウ「紅き翼及び超越者の力を貸してもらいたい」

式「なに？」

ガトウ「『完全なる世界』と言う組織を知ってるか？」

……なんか面倒事みたいだなあ。

紅茶をグイッと一気飲みする、もちろん熱いので

式「あてやあああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああつ！！！！！」

ちなみに今は棒不忍の仮面つかぶっている、食事するときはいつ  
もこれだ。

口の中がアツアツになりながら……これにて終了、次回もよろしく。



## 完全なる世界／絶望のR（後書き）

作「今日のネギラジオ!!」

夷「つつか書き方が変わったなあ」

作「感想で言われちゃったから、台本形式ってこんなのでいいのかな？」

夷「書き方……というよりも文才ねえしな」

作「う、うるさい!! デイケイドだって書いてないんだよ」

夷「スランプ？」

作「いや……どの世界に行こうか迷ってる」

夷「関係ねえよ、久しぶりに一週間以内にできたな」

作「頑張った、閑話抜かすと最長じゃないか？」

夷「木乃香の場面は……」

作「指が勝手に……シリアルにしてしまったんだ!!」

夷「うつせい!! つうかてめえがゲームするのがわるい!!」

作「いいじゃねえか!! スパロボ、AC、アニメ、仮面ライダーのDVD観賞! つうか設定忘れ過ぎワロタ」

夷「おいおい、頼むぜ」

作「グロング語読めないんだがどうしたらいい？」

夷「……どうでもいいわ!!」

作「そういえば今回のハリセン！」

夷「それと木乃香のハンマーな、マジで本編出しゃがった」

作「主武器だから」

木乃香「マジカル 木乃香ちゃんをお楽しみに!!」

夷「帰れ！ それと似合わないからやめろ、今回のハリセンはいつもお世話になります皋月二八様」

作「それと武器の事や、贈り物ありがとうございます、リンドウ様!!」

夷「はいはい、で今回のハリセン、いい出来だから使って見たんだが……言っネタ武器だよ」

作「そして予想以上に面白かった蟲ピン、これは使える!!」

夷「そろそろ大戦期終わりか？」

作「……まだまだ、これからどうしようか。原作に入るのが三十話くらいになりそうな気が」

夷「ちなみにこの小説の終わりは？」

作「ハッピーエンドッ！！！！これしかない！！！」

夷「ま、まあそうだな」

作「正直、鬱話？ シリアス？ はっ、そんなの読むだけで十分、各自信はサラサラねえーよ、と言うのが作者クオリティ」

夷「駄目だこりゃ」

作「それにネギアンチ？ むしろ擁護してやんよ！！！」

夷「薬味アンチって書かれてるが」

作「まあ、今回は真面目に書くぞ？ ネギってのは悪くも良くも頭が良すぎたんだよ、賢い子……聞こえはいいが、同時に危険もある。夷、子供の一番いいところはなんだ？」

夷「やっぱり元気なところか？」

作「正解は染まりやすいんだよ、子供は純粹だからな、洗脳しやすい。俺だって十歳まで女にはあれがついてると思ったしな」

夷「おい！！ 下ネタ禁止！」

夷「ごほん！ まあ原作のネギはとにかく問題行動が多いだろ？ けれど……怒られてるか？」

夷「注意だけで親身になつて注意してねえな、大人が」

作「『英雄の子供』アリカ姫の頭とナギ譲りの魔力……最高だな、むしろよく育てば最高の魔法使いが誕生する、多分ちゃんと修行すればナギに勝てるだろうな」

夷「うゝん、子供が親に勝つのは当たり前だろ？」

作「なんだが……周りの大人が最悪すぎた。英雄の子供だから何でもできる、そんな感じだしな。肝心の教育に居る筈の親がいないことが致命的すぎる」

夷「原作読んでないからわからんが……親いないのか？」

作「俺も最近読んでないからわからないが……ナギもアリカ姫も行方不明、多分死んでないと思うがな。つつか父親、母親居ないってどういう事だよ、子供見捨ててまでやることがあるのか？」

夷「知るか、つつかあのバカならやりかねない」

作「……もしもだ、二人がきちんと子育てしていれば、年頃の息子でイギリスで平和に暮らして　ねえか、連合に邪魔されるな、つつか外道過ぎて連合アンチだけは外せねえ。つつかこの国さえなければネギもナギもアリカ姫も幸せに暮らせたらうに。いつの時代も老害は邪魔をする、とっと死ねばいいのに」

夷「落ち着け、まあ何歳なんだ？　そのネギってのは」

作「十歳の子供だ」



作「では次回予告いってみよう!!」

夷「突然?!! ま、まあ、では次回「最強はルビをふるとバカになります」ってなんじゃこりゃああああああああ!!」

作「では次回も」

夷「お楽しみに! ちえりお!!」

|||||楽屋内

刹那「このちゃんだけいいな、このちゃんだけいいな、このちゃんだけいい(ぶつぶつぶつ)」

素子「私の出番、出番出番出番出番」

月詠「夷はんの女装、女装女装女装」

千草「ウチの出番は少ないが出たで!!」

ヒロイン全員「パルパルパルパルパルパル」

フェイク「カオスだ……混沌の聖地だ」

ルシフェル「私にも出番は」

出演者全員「「「「「お前の出番ねえから!!」「」「」「」

ルシフェル「ひどすぎる」

作「あれ？ ドウシテコウナッタ？」

## 時系列&魔王さんこんにちわ（前書き）

時系列が複雑になって来たところ……要望があつたので簡略的に作ってみました。

色々は無計画なので変なところもありますが……それでもよければ、それではどうぞ！

あ、それとこれにはこの小説二十話記念の閑話が書かれていますので、あしからず。



## 時系列&魔王さんこんにちわ

・2005年

夷、自身の世界で事故によって死亡、その後ルシフェルによって体ごと天界に誘拐、実験され魂ごと消滅しかける。その前に神が救出、神力で無理やり注入して何とか留める。この際、魂の輪廻転生を司る部分が消失、神は魂に細工をし転生者としてネギま！の世界に（夷に予備知識なし）転生。

・1988年

原作から十五年前、夷が赤ん坊の姿で転生、偶然通りかかった、近衛詠春、近衛桜に拾われる。このとき、養子となり名前を近衛夷に改名。

・1991年

転生三年後たち、自身の異常性と魔眼を認識しながら木乃香の兄として生活していく、このときにすでに実力はネギま！の強さ表では500程度、この頃に刹那と会う（噛み癖刹那が思いつたのはなぜだろうか？）

・1993年

転生生活五年目、魔眼がパワーアップしていることをorzしながら、仮面ライダーの力を主体に戦っていた。魔力、気、さらにとある理由で妖力も使えるようになっていた。このときに原作の木乃香と刹那の事件が発生、夷がカブトで介入し事なきを得る。そしてその数日後、夷は記憶転写装置を使って虚刀流を覚えるが……刀が使えない体になるが見稽古で何とか持ち直す。さらに零崎に覚醒する、このとき虚刀流と零崎を封印することを決意する。

・1994年

夷六歳、木乃香と刹那、素子が麻帆良に入学するために色々と準備する。そして鶴子との修業がトラウマになっていた。最近、前世である小説の人物、ぶっちゃけると『両儀式』に似てきたことを悩んでいた、ちなみに髪型はポニーテール。麻帆良の世界樹の解析に成功、神木だったせい、それとも自身の神力が覚醒したのか不明だが神力に目覚める。この頃から両儀式のせいでとばかりを受けまくるせいで、嫌いになった。

1996年

夷八歳、もはや人間を超えた力を持った夷は日々修業、たまにネタ武器、仮面づくりに勤しんでいた。零崎化の影響で人殺しをしかねない夷はなんとか修業用シュミレーターと妖怪を殺すことによって殺人欲を満たしていた。偶然にルシフェルに襲われている千草を助ける、またもや両儀式に関することなので本気でキレたらしい。そして月詠との試合で当時、まだ未完成の黒式を使用して勝つ、その時に月詠の道場の師範代に義息子の子をカミングアウト、詠春に破門され、鶴子と素子姉妹からありがたい奥義十連続を受け、全治十か月と刀が握られなくなりました。数か月後、神明流としての初任務（妖怪の駆除は自主参加）としてなぜかクルト・ゲードル、オスティア総督という重要な人物の護衛を任される。失敗したが木乃香やら色々な人物からの折檻から逃げる途中に神様に会う。そこでルシフェルの殺害を依頼される。数か月後に、神様のサポートもありなんとか過去に飛ぶ……がなぜか四十年前に行ってしまったらしい。

・1960年

なんとか約四十年前に到着した夷……いや、式は、そこでエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル、まあ『闇の福音』と出会った。そこで戦闘し、勝利するとなぜかエヴァのお気に入り。その後共に旅をするが、式はそこで零崎の制御のため解放する。別荘を作り、

零崎と力の制御に七年くらいかける。途中賞金に目のくらんだ者たちや軍を壊滅させながら京都まで行くと、まだ幼い頃の父親、詠春と会う。一晩の宿を取るはずだったが、なぜか関西呪術協会が攻撃、戦闘に陥る。結果だけ言うと圧勝した式はなぜか復活したリヨウメンスクナノカミを『体』だけ完全に消滅させた。その後は割愛するとして……なぜかエヴァと結ばれパクティオーした。

・1978年

数えて三百年程度、平行世界に手を出した式、たまあに働いていたが『週休日六日』を明言しており、弟子の修業や千草との遊び、エヴァとのデートくらいしかやっていないダメ人間だった。気まぐれに麻帆良に親書を届けると、次期英雄であるナギ・スプリングフィールドと戦い、これを圧勝する。

・1980年

詠春が桜と結婚……しかし初夜に逃亡した、夷は適当に帰ってくるだろうと高をくくっていた。

・1981年

後に大分烈戦争と呼ばれる戦争が勃発、急きよ魔法世界に突入した。するとどこかで見たことあるキャラクターやその技を使ってくるチートな転生者が、式とエヴァを襲った。適度に撃退、あるいは地獄に叩き落しながらオスティア回復作戦に乱入、どさくさに紛れてアスナを誘拐した、そのとき詠春と再会、なぜか紅き翼と行動を共にする。

・1982年　いまここ！！

新年祝つての鍋パーティーにラカンが乱入したが、これを蟲ピンで串刺し、しかし腹が鳴ったので鍋に誘うと（傷は気合で治した）意気投合し、この場面で加入しない筈のラカンが紅き翼に加入した。

鍋パーティーが終わった直後、フェイクからの情報により、千草の両親が転生者に襲われていると伝わり、すぐに向かったが間に合わなかった。このとき夷は本気を出して、その転生者を空気に変えて能力をすべて封印し、永遠に生かすと言う罰を与えた。その後、失意に吞まれて一度は死のうと考えるがなぜか未来に居る筈の木乃香が現れ、木乃香に説得(?)されて、また戦い始めた。そんなでもってグレートブリッジ奪還作戦をハリセンだけで攻略し……ガトウと出会う。

## もう一つの歴史

1996年

雪の日の夜、イギリスのとある村がメガロメセンブリア元老院が召喚した魔物に襲われる。

しかし、三人の魔法使いが撃退し、被害は零。

・1997年

木乃香が小学三年生の四月、キョウ・スプリングフィールドが木乃香のクラスの担任として配属された、このとき年齢十三。

今回の閑話……1996年、イギリスのウェールズのとある村のお話。

|||||とある田舎

？「見てろよ……千の」

？「この馬鹿者おおおおおおおつ！！」

おおつ、今日も母上の平手打ちが火を噴きやがった。あ、親父がテレビで見た……えーと、フィギュアスケートの三回転ジャンプみたいに吹き飛んだ。

？「ねえ、兄さん……父さん大丈夫かな？」

？「ネギ？ お前はあんな風になるなよ？」

ナギ「うん、キョウ兄さん！」

俺の名前はキョウ・スプリングフィールド、隣にいるのが今年で三歳になる弟のネギ・スプリングフィールド。向こうで夫婦魔法合戦しているのが、父親のナギ・スプリングフィールド、母のアリカ・スプリングフィールドだ。そして俺とネギは俗に言う『英雄の息子』らしい、自覚はないんだがな。

目の前では地面がえぐれるほどの衝撃波が……あ、また山の表面削って一年前みたく吹っ飛ばしたいのか？　ウチの親はありとあらゆる面で最強すぎる。

まずは魔法、二人とも最大火力なら山ひとつは吹っ飛ばせるらしい、これでも衰えた……とか抜かしたからびっくりした。次に身体能力、言わずがな、こちらも二人に組手してもらったが最初は母さんに地面にねじ伏せられたときはびっくりした（その後泣き顔で抱きしめてくれたの嬉しかったが）料理は……最悪だった、最強の破壊料理を作ってくれるよ母さんがな！！　まあ王族だったし、仕方ないが

ガサツな父さんが早起きして家族全員のご飯作る姿はいつも慣れない。まあその他、色々あるが……俺の事も語ろうか、俺は世にも珍しい魔法無効化能力マジックキャンセルを持ってるらしい。母さんはこれについて妹と少し溝があるらしい、けど定期的に文通はしてるらしいがな。名前は……アスナ叔母さんだったかな？ いまは麻帆良って場所に居るらしいけど……日本だっけ？ あの国の着物って服は好きだからいつも着てるんだが……ああ、はい、母さんが鼻血出しながら写真撮ってたのは少しトラウマだよ。

ナギ「だああああああああつ！！ キョウだって十一だ！ 別にいいだろうが……！」

アリカ「アホかつ！ 我が子を戦場に送りたいのか？！ もっとこの子には視野を」

ナギ「すべてぶっ飛ばせばいいんだよ！ そのうち二代目千の呪文サウザンドマスターの男って言われるからな！」

アリカ「違う！ この子は私のように人生を無駄にしてほしくないのじゃ」

キョウ「あ、あのお二人さん？」

ナギ「攻撃は最強の防御だろうが！ この石頭！」

アリカ「知識こそが最高の武器じゃ！ 鳥頭」

プツン  
俺の中の何かがはじけた、こんの~~~~~

キヨウ「年がら年中発情夫婦があああああああつ！！」  
フルグリエンス  
の暴風」  
雷

テンベス・スターズ・

ナギ&アリカ「ハッ！　つてま、ま」

ちゅどおおおおおおおおおおおおおん

ネギ「……僕も兄さんみたいな、立派な魔法使いになる！」

ナギ&アリカ&キヨウ「「ネギ……お前だけは良い子に育つてくれ」」

家族全員の気持ちが多くなった瞬間だった。

その後、ネギと遊んだり勉強したり……ああ、そういえば、俺は魔法学校に行っている。徒歩でな、意外と体力はあるんだよね、母さんから王族の知識や能力制御、父さんから魔法と日常生活の知識を、あれでも生活知識はあるからなあ。

ネカネ「キヨウ！　今日は何して遊ぶの？」

アーニヤ「あんた……ネギに無茶なことさせてないでしょうね！」

あー、今は遊んでいるところだ。俺の親戚筋の姉である、ネカネ・スプリングフィールド、そしてこちらを睨んでくるのが、ウチの弟に絶賛恋しているアンナ・ユーリエウ　なげえ！　アーニヤだ。二人とも家族みたいなもんだ、この村には老人ばかりで、子供があんまりいないからなあ……仕方なく遊ぶのがこの四人になってしまっ、まあ、俺は一人で本読んだ方が楽しいしな。それになにか足りない気がするんだよね、なんか……大事な物が無くなった気分？　まあ関係ないか、今の俺は幸せだしな。

キヨウ「しねえよ、つつかお前こそ、弟を無理させるなよ？　俺はあと少しで卒業だしな」

普通の成績しかとってないしな、ウチの魔法学校では十二で卒業だしな。今年の三月で卒業、試験受けて、その後は……どうしようか？　つつか考えてないな、魔法世界には行かねえし……母親を「災厄」とか言ってる奴等の元なんて行くかよ、糞が。

ネギ「どうするの？」

キヨウ「だー！！　お前から考えろ！！　つつかネカネ、てめえ俺より年上のはずだろ？！！」

ネカネ「キヨウ？　年上への口の聞き方はそうじゃないでしょ？」  
(黒い笑みで)

すみませんでしたあああああああああ！！！！　こわい、つつかこわい、母さん並にこわいです！！

キヨウ「あー、はいはい、どうせ俺は英国紳士失格ですよ」

なーぜか、誰にでもため口になる……なんで？

アーニヤ「早く決めなさいよー！」

キヨウ「うつさいツンデレ、昔見たく『キヨウお兄ちゃん』で良いんだぞ？」

アーニヤ「ぶっ！　な、何言ってるばしょあぼあぼ」



キョウ「言葉ちゃんと喋れ、バカ野郎」

アレだ、この前見た……あにめって奴で、こういうのをツンデレと言っらしい。日本ってすごい国だよなあ、ロボットがいたり、超能力者だっけ？ そんなのいたり……すごいなあ。

ネギ「父さんみたいになりたいなあ」

キョウ「あー、ネギ？ 確かに憧れなくなるのはわかるが……やめとけ」

にしてもだ、ウチのネギの性格は温厚、もしくはヘタレだ。とてもじゃないがウチの両親から生まれたなら、もっと荒い性格になつてもおかしくない。ウチの母さん、父さんの性格から、俺みたいなのが生まれてもおかしくないんだが……ドウシテコウナッタ？ あれか、俺が性格持つてたのか？ わからねえなあ。

ネカネ「それじゃ、雪なげとかは？」

キョウ「第二十次雪合戦を始める気か？ またネギやアーニヤが雪に当たって泣き出すぞ？」

アーニヤ「魔法を見せるとか！」

キョウ「どこのバカが魔力暴発させて、林焼いたんだよ……没」

ネギ「紅き翼っっっ」

キョウ「両義式が嫌いだから……没」

ネギ「兄さんが嫌いなだけじゃないか」

キョウ「理不尽だろ？」

ネギ「うん」

キョウ「これが兄の特権だ、弟よ」

ネギ「兄さんのバカあああああー！」

大戦の英雄、両義式。ある人曰く『ハリセンで戦艦を叩き落す奴』  
『向かってきた軍勢にくしゃみ一発で吹っ飛ばす奴』『何やら棒状の何かで帝国の障壁をぶち破った』『無類の仮面好きで戦いのたびに仮面が変わる』『雌雄同性である』『お姫様を誘拐した』『ただのビニールテープで鬼神兵をバラバラに』と数え上げるとキリがなく、コイツ人間かと思う内容ばかり、さらに俺と顔がよく似てるらしい。一回だけ大衆に顔を見せたことがあるらしいが、そのとき絶世の美女、または美男子と言われたらしいが……真偽のほどはわからん、唯一知ってる父さんに聞いても『お前とかなり似てる奴』だけで終わる。謎だらけだが、家にそいつが使っていた鋼系がある、恐ろしい切れ味で鉄も切り裂くほどだ……なんつつもん使ってやる。

キョウ「戯言はここまでにして……ヘクシヨン！」

ネカネ「あら？ 吹雪いて来たのかしら」

アーニヤ「えー、まだ五時くらいなのに……」

キヨウ「あれだ、これ以上遊ぶなど、神様からのお告げだ」

ネギ「神様なんていないって言ってるのに？」

キヨウ「……誰かが言ってた、俺が望めば神様だって協力する、ってな」

ネギ「どうせ、自分でしょ？」

まあ戯言なんだが……マジでやばそうだな、意外と遠くで遊んでるんだがこのままだと夜くらいに吹雪くな。ネカネもそう思ったのか、アーニヤを説得する。今日は結局、紅き翼こっこしかできなかったな……俺が両義式役なのは当たり前なんだが、ネカネがラカン役なのには悪意を感じるんだが？

……で村に戻ったわけだが、なぜか悪魔に囲まれました。

悪魔「ウゴクナ？ ウゴク」

キヨウ「テンベスタルダリエンス雷の暴風！！」

まあ雷の暴風でぶっ飛ばしたわけだが……ヤバいな、村では非常用の結界が発動してるし、もしもの時に両義式がやったらしいが、まともに戦えるのが父さんと母さん、それとネカネの親代わりのスタンのじじい、そして俺、日頃から英雄と戦っている俺をなめんな。

ネギ「う、うう、ぼ、僕のせい？」

キョウ「大丈夫だ、俺が追っ払ってやる」

途中ネギが色々寄り道したので今は七時程度か？ 多分、自分が早く行ったら……って思ってるんだろう、いや、みんなで真冬の湖にダイブするのは仕方ない、アーニヤの魔法が役に立つときが来るとは……

キョウ「くっ！ 魔法の射手…連弾・光の十七矢！！」

にしても雑魚だが下級悪魔は数が多いことに定評があるからな、俺が魔法無効化マジックキャンセルを持っていても、全員を守るわけじゃない、三人を巻き込まないために威力を落しながらやってるからな、いずれは追い詰められる。魔力は腐るほどあるからな、威力が低いのなら任せろ！！

悪魔「ススめ！！ アイテハコドモヒトリダ！！」

キョウ「なめんじゃねえ、父さんが来るまで持ちこたえれる！」

アーニヤ「あ、危ない！！」

おっと、俺の付近まで来てた悪魔が居たのか、畜生こう気配を消すのがうまい奴はきつなあ、この数の悪魔なんてこの辺じゃ出ない筈……術者が居る筈だが、この数出すには大量の魔力を使ってるはずだ、最悪死んでる場合が……。

ネギ「兄さん」

キヨウ「らあああああつ!!」

悪魔「ホントウニコドモカ?!!」

キヨウ「子供は子供でも、英雄の息子だ、この野郎!!」

ナイフを持ちながら応戦する、このナイフ『七つ夜』ってんだが、俺の魔法発動体でもあるんだが……切れ味やべえ、触れただけでバターのようになれる。切った感覚に吐き気を覚えるがな。

ネカネ「う、ごめんね、キヨウ」

キヨウ「そのまま障壁を持続させろ、無いよりはマシだ!」

ネカネは唯一、俺以外に魔法がまともに使える人物だ。アーニヤやネギはあくまで、基本だけだ。三歳で使えたらこわいよ! 俺は使えたがな。

つつかあと三十体かよ……仕方ない。

キヨウ「来れ<sup>ケノデイトス・</sup>虚空の雷<sup>アストラブサトーデ・テメト・</sup>薙ぎ払え<sup>ディオス・テュコス</sup>雷の斧!!」

父さんの得意魔法である、まだ魔力を制御しきれていないので詠唱を唱える。千の雷も使えるがここら辺一帯を吹っ飛ばしそうだから怖い。

雷の斧は三十体の悪魔を消滅させた、後は余剰魔力が腕にたまっていたが……どうやって放出するか。

悪魔「バカガタタカイデ、キヲヌクナド!」

キヨウ「雷の拳!!」

余剰魔法を解放して即席の魔法……というよりも、打撃技をする。戦いの中じゃこんなお当たり前だし、たまに足にためてスタン効果を付属させた範囲攻撃をする……それを気合で治す、父さんは人外だと思う。

ネギ「お、終わったの？」

アーニヤ「み、見たいよ？　こ、怖くないのネギ」

ネカネ「そんな事より村に入りましょう、ここより安全よ」

……やばい、いや悪魔もそうだが、この場所がだ。何かが近づいてくる、ありえないほどの魔力が……存在が、本気の俺でも勝てないことはわかる、まさか……魔王クラス？！……人間が勝てる相手じゃねえぞ、とりあえず三人には悪いが村に逃げてもらおうか。

キョウ「三人ともよく聞け、早く村に行って父さんたちを呼んで来い」

ネギ「な、なんで？！　兄さんも行こうよ！」

ネカネ「なら私も残ります、キョウだけ」

キョウ「お前が三人を守るんだ、俺が死んでもだ」

アーニヤ「な、何言ってるのよ！　不吉なこと言わないでよっ！」

あー、辛気臭いのは嫌なんだ。つつかさつきから見てるな……早くしないとやばい。俺が気付いてるのがわかってるのか？　さすが魔

王様……泣けるね。

キョウ「さっさと行け、正直お前らがいると本気だせないから」

ネカネ「……わかったわ」

ネギ&アーニヤ「ネカネお姉ちゃん!!」

ネカネ「でも約束するわ、すぐナギさんたちを呼んでくるわ!」

おいおい、なんか死亡フラグがビンビンなんだが……やめてくれよ、つつか泣くな お前らは笑っててくれよ。それだけが俺の願いなのに。

キョウ「はいはい、期待して待ってるぜ」

ネカネ「ッ!! ……行くわよ、ネギ、アーニヤ!!」

ネギ「兄さん、兄さん!!」

アーニヤ「お兄ちゃん!!」

あららら、アーニヤ……帰ったら弄ってやろう、つつか手を握りながら身体能力強化して走って行っただ、世界狙えるな……さて。

キョウ「出てこいよ」

?「うん、やっぱり人間はいいね……見ていて面白い」

キョウ「まあ、そうだよな、魔界の王からしたらどうなの?」

足が震える、手から七つ夜が零れ落ちそうになる、しかししっかりと目の前の女を見据える、その顔には笑顔……しかし目が笑っていないし、俺に明確な殺意をたきつけてくる。体中が重い……殺意に吞まれてるよ。

？「……そして憎たらしいね、何が楽しいやら」

キョウ「嫉妬か？ ああ、理解……レヴィアタンか」

レヴィアタン「うん、そうだよ？ 僕はレヴィアタン、嫉妬を司る悪魔であり魔王だよ」

キョウ「俺はキョウ・スプリングフィールド」

最悪だ、昔読んだ旧約聖書には。ベヒモスが最高の生物と記されるに対し、レヴィアタンは最強の生物……つまり獣として書かれているが、悪魔としては最悪のどんな悪魔扱いも通用しない……最悪の悪魔だよ。さらに悪魔の9階級においてはサタン、ベルゼブブに次ぐ第三位の地位を持つ強大な魔神……簡単に言くと人間じゃ勝てねえ、ってわけだ。

レヴィアタン「にしても君も逃げればよかったのに」

キョウ「逃げたら殺すだろ？ つうか、魔王相手に逃げ切れるわけないじゃん」

はあ、どこのだいつだ、こんな奴召喚したの……幸い、憑依のようだが、力がヤバイのは変わらない。つうか本気だったら今生きてないしなあ。



レヴィアタン「……にしても君を見たことがあるような」

キョウ「気のせいだろ？ 人間の子供が悪魔の悪魔、魔王に会えるわけないじゃん」

レヴィアタン「いやいや、意外に僕たちは何度か人間界に入ってるよ？」

キョウ「マジですか？」

レヴィアタン「嘘だよ」

キョウ「ダヨネー」

あー、やっぱやめない？ 俺死ぬよ？ 絶対死ぬよ？ 魔王に勝てるわけないじゃん。

レヴィアタン「じゃあ死んでもらおうか……ちなみに言っておくけど」

キョウ「死ぬ気はないけどなー、で何？」

レヴィアタン「僕、君に一目ぼれしたから逃がしてもいいよ？」

キョウ「あっはっはっは、本当の姿見せたらいいよ。つつかそれ嘘だろ？」

レヴィアタン「……よし、殺そう」

キヨウ「ねえ！ どっち！！」

まずはレヴィアタンは水を体の周りに渦巻かせながら、突っ込んでくる。それを全力で避ける、当たったらどうなるかわからん。そのまま、水を飛ばしてくるので魔法の射手を全力で撃ちながら相殺する。俺は本気の一撃を出すために精神を集中させる。

レヴィアタン「その年でこの僕と戦えるなんてすごいね、すごく憎たらしいよ」

キヨウ「嫉妬乙」

水を凝縮するレヴィアタン、俺はすぐに回避する。そして俺の体にあつた場所に高圧の水が後ろの木を貫通する。本で読んだなあ、たしかウォータージェットとか言ってたっけ？ 圧力かけて水に切断できるほどの力を持たせるんだっけ？ まあ「切る」というよりは「水流の当たった部分を吹き飛ばす」って方がいいのか？ まあ人体に当たれば……言わずかな、えらいことになるな。で、なぜ0.1mm〜1mm程度のはずだが……あきらかに10cmくらいの穴が開いてるんですが、レヴィさん、今度からめんどいからレヴィって表示ね。

レヴィ「さつさと死んで、僕の配下になれよ、憎たらしい」

キヨウ「めっちゃ怖いんですが、つつかマジですか？！」

レヴィ「ちなみに処女だよ？」

キヨウ「しょ……じょ？」

なんだろう？ あれか、なにかしてない女って意味かな？ 生きてたら母さんに教えてもらおう。つか死んだあとは少し安心かな、悪魔に永久就職とかマジラッキー、んなわけあるかああああああああああつ！！ あと七十年は生きるぞ！！ 嫁さんもらって幸せに生きてやんよ！！

レヴィ「この年じゃ、まだわからないか……まあいいや、こっち来たら教えるよ」

キョウ「いや、まだ死ぬ気はない」

レヴィ「……死んで？」

キョウ「可愛く言っても駄目だぞ？」

レヴィ「隙あり」

ガツ？！！ 後ろに衝撃が？ 振り向くと……レヴィが目の前に笑いながら立つてるんだが、それに腹が熱い？ なんで？ OH、腹から手が生えてるよ。

キョウ「ガハッ、分身？」

レヴィ「僕は一人に憑依したとは一言も言っていないよ？」

キョウ「そ、りゃ、そうだ、な」

痛い、頭がクラクラする、あれだ内臓が挟られてる。なんとか生命活動はできるみたいだけど……息ができねえ。

あー、なんかぼやっとしてきた。これが走馬灯？ って誰だ？

？『お前の力……そんなもんか？』

いや、知らんがな、つか全力ですよ。魔力高めてるが……もう意味ねえだろう、これ。

？『諦めんなよ、死を覚悟した今なら見える筈だぜ？』

何が？

？『死線だよ、ほらうつすらと見えるだろ？』

あ、ホントだ、線ポイのがレヴィから出てるのがわかるよ……やっ  
たねキョウ！

？『おいバカやめろ！ はあ……まさか十二年で死にけるなんて  
な、まあいいや』

おーい、話が見えないんだが？

？『いい加減、起きろよ……零崎虚識』

その瞬間、カチリと何かがはまる感覚がした……ああ、そういう事  
か。

俺 殺人鬼なんだ、と理解した。次の瞬間、七つ夜  
で腹から出てる腕を刺す、それは死の点と呼ばれる場所。

レヴィ「な、何をした？！」

？「あーなんだろうな」

レヴィ「その眼……魔眼なのか」

？「え？ ああ、そうだな……なんだろうな」

視界が変だ、何か青みがかつてる様な……そんな視界と黒い線と黒い点が見える。使い方が自然と頭に入る。ゴポリと腕が抜かれ、血が噴き出す、不思議と恐怖がない。むしろ……興奮する、血を見て喜ぶ変態になったのか？

レヴィ「その眼……直死の魔眼か！」

虚識「みたいだな、じゃあ改めて自己紹介。俺の名は零崎虚識、ただの殺人鬼だ」

俺はもう一人のレヴィの全身の死線を切り裂く、すると細切れになりバラバラと崩れていく、どうせ俺は御払いもできないしね、憑依された方には残念だけどここで死んでくれ。初めて人殺したのに……まったく罪悪感を感じないんだが？

レヴィ「……最高、本当に惚れちゃった」

虚識「殺されたのに？」

レヴィ「どうせ少し魂を分けたただだし、君は殺してないでしょ？」

虚識「次は殺す」

レヴィ「僕、ゾクゾクしてきたよ」

虚識「変態」

レヴィ「殺人鬼よりマシ、アスモデウスだったらもつとひどいよ？  
この場で脱いでたかも」

……ただの変態だろ？ そりゃ……はあ、なんか零崎になったせい  
か、この世の理不尽が楽しく感じてるよ。うわー変態？ 変態なの  
か？！ つつか変態だよ。

虚識「んじゃ、死んでくれ」

レヴィ「ま、仕方ないね……と言った？」

レヴィは俺に向かってウォータージェットを発射する。それを七つ  
夜で防御しながら近づく……うん、水しぶきが気持ちいいな。

レヴィ「反則」

虚識「存在自体が理不尽な奴が言つなよ、んじゃ消えろ、千の雷」

俺は今までためた魔力を放出する、そのまま腕から出た千の雷はレ  
ヴィを消し去る。消える前になんか口動いてたよなあ……なんだっ  
け？

レヴィ『今度は本当の僕で行くよ？ キヨウ』

あー、さらなる死亡フラグだな……つつか血の出すぎてヤバいん  
だが、あー、ぶっ倒れるよこん畜生。とりあえず、残った残りかす  
の魔力でとりあえず治療魔法を……さっきの威力ありすぎたなあ、  
後ろに会った山消し飛んだなあ。

ナギ「キヨウ！！ 畜生！！ アリカ早く医療魔法を！」

アリカ「わかっておる！ こんなところで失つてたまるか！！」

ネギ「兄さん、兄さん死なないでよ！」

ネカネ「い、いや、イヤアアアアアアアア」

父さんと母さん、ネギとネカネの泣いてる声が聞こえる……初めて聞いたな、父さんと母さんの泣き声……ははっは、やっべ気絶するぜ。

そう思った瞬間、俺の意識は闇に覆われた。

その後の話をしようか、村の結界により死傷者はゼロ、つうか俺はいなかったからな。聞いた話だと生死の境を行ったり来たりしてらしい、起きたのはその三日後。まずは父さんからぶん殴られ、母さんからは説教を受けた後に抱き着かれて泣かれた（その時、呼吸困難になり死にかけました）、ネカネからもありがたーいお説教を三時間、アーニヤは泣き顔で殴りかかってきました（その時腹にヒットし、傷口が開いた）、ネギは泣きながら『こんな事しないで』と泣きついて来た……我が弟よ、大丈夫、今度はしない筈。

調査した結果、俺がバラした女からメガロメセンブリア元老院の物が発見される、母さんは激昂したが……とある友人に連絡した、まあそれから村の結界の修復、俺の看病　と言つても一か月で治つたが、医者曰く『異常な回復量』らしい。自宅待機していたが、ネギやネカネ、アーニヤのおかげで退屈しなかった。

そして時間が少し進んで、三月の終業式。

ナギ「息子の卒業式だ！！」

アリカ「ハアハア、着物いいな、着物」

なんだ？ あの母親のような物……ちなみに俺の母さんは認識障害の魔法のおかげで正体がばれてない、ばれたらやばいかな……、つうかなんでほかのみんなはスーツなのに俺だけ着物？！！

ネギ「よく似合ってるよ！」

ネカネ「ハアハア、着物…… GJ！！」

アーニヤ「私よりも女っぽい」

アーニヤアアアアアアアアアア！！ つうかネギ、ソレは男として喜びたくねえ！ ネカネ？ ネカネだよな？！！ つうかキヤラが崩壊しまくってる、俺の幼馴染を返せええええええええええええ！！ ちなみに今日の服装は白の着物に赤い帯…… うん、周りの男子がうざすぎる、目線がやばい、俺はおとこだつつうの！ つうか女子「さすがお姉さま！」とか「その目で思いつきり罵倒して」とか漏らすな！！ てめえら十二だろうがあああああああああああ！！

校長「メルディアナ魔法学校卒業生代表！ キョウ・スプリングフ  
イールドちゃん」

キョウ「死ねや、じじiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！」



俺の祖父、ハキ・スプリングフィールド……メルディアナ魔法学校の校長でもあり、魔法世界でも指折りの実力者らしい、今はただの変態じじいだが。

その後、卒業証書をもらい、じじいの頭の良心（髪）を全部燃やした。

ネカネ「卒業おめでと、キヨウ」

アリカ「もう少し、そうじゃ！ その位置じゃ！」

キヨウ「……嫌いになるよ？ 母さん」

アリカ「なっ？！……！！す、すまなかった、許してくええええええ！！」

うぜええええええええええええええええ！！頼むから鼻から色々出てる！！美人が台無しだよ、畜生！！

ナギ「ま、まあ後は卒業試験だけだな」

アーニヤ「ま、まあお兄ちゃんなら、大丈夫ね！！」

ネギ「僕も来年から今年から入るから……頑張るよ！」

ちなみにアーニヤも魔法学校に入っているのでネギとは一年違いだったりする。

まあ卒業試験つてのは魔法球体に触れて出てきた指令をこなすだけ、まあ簡単だから大丈夫。

キヨウ「さて、何が出やがりますかな？」

魔法球体『日本の学校で教師をやること』

キヨウ「は？」

一瞬頭が真っ白になる……マジで、は？

全員「……」な、なんじゃこりゃああああああああああああああああああああああああああああ！！」「」「」「」

俺の不幸は止まるところを知らなかったらしい、つつかマジですか？　そうですか。

**時系列&魔王さんこんにちわ（後書き）**

作「今回はラジオなし！ 次回「最強はルビをふるとバカになります」、女バージョンをお楽しみに！！ それではちえりお！！」

**最強はルビをふるとバカになります（前書き）**

変なテンションで書いたので……今回原作崩壊が多いです。  
今回、書き方を台本形式から普通の書き方に変えました。

それとアリカファンの皆さん……すいません、一番キャラ崩壊起こしています、って前回の閑話でいい忘れてた。

それではどうぞ！

ナギ「待てや！」

なに？ 始めるんだが？

ナギ「俺の主人公の小説書け！！」

だが断る。

ナギ「なんでだ！！」

ぶっちゃけると後半でマジの主人公してもらっから……心配するな。

ナギ「我が世の春が来たああああああああ！！」

声優ネタすんじゃねえよ、では本当にどうぞ！

**最強はルビをふるとバカになります**

「協力してくれないか？」

「だが断る」

「ど、どうしてですか?!」

なぜか、タカミチとガトウに頭を下げられるが……こちらら迷惑なんだよ。

「めんどいし、正直なんで俺がこの世界を救わなくちゃなんない。とりあえず、この世界の住人で頑張れよ」

「それが無理だから頼んでいるんだ!! 超越者!! あなたならできるだろう!!」

「……あのなあ、俺は全知全能の神じゃなんだぞ？」

『全知全能のワシと殴り合っているがの』

『黙ってろ、じじい（ゼウス）、ひげ全部抜いて天界に突き刺すぞ』

冒頭からすまない、式ですたい。

なぜか家の場所を特定してきたガトウとタカミチ……いや坊主だな、めんどい。俺の家を見つけたその根性は認めてやろう。なんだつけ？ 完全なる世界？ 知るか!! 情報整理はフェイクに任せてんだよ、俺は週六日休業なんだよ、働きたくないでござる。つつか三百歳のジジイになに期待してやがる。なんもでねえよ!! あ、お

年玉か？

「わからないのか？！ 世界の危機なんだ！！ 頼む」

「お願いします、あなたしかいないんです！！」

……あのさあ、子供には弱いんだが、仕方ないなあ。

「どうするんだ？ 式」

「わーった、わーったよ！！ やりますよ、やらせていただきますよ、このやるおおおおおおおおおっ！！！！」

「ダイジョウブ？ シキ」

「もえちきた、アスナ抱きしめていい？」

「ウン」

あれから一か月がたった、今はアスナを抱きしめている……あー、癒されるわー。今は身長（100cm）を縮めてアスナと同じくらいにたまりにエヴァにもしてもらっている……時々、そのまま食われるが。

「ダイジョウブ？」

「もーまんたい、でも疲れた」

あれから俺は本気で調査に乗り出した、所々で脅しを使ったり、性転換して誘惑したり、金で買ったり……あー、ダンテエ、お前の気持ちがよくわかった。すまん、今度行くときはストロベリーサンデーとトマトジュース持っていく。

「シキ、カミノケタベナイデ」

「モフモフ」

「……」

「モフモフ……御馳走様でした」

「……バカ」

あれ？ アスナが少し怒ってる様な……まーだ弱いけど感情が戻ってきてるのかな？

この一か月でわかったことと言えば……まあ少しだ、。

とりあえず『完全なる世界』について かなり昔から活動してるらしい、名称はコズモエンテレケイア、めんどいから完世な、作者も長くてめんどいと言ってた。それで調べてく内にわかったが、この組織は向こうの世界……つまりは俺の世界で言う、死の商人みたいなものだな、下っ端の構成員がマフィア、政府の役人など戦争で得をする者達ばかりだったな。マフィアは『零崎』で皆殺し、政府の方は魔眼で操ってる……自分の魔眼が万能になりすぎて怖いんですが 戯言だけだな！

幹部の情報はかなり少ない……と言うか無いに等しい。あっても『十代くらいの子供』『仮面を被ってる』『小柄で少女のようでもあり、老婆のようでもある不思議な人』やら……おい、仮面被った奴

出てこい、俺にその仮面を見せろおおおおおおおおお  
！！ ヒャー！！ 我慢できねええええええええええっ！  
……ゴホン、ボスはまだ確定ではないが『造物主<sup>ライフメーカー</sup>』と言う人物らしい。  
……わーお、強そうだなあ！。

冗談はさておき、これだけである。あまり目立つこととして、ものすごく恥ずかしい二つ名言われても困るだけである、四百歳のじじいにはキツイぜ ……すまん。

「（イライライライライラ）」

「お、落ち着け、エヴァ！ 魔力が体から吹き出てるって！！ おい、ラカン抑えるの手伝え！！！」

「……あいつはわざとやってるのか？ それとも天然」

「うがあああああああつ！！ 私に抱き着けばいいものを！！！」

「エヴァンジェリン様！！ おち、落ち着いて！！！」

「若いのー」

「ですねー」

「引っ付くな、このガキどもがあああああああつ！！！」

「魔力が逆流して ひゃぎゃあああああああああ  
ああああああああああつ！！！」





「はい！」

そう言つて元気よく走っていくタカミチ……ちなみにガトウとタカミチは師弟の間柄だ。……にしてもだ。

「難儀だな、まさか生まれつき呪文の詠唱ができない体質、なんて奴がいるとはな」

「だが詠唱できないだけで、使えないわけでもない」

「どうして式、まさか……虚刀流でも教える気か？」

「その通りだ、エヴァ」

ここで俺は身長を元に戻す、ガトウやみんなはツッコまない、俺の突発的な行動には慣れてくれたらしい。うーん、驚くエヴァの顔が結構好きなんだが……

「しかし、あれは常人が使える物なのか？」

「質問なんだが……その虚刀流と言うのは？」

「『虚』しい『刀』の『流』れと書いて、虚刀流。詠春によく奥義をぶち込んだなあ」

「……（ガタガタガタガタ）」

「聞くところだと、剣法か？　しかしあいつには剣を持たしたことが」

「虚刀流は刀を使わない剣法なんだ」

「はあ?!?!」

ガトウが口を大きく開けて驚く、まあ普通の反応だな。むしろ俺の方がおかしい、これでまともだと思っただらおしまいだよなあ。

「聞いて驚くなよ? こいつはその虚刀流で鉄を斬るからな?」

「……人間か?」

「大半やめてるな」

コジマ粒子、ゲッター線、タキオン粒子、ムアコックレヒテ機関、地味にメタトロン、その他もろもろのエネルギー吸収して動いてる時点 いや人間の形保ってる時点でびっくりだよ、いやゲッター線はなんか次元の壁越えたらエンペラーと出会って、タキオンはカブトから……生身でハイパークロックアップできちゃった まだ過去、未来はいけないがな。ムアコックレヒテ機関? 誤って吸収したぜ、メタトロンは……うん、仕方ない、木星行ったらあったんだもの。

にしてもだ、俺の体ってどうなってんだ? いやマジで神力のおかげか? なんか体内で生成されてそうだから怖い、俺って何に力テゴライズされるんだ? 人間? 魔王? 神? それとも化け物? 最後が一番当てはまるぜ。

「……マジで?」

「マジだ、《みんなで渡れば怖くない、ただし丸太橋》みたいになっ

「！」

「不安しかねえよ!!」

「ガトウ……この程度でツツコンだら、お前の胃はストレスでマツハだ」

「orz」

まあいいや、とりあえず外に出てるタカミチ少年の元に行くかあ。

「おい、タカミチやーい」

「式さん？ どうしたんですか？」

「ああ、お前に俺の技術を教えようと思ってな」

「ええっ?! 良いんですか!!」

「だかし駄菓子菓子」

「なんか違うような……」

「なめると速攻で死ぬから 死ぬ覚悟はあるか？」

俺はほんのちよっぴり、まるで牛乳にこれでもかと甘味を入れた感じで甘くしてから、砂糖百パーセントのケーキを出す感じで殺気を出す、こうでもしないと殺気で殺しちゃうからなあ……ダンテコッ

タイ。

「ッ?!」

あー、殺意慣れしてないところなるよなあ……まだ子供だし、まあ俺は見稽古と言う反則使って覚えたけどな、さて小僧はどうだ？震えてるなあ、まあ仕方ないなあ……。

「怖いか？ 腕が振るえるか？ 足が動かないか？」

「……ち、違いますッ!! 僕は恐れていません!!」

「……覚悟はあるか？」

俺は静かに問いかける。

「俺がやろうとしてるのは、一種の人体改造だ……血反吐は当たり前、だが確実にお前は強くなれる」

「……」

「どうする？ 小僧？ 怖気づいたなら」

「さい」

……クククク、これだからまだ人間をやめずに人間の味方してるだけさ。アーカード……てめえの言う通りだ、人間は面白いなあ。ちなみにアーカードとは意見の衝突、ただの喧嘩、言い争いで何度も戦った、あつちは俺の事を人間と言ったが……俺ヘタすると歌r打分解されても生きてる保障あるからな？ 実際、波動砲ぶつ放され

て分子まで分解されたが再生できたし……まじチート乙。

「弟子にしてください!!」

「いいだろう!! んじゃ、まずは」

その日から俺の家からタカミチの叫び声が消えることはなかった。

後のタカミチはこう語った。

『え？ 式さんとの修業？ ……あれは拷問ですよ？ 腕はぶった切られるわ、あやゆく四肢切断されかけるは。後は……岩を斬るために少しでも吸血鬼の細胞入れられましたよ、ええ、少しだけです。まあ一言だけコメントするなら……地獄ですよ。死んだ方がマシと思えるくらい』

……この記事を後年（六百歳）の俺が見た瞬間、少しタカミチに謝った。まあ……あそこまでやりきった奴もそうはいないんだがな。俺も一言、《やりすぎた修業、ただし六歳の俺の特訓内容》みたいになっ!! ……マジだからね？ あ、あの鶴子姉様？ お、下ろして、刀おー イエアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!! ……（二十数年後の麻帆良での夷と鶴子の（血まみれの）会話より）

|||||それから数か月

「居合い拳!!」

スパンツ!! よーし、んじゃ俺もガトウから見稽古した技を

「居合い拳（弱）」

ちゅどーーーーーーん！！ お、タカミチが奥義を

「……虚刀流、一の奥義 『鏡花水月』 未完！！」

ドゴンツー！！ んじゃ、複合奥義いくぜ！！

「虚刀流……曲絃接続、殺曲『黒百合』」

ズガガガガガッ！！ ドゴム！！

「見ろ……魔物がごみの様だ」

「イウヨリモ、エヴァトメナクテイイノ？」

ひゃっはーーーーー！！ 久しぶりに転生者に会ったんだが……こいつがなんか魂まで対価にしちゃって、大量の魔物が出てきてしまったんだなあ、これが。

まあ、紅き翼と、強化したタカミチならば大丈夫だろう。別荘も使って一年ほどゆっくりと基礎をつけたし、未完成（本当に未完成）だが奥義が放てる。いい経験値稼ぎなのでやらせてる、他の奴等？  
ああ、あそこ。

「ヒヤッハーーーーー！！ 魔物は撃滅だ！！」

「おらおらおらおら、こちとらフラスレーションたまってんだよ！！」

「……師匠がエヴァ様と毎日、イチャイチャとツ！！ 聞こえてんだよ、夜k」

スタンバ―イスタンバ―イ、GO！！ そのまま、俺は詠春に向けて蟲ピンを投げる。

そのまま詠春の顔をかすり、後ろの三百体くらい魔物を消しながら突き進んでいく。エイシュン？ カエツタラオボエテロヨ？ つうかここ健全サイトだから……自重しようか。

「ビューティフォー」 アル

「……ワシ、入る集団間違えたかの？」

「……鎧袖一触とはこのことか。ツテ、コウイウコト？」

「アスナ？ すぐに忘れる、いいな？ 絶対だぞ？」

「フリデスネ、ワカリマス」

「うばああああああああああ！！」

「ケケケ、久シブリノ殺シ合イダゼエエエエエエエツ！！」

……あえて言うか、カオスすぎて収拾つかんわ、ボケエエエエエエエエエエエエエエツ！！

「色々あって、連合の本国首都に到着」



初めましてこんにちはこんばんはおはようございます、両義式の女バージョン、名前を両義識と言います。って口調がやっぱ変だな、めんどいからいつも通りな。

「性別変えるって……非常識な」

「四百年生きてるとなァー、無駄な知識がたまるんだよ」

元々は『闇』と『光』を逆転させる魔法を研究してたら、なんかできた……ジャンゴの小僧は大丈夫だろうか？ まあ、太陽少年だし大丈夫か。

「このまま式と……ゴクリ」

「誰力、コノポンコツ御主人ヲ止メロ」

「無理」

「右に同じく」

「……命は投げ捨てる物ではありません。桜と再会していないのに死んではたまりません」

最初がナギ、ラカン、詠春の順番でそう言っている。

「にしてもここは変わらんな」

「アスナちゃん……この服w」

「……いっぺん死ね」

そのままヒヒロノタチでアルに斬りかかる、ちなみに不死殺し付きだからな

そのまま強制鬼ごっこをし、アルを××した後、着せようとした服を見た。……メイド服だった、さらにアスナのサイズぴったり（こっそり奪って小さくなったエヴァに着せたのは余談）

さて、そろそろなぜ連合の本拠地に来た理由を言うか。理由は簡単、ガトウに呼ばれたからだ、あんな奴だが連合ではメガロメセンブリア当局の捜査員。結構権力を持つてるらしい……が、一度戻り報告したら、あつてほしい人が居ると言われ、わざわざ来たんだが。

「アスナー、これから行くところはお前にとっては最悪の場所だ。今からなら、転移札で家に戻してやる」

「……イイノ、ネエサンニアエルカモ」

「無理はするなよ、無理して倒れたら、心配するのは式や私たちなんだからな！」

「ツンデレ乙、まあその通りだ。無理はするなよ？」

「完全に親子d イテ！！」

あ、あれ？　なんかアスナが怒ったみたいでナギの脛を蹴ってるんだが……どうしたんだ？

「ワタシト……式は親子じゃなくて、家族！！」

「……」

「……」

「……」

俺やエヴァ、タカミチが沈黙する。

「どうしたの？」

全員（アスナ以外）「「「「「「「「「「か、片言じゃなくなってる  
うううううううううう？！」」「」「」「」「」

怒りの力はすごいねー……うん。

そんなこんなでメガロメセンブリア元老院本部に……とりあえず、俺への目線がいやらしい。なぜか女になると一部分が大きくなるので着物がきつくなる、なので千草……いや千草さんみたいな着物の着方になる。正直、あの時はツッコまなかったが……肩寒いやね？冬でもあれだったし、肩震えてたし、まったく無茶しやがって。

「（式に変な目で見てる奴は全員）」

「（おちちゅけ……つけ、これは変装だ）」

「（仮面被る意味あるのか？）」

「（……素顔見せるのが恥ずかしい）」

「（え？もしかして今まで素顔見せなかったのも……恥ずかしかったからか？）」

そーですよ、あーあー、三百……もうすぐで四百歳だが、恥ずかしいんですよ！！ あー、もういいや、奥の手使うか。

「（忍法骨肉細工）」

メキボキクシャー！！とコミカルな音が俺の体から発生する。エヴァは嫌そうな顔をしながら、紅き翼のメンバーは目を丸くしながら……そんなに変か？ 体を固体から液体、気体にしてるわけじゃないのに（とあるブラックなRXを見稽古で見たらできた）そして顔に合わせて体格を整え、できたのが……

「これならいいだろ？」

黒<sup>ヘイ</sup>になつてみた、わざわざアーティーファクトまで発動してやったんだ……似てなきや死ねる。

「……ってなんじゃそりゃー！！」

「……あ、ああゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ……」

「確か……忍法骨肉細工、だったか？ 悪趣味な術だ」

式「別にいいだろ？」

ナギがツツコんでくるが……詠春、まだトラウマだったんだ。昔修業中にやったら、怯えたもんなあー。

「お前は一人人間びつくりシヨーか？」

「ちなみにこれ普通の人間となると二十年近くかかるから……  
おすすめはしない」

「……ガトウ師匠、僕はとんでもない人に弟子入りしたような気がする」

「まあ、仕方ない。式は『理不尽が服着て歩いている』実例だから」

「そろそろ着くぞ?」

そして俺たちは少し豪華な扉の前についた、一応アスナには認識障害をつけてもらっている、そうじゃなきゃこんな堂々に行かないさ。そしてガトウがノックする、少したちガトウが扉を開けると少し年を取っている男が椅子に座っていた。

「マクギル元老院議員、連れてきました。紅き翼、並びに超越者と闇の福音です」

「ご苦労、君の労力に感謝する」

「このジジイが協力者か? 確かに元老院議員な」

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ」

部屋の奥に、ローブを顔にまで覆いかぶせている……女だろう、そいつがゆつくりとこっちに歩いてくる。なーんか嫌な予感が。

「ウェスペルタイア王国……アリカ王女だ」

「久しぶりだな、超越者」

「ジーザス、まさかの直球かよ……ストライク、バッターアウト」

あらららら、まさかアリカ姫が出てくるとは……予想外だな。てつきり王国に引きこもって戦闘の指揮を執ってるのかと、つつか俺を憎くないのか？

「……………俺はナギ・スプリングフィールド。この『紅き翼』のリーダーだ」

「ズケズケと……貴様らがやったことを理解しておるのか？ 下手をすれば全軍率いて来てもよかったのだぞ？」

「残念ながら、今の王国にそんな力ねえだろ？ それよりもアスナを奪われたことを隠すのが精一杯だろ？ 違うか？」

「ああ、その通りだ。どっかの誰かがやってくれたおかげでな」

「姉さん、やめて。式を悪く言わないで」

「ア、アアアア、アスナ?!?!」

能力で認識障害打ち消しやがった、おいおい、マジでカオスになるからやめてくれ。

「……ゴホン、取り乱して悪かった。ではアスナ、帰ろう」

「どいへ?」

「故郷にだ」

「嫌」

「ワガママを言わないでくれ。お前の『力』を必要としてるのだ」

「……やっぱり姉さんもそうだよな」

「ア、アスナ?!」

「私を散々閉じ込めて！ 自由もくれずに道具のように扱って!!  
……姉さんだけはそうじゃないと思ってたのに!! それなのに」

「す、すまん。取り消す、だからア」

「姉さんなんか だいつきらい!!」

……えーと、色々ありすぎて困るんだが？ あれ？ アスナ？ お前って感情がまだ発達しきってない筈なんだが？ もしかして別荘での治療の成果が今出ちゃった？ 少し精神世界に潜り込んで弄っただけなんだが……あー、ミスった。

なんかアリカなんか石像化してるし、みんなアスナの姿に『（。』。ポカーン』としてるし、俺なんて夢じゃないのかって神力で体正常化させてるもの……えーと、とりあえず。

「起きんかい！ ちえりお!!」

「いったあああああああああああつ!!」

石像化してるアリカ王女に鉄拳で叩き起こすことから始めた。

~~~~~十分後

「アスナ、大丈夫か？」

「大丈夫」

「にしても驚いたな……アスナにあんな感情が眠っていたとは」

エヴァが問いかけるとうなづくアスナ、というよりも普通に会話できるのがすごい、今までだと『アスナー』『ナニ？』『今日はハンバーグだ！』『ソウ……』こんな感じ、まともに会話できるのは結構少ない。

うーん、よくなったとはいえ、まだ感情が操れてないなあ……地道に訓練するしかないか。

あの後、さすがにヤバいと思った俺たちは、俺とエヴァ、チャチャゼロだけ退出し外に出てきた。改めて認識障害と少し感情にリミッターをつけさせてもらった……じゃないと感情でつぶれる。

「……アスナ、とりあえず俺がアリカと話してみる。とりあえずだから……期待はするなよ？」

「うん……ごめん」

「子供は大人に頼れ……そうじゃなければ、私のような人生を送るぞ？」

……俺と出会う前のエヴァはかなりあらぶってたと聞くしな（チャチャゼロ談）

ちなみに別荘でやったことは、まずは一年かけての教育、まあ普通の教育だな。次に俺が精神世界に入って、精神の正常化、そして感情の形成……だったんだが、フェイクがいらん知識を教えたので、まあアニメの知識なんだが……おかげでアスナがアニメに夢中に。その時は感情を形成できなくて……後三年はいると思ったんだがなあ。

「……ごめんなさい」

「わかればいい、んじゃ行ってくる。頼んだぞ、エヴァ、チャチャゼロ」

「ああ」

「俺八子守り人形じゃネエンダゾ？」

そのまま転移して部屋に戻ると

「大嫌い大嫌い大嫌い大嫌い……」

「姫さん?! あっ、式!! 頼む、姫さんを起こしてくれ!」

「どうしてこうなった?」

「（。。。）ポカーン」

ちなみにこの騒ぎが収まるまで三十分かかった（俺の再起動が二十

分遅れたせい)

「……えーと、なんだ？ んじゃ、アリカは戦争を止めたいから協力しろと？」

「厳密に言つとそうだ……」

何でもアリカが言うには王女としての立場を使って色々動き回ったが、全てが失敗、妨害で終わつたらしい。んで、独自に調べていくうちにガトウに目をつけたらしい、そしてガトウに命令してここに俺たちを連れてくるよう命令したらしい。

「まさか……一つの組織に、この戦争が引き起こされたとは」

「お気持ちはお察ししますが……事実です」

「『完全なる世界』……はた迷惑な奴らだ」

「許せねえな、なんの目的で引き起こしたんだ？」

それが問題だ、こういう組織での目的と言えば……『世界の滅亡』、『世界征服』なんだが、あんまりそういう感じじゃない。まるで戦争を終わらせたくないように、連合が勝てれば帝国に力を貸し、帝国が勝てれば連合に力を貸し、まるでイタチごっこだな。

……何かの準備か？ ルシフェルの動きも気になるしな、今のところは転生者だけ、たまーに『転生者殺し』も来るが……まあ、俺の敵じゃない。

「それがわかれば苦労はせんよ……」

「まあ、今わかっていることは……この書類に書いてある。後で読んでくれ」

「むう、さすが超越者か？ 私やガトウが全力を挙げてても調べられなかった物を……」

……ぶっちゃけると、全部、自分の分身に任せていましたー なんて言えるか、苦笑いしながらアリカを見据えて話しかける。

「さて、ここからは個人的な話だ。アリカ王女様」

「……アスナのことか？」

「まあな、悪かったな。まだ……会わせる時期じゃなかった」

「……がとう」

はい？ あ、あれ？ アリカが泣き出したんだが？！ って泣くな
あああああ！！

「ありがとう、妹を救ってくれて……」

「え？ い、いや、まだそこまでやっていないんだが？！ つつか泣きやm 伏せろ！！」

次の瞬間、なぜかロケット弾が窓から飛来してくる。

ナギがアリカを抱き寄せ、障壁を張り、みんなが武器を取り出す。俺は鋼糸で縛り上げ勢いを止め、魔眼で消し去る。……おうおう、

久しぶりに実弾見たな。

「敵襲?! 無謀なことを!!」

「しかし、師匠が言ってくれなければ、私たちのうち誰かが死んでましたよ?」

ガトウが叫びながら舌打ちをするが、詠春がそれをたしなめる。

「んな、事は良いんだよ!! ナギ! 姫さんを守っておけ、俺が行く!!」

「わしも行くかの、若いもんに任せておけん」

「私はナギと共に、アリカ様を守っておきます!」

「議員、こちらです!!」

ナギとアルがアリカの警護に、タカミチとガトウが議員の保護、ラカン、ゼクト、詠春が敵の追撃に……まったく、久しぶりに戦闘無しで会話をしようと思ったのにさ。

「どこのバカだ? せっかくこの後、姉妹を合わせてやろうと思ってるのにさ」

キレて零崎虚識に名を変える、黒の仮面を被り殺気を全身に充満させる。また転生者か?

「……え?」

「……お前はアスナの姉だ、本来はあんたが責任を取って育てなきゃならない。だが時期がそうじゃない、だかな……おばあちゃんが言ってた」

久々に天道語録行くとするか。

「まずい飯屋と家族の絆を邪魔する奴は消えろ……とな」

少し改変したが久しぶりだな。

「超越者……いや、式」

「今は零崎虚識なんだが……なんだ？」

「……頼む、妹と アスナと会いたい！ だから」

「合点承知、ノイプロブレム無問題、任務了解……んじゃ、姉妹の仲を裂く奴は殺して解して並べて揃えて晒してやろう……さあ零崎を始めますか」

零崎（皆殺し）の始まりだ。

そのまま、窓から外に出ると十人くらいの男がラカンたちと戦っていた。全員、転生者だな、久しぶりに大所帯だな。まあ、ラカンたちがいるから問題なし、つつかあいっすら強化したから、並の転生者程度なら簡単なんだよなあ。

「な、なんでこんな強いんだ！ 俺はギルガメッシュの能力があるはずなのに……！」

「んな、力任せの適当じゃ……このラカン様は殺せねえんだよ……！」

ラカンWパンチ!!」

「こっちはセイバーの腕前なのに……なぜ、この世界の住人が勝てる?!」

「……そんな切れ味だけで、中身が空っぽな攻撃受けるわけないでしょう! 神明流決戦奥義……真・雷光剣!!」

「合法口りは幼女で十分なんだよ!」

「……へんたいと言う奴じゃな、アスナに近づかないようにせんな。地を裂く爆流!!」

「なんだこりゃ……だが、こっちは後、俺を入れて七人居るんだ!!」

「俺を忘れてるな、糞転生者ども。小便は済ませたか? 神様にお祈りは? 部屋の隅でガタガタ震えて命乞いする心の準備はOK?」

俺は指先に剄と色々な(危険な)エネルギーを収束させて鋼系を発生させる。そのまま、七人の周囲を囲み鋼系すべてから内向きに衝剄を放つ。さらに追撃として内部に影の倉庫から出した刀を射出する。

「繰弦曲・崩落及び殺曲『刀語』」
さつきよく かたながたり

そして内部から悲鳴や叫び声が聞こえた……うーん、もう少し骨があると思ったが見当違いだったか? そんなこと思っていると鋼系を突破してこちらに突っ込んでくる奴が……言っちゃうとシエルブリッド最終形態だ。

「うおおおおおおおっ！！ 自慢」

てめえ如き偽物が……あいつの、カズマの魂の一撃を

「使っんじゃねえよ！！ 外力系衝剋……剛力徹破・破！！」

右腕に純粹な剋を収束させ、放つ。サヴァリスの剛力徹破・突を見稽古で見取り、自分自身の技として昇華させた技。突が拳打の破壊をより深く突きぬけさせ、爆発させる技なら、破は拳打の破壊を突きぬけさせず、相手の体の表面で爆発させる技。

「そ、そんな？！」

「……おまけだ、もらっておけ活剋衝剋混合変化……千人衝&ハイパークロックアップ」

右腕が消失している転生者に……本当に千人に分身した俺が同時に蹴りやらパンチやら、打撃を加える。ちなみに冗談でラカンに覚えさせたら気合でやりやがった……そしてハイパークロックアップしたからわかったが、向こうでラカンが千人くらいで斬艦剣を放り投げていた。

目の前で転生者が爆散したが気にしない、うんうん、やっぱり零崎で殺すとなんも感じないな……いい機会なので忍法骨肉細工で戻して置く。やっぱり自分の顔はそのままが一番いいな。

生身でハイパークロックアップしてるが……大丈夫だ、問題ない。その後、詠春たちも戦いが終わり死体と戦闘痕を処理する、途中で兵士たちが来たが飛んできたアリカが事情を説明してなんとか事なきを得た……危ない危ない、あやゆく鋼系で解体するところだった。

「派手にやったな、式」

「エヴァか……いや？ これでも鋼系の出力は最弱にしたんだが……リミッターかけ直すか？」

「……師匠、あなたはどこに行きつく気ですか？」

「神？」

「本当にありそうだから怖いんですよ、あなたの場合」

詠春がため息をつき、アルが笑いながら言う……そう言えばどうなんでしょうか？

実際のところ、神も吸収して喰らったし……味は最悪だったかな、と言うか神食って大丈夫なのか？ まあ、吸収しただけなんだが……ルシフェルに力を貸していたから殺したんだがな、神様（俺を転生させてくれた神）に許可貰ったからいいと思うんだがな。

「ふう、にしてもいいのか？ 式」

ナギが質問してくる。

「何が？」

「アスナだよ、アスナ。姫さんと二人つきりにしていいのか？」

「……多分、だいじょ」

「アスナアスナあ！！」（注意、アリカさんです）

「……姉さん、離れて」

「……あの、すいません、聞きますけど誰ですか？ あんなアスナに抱き着いて涎垂らしてる人」

[illegible]

タカミチが目をまん丸くして驚き、ガトウが頭を抱えながらうつずくまる。正直、俺も驚いてるよ、こん畜生。

「わかいの」

「アリカ」

「なんだ？」
式

「シスコ万歳」

「ッ！！！！……同志よ！！！」

ガシッ！と手を固く握りあう。ああ、木乃香に会いたい、マジ会いたい。家では一日一回は抱き着いていたし、キャラ崩壊？ ナニソレオイシイノ？

「……そんな式も大好きだ！！」

「ダレカー、コノアホ御主人止メテ」

「アリカ、お前とはいい友情がはぐくめそうだ」

「いいよ？ 仮面は外さない」

「ナラオレ八頭ノ上二乗ルゼ？」

「じゃあ僕はガトウ師匠の隣で」

「はははは、今日は疲れたよ……」

とりあえず、最新のデジカメを使って高画質で撮る。タイマー式にしてるので押さなくて大丈夫だ。

とりあえず、決めた配置が。

真ん中はナギ、その右に俺と抱きかかえたエヴァ（十歳バージョン）頭にチャチャゼロが乗る、ナギの左隣にゼクト、その右隣にアル、俺の左隣に手をつなぐアリカとアスナ、その後ろにガトウとタカミチ、そしてナギの後ろにラカン、その右隣に詠春。

出来た写真をすぐに現像し、全員配る。いい機会なのでデジカメでアリカとアスナの写真を撮り、二人に渡す……アリカが『観賞用、保存用、布教用だな』とつぶやいていたのには感心した。現代に戻ったら、木乃香と写真を撮ろうと思った。

このとき予想していなかったが、俺が紅き翼の『両儀式』としてみんなと写真を撮ったのは、これで最初で最後となった。

そして、アリカは王国に帰り、俺たち紅き翼は連合の首都で情報を集めていた。二週間が過ぎ、俺が情報を集めようと町に繰り出した時……出会ったのは

「君が超越者かい？」

「ガキがなんの用だ？ サインはやらんぞ？」

「ふふふ、僕の名前はフェイト・アーウェルンクス……『完全なる
コスモエンテレケイア
世界』の幹部さ」

「……はい？」

「まあいい、単刀直入に言おう『両義式』……僕たちに協力しない
か？」

……あのー、なんか勧誘されたんだが？ どうすればいい？ とり
あえず

「メロンパンあるけど食べる？」

「もちろんですよ」

メロンパンうめー。

最強はルビをふるとバカになります（後書き）

作「今日のネギま！ラジオ、こいや夷」

夷「おい、俺の設定がえらいことになってるんだが？ コジマはまだしもゲッター線はやめろよ」

作「本当はバイドも入れようかと思ったんだが？」

夷「それよりもニュードかDG細胞をな」

作「この会話ついてこれる人いるのか？ というか、ほとんど核より危険な物質だし」

夷「太陽少年と暗黒少年の力もあるし」

作「拝啓、読者様。最近この小説の主人公がバク化してきました」

夷「自分でもわからんエネルギーあるし……贈り物にもえらい物あるからなあ」

作「勇者シリーズとか天空シリーズってどうやって使えばいいんだろつか？」

夷「正直、あの鎧とか武器とか……改造しすぎて次元切り裂くんだが」

作「どうしてそうなった？」

夷「なんか酒飲みすぎて酔っ払ったら……つい」

作「つい　じゃねえよ!!」

夷「それになんか蟲ピンを気にいったから使いまくってるんだが……いいのだろうか？」

作「……（言えない、書きやすいから使ってるなんて言えない）」

夷「そろそろしめるか。次回『フェイト、そして姫とバカは駆け巡る』」

作「次回も!!」

刹那「ええ?!　え、ええつと……ちえりひよ!　……ちえりお
おおおおおおおおお!!（泣きながら逃走）」

夷「……まだ噛み癖なってるんかい」

||||||| 楽屋

フェイト「ついに僕が登場だ!」

ナギ「主役は俺だからな?」

アリカ「アスナ……着物とはいいいものだ」

ラカン「こんな王女で大丈夫か?」

ガトウ「一番いい王女を頼む」

タカミチ「現実逃避しないでください」

エヴァ「アスナ、何見てるんだ？」

アスナ「マジ ガー?と、この後見るのはリリカルな魔法少女のアニメ」

詠春「……どうしてカオスになるんだ？」

ゼクト「人……それを必然と言う」

アル「良い台詞です、同意できます、しかしこの場では無意味です」

鳴滝「おのれディケイドオオオオオオオ！」

出演者全員「「「「「てめえ、別の小説だろうが！」」「」「」

作「さーて、新しいネギま!の小説書くか」

出演者全員「「「「「「「「「「？」「「「「「「「「

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6818u/>

ネギま！ 転生しまし……え？！

2011年10月6日03時18分発行